



連載専門誌

対人援助学会マガジン



vol. 16 No. 3

第63号

December 2025

対人援助学会



No.63 M O K U J I

目次		2 - 3
ハチドリの器	見野 大介	4
執筆者@短信	執筆者全員	5 - 16
付け加えることができる価値は何か？（9）	千葉 晃央	17 - 21
臨床社会学の方法（50）	中村 正	22 - 31
カウンセリングのお作法（45）	中島 弘美	32 - 34
晩年DAN通信+木陰の物語を詳説する	団 土郎	35 - 63
幼稚園の現場から（63）	鶴谷 主一	64 - 70
福祉系対人援助職養成の現場から（63）	西川 友理	71 - 75
ああ、相談業務（23）	河岸 由里子	76 - 79
生殖医療と家族援助	荒木 晃子	80 - 82
路上生活者の個人史（17）	竹中 尚文	83 - 84
スポーツおじいさんになりたい！（7）	國友 万裕	85 - 92
役場の対人援助論（53）	岡崎 正明	93 - 97
臨床のきれはし（31）	浅田 英輔	98 - 100
発達検査と対人援助学（22）	大谷 多加志	101 - 104
講演会＆ライブな日々（45）	古川 秀明	105 - 107
療育手帳の向こう側（5）	坂口 伊都	108 - 112
周辺からの記憶－東日本大震災家族応援プロジェクト－（49）	村本 邦子	113 - 130
精神科医の思うこと（39）	松村 奈奈子	131 - 134
お客様（1）	柳 たかを	135 - 146
心理コーディネーターになるために（20）	山下 桂永子	147 - 150
先人の知恵から（50）	河岸 由里子	151 - 157
うたとかたりの対人援助学（34）	鵜野 祐介	158 - 165
ああ結婚（36）	黒田 長宏	166 - 167
PBLの風と土（35）	山口 洋典	168 - 173
接骨院に心理学を入れてみた（34）	寺田 弘志	174 - 186
現代社会を『関係性』という観点から考える（35）	三浦 恵子	187 - 192
「余地」—相談業務を楽しむ方法—（32）	杉江 太朗	193 - 196
統合失調症を患う母とともに生きる子ども（13）	松岡 園子	197 - 206
原田牧場Note（21）	原田 希	207 - 209
私の頭の中のまだエンピツ（5）	川畠 隆	210 - 214
応援、母ちゃん（23）	玉村 文	215 - 219
HITOKOMART（22）	篠原ユキオ	220 - 223

川下の風景（19）	米津 達也	224 – 226
こころ日記『ぼちぼち』	脇野 千恵	227 – 228
スクールソーシャルワーカーの仕事（4）	高名 祐美	229 – 232
一語一絵（20）	畠中 美穂	233 – 237
対人援助をリブートするこの一冊（33）	渡辺 修宏	238 – 242
対人援助をリブートするこの一冊（34）	小幡 知史	243 – 244
新・島根の中山間地からWork as Life（6）	野中 浩一	245 – 251
ヨミトリとヨミトリ君でご一緒しましょ！（14）	高木 久美子	252 – 261
理事長のひとりごと（3）	鳴海 明敏	262 – 263
現象学としての書道（13）	櫻井 育子	264 – 265
コソダテノシンリ（11）	中谷 陽輔	266 – 272
教室の窓から	來須 真紀	273 – 274
社会科の授業を対人援助学の視点から（11）	内田 一樹	275 – 297
ある看護科教員のアタマの中（10）	山岸 若菜	298 – 300
人生は対応のバリエーション（11）	宮井 研治	301 – 305
けふばあちゃんからの手紙（6）	乾 京子	306 – 308
心理臨床における多重関係を考える（5）	本林 友梨	309 – 311
森で出会えば（4）	田中 千晶	312 – 314
地球と宇宙の文化心理学（3）	土元 哲平	315 – 317
編集後記	編集長&編集員	318 – 319



ハチドリの器 46

見野 大介

Mino Daisuke

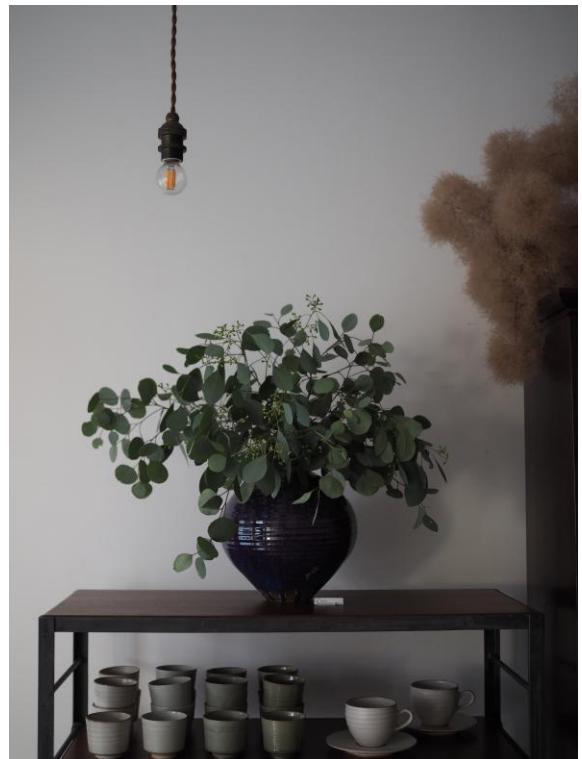


右上：企画展 in cofunia（奈良）

右下：個展 in 若葉屋（京都）

左下：企画展 in cofunia（奈良）

左上：個展 in 若葉屋（京都）



山　山　山　山　山　山　山

第 63 号

執筆者 @短信

田中 千晶

この短信を書いている現在は修士論文提出 40 日前です。11月末が原稿締め切りですが書けるときに書けるものを、できる時にできることをしておかないとなんにも終わらない気がして怖いので、現実逃避の意味もかねてマガジンの作業をしています。

私の記憶では倫理審査も割と早いタイミングで突破したし、アンケートも早めに撒いた…。インタビュー調査もわりと8月中にとったし…指導教員にも言われましたが「どこで失速したのでしょうか。」どこにも出かけずにこの夏は「我慢の夏！」としたんだけどなあ…。

ま、今更過去の事を悔やんでいてもなんともならないのでできるところから執筆していこうと思います。まずは謝辞から書こうかな…。

森で出会えば…

P312～

本林 友梨

去年のこの時期から対人援助学マガジンへの連載を始めさせていただきました。もう 1 年経ったなんて…！この 1 年、研究を進めていくことはできなかったのは悔やまれ、もう少し頑張れなかつたのかを感じますが、一方で、なんだかんだよく過ごし

たなと思える感覚もあります。研究をすること、対人援助学マガジンの連載を始めたこと、それぞれ私にとっては容易いことではなく(実際時に少し後悔？することもあります)、しんどいところですが、“厳しい状況に身を置かなければ成長しない”というような考えを胸に、なんとかまた 1 年やっていけたら嬉しいと思います。

心理臨床における多重関係を考える

P309～

土元 哲平

地球のことばかり考えて半年以上が過ぎました。そろそろ月や火星に興味が出てきたところだったのですが、『日本人宇宙飛行士』(稻泉 連、著)という著書に出会い、また地球の美しさに惹かれるようになりました。何度も見ても、見飽きません。月には、全く行きたくありませんが、宇宙から(安全に)地球を眺める日を夢見ています。



地球と宇宙の文化心理学

P315～

高名 祐美

スクールソーシャルワーカーのことをこのマガジンで書いている。何をするのが SSW なのか的確に応えられない。それが歯がゆく、悔しく思う。それで文字にしてみようと思い立った。やはり筆は進まない。

学校からの依頼で支援開始となるのだが、学校から指示されることだけ実践すればいいのか？最近は疑問だらけになっている。

ソーシャルワークを生涯の仕事としたいと選んだこの道。毎日スケジュールノートとにらめっこしつつ、保護者との面接や学校訪問、関係機関とのやりとりをいつ行

えるか考える。そして記録に追われる。これがやりたかったことなのだろうか…。面接にはエネルギーを注げるのだが、そこで得たことからどのように展開していくべきか。さまざま考えてしまう今日このごろ。

スクールソーシャルワーカーの仕事

P229～

水野 スウ

めちゃめちゃ濃くて忙しい 11 月でした。今回はマガジン原稿お休みしますが、近況報告を。

月のはじめに、「紅茶の時間」で通算 34 回目になる宮沢賢治さん童話の朗読とワークショップ、月の終わりに、埼玉のフォークシンガー・たかはしへんさんコンサート、と 2 回のとくべつ紅茶があり(会場はどちらも石川県津幡町のわが家、ステージのバックは紅葉の雑木林)、その合間に、川越紅茶と京都紅茶と津幡紅茶の 4 人で姉妹紅茶旅 in 石川、東京の娘夫婦が久しぶりに里帰り。そのまた合間に夫婦で夕陽の追っかけ、紅葉の追っかけ。

11 月はそれに加えて、12 月 1 日から始まる「つながる世界」展の準備打ち合わせもところどころに。「つながる世界」展は、日本の 25 人の絵本作家さんたちが、一昨年 10 月からのパレスチナの現状に声をあげずにいられなくなり、自分たちも表現しなくては、とガザの子どもたちを想って描いたオリジナル原画の絵画展のこと。合わせて JVC(日本国際ボランティアセンター)が撮影したパレスチナの子どもたちの写真の展示も。金沢では市の後援を得たおかげで、金沢市役所の庁舎がその会場に。「つながる世界」展を呼びかけた絵本作家のお一人、チェコスロバキア在住の降矢ななさんも来日されて、金沢展会期中にギャラリートーク、そして絵本の読み聞かせと講演をしてくださいます。

この絵画展と写真展は今年 6 月から巡回展が始まり、これまでに東京や広島、京都などで開かれ、金沢の次は沖縄で。マガジン更新時にはもう金沢展は終わっていますが、お住まいの近くでこの「つながる世界」展+写真展がありましたら、どうぞ足を運んでみてくださいね。

そんなこんな 11 月に、週一誰でもどう

その場「紅茶の時間は」43年目に入りました。今でもぽつぽつと来るひとがいます。ここそこは、こもり気味の男性と、胸ん中モヤモヤがいっぱいの主婦さんがよく。二人の来る時間が度々重なって一緒に時間を過ごすうち、全然違う人生送ってきたのに意外と共通点あるもんだなあ、と二人とも気づいていくところがおもしろいです。悩みの質は違うけど、自分のきもちを感じてそれを言葉にするのがどちらも苦手、言葉にする機会が少なかった二人、という点でおおいに似てる。紅茶は、その気になればいつでもコミュニケーションの練習ができる場所だよ、と言ったら二人ともそう認識してくれたみたいで、聴く練習、気持ちに気づく練習、それを言葉にする練習、「ありがとう」を言う時も、それはどんなありがとうございましたで、何を伝えたいありがとうなのか、などなど、言葉にしてもらって、時には数秒で終わるロールプレイをしてみたりもしています。

巷ではインフルエンザが猛威をふるっているよう。執筆者の皆さまもどうかお身体気をつけて。そしてちょっと早いけど、良いお年を。ではまた。

きもちは言葉をさがしている 休載

馬渡 徳子

2025年3月から9月まで、団士郎さんの家族漫画展とトークショーを県内で実施した。

開催地域と場所は、①3月輪島市:ふれあい健康福祉センター(支援者支援のワークショップ)→②5月七尾市:パトリア(漫画展)・のと里山里海ミュージアム(トークショー)③6月金沢市:無料塾寺子屋えがお・子ども食堂(漫画展)→④7月津幡町:文化会館シグナス(漫画展)→⑤7月宝達志水町:町民センター・アステラス(漫画展)→⑥8月輪島市:輪島高校(漫画展)・輪島病院(漫画展)→⑦9月珠洲市:珠洲総合病院(漫画展)・飯田わくわく広場(漫画展・トークショー)だった。

年度当初は、③~⑤の予定はなく、漫画展とトークショーの準備過程に参画された現地の方々からの追加要請にての実施だった。漫画の掛け軸も、手渡しで次の会場にバトンリレーし、しつらいや留意点、

実施しての感想などを交流してつないでいた。

漫画展の期間中には、現地の方々が有休をとて交代で当番にあたったことで、来場者との対話が叶ったし、わざわざ金沢地区から、ご自身の母校や故郷を訪ねて来場くださった方々もおられ、話が弾んだ。

漫画展会場には、「家族の練習問題」を寄贈し、トークショーの会場では来場者に抽選によるプレゼントをさせていただいた。



漫画展を実施することで、様々な化学反応が起きることが本当に不思議だった。輪島高校文化祭の帰り道に、車での送迎を申し出てくださった方から、お母さまが有名な鉄板焼きとお好み焼き店を営んでおられたが、全壊のため更地となり、石川中央地区に二次避難継続中で、こののちに再建は想定できないとのお話を伺った。90歳にても店を一人で切り盛りしておられたが、地震後の二次避難中に急に難聴が進み、亀背となり、筋力低下が進み、しゅんとしておられるとのことだった。「そうであれば、うちの子ども食堂で子どもたちのためにお好み焼きを焼いていただけませんか」とご依頼すると、「それはうれしいと思う。いろんなこだわりもあって、家族で準備します。人生最後の焼きになるかも。私たち夫婦も有休をとて一緒に焼きます。」とのことで、すぐにお母さまご本人のご承諾もいただけた。

子ども食堂を開催しているえがお会館では、2024年2月より毎月第一火曜日に、「能登の人あつまれ」を実施し、二次避難先で孤立することのないように継続している。毎月20~30名の方々が現在も集っている。進行は能登の公民館主事だった方がされている。ここで、告知をすると、皆さんは「〇〇ちゃん、どうしとったがや。更地になってしまって、心配しとったがや。また逢えて、本当に良かった。」と心から再会を喜んでおられました。

そして、10月27日の子ども食堂にて、ハロウィンパーティでお好み焼きをご披露

いただきました。美容院に行かれ、お化粧をされて、おしゃれなエプロン姿でシャキッと凛と背筋を伸ばし、てきぱきと焼かれたり、息子さん夫婦に輪島弁で指示をされる姿は、とてもかっこよくて惚れ惚れしました。外はカリッと、中はふわふわで、出汁のきいたお好み焼で、お手製のソースとマヨネーズとふりかけに子どもたち保護者からはおかわりのコールが相次ぎました。

さてさて、漫画展とトークショーは、現地の方々からの熱いリクエストで、来年三月に輪島市に参ります。この漫画展が更に拡がって、新たな化学反応を起こし、継続していく様子を願っています。

今号は、コロナとインフルエンザにダブル罹患し、体調が十分に快復叶わず、本文「馬渡の眼」をお休みいたします。

皆様、良いお年をお迎えくださいますように。ごきげんよう。

馬渡の眼 休載

乾 京子

30年ほど以前に「じゅりんこ文庫 便り」に「子ども時代は、初めての体験の積み重ね」と書いたことがあります。だが、しかし、初めての体験は《子ども時代》に限ったことではないなあとこの頃思っています。《老い》と向き合うこともそうだし、まずはもって知らないことの方が断然多いのだから、(へえ、そうなん?) (えっ、初めて見た!) (わあ、すごい!!) (わあ、きれい!!) (えっ、それってどういうこと?) (う~ん どうしたらしい?) ……なんてことが日常的に起こってきます。

頭と身体が、…頭の指令がどうやらワントンテンポ遅れて身体に伝わるようで、あと気が付いた時には転んでいたという事が起ります。10月末にも、湖北野鳥センターに冬鳥を見に行って、夫が道の駅で買い物をしている間に、道を渡って、湖岸ギリギリに行って野鳥の写真を撮ろうと石畳と草の茂った湖岸を歩いていた時の事。頭は「気を付けて! 転ばないよう! ゆっくりゆっくり!!」と、そのように行動していたはずなのです。ところが気が付ければ、空が目の真正面上の方。(頭を打ったみたい。相手は石だ。どうしたもんかなあ?) (すぐには動かない方がよさそうだ。

血は出でていない。手は動く。足も大丈夫そうだ。目も見えている。左後頭部、耳の後ろが痛い。う~ん、どうしたもんかなあ?夫を大津まで無事に届けられるか?夫は運転しない。)ゆっくり起き上がって、車に戻って、スマホで長浜赤十字病院救急外来を検索。ナビに入れる。そこへ夫がのんびり帰ってくる。……救急外来で2時間待つて、CTの結果、たん瘤だけで脳内出血はなさそう。やれやれ、無事に家まで帰り付きました。…なんていうことも初めての体験でした。

じゃりんこ文庫
P306~

中谷 陽輔

本文では、コソダテにおける「余裕」について思うところを書き始めました。そして今は「余裕」を失いがちな年末です。「やらねばならないこと」で余裕を失うこともあります、何かと楽しみなはずのイベントに向けて準備をしていく中で、「余裕」がなくなることも多々あるな、なんてことも思っています。

ちなみに我が家は、2人の子どもたちへのプレゼントや当日の過ごし方についてサンタさんと打ち合わせが何度も行われたり、実は夫婦の結婚記念日が12月15日で、その翌日16日が妻の誕生日だったりして、それらのイベントへの準備・計画もあつたります。あとは、他の共働き夫婦と同様、子どもの学童・保育園が休みになる冬休み期間をどうするかについて事前調整が必要だったり、その中でも大掃除やらのことも計画・実行したり、もちろん仕事も師走で何かとバタバタしたり…と、慌ただしい中で、やはり例年「余裕」は失われがちです。さらに昨年は、父の介護時間も必要だったりして、年末年始は特に、「余裕」を保つのがなかなかに難しくはありました。

だからこそ今年は、ぼーっとする時間など「余裕」を回復する時間を、積極的・意図的に作りたいなと思っています。あと我が家では、ここ数ヶ月ほど、就寝前に家族4人でUNOやババ抜きなどのカードゲームを1~2回するのが恒例行事になってきました。そのため、大晦日と正月は、そんな子どもたちと、こたつを出してカードゲー

ム・ボードゲーム大会をしようと大人たちで企画し、少しずつゲームを集め始めています。こんな感じで、ちょっとしたワクワクする計画をもちながら、心の「余裕」を生み出すこともほどよく行うことも大事だと思いつつ、残り少なくなった今年の日常を過ごしております。

喪中につき新年の挨拶は控えますが、皆様におかれましては、良い年をお迎えください。

コソダテノシンリ
P266~

団 土郎

このところ「無知学」なるモノにはまっている。きっかけは偶然ネットで見た一冊の本。



最近、Audibleに流され気味で気になっていた読書欲がこれでV字回復?したのだから興味深い。比較的新しい考え方、視点のようだが、私には新しくはなかった。ずっと自分の中にあった感覚、カテゴリーを「ここでどうですか?」と提示された気がしたのだ。

知の優越意識やアカデミズムの権力性に、長らく腑に落ちなさを感じていたので、無知学の整理や学際への様々な言及が面白い。

無知学/アグノトロジーは2023刊行の「現代思想」で特集されていたと知って、バックナンバーをポチったが、その巻頭対談も面白い。

近年なかなか本が読み切れない傾向が続いている(面白くなってしまって中斷)が、この本は間もなく読了しそうだ。

更に実は、読み終えないうちに頭から再読を開始している。すると初めて読んだときより面白く、アンダーラインを引きたくなるところが変化する。そしてなにより、初

読時よりも分かるのだ。

研究者の多くはこのような読書の仕方をしているのかとも思うが、私は読み飛ばし派だから、こんな読み方をしたことがなかった。それでも、本当に内容を理解しているのか、自分の都合良いように誤読しているのか怪しいところはあるが、まあそれが読書だろう。

とにかく「無知(未知)」は劣位なものでも、克服されるべきものでもない。意識化された限られた知(知識)以外の、あらゆる平面に膨大に存在しているものなのだ。

個人が己の関心を頼りに恣意的にピックアップしたモノを深めてゆくのは自由だが、それが優れているなどと思ったがるのには少々苦笑い。何か見つける度に大発見だと騒ぎたい人間を静かに黙って見つめている存在。この無知、未知という基本状態に気付かされたことで、自分がこれまでしてきた様々なことのあり方が納得だった。

それを、知を得た感覚ではなく、無知であることを自覚する感覚で納得できたのは、とてもすっきりした気分だった。そんなことを言うと、ソクラテスなどが登場してきそうだが、まあそれはよいとしよう、

晩年D・A・N通信
&
『木陰の物語』を
家族の構造理論で詳説する
P35~

内田 一樹

11月23日から26日まで福島県浜通りスタディツアーに行ってきます。

2回目の浜通りスタディツアーです。この間自分自身も心身の調子を崩しており、ベストコンディションとは言えない状況です。こうした状況の中だからこそ気づくことができました。それは対人援助学という学問に対しても新しい視点をもたらしてくれました。

社会科の授業を
対人援助学の視点から
P275~

宮井 研治

年の暮れである。一年が早い、あまりに

も。歳をとると、早い、早いとは聞いていたが、実際に渦中に身を置くと、年中行事が右から左に過ぎ去っていったかと思うと、また立ち現れる感じというか。盆、クリスマス、正月、盆、クリスマス、正月、盆、クリスマス、正月……のリフレインの目まぐるしさ(我ながら、季節感を表す行事の認識の乏しさには恥ずかしくなるが)。この先は、季節感さえなくなり、夏冬の面裏のスピード感ばかりが全面に出てくるのかと思うと、何んなりする。まあ、でも、夏と冬、あるだけマシと思いたい。

先日、私のライフワークであるキャンプに久しぶりに出かけた。ソロではなく、仲間と一緒にいるのである。でも、昨今の熊騒ぎである。そのキャンプ地周辺は熊情報もなく、皆、高を括っていた。もちろん、出なかった。しかし、キャンプの初日明けの朝、仲間が昨晚は眠れなかつたという。「カサ、カサ」という音に一晩悩まされたらしい。「熊か！？」他の仲間に、スマホで知らせるべきかどうか真剣に考えたようである。でも、下手に動いて熊を興奮させるのもどうか。いろいろ考えているうちに寝入ってしまったらしい(結局、眠ってるんですが！)朝起きて、おそるおそる確認すると、めくれたテントの一部が風のせいで、テントの他の部分に触れていたらしい。キャンプをやる方ならお分かりになると思うが、テントの中では、静かな夜など、やたら周りの音がクリアに身近に反響して聞こえてくるのも事実である。私といえば、「熊さん、わたしの大切なライフワークを奪わないで！」と、これからからのキャンプについて願うばかりである。

人生は対応のヴァリエーション

P301～

櫻井 育子

思えば思ったとおりになっているのかもしれない。小学生の時は喫茶店、中学校の時は芸術家、高校でカウンセラー、大学で先生、というのが「夢」として描いていたもの。ふと思えば逆から順に叶っていることに気がついた。先生をやり、カウンセラーをやり、昨年あたりから芸術家というのも現実化しており、もしかしたら次は「喫茶店」なのか！？

計画通りにしたつもりもないし、ただ「嫌なことは嫌だな」というのは明確な子ども

だった。何をするのも中途半端な気がしていて、資格を取ることもモチベーションが湧かない人間で、気がついたら役立つような資格は運転免許だけだった。

一方で突き動かされたらすぐ決断してしまう。だから遊さんのブログを読んで教員を辞めた。土郎さんの漫画をどうしても紹介したくて石巻で漫画展を開催した。そういう猪突猛進性はたぶん「長所」だ。というより、だからこそ掴んできたラッキーなことはたくさんある。そろそろ落ち着いたらいいのでは、と一時期思っていたが、もう気にしないことにした。

ここから先の時代をつくっていくのは、先がわからなくて「自分に安心できる人」そして「はみだすこと恐れない人」だと本気で思っている。不安は不安を煽る。そうやって混乱してきた時代を、安心して生き延びるために改革は本気で必要だ。これからもより一層調子に乗って走ろうと思う。

生涯発達支援塾 TANE 代表

shukou0122@gmail.com

<https://ikuko-sakurai.com>

現象学としての書道

P264～

鳴海 明敏

備忘録

県庁職員を定年退職した翌月、2010年平成22年4月に新規開設された児童心理治療施設青森おおぞら学園の園長を引き受け、15年間勤めました。

2024年令和6年秋に軽い脳梗塞で入院し、それを機に翌2025年令和7年3月で園長職を退き、現在は法人の理事長として、週に3日職場に顔を出すという生活をしています。

だから、週のうち4日は、家に居て家事見習い中です。メモを持っての買い物も、だんだん板についてきたような気がしています。商品によっては、「底値」も分かるようになりました。

そんな生活をしながら、思い出したことや気が付いたこと、整理しておきたいことなどのあれやこれやについて、思いつくままに書き残していくかと思います。学園のこどもたちのことを紹介することもある

かと思いますが、それなりのカモフラージュを施しています。

今年の11月の連休には、千葉県内で家庭を持っている次女が家族全員で帰省するということで、家の中の片づけやらなにやらで、忙しく過ごしていました。ところが、悪い予想は当たるもので、小学3年生の妹がインフルエンザ罹患ということで、直前になり帰省はキャンセルになってしまいました。その後、中学生の姉もお父さんも罹患したとのことでした。

月一のペースで開催している「フォーカシングの会」と、同じくらいのペースでウェブで開催している「(カウンセリング関係の)文献を読む会」への参加が楽しみです。

理事長の独り言

P262～

高木 久美子

新たに何かが生まれることを見ることは、心がワクワクします。椎茸です。



10月の終わりに信州を旅行し、かねて栽培してみたいと思っていた椎茸の原木を2本入手しました。直径10cm余、長さ1mほどの菌打ち済みの立派な原木です。よくテレビで腰の高さあたりから斜めに交差して立てかけてあるのを見ますが、できるだけ低い位置で横置きにしてくださいとのこと。

きのこといえば木々の間の薄暗い湿ったところに生えているような印象だったのと、裏庭の雑草ぼうぼうのところはうつつけだと思いましたが、雑草はちゃんと取るか防草シートを敷くべしとの助言。

美味しい椎茸食べたさに素直に諸々アドバイスに従って環境を整え、毎日楽しみに眺めること約1週間。11月5日、1本の原木に1つ、小さな椎茸の赤ちゃんが出てきました。可愛い。こんなに椎茸を愛おしく思ったことはありません。成長の仕方は、先ず軸がにゅっと3cmほど伸びた後、傘の部分が急速に大きくなってきました。そ

の後椎茸はどんどん大きくなり、11月18日ついに収穫しました。

大きくなっていく第1号に目を見張りつつ他にはまったく出てくる気配がないことに少し不安を覚えましたが、18日の初収穫の頃には、同じ原木からまた1か所椎茸が登場し、今度は3つ子で第1号とはまた別の楽しみで成長を見つめました。1号ほどではなかったですが、3つ子もどんどん大きくなる様はとても迫力がありました。その後もう1本の原木からも無事椎茸の赤ちゃんが出てきましたが、こちらはずっとまったく出現がなかった半面、たくさんの菌打ちの箇所から一気に椎茸がどっと出てきて感動。またも壮观でした。

原木にもそれぞれの椎茸にも個性があり、当分目が離せそうにありません。肉厚で、味は絶品です。

ヨミトリとヨミトリ君で ご一緒に

P252~

畠中 美穂

海外のお土産にハンドクリームをいただいた。パッケージに少しおは英語が書かれているもののほとんどがその国の文字で書いてあるので成分などもわからない。封を開けるとよい香りがして、手に塗ってもさらっとしていて気持ちよい。何の香りだろうか。何かはわからないけれども、『外国の匂い』。アロマオイルやキャンドル、紅茶やお香などでも日本では馴染みのない香りというものがあって、そういう意味でどこか懐かしい、『外国の匂い』。「手肌を保湿し、乾燥を防ぐ」といった本来の効果だけではない贈り物をいただいた。

一語一絵
P233~

山下 桂永子

いよいよ師走ということで、11月からすでに坊さんが全力疾走しているかのように予定がぎゅうぎゅうしております。

そんななか今年もいろいろと旅に出ました。1月に飛騨高山と白川郷、3月にタイ、7月に台湾、11月に長崎の五島列島、合間に日帰りで東京や博多に行って美術館

巡りや美味しいものを食べにも行きました。どの経験も素晴らしい、驚きと学びに満ちていました。旅に行ってその土地の美味しいものを食べ、美しいものを見て、積み重ねられた歴史や文化に触ると、なんだか自分の心や人生がとても豊かになったような気持ちになれるのですが、日常に戻るとあれもできていない、これもやっていないと自分の足りないものばかり目についてしまいます。したいことは勢いでできるのに、やらなきやいけないことはとことん先送りの人生です。

また今年も本棚にある「どんなグズもある本」を読み返し、1人反省会をする年末恒例の儀式を行うことになりそうです。内容とは関係がないのですが、読んで頂ければ幸いです。

心理コーディネーターに
なるために
P147~

渡辺 修宏

「対人援助をリブートするこの一冊」と称しつつ、現在は漫画を紹介させてもらっています。漫画であれば万人向けの敷居の低い作品をガンガン紹介できると思いきや、意外や意外、逆に、作品を選ぶのに悩む悩む。…でも、その過程であることに気づいたり。漫画って…トータルアートなんですよね。

対人援助実践をリブートする
この一冊
P238~

玉村 文

今回のテーマは母子旅、未就学児3人を連れての旅行の記録です。母子旅とはいえば私にとっては「リトリート」でした。リトリートとは、日常から少し離れて心と体を休め、自分自身と深く向き合うための時間のこと。静かな自然の中で、慌ただしい日常から一步離れることで、心の声や本来の自分に気づくプロセスです。

伊豆高原の海と風、温泉、そして子どもたちと過ごすひととき。それらを通して、私

は「今ここにある幸せ」を丁寧に感じ取る時間を過ごしました。仕事や子育てに追われる毎日の中で見失いかちな“自分の感覚”を、少し取り戻したような旅になりました。

応援 母ちゃん！

P215~

米津 達也

今回、人生初のフルマラソン完走を通じて世の中の視方が変わったが、これは3年計画の1年目に過ぎない。最終的には、米津50-50(フィフィ、フィフィ)計画があり、50歳になった年に比叡山トレイルランニング50kmレースの完走を目指している。50歳まで3年を切った。やれることは、今、やっておこうと淡々と足を進めるのみだ。



川下の風景
P224~

川畑 隆

大学時代の心理学科の同級生の一人が退職して京都に戻ってきたので、「おかえりなさい」呑み会をやりました。

昔懐かしい四条の『とみ寿司』から居酒屋『静』に流れました。お店はいずれも50年前のまま。それが第1回。「それじゃあ、元気で。またいつか」とはならず、結局来年1月の「例会」が9回目になります。2回目以降は京都劇場の横のそば処『徳兵衛』→天満近くの小さな呑み屋→四条木屋町の寿司居酒屋『杉玉』→近鉄八尾近くの呑み屋→京田辺の『屋台すし』→出町柳の『つなぐ食堂』→京橋の居酒屋『みつばち』と続いて、次は京都府庁前の『味房・かまん坐』です。

最初は4名だったのが8名の回もあつたりして、そのうちの1名が関東の実家に移り住むことになったので、「関東部会」を作ろうなんて声もあがっています(作ってどうするのかは知りませんが)。6回目は母校同志社大学の京田辺校地を巡りました。7回目は今出川校地から出町柳までを散策、9回目は今出川校地から京都御所、護王神社詣で、そして『かまん坐』へというコースになっております。

以前このマガジンに連載させてもらった『かけだ詩』に、「当時はまぶしいほどのエマニエルにいちゃんず 今も輝いているかな? エマニエルじいちゃんず」と書きましたが、そのじいちゃんずや、そうじゃなかつた同級生も集っています。1人は8回目に岡山から駆けつけました。もう1人閉じこもっているらしい奴を引っ張り出そうと2度ハガキを送りましたが、返事はありません。あまりしつこいのもよくないし3度でやめとります。

71歳が最年少のささやかな老春?…いや、『♪そもそも、これが青春だ!』

私の頭の中のまだエンピツ P210~

杉江 太朗

子どもの福祉領域で働く杉江と言います。前回の短信で職場の道路工事が行われていると書きました。その工事は急ピッチで進められ、歩道も広くなり綺麗に舗装され、草刈まで行われる始末。その数日後、天皇・皇后陛下が通られる事になり、やはりそのせいだったのかと想定通りのことが起きました。イベントも無事終わりましたが、車道を4車線にしたにも関わらず、交通量にそれほど変化なく、ただ無駄に

広い道路ができただけに終わっています。

そんな中、ついにカフェのマシンが壊れてしまいました。売り上げに影響するため、すぐに新しいマシンを調達。新しいマシンはスマホとBluetoothで繋ぐことができ、アプリをタップするだけでコーヒーを注ぐことが出来ます。とは言っても、カプセルをセットしたり、捨てたりするのは手作業です。

道路にしても、マシンにしても、無駄が付き物のようです。その無駄だと思うことも、同僚と話すための話題提供には役立っています。短信を書くためのネタになりました。無駄なものにもきちんと意味があるようです。

「余地」-相談業務を楽しむ方法- P193~

浅田 英輔

お役所あるあるだが、秋以降は研修会が続く。春は前年度締めで忙しく、夏は今年度の準備で忙しいため、9月以降に研修会が集中することが多い。本業の行政説明のほか、心理士協会への研修会の依頼が結構ある。いくつかは名指しで依頼をいただいている。謝金を出してくれるものは、きちんと手続きをしてありがたくいただいている。ちゃんとみてみたら、9月から土日両方休みのところがない!次の休みは12月27日だということに今(11月末)気づきました!平日休まなければ!

臨床のときは P98~

松村 奈奈子

9月に遅い夏休みをとて、今年は栃木県へ旅に。栃木県、実は、生まれて初めて訪れました。

北関東は遠くて、関西人にとってなかなかハードル高かったです。かの有名な日光東照宮、思っていたよりカラフル、そして人の多さにびっくり、やるな一徳川家。あの有名な、左甚五郎の彫刻「招き猫」やお猿さんシリーズ、多くの観光客に交じって写メしっかり撮りました。他にも大谷石地下採掘場や中禅寺湖などなど、見どころ

いっぱいの栃木を満喫しました。とってもおいしい宇都宮餃子を食べながら、日本にはまだまだ行ってない魅力的な街があるなあとしみじみ思いました。

神科医の思うこと

P131~

村本 邦子

今月、両眼とも白内障の手術をした。2週間ほど大変だが、多少ペースダウンしながら穏々と日常をこなした。これからだんだんと体もいろいろ問題が増えていくだろうが、あまり振り回されずに、状況に合わせてできることを重ねていきたいと思っています。

視力が安定するまで1ヶ月ほどかかるようだが、基本的によく見えるようになった。これも科学の進歩、機能的にはありがたいことだと感謝しているが(文句言ってバチが当たったら困る!)、主観的にはサイボーグ感が拭えない。ChatGPTとかが脳神経と接続したりするような日も遠くないんじゃないだろうか。



周辺からの記憶

—東日本大震災家族応援プロジェクト—

P113~

國友 万裕

このところ引っ越しを考えています。今住んでいるところは早いもので、もう13年近く暮らしています。

25歳の時、アメリカ留学から帰って、千本通で暮らし始めたもう36年以上が過ぎています。その間、2度引越しはしたのですが、至近距離での引越しでした。アメリカ留学前の1年半は西院のところで暮らしていたため、中京区暮らしはもう38年ぐらいということになりますよね。

65歳や70歳を過ぎると貸してくれる物

件は減ると聞いています。貸す方の人たちからすれば、そこで死なれたりしたら困るというのがあるのでしょうか。だから 65 歳になる前にどこかに引っ越さないと、と思っているんです。

今のところで一生暮らしても構いませんが、どっちみち京都で一生暮らすんだから、他の京都の地域を味わってから一生を終えたいとも思うんですよね。

さて、どこにしようか。今考えているのは、出町柳です。何故、出町柳なのか。また、そのことに関しては、連載の中で書きたいと思います。

スポーツおじいさんになりたい！

P85～

三浦 恵子

9月末、日本司法福祉学会理事会・大会への参加のため約半年ぶりに関西に出向きました。私にとっては約40年過ごした思い出の地であり、久しぶりに母のお骨を収めたお寺にもお参りしたいと考えています。

しかし時は大阪万博閉幕直前、交通機関も宿も大混雑！ そういえば学会案内にも「宿の確保はお早目に」という記載があった…と思い返し、手際の悪さを反省しました。

「1970 年のこんにちは～」(三波春夫) の大阪万博の時もきっと同じような熱気だったのだろうと思い起こしています。

思えば、今年 3 月、和歌山の施設で療養している父の状態が悪化し急遽そちらに向かうことになった際も同様の大変さがありました。下記は同僚とのやりとりです。

同僚「何度も往復するのも大変だから、週末は和歌山で過ごしてくるのもいいのでは」

私「いや、もうあの地には私の居場所なんてないから(ふつ)」(寂しげな表情)

同僚「いや、そんな…」(悪いことを聞いてしまったか！…)

私「和歌山はパンダ様とパンダ推しの方々で席捲されているので、私のようなものは宿すらとれないんですよ…」

同僚「パンダかーい」

パンダ返還前に「もう一回会いたい」という方も多く、和歌山も大混雑でした。

(なんとか和歌山で宿も取れて、父も回復

したのでした)

現代社会を「関係性」という

観点から考える

P187

竹中 尚文

私は坊さんとして葬儀に関わる機会が多い。私は葬儀の経済的状況を分かっているつもりでいた。このところ私と近い関係の人が亡くなっ、お葬式という機会が続いた。近い関係であるから葬儀会社との交渉にも立ち会う機会も得た。そして葬儀にかかる費用の相場が町によってずいぶんと差があることに驚いた。ある町では 3~50 万円ほどに見えるお葬式が他の町だと 6~80 万円だという。さらに 130 万円以上もかかる町もあった。もちろんお葬式は個々に依頼する内容も異なるので一律の比較は困難だ。それにしても、この差異は大きすぎる。

◆この 3 つの町の違いは、まず町の大きさだった。最も安価だったのは田舎町と呼ばれる所だった。小さな町はリアルなコミュニケーションが多いように思う。お葬式に関心を示すのはある程度の年齢の高い人たちだ。自分や配偶者のお葬式があり、親のお葬式がある世代だ。小さな町で交わされるのは実際の言葉であり、リアルなコミュニケーションである。彼らが SNS などのツールを使ってお葬式を話題にする事例は少なそうだ。仮想空間や TV コマーシャルで提供される情報は葬儀業者によるものが少なくない。仮想空間で話されるお葬式の話題は意図を持って発信されたものが多い。そうするとネット上で AI が回答してくれる仏事の情報は、「え？」と首を傾げたくなる回答が少なくない。

◆リアルなコミュニケーションによる地域社会の形成は、私たちの生活そのものを守るように思う。



路上生活者の個人史

P83～

坂口 伊都

この 3 か月、目まぐるしく過ぎていった印象です。9 月に友人に会いに横浜へ。15 年ぶりの再会でした。年を取っても学生時代に戻りますね。その次の週に大阪万博へ前の職場の同僚と行きました。会場は見事な人の群れ。大回廊からの眺めが圧巻でした。

10 月に西川実行委員長に誘われて 2 年連続で対人援助学会大阪大会実行委員をさせていただきました。大会には多くの方に参加していただき、無事に終えることができました。ありがとうございます。準備期間中からドキドキすることも多々ありました。それでも、皆さまのお力を借りてやりきった感じです。こっこる一むのフィールドワークから始まって、ずっと興味深さを感じた大会になりました。今回参加が難しかった皆さま、次回の大会でお会いできるといいですね。

また、10 月から非常勤で里親支援の職に就きました。これまでの経験が役に立てば嬉しい限りです。新たな仕事が始まるときもまだ時間がかかりそうですが、今後どういう展開になるのか楽しみです。

療育手帳の向こう側

P108～

河岸 由里子

公認心理師・臨床心理士・北海道

かうんせりんぐるうむ かかし 主宰

【安楽死】先日小耳にはさんだのは、スイスで「安楽死」の話。「生きる権利があると同様に死ぬ権利がある」という人が居る。自殺予防に勤しんでいる身としては、「安楽死」を認めたくないが、自分がもし不治の病にかかり、痛みに苦しみ、子どもたちに迷惑をかけるとなったらどうだろう？ きっと緩和ケアで過ごすだろうとは思うが、とりあえず「安楽死」についてググってみた。

日本ではもちろん認められていないが、海外ではオランダなど認めている国もある。アメリカでも数州で認められている。ただし外国人の受け入れはスイスのみ。スイスでも「積極的安楽死」は法的に禁じられている。認められているのは自殺ほう助であ

る。自殺ほう助の団体が複数あり、まずそこに入会する必要がある。入会金は1万円足らずのようだ。その後審査がある。「治る見込みがない」「耐えがたい苦痛や障害がある」「健全な判断能力を有する」など各団体で定めている条件をクリアする必要がある。病状などの詳細を英語で書いたものが必要だし、英語、独語又は仏語での面接もある。費用は処置費、渡航費、滞在費などで200万～300万円。処置費は200万円くらいとか。医師がセットはするが、スイッチを押すのは自分自身だそうだ。点滴のバルブをひらくのだ。その後医師の死亡診断書、警察への報告などが行われ、遺体処理をしたのち日本へ遺体移送となる。遺体移送費は遺体処理費等を含むと100万～300万くらいかかるらしい。総額最大600万、日本に戻つてから葬儀をするならそれが加算される。それでも何年続くかわからない介護や薬品に費やす費用よりは安いのかもしれない。日本人が登録できる自殺ほう助団体は二つある。既に100名弱の日本人が登録しているという。

今後、「すべての手続きをサポートします」というキャッチフレーズで、「安楽死」への旅を企画する旅行会社が出てくるのかもしれない。或いはいずれ日本でも自殺ほう助が法的に認められる日が来るのかもしれない。昨年放送された報道をみたり、いろいろな記事を読んだりし、考えさせられた。

ああ、相談業務

P76～

先人の知恵から

P151～

中村 正

この間に書き溜めてきたものが相当の量になり、まとめて出版したらという要請を受け、編集をしていたが、ようやく出版となった。『脱暴力の臨床社会学』(人文書院)である。400ページ近いので高い。5280円もする。近くの図書館で購入希望をだして読んで欲しい。このマガジンの連載も一部だけ入っている。それでもまだかなりの分量が残っており、別に出版予定である。これまで書き散らかしてきたものを整理したので自分が何を発言してきたのか振り返りになる。マガジンは原稿そのまま

なのでいいのだが、共著本や雑誌論文は初校、再校と続いているので修正がある。

最終的に出版されたものをスキャンしてテキスト化し、完全版としてワードファイルにする作業をしてきた。ようやくそれが完成し、35年間にわたって書いたものをテキストにできた。それにしても最近のデジタル技術はたいしたものである。スキャンしてテキスト化する際の精度は概ね完璧である。今回出版した原稿を除き、既発表の原稿、このマガジン、またweb記事など合わせると、全体としてA4ワードファイルで1300ページくらいはある。次はこれをアップデートして出版原稿にしていく作業をしている。さらに、一般社団法人を創業して新しい活動もはじめたのでなお蓄積している。このマガジンも終わりは見えない。発信したいことが山積なのである。

「楽しそうに退職しましたね」と周囲の人から言われるので、動きは止まらない。まあしょうがないか。



臨床社会学の方法

P22～

中島 弘美

CONカウンセリングオフィス中島は

2025年11月で、30年を迎えました。

30年前の1995年、1月17日に阪神淡路大震災を経験し、三ヶ月ほど勤務先での仕事がストップしました。人生、何が起るかわからないということを実感しました。これから、どうするのが良いのだろうかと見つめなおし、考え方抜いての事務所スタートでした。

今日まで多くの方々に支えていただき、続けることができました。心から感謝申し上げます。ありがとうございます。

カウンセリングのお作法

P32～

黒田 長宏

本文に書いたバーチャルサロンだが、これをみると、東京都大田区で実際にこういうサロンを作つてみたいというイメージがわかる。それまでの間に考えている策もある。

ああ結婚

P166

脇野 千恵

今年も草津で、団士郎先生の漫画展と講演会を開催できた。講演を聞きに来てくれた人が10人ほど。久しぶりに出会う人もいた。地域の市民活動の場でもあるので、フロアでの講演はざわざわすることあってハプニングもあったが、それもありかなと。漫画展を見に来た人が、講演も聞いてみようかなと思ってくれるのが嬉しい。

市のコミュニティ事業団の人が休日出勤をして、色々と機材を調達してくれた。感謝だ。

漫画展の打ち合わせのとき、事業団の人に尋ねられた。「子育て真っ最中で、子どもに何か問題が起つたとき、それってやっぱり家族なんですかねえ」と。難しい質問だと思ったので、「一度お話を聞いてみませんか」とアドバイスした。家族のことを長く勉強しているが、同じことを何度も何度も学んでいるのに、飽きることがないのは不思議だ。自身はあまり賢くはないが、気に入ったこと好きなことはコツコツ続けることは苦にならない。自分がいいなと思ったことは、すぐに人に話すのも好きだ。相手はどう思っているか知らないが…。団士郎先生の「やってみたら！」という言葉がいいなと思っている。

問題が起つたとき、家族でできることはやってみよう、できない時は助けてと言えばいいと思えるのは、長く家族のことを学んできた大きな成果だと思う。そんなことを人に上手く伝えられるといいなとも思う

こころ日記「ばちばち」

P227～

岡崎 正明

「人生は旅である」と言ったのは誰だったか。中田英寿？スナフキン？まあ誰でもいいが、今年はいろいろなところに行か

せてもらった、旅の多い年だった気がする。大阪、北海道、山口、兵庫、福岡、香川、島根、滋賀。初めて行く所もあれば、久々の場所から、何度も来たけど意外とちゃんと見ていなかった所まで。知らないことを知り、世界の広さを認識する。旅の形や目的は、人や場面によってそれぞれだけど、私にとっては心が動く貴重な時間だ。

そういう意味では、今年は物理的な移動を伴う旅も多かったけど、未知の体験を通して出会いや発見をする、精神的な旅・冒険也多かった。自著を出版する、記者会見をする、取材を受ける、ラジオに出る、本屋に営業する、親を亡くす、研修を企画する…。どれも非日常的で、驚きや戸惑いもあるけれど、とても大切なことを教えてくれる時間であった。そんなところへ連れて来てくれた周囲や、辿り着いた自分の幸運に感謝である。

来年も何が起こるか分からないけど、きっと楽しいことも、しんどいこともあるだろう。いろいろな場面を大切に味わい、感謝しながら面白がって生きていくねーと思う。そんなわけで皆さん、ちょっと早いけど、どうぞよいお年を！

あ、そういうえば年明け早々、当学会のオンライン研究会で話をさせてもらうことになった。家族を再発見し、自己理解につなげる。親の介護や看取りのあり方。そんなことに興味のある方、よかつたらご参加ください。

2026年1月23日(金) 20:00~22:00
『自分史・家族史づくりがもたらす、相互理解とケアのかたち ~援助職がムスコとして味わった物語~』学会HPから申し込みフォームへ(参加無料)

役場の対人援助論 P93~

千葉 晃央

「家族支援と対人援助ちばっち」([家族支援と対人援助 ちばっち 家族療法 千葉晃央 福祉](#))の名前がウミガメの調査基地の外壁にあります。

鹿児島県屋久島のウミガメの生態調査に「家族支援と対人援助ちばっち」として協賛しています。屋久島は、北半球最大のアカウミガメの産卵地です。アオウミガメに関しては日本北限の産卵地です。協

賛をした日本ウミガメ協議会屋久島支部([日本ウミガメ協議会トップ](#))さんは、ボランティアを中心に屋久島島内海岸でのウミガメ上陸産卵状況、産卵環境状況などの生態調査をしています。未来でも同じ光景が見られるよう、環境保全、生態調査を微力ながら支えたいと思います。

カメは大好きです。長年カメを飼い、一緒に寝台列車に乗って大阪から秋田の実家に帰ったことも複数回あります。長生きのカメで家族よりも長く同居をしていた時もありました。自分を動物に例えると?というワークではいつもカメを描いてきました。アレルギー、アトピーがある私には体毛がある動物との同居は難しく、その中でカメは唯一一緒に過ごせる存在でした。

屋久島のこの活動をしているのは、私の幼なじみ大野睦さん(ネイティブビジョン代表[ネイティブビジョン | 屋久島縄文杉ツアーアー・白谷雲水峡ガイド | 世界遺産エコツアース専門会社](#))です。対人援助学マガジンにも以前に連載をしてくださいました。以前、屋久島に行った時には、産卵の中心となる永田浜を案内していただき、上陸したウミガメ、孵化した子ガメに会うことができました。かわいいし、感動的でした。そして、屋久島の自然にも感激しました。

皆さんも、ぜひ一度屋久島へ、そしてウミガメに関する活動に注目してみてください！そして、ちばっちのマークのデザインは、マガジン連載の小池さんです。こうして皆様に支えられています。



家族支援と対人援助 ちばっち

chibachi@f2.dion.ne.jp

090-9277-5049

障害者福祉援助論 P17~

見野 大介

ようやく秋になり、窯焚きも苦ではなくなってきた。ただ、11月だというのに未だに蚊が…。軸薬作ったり、粘土の再生作業したり、冬になると苦行でしかない屋外での作業が溜まっているから、なんとか今月中には終わらせたい。

ハチドリの器 P4

柳 たかを

今回の連載は宮沢賢治の「座敷ぼっこ」の話」を下敷きにしました。「座敷わらし」ともいいですね、古民家の何処かに棲みついて、住んでいる人間が、彼(座敷わらし)にとって好もしい人達なら色々と「福」をもたらしてくれるといいます、逆に人が自分の欲にとらわれると、興味を失つていつの間にかいなくなるそうです、

今、学歴詐称や疑わしい難民認定など怪しい事案が多数押し寄せて来ていますよねー、座敷わらしならこういう人たちをどう評価するんだろうなんて、そんな妄想をしているところです

お客様 P135~

荒木 晃子

盛会のうちに対人援助学会を終えた。大会実行委員としては大してお役に立つことはできなかったが、開催校での盛会に、大会長のNさんは安堵しておられることだろう。Nさんと言えば、二日に渡る学会期間中、いつも慌ただしく走る姿をお見かけしていた。まるで背中に元気玉を背負っているかのようで、こちらも元気とやる気をもらえたような気がしていた。大会長をはじめ、関係者の皆さん、本当に疲れさまでした。コーディネイトした理事会企画は予定通り、とはいかなかったものの、参加してくださった会場の方々から、本テーマへの関心の高さをはかることができたように思い、感謝している。

これまでには「性と生殖」をテーマに「不妊」に関連付けて記述してきた。前提として、あくまでも男女のマジョリティ・カップルが対象であった。今後、これまでの男女二元

論という限定的な視点では語れない。さて、どうなることやら。

生殖医療と家族援助 P80～

古川 秀明



20年ぶりに島根県を旅しました。そのライブハウスに招かれ、ライブをしました。マスターは沖縄県出身で蛇の皮を張った三味線「三線（さんしん）」と呼ばれる伝統楽器を自在に弾きこなされます。これは蛇皮線（じゃびせん）ですね？と尋ねると、沖縄では蛇皮線（じゃびせん）と言わなくて三線（さんしん）というそうです。蛇皮線（じゃびせん）というのは本土の人だけだそうです。そこでマスターにお願いして沖縄の唄「ハイサイおじさん」を一緒に演奏して歌いました。口笛や踊りが飛び出し、大変盛り上がり、会場はまさに興奮のるつぼと化した沖縄でした。こんなとき、音楽をやっていて良かったなあと思います。

講演＆ライブな日々 P105～

原田 希

原稿締め切りの1週間前が母の命日なので、それが終わるまでは手付かずのままゆっくりしてしまいます。大好きだったイチゴを買いに行つたけど売っていない季節で、ケーキをひとつ買ってきて、紅茶をいれてあげました。水を入れたマグカップを電子レンジでお湯にしてティバックをいれぱくぱくする方法で。鍵っ子だった私が安

全に紅茶をいれてひとりでもおやつタイムを楽しめるように、と母が操作を教えてくれた日の情景が懐かしく思い出されました。今はIHっていう火を使わない台所があるんですね、と写真の中の母に教えてあげました。いい命日でした。さて原稿！原稿！

原田牧場Note P207～

野中 浩一

主な仕事を一時的に引退し、自由になる時間が増え、ささやかな変化を感じています。

- ①洗い物をする機会が増えた、②色々な人と話したり食事したりする機会が増えた、
③散歩をする機会が増えた。

まあ良くも悪くも大したことは起こらないですね。ありがたいことです。

そんな日々の中で、今年度は島根大学の社会教育主事（社会教育士）の講座を受講しながら、50名の社会人受講生と、サポーターの方々と、活発に情報交換をさせてもらっています。

coconollp@gmail.com

島根の中山間地から Work as Life P245～

西川 友理

大阪キリスト教短期大学で保育幼児教育者養成に、またそれ以外の場所でも福祉系対人援助職養成に携わっています。昨年あたりからおやこ対話のファシリテーターとしていろんなところに顔を出させていただく機会がぽちぽちと出てきました。

さて、去る10月11日・12日、対人援助学会第17回年次大会にご参加くださった皆様、本当にありがとうございました！皆様のおかげ様で大変盛り上がった、学びの多い学会になりました。ひとつ、こぼれ話を紹介します。

「ガッカイ」というものが何かも知らなかつた18歳の学生が、チラシを見て「面白そう！」とお手伝いを申し出してくれました。色々と動き回り、ポスターを見て回り、分科会に参加し、何もかも終わった後、感想を聞くと「もっと勉強したい、と思いました」

という言葉が。「だれかを支援する、って本当に色んな人が関わる事なんやなって、めっちゃ思いました。支援の場って、本当に色んな人がいるんですね。もっと色々知りたい。色んな人に会って、いろんなことを勉強したい！」とのこと。ああもう、こんなこと言われると、ほんとにたまらなく嬉しいです。それもこれも、学会で彼女に出会ってくださったみなさんのおかげです。

対人援助学会は、引き続き、1月23日にオンラインで研究会が開催されます。ぜひご参加くださいませ！

福祉系対人援助職養成の 現場から P71～

松岡 園子

—母の「きちっとさん」事件簿—

母は几帳面な性格で、物の位置も日々のルーティーンもピタッと決まっています。少しでもズレると、すぐに世界がざわつくらしい。朝、30分寝坊しただけでも、「今日、世界が狂った？」かのような真顔のパニック。スマホがパスワード画面を出しだけで「え、何が起きたの？」と大騒ぎ。その小さな大事件が起きるたびに、つい笑ってしまいます。

統合失調症を患う母と ともに生きる子ども P197～

寺田 弘志

久しぶりに歯のかぶせ物が欠けたので、いつもの歯医者さんに行きました。すると前みたいに、粘土で型をとることがなく、3Dスキャナになっていました。

「精度はいかがですか？」とたずねると「粘土は温度などで膨張・収縮するので、粘土より誤差が少くなりました」ということでした。3Dスキャナは全国の4分の1くらいの歯医者さんで導入されているそうです。私もずいぶん前のことですが、3Dスキャナが出だしたころに、施術用に購入したがありました。しかし、スキャンするのに時間がかかる上に精度が悪くて、使い物になりませんでした。

丈夫なのかなと心配していましたが、かぶせ物をつけてもらうと、まったく違和

感がないのに驚きました。パソコンでかぶせ物の形状まで指定でき、院内のミリングマシンで削り出すことも可能だそうです。

今はまだ歯科技工士さんに加工を依頼しているとのことでしたが、歯科技工士さんの仕事が減っていくことは容易に想像できました。

いつか施術用ロボットができ、柔道整復師の仕事が減りだすのも、そう遠くない未来なのかもしれません。

いつも「誰か施術してくれへんかなあ」とばやいている私が、真っ先に施術用ロボットを買うかもしれません

今回も本文では、パラドキシカルストレッチングの説明をしていきます。

接骨院に心理学を入れて P174~

篠原 ユキオ

『旗本退屈男になった日』

中1の孫が10月に運動会の3人4脚で倒れてオデコに大きな怪我をした。直後は大きなキズパワーパッドを貼っていて痛々しい状態だったが10日もすると綺麗に治っていた。同時に一緒に潰れた額のニキビも綺麗に無くなつてその回復力にあらためて感心した。

その数日後、次女から「来週オデコ手術するねん」と告げられて驚いた。1年ほど前から額にできていたコブがどんどん大きくなってきたので切除する事になったといふ。

毎日のように顔を合わせていたのに気が付かなかったのは前髪で隠れていて分からなかつたのだが父親としてはわが子の綺麗な顔に傷ができるという事がショックだった。さすがに手術の日は落ち着かず、次女からのメールが届くまで仕事が手につかなかつた。

幸いに手術は無事に成功し、今はほとんど傷跡もわからない状態になつているのだが、その手術から間もない頃に今度は僕が怪我をしてしまつた。

足元の電気コードに足を引っ掛けた倒れ、机に額をぶつけてしまった。額が割れて血が止まらない。片手で額を抑えながら次女に電話してキズパワーパッドを買ってもらつた。

次女に「鏡で傷を見た時、早乙女主水

之介が頭に浮かんだわ」と言つたら知らなかつた。

早乙女主水之介は昭和の東映時代劇映画『旗本退屈男』の主人公、市川右太衛門の当たり役だが知らないのも無理はない。それなら漫画『愛と誠』の大賀誠かな。と思ったがこれも古かった。僕の額もキズパワーパッドのおかげでキレイに回復し、タテジワの一つのようになつてある。この一連の出来事は今年の秋の篠原家のオデコの傷の三題嘶となつた。

余談だが『愛と誠』のヒロインは早乙女愛なのだ。これは偶然の一致か。作者のながやす巧さんに会う機会があれば聞いてみようかなと思う。



HITOKOMART P220~

山口 洋典

2000年4月から2006年3月まで、大学コンソーシアム京都の事務局で勤務していました。立命館大学大学院理工学研究科の博士前期課程の大学院生だった1998年度と1999年度は中村正先生が総合コーディネーターを務めていたインセンシップ・プログラムのNPOコース(通称「NPOスクール」)でアシstanto(いわゆるTA)を務めていました。その後も「古巣」とはいくつかのご縁をいただいてきましたが、2025年度には、社会人向けの生涯学習事業「京(みやこ)カレッジ」の1講座として「防災と減災のためのリスクマネジメント」をコーディネートさせていただいています。こちらも、中村正先生のお声かけにより、担当する機会をいただきました。

2025年10月に大阪キリスト教短期大学で開催された対人援助学会の第17回大会では、村本邦子先生の司会のもと、大学コンソーシアム京都の「NPOス

クル」の頃にお出会いした cocoroom の上田假奈代さんによる講演の聞き手を務めさせていただきました。

実は対人援助学会の年次大会に出席させていただくのは初めてだったのですが、アウェイな感覚ではなく、なぜか懐かしい感覚を抱きました。

こうして多くのご縁に導かれていることを実感したこの秋、「防災と減災のためのリスクマネジメント」で先斗町のまち歩きをした11月29日、その日の夜に、先斗町歌舞練場の向かいの飲食店から火災が発生しました。火元となったお店は、かつて中村先生に保証人になっていただいた住まわせていただいた京町家の大家さんとよく通つた界隈で、かつての縁と日常の時間が、静かに胸の中で重なつた気がしました。

PBLの風と土 P168~

鶴野 祐介

晩秋の週末、松江市に行ってきました。街のあちこちに「ばけばけ」のポスターが貼られて、八雲とセツに沸き立っていました。小泉八雲記念館の近くになる八雲庵の「鴨なんば」が絶品でした。庭園とともに是非ご賞味ください。

うたとかたりの対人援助学 P158~

鶴谷 主一

今回は運動会が雨天延期で、平日3日間に分けてやつた話です。それに絡んで年長の恥ずかしがり屋の女の子の話です。

彼女は小学校の広いグラウンドで大勢の観客に囲まれて行うことに気後れしていく、延期の一報を聞いたときに正直「やつた!」と思っていたそうです。でもその気持ちを前面に出すと大人達に申し訳ないという気持ちがあつて、「ざんねんだね…」と言つたそうです。でも、あきらかに表情はニヤニヤしてゐる。

年長ぐらいになると、本音と建前が見え隠れするという話。

原町幼稚園 <http://www.haramachi-ki.jp>
メール office@haramachi-ki.jp

インスタ haramachi.k
ツイッター haramachikinder

幼稚園の現場から P64～

大谷 多加志

10月に開催された対人援助学会第17回大会に学会事務局スタッフとして参加しました。会場は大阪キリスト教短期大学、大会長はマガジン執筆者でもある西川友理さんで、お名前はいろいろなところでお見かけしつつも、仕事を一緒にさせて頂くのは今回が初めてだったように思います。大会長としての働きぶりを間近に、学生たちに慕われている様子や面倒ごとにも骨惜しみせず臨む姿を拝見して、こういう風に仕事ができる方なのだと感じ入りました。

ほかにもマガジン執筆者の方も含め、色々な方と久しぶりにお顔を合わせることができた貴重な機会となりました。マガジンを含めウェブの利便性や手軽さはとても大きいですが、リアルに対面の機会もやっぱり時々欲しいなと思います。来年の会場はたぶん京都、だそうです。

発達検査と対人援助学 P101～

來須 真紀

ついこないだ62号を書いたと思ったのに、もう63号。毎日毎日とても忙しかったです。仕事も推し活(わが子の習い事)も充実しているのですが、気が付けばクタクタです。今は2月に山口で行われる児童相談所とその近接領域における家族療法・家族援助の実際が楽しみでたまりません。私にとって全国の仲間との学びや楽しい話は次の力になっていきます。ご興味ある方はぜひHPをご覧ください。

教室の窓から P273～

山岸 若菜

現在の職場を12月末で退職することになりました。いくつか職場を変わると「波風立てず去る方法」もわかってくるので今回はその経験を活かそうと思っていましたが、最近はあまり他人の事情に深入りしない風潮のお

かけもあり、辞めやすくなってきた感じます。

でも一方で世間では退職代行サービスが

流行っているとか。

他人の事情に深入りしない風潮は良いけれど、余計なお世話も時には大事と思っているのでこれからはその塩梅が難しくなりそうです。

ある訪問看護師のあたまの中 P298～

迫 共

残念ながら勤務先の大学から雇止め通知を受けまして、次年度の受け入れ校を探しています。

そのため今号は休載とさせて頂き、職探しと最終段階の学位取得に集中させて頂きます。今年度は対人援助学会大会のみならず国際学会での発表、学会シンポ(12月予定)とワークショップ、勤務校の助成を活用した学生との街歩きイベント等、様々な業績を作る事ができ、学会投稿論文の掲載通知も頂きました。…と、頑張ってはいるのに、なかなか春からの仕事が決まりません。頑張りすぎ?

写真は10月に単著で出版した研究書です。ご興味おありの方は迫までお知らせください。学会員割引させて頂きます。

https://bookway.jp/modules/zox/index.php?main_page=product_info&products_id=1664

(迫メアド:
sakotomoya@gmail.com)

--



迫 共 SAKO Tomoya
sakotomoya@gmail.com
070-5654-1719

休載

付け加えることができる価値は何か？

～ パールハーバーメモリアルと日本人 ～

9

千葉 晃央

石油タンクは減り、「原子力」へ

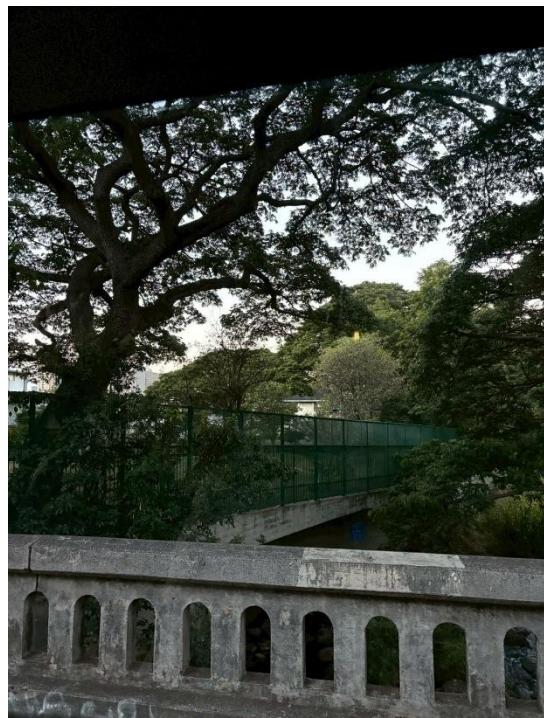
朝、5時50分集合。ハワイの産業のトップである軍需関連産業で、その中心となる基地「パールハーバー・ヒッカム統合基地（Joint Base Pearl Harbor-Hickam）」方面へ車で向かう。なぜ、こんなにはやいかというと、オアフ島の移動は車が中心で、通勤渋滞があるからである。

車異動の途中、「ここからはこのずっと向こうまで基地です！」との日系人である案内をしてくれた方の声。かなり広い。そこには大きな平たい円柱形の施設がある。それは石油タンクとのこと。今は9つタン



クがある。しかし、以前は26もあったそうである。そのぐらい軍の技術は進み、燃費も向上している。そして、石油ではなく、原子力にも置き換わっているとのことであった。この基地の敷地内には軍人の住宅もあり、ゴルフ場もあった。

道中、日本領事館に立ち寄る。奇襲だった真珠湾攻撃のときも、ここに日本領事館が



あり、FBI (Federal Bureau of Investigation:連邦捜査局) は、日本の動きを探っていた。そのため領事館職員等も目立つような大きな出入りはできない。日本領事館もアメリカ軍の基地の動向は常に監視していた。ただ、その情報を領事館からどう持ち出すのかが課題であった。その解決策として日本領事館から地下トンネルを掘り、領事館横の河川の土手に抜けることができた。その河川にボートをつけて、人が入りして情報を伝達していた。しかし、ハワイは火山島。土地岩盤はかたく、トンネルは人が這って出るのが精いっぱいの高さだった。

ハワイの基地は海軍と空軍の合同基地で規模が大きい。その一部が「パールハーバーメモリアル」として、真珠湾攻撃の被害、アメリカ軍の活動等を伝えている。

パールハーバーメモリアルで働く人々も軍人である。元有名教官だった軍人もいる。ツーリストにとって、ハワイの第二言語が日本語といわれるぐらい、日本語表記が街に溢れている。しかし、ここでは一切日本語表記はない。その中で日本語による音声ガイド機器は準備されている。入場時には基地なので透明なバッグに必要最低限のものを持ち込める。その荷物は入り口で軍人に確認される。入場すると右手に U S S ボー・フィン潜水艦福物館(別途有料)。奥には日本の海の特攻兵器人間魚雷こと「回天」もある。その横には米軍の沈められた戦艦一隻一隻に写真入りの碑が立てられていた。碑には艦の活躍とその終焉、被害者の数も記されている。

入場口の左手には真珠湾攻撃の記録の展示館がある。入り口には日本の戦闘機(模型)が天井からぶら下がり、真珠湾攻撃で行



われた魚雷発射態勢が表現されている。展示では、日本がいかに太平洋地域で覇権を拡大していくのかについて、図表も映像も用いて示されていた。その具体例として空母の模型も複数あり、甲板には複数の艦載機の模型もあり、その数も伝えていた。



戦艦アリゾナ・メモリアル

この建物はパールハーバーメモリアル内海上にあり、行くにはフェリーに乗船する。



その運航も軍が行っている。

乗船前にはブリーフィングルームで10代の女性が自分のルーツの方々がここで亡くなった話をしていた。合わせて真珠湾攻撃の説明をその彼女が行い、乗船予定者は全員がこの一連の話を学んで乗船した。話が終わると会場は拍手に包まれていた。

戦艦アリゾナ・メモリアルは祈念施設である。沈んだ戦艦アリゾナは今もその艦体の一部が海上に出ており、全体も海面下に見えている。その上に、戦艦アリゾナで亡くなった兵士の命に敬意を払い、祈念施設が



立てられた。白い建物の中央には星条旗が掲げられ、現在も海中のアリゾナから油が漏れしており、海面にはその油膜が表れている。これは「アリゾナの涙」と呼ばれている。建物の中の祭壇には亡くなった兵士の名前が千何百びっしりと刻まれていた。

また生き延びたアリゾナの戦艦乗組員が終戦後、天寿を全うし、その遺灰の一部を海中の艦内に家族によって戻されたエピソードも紹介されていた。海中で昔の仲間とも再会し、永遠の眠りについたということである。



このパールハーバーメモリアルは、アジア人の来場者が少ない印象であった。別日に訪れた方にきいても同様の印象であった。私が訪れたこの日は、日本語を話している人が1割ぐらいいた。日本人は、ここではいわゆる「加害者側」の立場である。国内のこうした平和関連施設とは逆の立場ともいえる。広島平和記念公園、原爆ドームなどでは外国の方々をお見掛けしてきたが、反対

の立場の経験である。こうした経験もしておかべきであると個人的には感じている。



降伏文書、神風特攻、戦艦ミズーリ

戦艦ミズーリメモリアルも訪ねる。ミズーリは日本降伏文書の調印式を行った戦艦である。そして、神風アタックを受けてもいる。その後、改装もしながら湾岸戦争まで使われた。砲塔の射程距離は42キロ。3門独立で動き、一つの砲台に90名程度が従事する。その砲台には撃破数として戦果マーキングと思しき数字もあった。

甲板には降伏文書が調印されたところが示されている。調印時の日本の代表は重光葵。暗殺未遂事件に遭っていて、当時は義足を利用していた。調印式では、その重光を想定し、時間配分を検討。その想定練習をアメリカ軍は行った。そこではある兵士がズボンにデッキブラシを入れて、義足による移



動時間をシミュレーションしたそうである。なぜなら軍艦の内部は戦艦でありバリアだらけだったからである。それでも当日は想定以上に調印まで時間がかかり、遅れて式が行われたそうである。文書署名ではサインを書くところを間違えてずれてしまうハプニングも発生。文書の書き直しを日本は主張したが認められず、訂正がなされたものが今に残っている。



特別攻撃部隊の跡



1945年ミズーリへの神風特攻隊による特別攻撃機には誰が搭乗していたかも2名まで絞られている。特攻後、ご遺体は甲板にあったそうである。そのご遺体を当時の艦長は「敵であったも尊敬すべし」として、日章旗を徹夜で手縫いさせて、アメリカ海軍による水葬式を行ったことも紹介されていた。痕跡は写真のように僅かな歪みがある。

ミズーリの甲板後方のスペースではイベントも行われていた。楽器演奏もあり、いかにも海軍である。このミズーリはミニッツ級の戦艦といわれ、ミニッツはアメリカ軍の有名な軍人である。ミニッツは海軍士官学校に入り、軍人に必要なことを学んだ。そこでは「東郷平八郎」についても学んでいる。その後、ミニッツは東郷平八郎が用いた軍艦の保全にも寄与している。



航空特攻隊員の制服

旧日本帝国陸軍の航空特攻隊員は、このような装備を身につけていました。皮製で毛裏の飛行帽子と飛行メガネのうち、帽子は羊皮とウサギの毛で作られています。飛行服の上に着たベストは、熱帯地方の植物の実からとれるカボック繊維が詰められていて、水中で浮力を得ることができます。同じく皮製の手袋と、ゴム底で黒い皮製の飛行靴を身につければ、航空特攻隊員の制服となります。

神風特攻飛行員制服

此模特身着帝国陆军神风特攻飞行员头戴皮质翻毛飞行头盔并配有航空护目镜似为羊皮所制，内衬翻毛则为兔皮，救生背心，其填充材质为木棉，此种植物纤维能在水中提供浮力，全套飞行动作手套和胶底皮靴。

臨床社会学の方法(51)

暴力の文化はあなたに「呼びかける」

中村 正

1. 「近助」の思想

内閣府男女共同参画局が発行している月刊総合情報誌『共同参画』11月号に、国のDV 加害者対策にかかる制度や政策について発言や提案をしてきたこともあり、巻頭言の執筆を依頼され、次のような文書を寄せた。特集はDV 対策である。紹介しておこう。

被害者にも加害者にも傍観者にもならない

内閣府調査によると、配偶者等からの暴力を受けながらも被害にあった女性の約4割、男性の約6割は、「相談するほどのことではない」等と考えて、誰にも相談していないことが分かっています。逆に言えば、被害を相談したことがある女性は約6割、男性は約4割となります。そして、被害を相談したことがある人のうち半数以上が「友人・知人」に相談をしています。このため、周囲の人たちの理解が重要となります。「知人・友人」は、当人の日常生活圏にいる身近な人たちのことです。見渡せる空間のなかにいる被害者の変化に気づき、声かけし、相談に応じること、これを「近助(きんじょ)」といいます。自助・共助・公助に加えた言い方です。DV や虐待について正確な情報を持ち、援助につなげていく架け橋のような役割を果たすことができ

ます。

見て見ぬふりをするだけではなく、「そんなことは喧嘩でよくあること」といってしまうことは加害者に加担していることになります。傍観者といいます。二次被害・二次加害も起こりかねません。傍観者としてではなく、「善き隣人として最初の支援者」になることは誰にでもできることです。第三者にできることはたくさんあります。例えば、「よく話をしてくれました」と応答するだけでもいいのです。DV 被害の専門機関の情報を伝えることもできます。

さらに、加害者対応です。DV 被害者支援の一環として加害者プログラムの対応をしている自治体が複数あり、プログラムを実施している民間団体も存在しています。一部ですが、暴力を振るう人も加害者向けの相談にやってくるようになりました。

そして、何よりも次の世代に向けた予防です。ストーキング行為、DV、子ども虐待、高齢者虐待等にかかる法律が2000年以降、数多く制定されてきました。現在20歳代までの若者はこうした時期の中を成長してきた世代です。家族体験が親の世代とは異なるのです。自らの家族生活を振り返りながら暴力や虐待についてとても敏感になっている世代です。特に男子がそうです。これから家族形成期に入っていく若い世代は、加害者にも被害者にも傍観者にもなりたくない脱暴力の意識をとても大

事にしています。その様子が私たちの取り組む男性相談から垣間見えるのです。

被害者支援、加害者対応、傍観者対策、予防的啓発がひとつになって暴力の解決が可能となります。できることから取り組んでいきましょう。

(月刊総合情報誌『共同参画』11月号、内閣府男女共同参画局、第194号、2025年11月10日発行、編集・発行内閣府)

毎年、11月の最後の2週間は「女性に対する暴力をなくす運動」となっている。配偶者等への暴力、性犯罪・性暴力等の暴力は、重大な人権侵害であり、男女共同参画社会を形成していく上で克服すべき重要な課題と位置付けた啓発である。パープルリボンをシンボルにして取り組みがなされる。今年度のテーマは、「DVや性暴力に、気づいたら、相談されたら、そのとき、私たちにもできことがある。」というのだ。意見を求められ、「私たちにはできことがある。」がいいのではないかとコメントした。主体性を表現するために「私たちには」として意思を明確にしたほうがよいと考えてのことである。残念ながら採用されなかったが、主眼は第三者の重要性である。

2. 被害者の相談行動

第三者とは市民である。暴力防止に市民社会がいかに向き合うのか、それは傍観者対策という意味になる。とはいって一般的な啓発の対象としての市民ではない。被害者の行動特性を考えてみよう。DV被害者は公的機関への相談ではなく、まず友人や同僚等、身近な人に相談することがわかっている。これはDVだけではなく、一定の人間関係にある者同士の暴力であるいじめやハ

ラスマントの場合もよく似ている。

いくつか紹介しておきたい。古いデータではあるが、小学生や中学生に「いじめを止めて欲しい人」を尋ねると、友だち、担任、保護者の名前があがる。こうした人たちに止めてほしいと思うのは、「傍観者」を減らしたいからだ。能動的な役割を果たす人が増えてほしいということを意味する(図1と図2参照)。

ハラスマントでも同じような傾向がある。ハラスマントを受けた後の行動として、パワー・ハラスマントとセクシュアル・ハラスマントの場合は「同僚に相談した」がトップとなっている(図3参照)。

DVの場合は、巻頭言にも記したように、男女とも「友人・知人に相談した」がトップであった(図4参照。内閣府「男女間における暴力に関する調査(令和5年度調査)」)。

そこで次の問題。暴力被害について相談された側はどうすればよいのか。突然の相談に戸惑い、適切な対応ができないことは避けたい。被害者の孤立感を深めること、相談された側も「力になれなかった」という後悔や無力感を生むことだけは少なくとも回避したい。共感疲労も生起するが、何もできずにいることの心理的負荷もあるので何とかしたいという思いは大切にしたい。こうしたことから、身近な人に相談を受けた時、友人、知人、同僚として何ができるかを知り、定式化し、整理をしておくことは、被害者が適切な支援につながるために大切なことである。知人・友人が「最初の支援者」として存在できればいい。そうした市民の存在は心強い。身近な人が、被害者にも加害者にも傍観者にもならない、つまり「善き隣人」になるという視点である(本連載

60号でも取り上げた)。自らが善き隣人として振る舞うことができれば、万が一、自らが被害者になった時にも助けてくれる環境がそこに存在することになる。合理的な他者ということでもある。ボランティア行動でいう「情けは人の為ならず」である。

第三者としてこうした役割を果たすことのできる市民が存在することは、市民社会の暴力への感知力を高めることになる。同時にそれは脱傍観者になることを意味する。その向かう先には、仲裁者、調整者、支援者が続く。もちろん支援のあり方は多様であるが、傍観者、同調者であることだけは回避したい。それは加害に加担することに他ならないからだ。

3. 加害で悩むことの相談

さらに重要な次の課題。では加害の場合はどうだろうか。男性相談と加害者相談の知見からすると、自ら加害者として警察に相談にいくことはない。しかし窓口さえあれば、DV加害相談に来談する男性たちは少なくない数で存在している。相談先は公的ではない場所と人であることが多い。DV加害者相談の窓口である。一般社団法人UNLEARNは個人相談とグループワークを実施している。京都府から事業として受託している。被害者支援の一環としてDV加害者を対象とした更生のためのカウンセリングである。

この取り組みの目的は、DV加害者が自らの行動に気づき、暴力に頼らない関係づくりの術を身につけることである。専門の相談員との個人カウンセリングを行った後、グループワークを行うこととしている。対象者は男性であり、暴力を繰り返さない、

更生意欲のある方、自分を変えたいという積極的な意思のある人としている。暴力に頼らないコミュニケーションをとりたいと願う、男性として生きづらさを抱えている方を対象にしている。この立て付けの相談には一定数の男性が来談する。週4コマの個人相談枠の9割ほどは埋まっていく。さらにグループワークは月に2回であるが、常に2から3つのグループが稼働している。

加害をしてしまい、それを誰に相談しているのかについてのデータはない。被害者相談とは異なり、仮に相談があった場合、知人・友人として何ができるかはさらに悩むところだろう。少なくとも、被害相談と同じように、こうした加害相談窓口があることを知っておき、情報として伝えることがまずは必要である。今後、加害者対応が進むと、加害の相談は知人や友人に対してもありうる。

しかし他方では、すでにDVや虐待に巻き込まれている家族は動かざるを得ない。被害当事者である家族や同居人は加害者に対峙する。緊急性も高く、とにかく避難しなければならない事案は別として、関係が持続する場合、被害者は加害者に自覚を促し、時には加害者として相談にいくよう指示、懇願することが少なくない。家族同士の暴力の特徴である。トラウマ的なボンディング（きずな）とも指摘される事態が背景にある。

社会制度として、配偶者暴力防止法（DV防止法）において保護命令制度が構築されている。保護命令制度は、被害者からの申立てにより、裁判所が、相手配偶者に対して、被害者の身辺へのつきまとい等の一定の行為を禁止する命令（保護命令）を発令

する制度である。保護命令に違反した者には、刑罰が科せられる。「配偶者」には、①法律婚の相手方、②事実婚の相手方、③生活の本拠を共にする交際相手（婚姻関係における共同生活に類する共同生活を営んでいないものを除く）が該当する。

また、離婚等の前に暴力等を受け、離婚等の後も引き続き暴力等を受ける場合、元①～③も含む。同性カップル間の暴力についても、保護命令の対象となった例がある。保護命令には、(1)被害者への接近禁止命令、(2)被害者への電話等禁止命令、(3)被害者の同居の子への接近禁止命令、(4)被害者の同居の子への電話等禁止命令、(5)被害者の親族等への接近禁止命令、(6)退去等命令の6類型がある。2年以下の拘禁刑又は200万円以下の罰金に処せられる。

しかしこの保護命令制度に連絡させた、私がかねてより提案してきた加害者の行動変容を指示するプログラムもしくはカウンセリングへ参加命令制度は構築されていない。だから被害者は加害者を何とかしようとして独自な努力を強いられる。

UNLEARNでの男性相談には、被害を受けている妻からの命令で相談にくる人が9割くらいを占める。公的な被害者相談にのらないとはいえた放置できないからである。

さらに最近では、妻命令に続き、娘命令、息子命令もある。娘は中学生の場合もあった。息子命令の事案はこんな様子だ。25歳の前妻とあいだの子どもだが、離婚後も交流があった。その男性は妻への暴力が原因の傷害罪で起訴された。拘置所に面会に来てくれたという。担当の弁護士にも進められUNLEARNの男性相談につながった。

ほとんどの男性はネットでDVについて

の様々な情報を得る。自分の行為はDVなのかという探索である。そういう調べあげている。その一環で加害者相談のことを知り、UNLEARNにつながることが多い。

最近では生成AIに相談し、加害者相談を提案されたという男性が来談した。AI命令である。他には、両親に言わされた人もいた。親族命令である。親密な関係性における暴力の特性とも言えるが、被害者やその周囲の人からの指示となっている。暴力が原因で離婚を提起されている場合は難しいが、別居をしつつ様子を見る際に、こうした参加命令はありうる選択肢である。

暴力加害者の一部とはいえ、彼らはどうして加害相談に来るのか。それは関係を持続させたいからである。もちろん反省を示すという見せかけの参加の事例もあるが、そうした動機の弱い参加者は長続きしない。真に加害をなんとかしたいという男性の場合は、自ら別居するなどしながら加害者相談に来るので長続きする。その前段階の情報探索行動で生成AI命令は初動期の動機形成としては意味がある。ネットへの加害者相談についての的確な情報発信が必要となる。一般社団法人UNLEARNはHPを作成しているがさらに検索しやすいように整理することを意識している。学術的な暴力加害の研究の情報発信が基本となるが、さらに強化すべきであろう。

4. 暴力の文化は「呼びかける」—男性の暴力を把握する理論として

巻頭言で「近助」の行動の重要さを紹介したのは、こうした知人・友人、同僚、家族や親族の存在の大きさを根拠にしている。この意味することについて別の角度から検討

しておきたい。論点は、「環境心理や生態として存在している男性文化」である。親密な関係性における男性の暴力の生成には、ジェンダー秩序、家族制度、生活慣行、戦争の影響、喧嘩の体験、競争文化、家族生育史などが重なりっている。ひとことで言えば、これらは男性としての主体形成において暴力性を含み、暴力を否定しない意識や行動生成の貯水池となっている。それらを自然なこととして身につけていることが相談から見えてくる。暴力を含む問題のある男性性は Toxic Masculinity（有害な男性性）と表現されているほどである。

しかし、この言葉は男らしさ・男性性の否定にもなりかねない表現でもあることから、「自他を害する過剰な男らしさへの執着」（伊藤公雄氏）という訳が提案されている。しかし、男性中心主義社会における日常のコミュニケーションや相互作用を解剖していくことからすると、また、被害者相談や暴力加害相談から見えてくることを勘案すると、この訳を広げて解釈する必要を感じる。

たとえば、マイクロアグレッションをジェンダー作用において切り取った「マイクロマチズモ」というフィルターあるいはレンズが有益であると考える。つまりその「有害さ」は「過剰な」というだけではない面を持つことを把握すべきだからである。男性性はマジョリティの特権に関わるがゆえに、無自覚さがあり、「過剰な」というだけはない局面がある。あるいはその「過剰さ」はジェンダーのことを考えなくてもよいという立ち位置に由来することを捕捉すべきだと考える。「無自覚さ」である。つまり、男性性ジェンダーだけではなくジェンダーその

ものについて無視できる位置にいることそれ自体が有害性の元だととらえたい。ジェンダーについての無自覚さ、無知であることが男性性ジェンダー作用であり、自らの暴力性を自覚できないことそれ自体が男性性ジェンダーの「効果」なのである。モラルハラスメントや心理的暴力はそのことを指摘してきたのだから。ジェンダーについて意識しなくてもよいという立ち位置は、結果として暴力加担的な方へと男性の主体を形成する作用を果たしている。

その主体形成やひきよせる事態を「呼びかけ作用」として把握してみる。代表的な理論家としてフランスのマルクス主義思想家、ルイ・アルチュセールの考え方を紹介しておきたい。

アルチュセールは、イデオロギーが社会を維持し、再生産するために不可欠なものであり、それは単なる観念ではなく、社会制度や実践を介して個々人を特定の「主体」として形成する働きを持つと定義する。彼は、国家が直接的な権力行使をする「抑圧的国家装置」と、学校やメディアといった間接的な権力行使をする「イデオロギー的国家装置 (les appareils idéologiques d'État : 略して AIE と表記)」を区別し、後者が現代社会で支配的であると論じた。イデオロギー的権力行使は、軍隊や警察のように直接的な暴力で支配するのではなく、学校や家庭、メディアなどが社会の価値観や規範を人々に教え込み、社会を支える主体になっていくことこそが社会構造を再生産するのに不可欠だと指摘した。

そしてこの作用の中心にあることをイデオロギー作用としての「呼びかけ interpellation」と捉えた。原語は「審問」と

いう意味であるが、最初に訳した西川長夫氏が「呼びかけ」と訳したものがその後も使われている。たとえば、警察官が「おい、お前。」と呼びかける。その呼びかけに応じて振り返ることで、個人は警察の権威に従う「主体」となることだと例示する。この「呼びかけ」は、私たちに特定の主体としてのアイデンティティを植え付け、私たちが自らをこの社会の主体だと認識して行動するように促す。

また、「イデオロギーは歴史をもたない」ともいう。イデオロギーは形を変えて常に存在する構造的な働きであり、特定の歴史的時期にのみ存在するものではないとアルチュセールは考えた。それは、フロイトの「無意識」のように、人類の歴史を通じて遍在する構造的なものだとされている。そして何よりも「主体形成への貢献」がある。人間はイデオロギーによって社会的な主体として形成されていく。これは、自己生成的な独立した主体ではなく、社会的な力によって作り出されるものという意味である。こうしたなかでジェンダーもイデオロギーとして機能しており、男性性ジェンダー作用は男性を生き生きとさせるように「呼びかける」。

総括的にいえば、「国家の抑圧装置は〈暴力〉」によって機能しているのに対し、「国家のイデオロギー装置は〈イデオロギー〉によって機能している」という。イデオロギー装置の具体的な例として、アルチュセールは、①宗教的 AIE (様々な教会制度)、②学校の AIE 様々な公立、私立の〈学校〉制度)、③家族的 AIE、④法的 AIE、⑤政治的 AIE (政治制度・その中の様々な政党)、⑥情報の AIE (新聞・ラジオ・テレビなど)、⑦出版・

放送の AIE、⑧文化的 AIE (文学・美術・スポーツ等)をあげている。これらの装置は、日常生活世界に遍在し、諸個人を従順で主体的な身体と心理をもった主体として編成する作用を果たすという。つまりイデオロギー装置とは、「生産諸関係の再生産、つまり資本主義的搾取諸関係の再生産に貢献する主体化の装置」と捉えたのである (『再生産について:イデオロギーと国家のイデオロギー諸装置』平凡社、2005年)。

5. 社会は人間に「呼びかける」ことをとおして文化を実現させる

暴力は人間としての主体の形成のなかに組み込まれており、社会の諸相で機能している。なかでもジェンダー作用はあらゆる方向から「呼びかけ」として存在している。当該社会を生きるために有意となる主体化作用である。社会を再生産するための主流となる「男性的な主体であれ」という「呼びかけ」が不斷に存在し、それに応答して生きる過程で男らしさが学習され、不斷に実践される。主流となった男性文化はその「呼びかけ」の源泉として、暴力と親和的あるいは必ずしも否定しない意識や規範としてある。文字通り、「呼びかけ」に応答することが男らしさの学習となる。

暴力行動は、社会的に構成されたイデオロギーという名の文化に応答する生活実践をとおして内面化されたものと考えることができる。とすると、社会的に構築されたものであるならば、社会的に制御することが脱暴力には必要であるし可能である。動機形成から行動変容への選択肢を社会的に編成する、つまり個人の心理やパーソナリティに帰属させないためにも脱暴力への個

人の変容を促す社会的制御が環境として構築されていれば脱学習は可能となる。暴力の文化として環境に埋め込まれた心理的社會的要素があるという立論となる。「呼びかけ」は暴力の文化を源流とする。つまり国家のイデオロギー装置の作用ということになる。

秩序の再生産のために〈国家〉は社会のなかで生きる人間をその社会の主体としてあらゆるイデオロギーをとおして編み上げていく。男性文化として存在しているジェンダーのイデオロギーは男性にも女性にも「呼びかける」。ジェンダー秩序は資本主義制度を維持するために、つまり社会構造の再生産のために不可欠なイデオロギー作用を社会の諸相で果たす。格差、差別、貧困、偏見を含む社会問題の一角に暴力がある。競争、霸権、支配、権力等が人々の意識となっていてそれが男性的な主体となるように絶えず「呼びかける」。こうして男性は男らしく男性になっていく。中心にあるのは男性特権であり、男性はジェンダーのことを考えなくても生きていけるような存在となる。

アルチュセールはこうしたイデオロギー装置の特徴を整序している。イデオロギーは、①主体としての諸「個人」へ呼びかける、②諸個人の〈主体〉への服従、③諸主体と〈主体〉とのあいだにおける、また諸主体自身のあいだにおける、相互的再認、④さらに究極的には主体の自分自身による再認という諸段階がある。長くなるが中心の部分を引用しておこう。

こうしてわれわれは、イデオロギーは、われわれが呼びかけ interpellation と呼び、警官(あるいは警官でなくとも)が毎日やっている、「おい、おまえ、

そこのおまえだ!」といった、きわめてありふれた呼びかけのタイプにしたがって思い浮かべることができるようにあのきわめて明確な操作によって、諸個人のあいだから主体を「徵募し」(イデオロギーは彼らをすべて徵募する)、あるいは諸個人を主体に「変える」(イデオロギーは諸個人をすべて変える)ように「作用し」、あるいは「機能する」ということを示唆しておきたい。・・街頭で起こったと仮定するなら、呼びかけられた個人は振り向くであろう。このような一八〇度の単純な物理的回転によって、この個人は主体になる。なぜか?なぜなら彼は呼びかけが「まさしく」彼に向かってなされており、また「呼びかけられたのはまさしく彼である」(そして別の者ではない)ということを認めたからである。経験の示すところによると、呼びかけという実際的な距離をもったコミュニケーションは、狙った相手をほとんどはずすことがないかのごとくである。

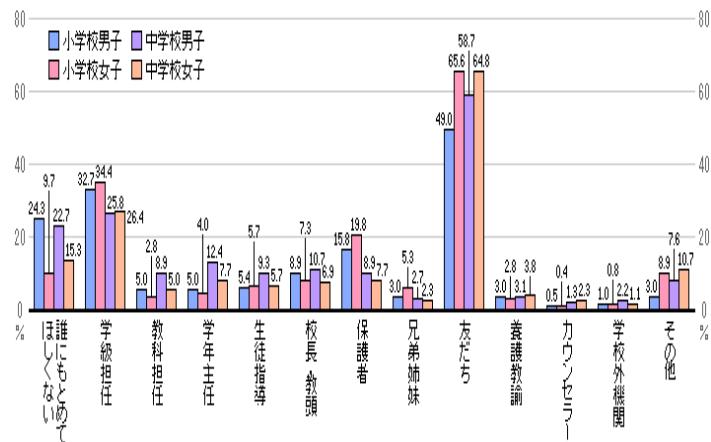
6. もう一つの「声」を善き隣人から発すること

ジェンダーは「呼びかける」。それに応答する相互作用を組織する。こうして男性をジェンダー的主体へと構築していく。すると、そうではない方へと別の「呼びかけ」を構築していくことを市民社会の「声」として発することで対抗するしかない。これは加害者との対話ということになり、保護命令制度に随伴したカウセンリング参加命令制度が必要だと主張する理由である。刑罰では脱暴力は難しい。対話を拓かなければならぬ。脱暴力への「呼びかけ」である。「声」を発するのは、善き隣人である。そして妻、娘、息子や親族である。第三者の存在がこうして意味づけられていく。

脱暴力のための社会的制御の構築における

る対話への参加をめざす取り組みが加害者相談となる。社会的に組成されている男性文化のなかの暴力親和性に対処することはひとりではできないので、脱暴力の社会的制御が必要となり、そこに組み込まれた対話創造が有益となる。

図1 いじめ問題の相談先



森田洋司ほか『日本のいじめ』(金子書房、1999)より

図2 いじめ問題で対応して欲しい人

クラスの誰かが他の子をいじめているのを見たときの対応の構成割合

対応	平成16年	平成21年						
		総数	男	女	小学生5~6年生	中学生	高校生等	就職・その他
総数	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	-
「やめる!」と言って止めようとする	18.0	16.9	21.6	11.6	24.1	13.4	15.1	-
先生に知らせる	21.4	25.7	26.1	25.3	39.7	25.1	14.8	-
友達に相談する	36.2	36.4	25.9	48.0	22.1	39.7	44.3	-
別に何もしない	24.4	21.0	26.3	15.1	14.1	21.8	25.8	-

森田洋司ほか『日本のいじめ』(金子書房、1999)より

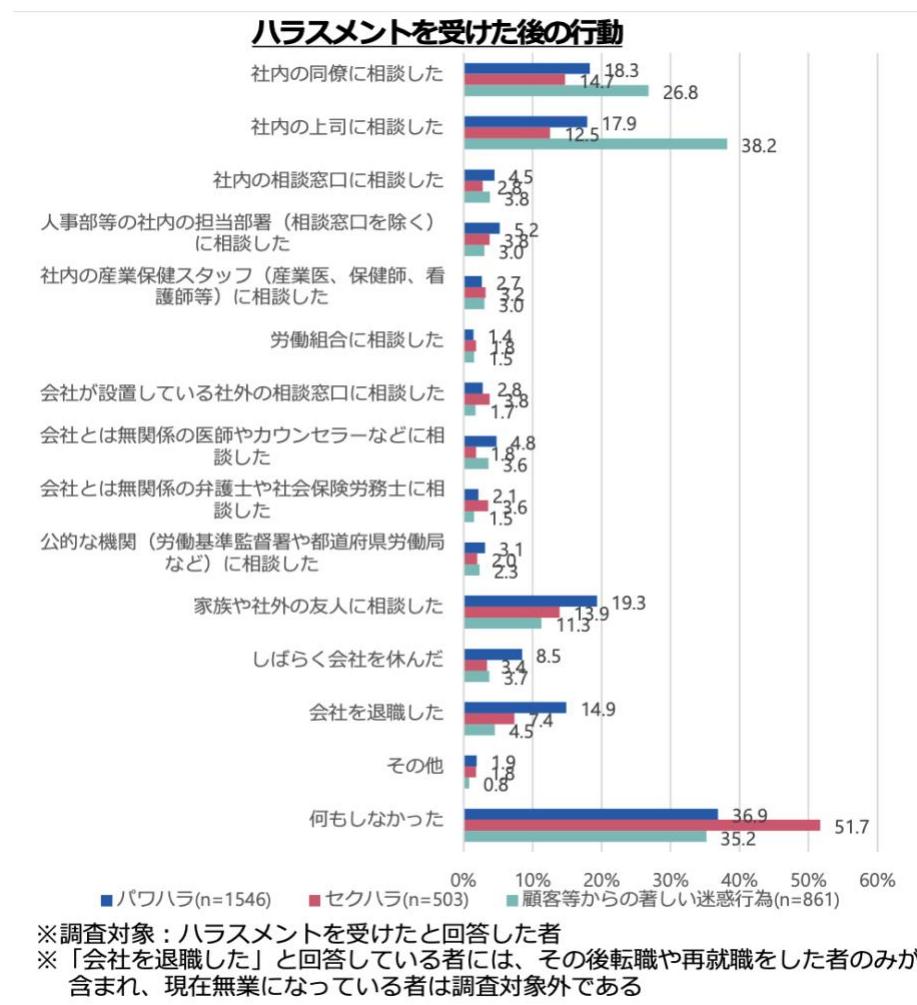
注)「高校生等」とは、「高校生」、「各種学校・専修学校・職業訓練校の生徒」の合計である。

厚生労働省『平成21年度 全国家庭児童調査』より

<http://www.mhlw.go.jp/stf/toukei/list/72-16b.html>

森田洋司ほか『日本のいじめ』(金子書房、1999)より

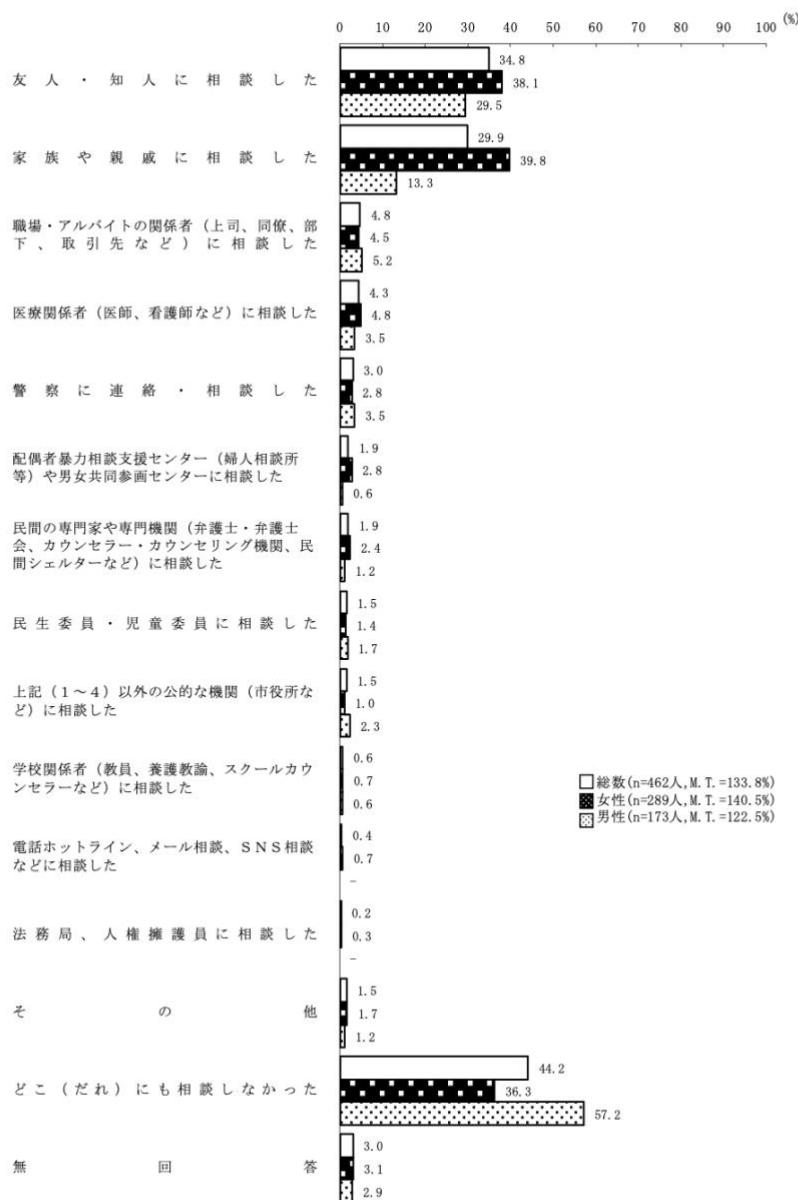
図3 ハラスメント問題での相談



(『職場のハラスメントに関する実態調査結果概要』(令和5年度厚生労働省委託事業) 厚生労働省、調査実施期間：2023年12月1日～12月29日、調査対象：全国の従業員30人以上の企業・団体有効回答数発送件数：7,780件/25,000件有効回答率31.1%)。

図4 DVでの相談（内閣府「男女間における暴力に関する調査（令和5年度調査）」）

図2-5-2 配偶者からの暴力の相談先（複数回答）



*「上記（1～4）以外の公的な機関」とは、下記以外の公的な機関を指す。

- 1.配偶者暴力相談支援センター（婦人相談所等）や男女共同参画センター
- 2.警察
- 3.民生委員・児童委員
- 4.法務局、人権擁護員

2025年11月30日受理

なかむら ただし

立命館大学 社会病理学・臨床社会学・男性性研究

カウンセリングのお作法 第45回

CON

Counseling Office Nakajima

カウンセリングオフィス中島 中島(水鳥)弘美

～ 支援の記録について(3) ～

初回面接 問題確認段階



支援を順調に効果的にすすめるために、何について記録を残すかの三回目です。

今回は、家族面接初回の問題確認段階を中心に話します。

問題確認での情報を記録

初回面接では、あいさつなどの社交段階を経て、本題である問題確認に入っていきます。どのような事情で相談に来られたのかの内容を確認します。この段階では、主に、ご家族が何を語るのかに注目し、記録をします。

ポイントは二つ。

参加者の家族それぞれが語る内容そのものと、そのことをどう受け止めているのかです。

たとえば、父は何を語り、母は何に注目をしているのか、子ども自身はどうか、そして、どのように感じているのか、それぞれの思いを語ってもらい、事実と感情を区別して聴きとり、記録します。

今日はどういったことで?

「今日はどういったことでこちらに来られましたか、どなたからでも、どんなことでも結構です、いろいろとお話をきかせてください」

と、ややゆっくり、はっきりとカウンセラーが問い合わせを投げかけます。

ご家族が考えている枠組みで自由に話をすることができるよう、あえて、オープンな問い合わせです。それは、家族なりの普段のやり方で話してもらうことを促進するという考えに基づいているからです。

申し込みの時点で、親御さんのどちらから、「子どもが学校を休んでいる」などの相談内容の話が事前に判明している場合でも、改めて、直接うかがい、ここからが全員そろってのスタートであるということを感じ取ってもらい、その場面で出てきた話や、ことばを記録します。

「どなたからでも、どんなことでも」というカウンセラーの依頼に対して、ご家族はどうする?だれが話す?と、顔を見合わせたり、どうぞと合図を送ったりして、打ち合わせをします。

その場面も貴重なデータです。どんなふうに家族がやりとりをして、物事が決まっていくのか(=誰が話すのかが決まる)に注目し、そのときに、子どもさんはどのような様子なのか、家族の行動パターンやかじとりの様子を観察します。

その流れを経て、来所した事情が面接室で語られます。

家族の誰かが話すところを別の家族メンバーもその場でストレートに聞くという体験をします。中には、「子どもの前で話していいのですか」と、言われることもあります。それは、親が事情を話すことについて、子どもが不快な思いをするのではないかと、子どもの気持ちに配慮する思いからくる発言と考えられます。子どもも、親が他者であるカウンセラーに自分のことを話している内容をじかに聞いて、さまざまな思いが生まれるという作用がおこります。

何かが明確になる場面でもあり、誰かにとって、シビアな体験になる可能性もあり、それぞれがさまざまな感情に向き合うことになります。

家族全員が同じような思いで来所事情を受けとめている場合は、次の段階に移りやすいのですが、必ずしも一致しないこともあります。そのような場合は、家族それぞれに「〇〇さんはどうお考えですか?」と、ひとりひとりに言葉をかけ、家族の受け止めについても家族それぞれの思い感情を確かめます。誰かが話しているときの、別の誰かの様子にも注目します。

今後の希望方向

例えば、学校を休んでいる状況について、どう受け止めているのかが語られます。

塾には通うことができるので勉強面は心配していない 放課後は同級生と遊んでいろいろ誘ってくれるのがうれしい 学校が合わない様子なので転校を考えているなど、これまでの事情説明とともに、あらたな話題も出てきます。塾、友人、転校など、家族の生活環境や関係者に関する情報も追加されて、さらに本人家族理解が進みます。

要注意 原因探しの話題

状況に対する受けとめや感情の話の中で、どうしても起こりがちのが、悪者さがし、原因探です。何が良くなかったのが、なんでこうなったのか、〇〇に問題がある、もっとこうしていればよかったとか、ときに怒りの感情が現れたりして、家族なりの考え方や感情が表面化します。

「なんで△△できないのか」と、話題が集中してしまうこともあります。カウンセラーはなんでという質問をご家族にしませんが、家族の話し合いのなかでは、「なんで、どうして」という原因探しになります。

このような中で、子ども自身が話しづらそうな様子であれば、

「〇〇さんは、これからどうしたい?どうなったらいいと思いますか?」

と、今後に焦点をあてた問い合わせを行い、これからに家族の視点が向くようにしていきます。子ども自身は、その問い合わせにすぐに応じるわけではありませんが、時間をかけながら、からの希望方向の意思確認をし、本人の意思を尊重します。

話せないことも

家族の思いに触れるなかで、とくに子ども自身が、スムーズに話すことができている様子だとしても、すべてをわかった気にならないように、要注意です。話せないことがあるかもしれない想定しつつ、表情、しぐさを見守りながら、気持ちや感情の理解に努めることになります。

晩年

D・A・N 通信

No.14

2025.08.21 (78歳3ヶ月) ~2025.11.20 (78歳6ヶ月)

団士郎

8/21

月末から予定が詰まっているので、早めに「木陰の物語」新作を。アッと思い立った話があって、スルスルと仕上がった。まだちょっと月初の締切日には早すぎだろう。引っ張られて、次々号のマガジン(12月15日発行予定)連載二回目にも手をつけた。楽しい。



8/26

ちょっとぼんやりゆったりしていたら数日経つた。Netflixで評判のものを見たり、youtubeに呆けたり。対人援助学マガジン62号の到着原稿編集作業は着々。近くの気になっていた

新しい鰻屋に行ってみたが、外国人目当てのようであつらなかった。錦市場の佃煮みたいな鰻を出した店よりはマシだが。



8/29

家族漫画展とトークを担当する東日本家族応援プロジェクトが進行中。白河市は巡回展のラスト。昨日1日は、15年前のあの日に起きたことを、じっくり聞かせてもらった。同時に、今日明日は能登、輪島高校で家族漫画展開催。その前には子ども食堂での展示も。いろんな人の支えで、あちこちでやれている。有難い。



8/31



この装束で立入り制限区域の大熊町議員さんのお宅だったところを案内してもらい絶句。久々に Chernobyl を訪問した時のことを思い出す。積算線量計の数値が少しずつ上がる。県のひらめ養殖場が地震と津波で崩壊。15年経ってもそのままのところが多数。



嬉しいことに輪島高校の学校祭で木陰の物語掛け軸展を実施してくださった。たくさんの人

に見てもらったようで感謝。私が能登に出向けるのは今月下旬になる。



9/1

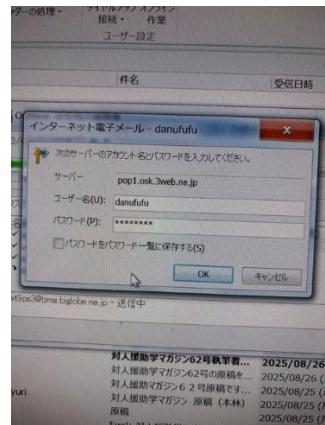
4泊5日の東北遠征、東日本家族応援プロジェクト+から戻ってきた。今年もいろんな方の話を聞き、初めての体験もし、初立入り許可のものも見た。2011.3.11から約十五年も経つが、隠されたところはこんな風だ。見せている綺麗な復興と、見えない放置されたものの混在が福島。原発事故は手に負えないのだ。



9/3

PCトラブルでとんでもない事態の渦中にいるが、一方でどうでもいい気もして、何とかしなきや…くらいの焦り。一番多用しているメールが使えなくなっている。なんだよこの画面、見

たことがない。大昔から使っているアドレスだけど、どうすりやいいのでしょうかねえ。マガジンの原稿受け取らなきゃならんのに。



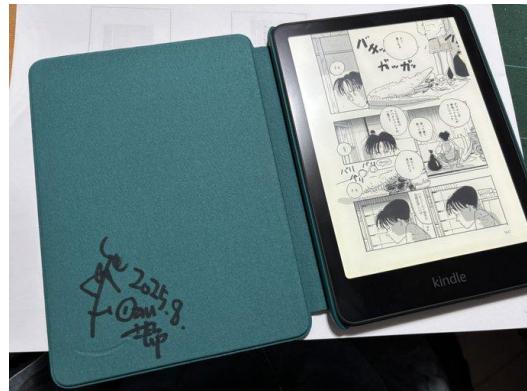
9/4

次々とミスやトラブルが重なるので、前に映画館で見て、かっちり作ってあるなあと面白かった「ラストマイル」を Amazon プライムで再見。みんなしっかり仕事しているなあ。やはり面白い、あっという間だった。物流現場、凄いね。



メールトラブルは料金が引き落とされていない結果だと分かり、その支払いに銀行に。その後、上島珈琲店で岡崎京子の pink を読もうと Kindle を手に出た。

支払いを済ませて、カフェに着いてコーヒーを飲みながら読もうとしたらなかった。銀行のキャッシュコーナーに置いてきたらしい。すぐ取りに戻る気にならず、銀行が閉じてから行ってみた。書類は書かされたがあつてよかつた。



9/6

昨日の台風の影響を微妙に受けていそうな新幹線。力チツと乗り継ぎを予定していたので、列車によって少々の遅れ含みというのが気になった。

ならば京都駅まで行って早目に変更。のぞみが思いがけず混雑していて、s.work?席とやらで二千円追加。何のことと思ったら、B席がパーテーションだった。初めて。



9/7

昨夜は小倉城前のホテルに宿泊。昨日、今日、二日間、2か所で二時間半ずつのお話。いい感触で、感想アンケートもたくさんいただく。送っておいた書籍もたくさんの方が買ってくださって、最新刊などもっと送っておけばよかった。ありがたし。



9/7

小倉からの帰路、広島に途中下車して〇さんと歓談。お互に独り者になった高齢者だが、彼がすっかり元気になっていて嬉しい。20時過ぎ発ののぞみまで五時間足らず、お茶飲んで、食事をして、あれやこれやの四方山話。写真のアニメ化ソフトやAIテクノロジーの進化に驚きながら笑う。



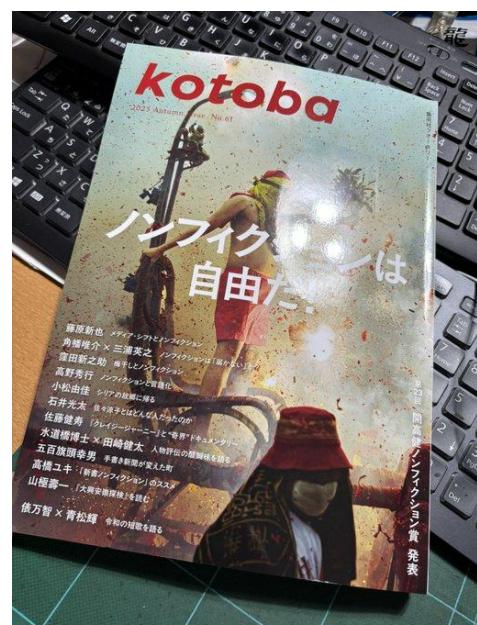
9/9

出かけたついでのタイミングが上映時間ぴったりだったので、「遠い山なみの光」を観た。静かにずっと緊張している物語に、ぐんぐん引き込まれていった。どの女優も素晴らしい。中でも、二階堂ふみって、こんな凄いんだと思った。



9/10

書店で目について久しぶりに購入したこの季刊誌。パラパラと目を通し始めたが面白い。角幡唯介と三浦英之の朝日新聞記者絡みと知る対談面白い。石井光太の書く佐々涼子の記憶も興味深い。彼の取り上げるノンフィクション三冊も同感、既読のインナップ。wさんのSNSはこの記事の写真だったか。



9/13

今日・明日は京都国際社会福祉センターの家族療法プログラムステップ3、事例検討。エントリーの少人数で、ジェノグラム事例検討と家族造形法。メンバーとして造形法に参加していると、思いがけない気づきが浮かんできて気持ち高まる。帰路、大津駅前から花火が見えた。ビルの狭間が綺麗。



9/14

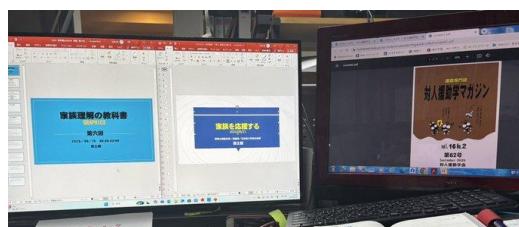
仕事終わりの帰路、駅からのタクシーで気持ちの良い音楽が流れていた。運転手の好みだろうと思っていたら、「ハイファイセットいいですね」と話しかけられた。そして「山本潤子の

声がいいんですよ」と言うので、「そういえばYouTubeで青い夏という曲をしばらく何度も聞いていました」なんて話してしまった。気になつたので帰宅してからスマホで検索したら、今年の3月に山本潤子さんは亡くなっていた。
(ところがこれがどうやらネットのガセ情報らしく、はつきりしたことは不明。ならば人の生死についてウカウカ書くべからずという事ですね。)「青い夏」を聴いてみた。



9/16

右のマガジン発行準備は完了。多分、明日にはアップされるだろう。真ん中のは日曜日に能登、珠洲市での講演会レジュメ。いろいろ思案して固めた。左は金曜夜のzoom講座、前期最終回用pp。後半は受け付けた質問に答えるので、その準備も。そういうことの合間に遠出したり人と会ったりしている。



9/17

植田正治写真美術館が秋の大人遠足の目的地。鳥取だというが、かなり島根県寄りの伯耆町。秋晴れの空の下、快適ドライブで高松伸設計の美術館も素晴らしい。帰路、兵庫県養父市に山田風太郎記念館があるのを目にして立ち寄る。楽しい。
(これをきっかけに、後日、audibleで昔の大ヒット作

品、「くノ一忍法帖」を聴いてみた。なかなかの荒唐無稽さだった。)



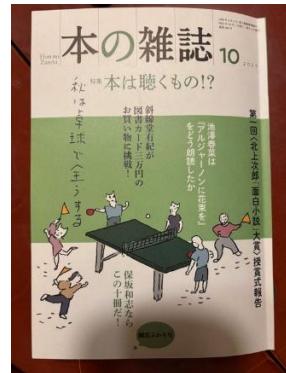
(



9/18

また一冊、プリント版のマガジンを制作。対人援助職者周辺の四方山話をあれこれ。夕刻、遠来の客あり。audible 仲間として、今号「本の雑誌」の特集、「本は聴くもの？」の話題で盛り上がる。オーディオブックは読書？を取

り戻す仕事をしている。読まない、買わない元読書家は出版社を潰す。



9/20

明日の能登・珠洲市での講演の前ノリ。半島の先まで金沢駅着から車で三時間ほどもかかる。明日の講演会場でマンガ展もしてもらっている場所へ。ちょうど地元のお祭りの山車がきた。夕飯は素敵なお店で世話人さん達と六人でおおいに楽しむ。



9/21

いろいろなイベントが用意されていた今日。10時から無事、一時間半のお話ができました。たくさん参加してくださって、ありがとうございます。また機会を見つけて寄せていただきたいと思います。世話役の方々、ご苦労様でした。

9/22

今日は自宅でゆっくり。ユナイテッド・シネマ大津にこれを観に出かけた。原作の小説が面白かったもの。

このところ老化と共に映画のセリフが聞き取りにくくなっているのが辛い。予告編の三本がどれも原作小説を読んだものだったのに驚く。本の選球眼は悪くないのだと思った。



9/25

昔から知っていたが、1度も足を運んだことがなかった西宮の大谷美術館にボローニャ国際絵本原画展に漫画グループばむの月例会で爺さん六人で。魅力的な絵をたくさん見たが、シドニー・スミスの原画に惹かれて絵本二冊購入。その後、阪神電車香櫞園駅近くの上品なカフェで長々とダべる。



9/26

他者の創作物を見ると、どこかでムクムク湧いてくるものがある。私の場合、「描く」という行為へのモチベーションは高めてやらないと、言葉で済ませてしまうところがある。昨日の絵本原画展はそう勧いてくれて、朝から木陰の物語新作のペン入れ完成。この後はPC作業になる。



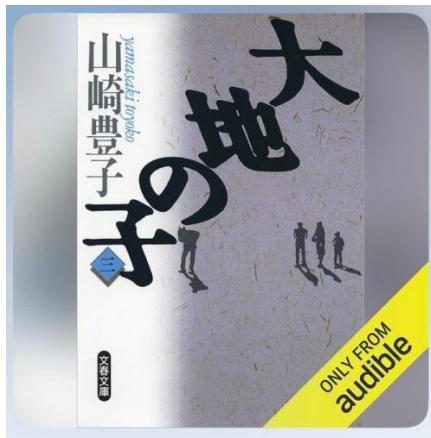
9/26

ここ数日、聴き続けているのが「大地の子」。NHK のテレビドラマは昔、見た記憶がある。だが、山崎豊子の小説はどれも長いので読んだものと、読みそびれていたものがある。これはそびれた方で、Audible だから手が出せた感じはある。中国残留孤児問題は一時、大きな話題だった。イライラ面白い。



10/02

週の前半にあれこれ準備して、後半に遠征するサイクルが続く。その合間に、どこかで目についた本をポチリ。届くわりに読めないが、一部は読むから無駄とは思わない。audible は聴けるから、面白ければ最後まで。どうかなと思って聴き始めたこれは予想外に面白い。届いた本の始まりも興味深い。



9/29

日帰りで新横浜。娘と孫に会いに来た。今夏、コロナで中止になった里帰りのかわりに出かけたのだ。孫は会うたびに子どもらしくなっている。久しぶりにお店屋さんごっこなど、その進化に驚く。それをどんどんこなしていく、何もかもが飛ぶように過ぎていく気がする。こちらが歳をとっただけの話だが。――



(この本に、えらくはまってしまった。読了前に、最初から再読している。近年、こんなに面白がっているものは希だ。そして2023年に出た「現代思想」[無知学/アグノトロジーとは何か]もネット購入。読み始めたところだが面白い)

10/03

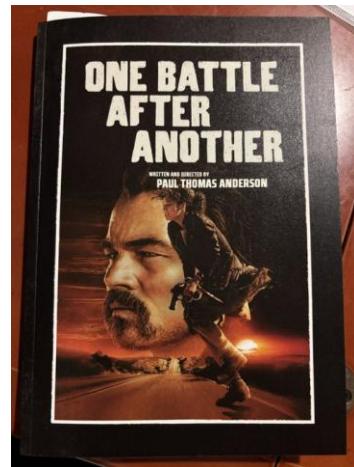
午後、立命館大学茨木キャンパスに。まず図書館前でやっている「破られた約束・日系カナダ人の財産没収展」を見る。アメリカでもあつたことがカナダでも。その後、東日本家族応援プロジェクト 15 年目。9月の遠征で院生達が見聞きしたことの報告を聞く。



10/04

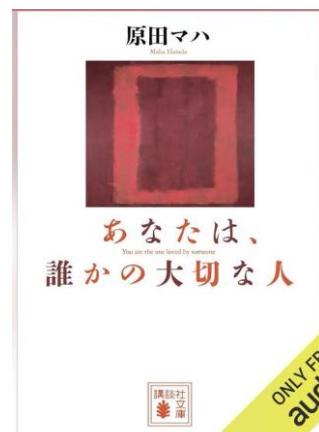
朝、亀岡に向かって JR 嵐野線に乗っている。まだ早いので満員電車ではないが、圧倒的に外国人が多い。そして嵯峨嵐山駅。全員が下車はオーバーだが、ガラガラになった。この調子で嵐山観光は雨の土曜日でも大賑わいになるのだろう。私はアウラ学びの森で 6 年目、第十二回の講演会。

盛りだくさん、でもわかつてもらい易く話した帰路。二条駅前シネコンで「ワン バトル アフター アナザー」を見る。タイトル、何のことやらだが、PT アンダーソン監督、ディカプリオ、ショーン・ペンの顔ぶれに一票。70 年代意識っぽい、懐かしさの漂う 162 分の映画。



10/07

ストレッチに行ったり、連載の物語を考えたり。数日はゆっくりできるのでお楽しみを。audible は原田マハさん。短編数篇の構成は楽しく聞きやすい。でも一番好きなのはやはり「楽園のカンヴァス」。書店で表紙を見て手にして、あんなに夢中になった小説の記憶は他にない。またいつか読もう。



10/08

草津の勉強会 27 年目の後期スタート。リピーター&初参加一人。「続ける」と「続く」の両方の事を考える。一回目はケース検討はなしにして二時間半、「語り方」について、かつて経験した家族について話し込む。おもしろい！と言ってくれる人が複数。



10/10

ワイヤレスイヤホンは日常的に使う。だから落としてしまったり、紛失もやむなしとは考えている。だが、この製品、実は三回目の購入で、しかも左右で計6個のイヤホンはあるのだ。ならばなぜそんな無駄遣いをと言われそうだが、この充電器の方を二度紛失した。意味がわからん感じである。



10/11

対人援助学会 in 大阪に参加。最近、学会に出ることはなくなったが、これだけはマガジン編集長をしているので原則出席だ。掛軸展もしてくれてるし。この集まりはマガジン執筆者と読者の茶話会。終了後、昔馴染みと一風

変わった食事後、来る時見かけた天王寺の金子眼鏡で修理してもらう。ストレス解消。_



10/15

ゲームをじっと見続ける根気も情熱もない。最悪のチームもない。でもダイジェストやハイライトは見ていると楽しい。特に昨日今日は、なんかちょっと嬉しい。ストレッチしてもらってる間も、隣席で熱心に昨夜のサッカーを語る人がいたが不快ではなかった。





10/16

昨日、SNSで目にして、知らないなあと思った。チケット写真に movix 広島とあったので、近くの movix を検索したら上映中。明日からの準備も完了したので観に出かけた。とても面白かった。最近関心のある科学知の在り方や限界。白か黒かではなく、グラデーションで存在する世界が興味深い。



10/17

久しぶりの空港。喜八洲のみたらし団子を焦げ多めに焼いてもらって、待合ラウンジで旅本を楽しむ。いいお天気で、飛行機が景色に馴染んでいる。久々に手荷物を預けたら、自動受け付けになっていて、慣れないセルフ対応に戸惑う。歳をとるとホント変化対応に弱い。



10/18

今日の講演は北海道大樹町。どこだろうと思ったが帯広の近く。ホリエモンが話題にするロケット発射ベースのあるところだった。せっかくなので見物に。札幌への帰路途上にバターサンドの六花亭のカフェに。広い大地を疾走する秋。





10/19

日差しは明るいが、札幌の気温はこれ。朝の体感はもっと低いかな。街の装いも当然こう。私も準備はしてきたが。出発前は、アロハで動いて汗ばんでいたのに。日本中、一気に秋冬か。気候が極端だ。まあこれが通常の10月下旬だろうが。



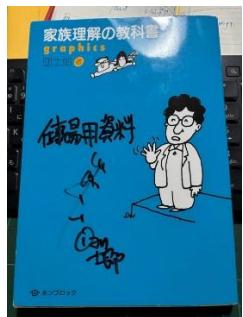
10/20

これが北海道だねえ。札幌芸術の森は素晴らしい！季節も重なって、紅葉の具合は極上。オスロで訪れたヴィーゲラン彫刻公園の作品を久々に森の中で目にした。だが峠に向かうと積雪だ。中山峠は寒い。関西との温度差二十度は少々引くなあ。



10/23

昨夜は「家族の練習問題」発行のホンブロック企画 zoom トーク。コロナ禍きっかけで活性化したzoom プログラムがあれこれ継続している。明日夜はこの新刊を使った授業の後期六回の初回。前期とは違って、テキストから飛び出した中身を計画している。



「家族理解の教科書グラフィックス」の授業は、zoom でこんなところから発信しています。三方を本に囲まれた、私には快適な護美屋敷。一昨日もここでトークをしていました。そして明後日は遠方で WS 開催です。



10/25

また週末は空港に。明日には戻ってくるのだから慌ただしい。昨夜の zoom 講座が引っかかっていたので、道中に早速配信の録画を見てみた。気についていたよりずっと、私には面白かった。なんだか分かりにくく、面倒くさいことを言っている気がして、終わりにぶち込んだ無

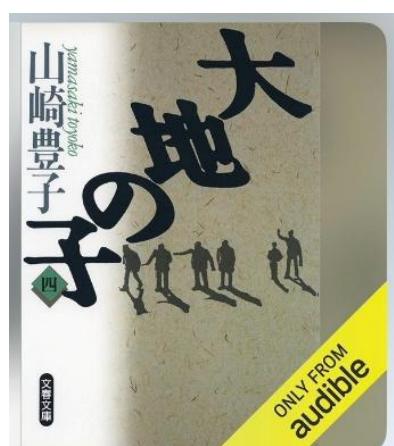
知学の話題も気になっていたが、まあこれならいいか。

10/26

半年に一度、25 年以上続いている青森県弘前 ws。十三人の参加で例によってあれこれ話したり、話し合ってもらったり。長年来てくれている人が多いが、初参加の方もあり嬉しいことだ。いつまでやるのかと思わないでもないが、そんな事考えなくていい気もする。

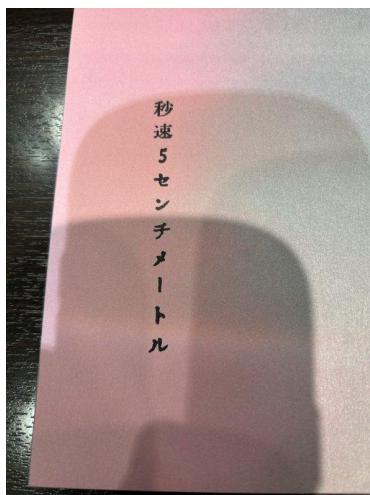


「大地の子」全 4 巻を旅の道中に聴き終えた。長い長い物語だった。小説であることは承知しながら、次々語られる出来事に、ハラハラ、イライラ、ドキドキの連続だった。1991 年に刊行とあるから、35 年近く前のことだ。日中の今と昔を思いながら、歴史の中のどの時期を生きるかは選べずには人はそこに居るのだなあと思った。



10/27

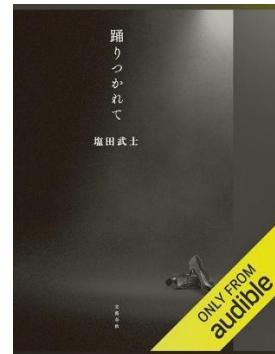
10月のスケジュールが終わって、しばらくはゆっくり。ならばと昼前に起き出して大津7シネマに。「秒速5センチメートル」、前に見たことがある新海誠アニメの実写化である。アニメがとても良かった記憶はあるが覚えていない。映画が始まても中盤まで心当たりがなかった。そしてそこから一気であった。言葉にしておきたい記憶が蘇った。



10/28

いろんなものを見たり読んだり、聞いたりするが、最近一番インパクトがあったのがこれ。出だしから展開してゆくのは殺人や暴力では届かない恐ろしさ。SNSで目にするいろんな

人たちの無責任な攻撃、批判、炎上などへの強い警告物語だ。さあこれがどう展開してゆくのか。楽しみだが怖いな。



10/29

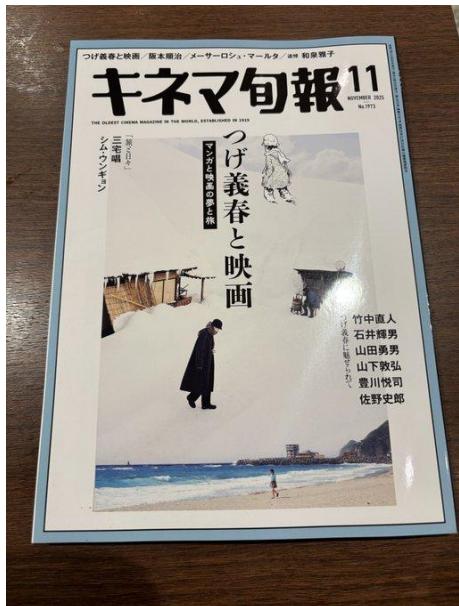
丸善で手にした本のはじめに、クリエイティブノンフィクションという言葉が登場した。フィクションでも、ノンフィクションでもなく。そんな認識の仕方をしたことがない言葉だったので、それだけで購入。私にとって初見の言葉に一票投じた感覚の出費。



10/30

午後、来客あり。久しぶりにゆっくり話す相手なので、あちこちと話題が飛び回る。共通の記憶と現在が重なって面白い。夕飯は焼き魚

定食を出すいつものところに。その後、holly's cafeで新作の下書きをと思っているが、その前に雑誌で一息。いい一日だ。



10/31

月末はいつも木陰の物語の新作を物語作り、コマ割り、下書き、ペン入れ、スキャナーで読み込んでキャプションを入れ、アミ、グラデーションなど加工して完成。第309話のタイトルは「撤収時期」。まあまあの出来かな。その一コマから。



11/01 全国各地で自主開催してもらっている家族理解勉強会用のDVD第四弾を来週スタジオ収録する。そのパワポ資料の制作を大津駅前のスタバに来て完成。私のWSプログラ

ムに参加して面白いと思ってくれた人が呼びかけ人になって職場や地域で自主開催。その気になつたらお問い合わせ下さい。



11/2 今週末は東京wsです。エントリーが少ないようなので、急なお知らせですが、お時間あつたら覗きに来てください。家族に関心のある方なら、どなたでも大歓迎です。

【11月8日東京】第79回家族理解ワークショップ東京

全国で継続開催されている家族理解ワークショップ。東京の秋開催が11月8土曜日に神田にある「連合会館」で行われます。家族に関わるお仕事をされている方、ご自身の家族に何かしらの課題感を感じておられる方、家族という共同体に興味がある方など、ご興味のある方は下記をご確認ください。毎回初参加の方が複数名いらっしゃいます。大歓迎です。

【開催概要と参加申込方法について】

開催日：25年11月8日（土）

開催時間：13時30分～19時30分（休憩含む）

参加費：9,000円（学生6,000円 ※社会人学生は除く）

会場：連合会館（各線御茶ノ水駅すぐ）

アクセス：<https://rengokaikan.jp/access/>

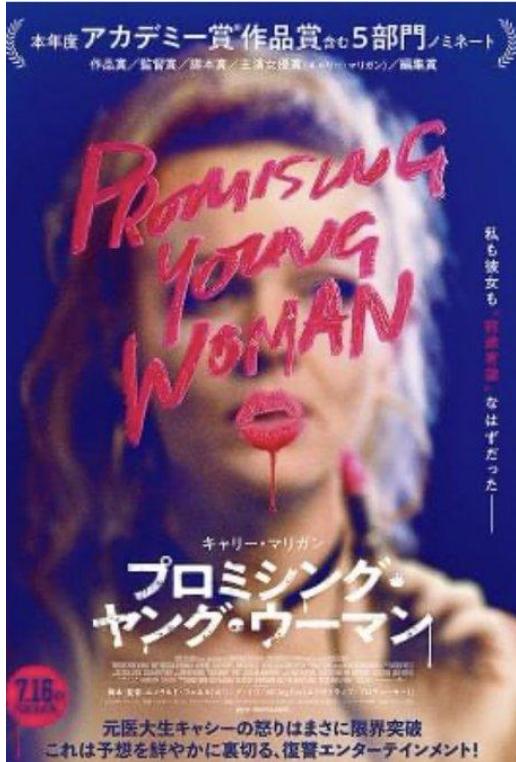
申込：参加申込は下記のリンクよりお願いします。お申し込みが完了しますと、折り返し参加案内のメールが届きます。

<https://asoblock.smktg.jp/public/application/add/4348>

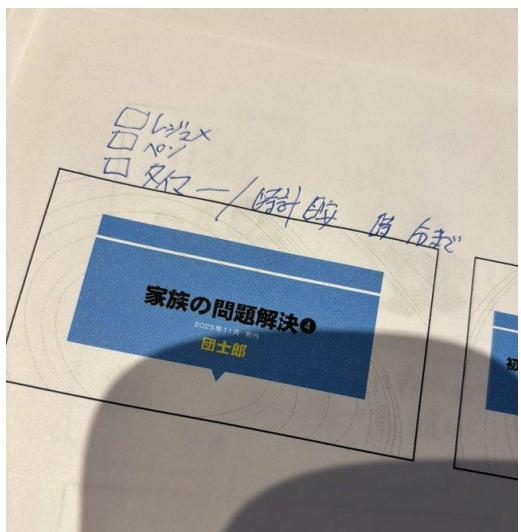
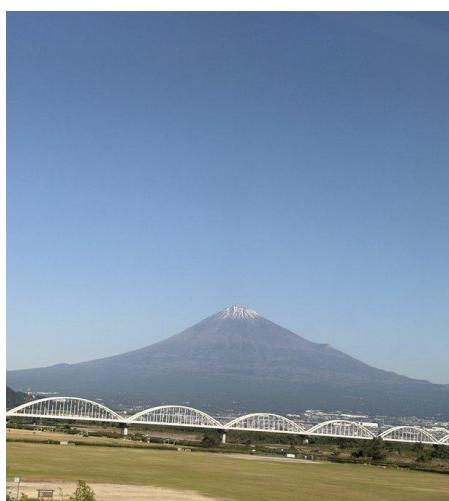
11月4日

11/03 連休の夜中に、5年ほど前、映画館で見たことは思い出したが、記憶になかった展開の映画を観る。アカデミー賞候補？それでみたのだったかな？ 確実に再見なのだがとても面白かった。前見た時そう思ってなかった

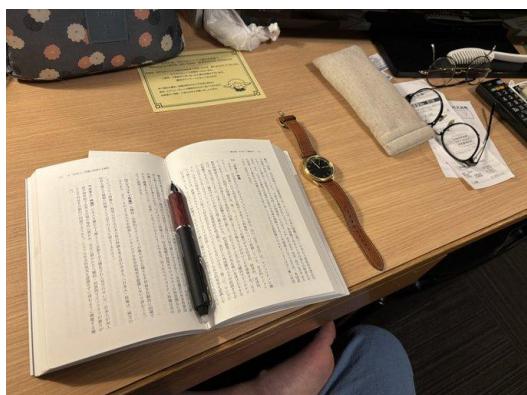
らしいのが不思議。魅力的な主人公の命懸けの落とし前。このエンディングか！



11/04 11月、12月に開催の草津市での展覧会と、青森県むつ市図書館での展覧会の準備に、HさんとWさんが来訪。各会場での展示作を選択する。なのだが準備もそこそこに、高齢者時事鼎談会になってしまふ。みんな意見のある者だから、話が尽きることはない。で、若者が追いかけて届けてくれた。



11/08 明日、いやもう今日だが、予定の WS は午後から。そんな夜中のホテルでの読書が妙に捲るのでウキウキ。最近、本が読めなくなってきたので嬉しい。面白いと思うものも、これはイマイチだなというのも含めて、audible に侵入され気味だった読書を回復したい。





11/08 JR お茶の水近くの会場で家族理解 WS。
ニコライ堂見てパリか！と思う。この辺り綺麗
だ。もう一枚パシャ。少人数と聞いていたが
十人で開始。なかなかいいテンポでセッション
1~4まで。終了後、いつもの三人で名前だけ
昔から知っていた中華料理店・銀座アスター
に。コース料理どれも美味しい。安くはない
けど。



11/10 先週末、長男同席で DVD 収録と WS
の二日を済ませ、日曜は横浜で娘と孫娘に会
った。雨だったので動物園に行けなかったの
が残念。今週は関西にいるが、次男からのメ
ールで、週末立ち寄るから飯食いに行きませ
んか？と。それぞれ所持持ちの三兄妹が、
歳とった私を気遣ってくれる。有難い老後だ。



11/11 本日予定のレジュメ準備の前に、11時過ぎから、映画「爆弾」を観る。出だしから異色でなかなか面白いが、なんか知ってる話の気がずっとしていた。そして audible で聴いたんだと思い及ぶ。後で確認してみたらラスト一時間ほどは未聴。全く雑な聞き方をしている。話はほぼ覚えてないので不都合はないが、我が身の老化を噛みしめる日々である。



11/11 一仕事済ませて、このところ楽しんでいる「無知学への招待」のこのあたりを読み終えて街に。そうしたら「風しもの村」の貝原浩さんの個展をヒルゲートでやっていた。絵本、図録も持っている作家。覗いてみたら「ベラルーシの婆さまたち」が迫力。画廊主人に話しかけられてしばらく、チエルノブイリ話などする。



11/12 ずいぶん昔のことだが NY を次男と散策していて、日本進出前のスタバに入った。トイレに行こうとして面倒な習慣に引いてしまった。店のカウンターでトイレの鍵を借りなければ使えなかった。

それに近い事が京都のここでも導入なのか？レシートの暗証番号を入力しないと使えない。■も入力って、分かりにくい方式でドアの前で戸惑う。そういえば、NY では前の人気が出て、扉を閉じる前に入ったりしていたが、今日も外国人が開けてくれているところに交代で入った。



11/15

昨日は漫画集団ぼむの月例会。珍しく持ち寄り談話会にしようということになった。鯖寿司、イカ焼き、ビーフオードブル詰め合わせ、手作りトルティージャ、柿の葉寿司などあれこれ。私が迷って却下したのがケンチキ。そつちにしとけば寿司かぶりにならなかつたなあ。阪神イカ焼きが旨い。

いろんなタスクが一区切りしているので、夜中、YouTube の街角ピアノのはしごと、アコギ夫婦の演奏を初めてみたのでいくつか楽しんだら午前 4 時になった。寝よう。



11/16

来年のぼむ展の準備を始めた日曜。夕飯に出かけて、いつもの魚の店でホッケとアカウオを。食後、POPEYE を買ってカフェに。特集は映画。一覧表の観た作品に印を付ける。200 本中 104 本観ていた。記憶違いがあるかもしれないが、まあ上出来。映画ファンと言ってもよからう。未見の良い物もいくつかみつかつた。



昨夜は次男が来て、定番のちか定に鰻。その後、仕事場まで自宅から布団を運んで貰つて、お茶しながら、楽しく長々とあれこれ話す。



来年のぼむ展の準備を始めた日曜。夕飯に出かけて、いつもの魚の店でホッケとアカウオを。食後、POPEYE を買ってカフェに。特集は映画。一覧表の観た作品に印を付ける。200 本中 104 本観ていた。記憶違いがあるかもしれないが、まあ上出来。映画ファンと言つてもよからう。未見の良い物もいくつかみつかった。



11/17

日常的パターンから外れたことを選びたいと常日頃思っている。そこで今日はここに。切符はサブスクの PR に乗ってみた。



京都南座は 30 年ぶりくらいになる。典子と玉三郎の公演を観にきて以来。仕事場からの道中も秋の京都らしいルートを。劇場内は高齢者の大集合で、平日 16 時の開演を待っている。

11/19

昨日は馴染がやってきて、ゆっくり話し込む。その前後にはぼむ展用の作品作りに精を出

す。色が入るとずいぶん印象が変わる。これが拡大されて掛け軸になると映える。そんな手作業の耳のお供は小三治や志ん朝の落語。こういう聞き方が一番楽しい。



11/20

ストレッチに行った後、movix 京都に。「平場の月」を観る。いい映画だった。朝倉かすみ著の原作を、だいぶ前に読んでいたのが誘引だが、その割に覚えていない。舞台は埼玉県朝霞市。昔、ここで継続の WS をしていたことがある。主人公の仕事場でチラシをザクッと切るシーン。工場でこのバイト仕事をしていたのを思い出す。



「木陰の物語」

を

家族の構造理論で詳説する

②

団士郎

家族療法に限ったことではないが、客觀性を持った科学でありたい気持ちを払拭できず、厳密さへのこだわりに引っ張られていく事柄が多い。昨今の何でも「エビデンス」、とにかく効果なんて動きはそう見える。そして結局のところ行き着くのは「脳」や「神経」で、心理学やこころの話なんてどうでもよいという結末になる。

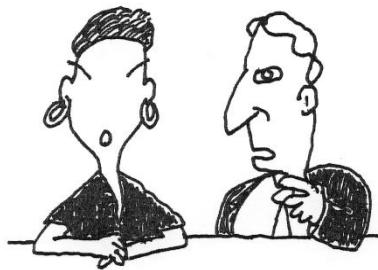
家族療法も初期に魅了されたところから、だんだん細分化されていっているように、私には見えてきていた。大雑把だからこそ、後に続く者にとって自由度の高そうなところが魅力だったのだが、そのような発展、展開への関心は思ったほどには生まれなかつた。進化していくのかもしれないが、新鮮さに驚いた頃の「家族療法」のことが今も一番のままだ。

私にとってはS.ミニユーチンの構造的家族療法が特にそうだった。同時期に、J.ヘイリー や、P.ワツラウイック、他にも当時の第一世代家族療法家の話を直接聞いたが、やはり構造派の学びが一番面白く、私の立ち位置にも近く、自在に展開していけるように感じられた。

私の家族療法の先生であったG.D.シメオンさんが、ミニユーチン氏から日本での家族療法訓練法として、「健康家族面接」のプランを直伝されたことも大きかった。その結果、初期に学んだ私達はケースだけではなく、症状は抱えていない日本の平均的健康家族との面接(訓練)を多数経験させてもらうことになった。

「普通の家族」という言い方は嫌がる人もいるが、日本社会で営まれる平凡な家族の特徴を体得的に学ぶ機会を得た。そんな背景もあって、私の家族療法はS.ミニユーチンが構造理論と称していたモノを、一般的な日本の家族に重ねたものになった。

並行して時代の知見、新たな視点は当然のように目にしていたが、コロコロ様変わりするのではなく、構造理論の中で蓄積し、発展的に続いた。その主な理由は、従来型の相談より来談者の役に立っていると思えたからで、これが絶対的に大きかった。



つぎつぎと家庭や親子関係を舞合にした事件が世間を賑わす。そして解説に評論家や学者がかりだされる。テレビの前の見物人でいられる者は、興味深いショートとして眺めていれば良いのかもしれない



しかし、ひとたび当事者家族になつた

経験のある人なら、

「いやあ、どうすればよかつたのですか？」

「それをなぜ教えてくれなかつたのですか？」

みんな一緒に

in the shade of family tree

木陰の物語



二十一年の児童相談の仕事は、楽しいことやうれしいことが多かつたが、時々どんでもなくストレスフルであつた

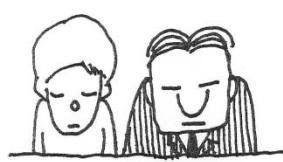


なぜこんな事件が起きたのかについて、したり顔で騒ぎ立てるのは虚しい。それが再発防止に寄与することは少ないからだ。むしろ類似事件の続発に、手を貸しているのではないかと思うことさえある



連続放火事件を起こしたとみなされている少女とその家族に会うことになった

心理療法の専門書のどこを見ても、放火の再発防止法など書いてはいない。もつとも、そんなことを言えば心理療法は、なんだつてそうなのである。だから一方、確かに治し方や、絶対に効くなんて方法も、また胡散臭いのだが



それが心のケアになつたのかどうかは分からぬ

わかつてゐる
ことで、よかつた
と思うのは、
彼女の周りで
二度と出火する
ことがなかつた
ことである



サラリーマンの父親とパート勤めの母親。小学校5年生の本人と、2年生の弟の四人である。結果的に一年半の間、月一度、一家で面接に来つづけた。しかし解決策は誰にも分からなかつた。傍観者はいろいろ解釈したが、両親と担当者の私は、祈るように繰り返した



放火事件の関わる記憶では
四人の子を思い出す
ことができる

しかしどれも、
何かが解明できた
とはいえない



雪子の一室

には大記録がある。それは
一年半、十八回の面接に一度も、
メンバーが欠けること、それには
ある。変更されることも、
一年半、十八回の面接に一度も、
メンバーが欠けること、それには
ある。それは



この間両親は、こんな質問を一度もしなかつた。もし正面切ってそう聞かれたら私は、分かりませんと応えるしかなかつただろう

ここには面接の内容を描くのが目的ではない
木陰の物語では、家族の話を描いている



大人が二人と学齢の子が二人普通はあるものである。それに一年以上続くのである
インフルエンザも流行するし、不測の事故が生じたりするのも普通である。しかしそんなことは一度もなかつた。約束の日に、かならず四人であらわれた



他にもたくさん家族面接をしていたし、直前になつてからの日程変更依頼には苦慮していた。だらう余計に際立つて印象的だつた

月に一度、かならず来てもらわからといつて、何かを課してあつたわけではない。近況を聞いて、四人で一枚の絵を描いてもらつていただけだ



「家族で何かしているところの絵」これがテーマだ





一年半の面接を
終了して三ヵ月
ばかり経った頃、
その後の様子を
聞くため、
フォローアップの
電話をした



そして数日後、入院中の母親か
ら手紙が来た

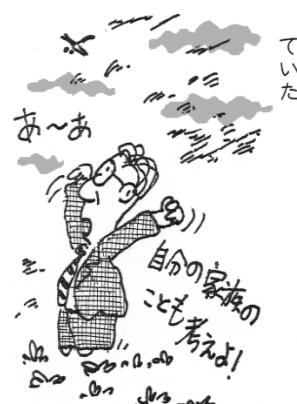
雪子本人が出て、母親が直接終
了後一月もしないうちに、緊急入
院したという。でも私がお母さん
代わりで頑張っているから、大丈
夫だよと雪子はいつた



私が述べられ、近況や病気のこ
とを書いた後に、雪子のことが済
んでからで本当に良かった。いま
は安心して自分の体のことを考え
られるとあつた



そうしたら雪子の問題が気がか
りのまま、家族は次の課題と直面
することになった
こんな事実に触ると、家族に
は、背負えない程の荷物が届くこ
とはないのかもしれないと思う。
しかし、いつも気楽にいればいい
というものでもない
家族がいろいろ言われる昨今、
どうしたら良いのか誰も教えてく
れないので、結果が悪かった時だ
け責任が親に押しつけられると不
満な人も多いかもしれない



しかしこの家族との出会いで私
は、親の熱意は何かを変えるのだ
と思つた。病氣も事故も、緊急の
用件も、面接を妨げなかつた
両親は、効果があるならうかが
うが、そうでないなら毎月休暇を
とつて行つて、どうなるのですな
どと聞きはしなかつた
一生懸命は値打ちがあると思つ
た。仕事一本の猛烈サラリーマン
だった父の内面には、家族を放つ
ておいた後悔があつたかも知れな
い。結婚後、一度も夫婦で楽しむ
ことなどなく、「家を買おう」「お
まえもパートで助けろ」「休まず
働いてローンを早く返そう」、そ
う生きてきた一家に、激変を求め
る課題が家族面接だつた
父親はこれを、一度の例外もなく
やりきつた。この事実が家族を
再生させたのだと思つた
家族崩壊などと聞いた風なこと
をいう前に、何かあつた時には一
度、本気で家族の時間を生きてみ
ればいいのだ。そんなことを思つ
ていた

「木陰の物語」を 家族の構造理論で詳説する

②

マンガ「みんな一緒に」

放火事件にまつわるケースを担当することになった時、特に策があったわけではない。だから当時、ケースを問わず実施していた「合同家族面接」と「家族描画法」をすることにした。結果的に年半、月に一度くらいのペースで家族に会い続けた。幸運なことに、放火の再発はなく、その結果には胸をなで下ろした。

しかし、そこから児童期の放火予防対策として、「合同家族面接」や「描画法」が有益だ等と言えたわけではなかった。

2019年中国・蘇州で開かれた「表現性心理学会」に招かれて記念講演をしたとき、このケースを取り上げた。その時にも考えていたことだが、この家族が私にもたらしてくれた学びはとても大きいものだった。

今回はそれを振り返りながら家族療法のことを考えてみることにした。

放火

マンガでも描いているが、担当した当时、心理臨床経験12年目で様々なケースを数多く担当していた。

「放火」事案では、以前に公立小学校全焼事件、農家作業小屋の連続放火事件の経験があった。そして、公立中学校放火事件の精神鑑定について、保護者サイドからの異議申

し立てを児相の嘱託医が受けている案件が身近などころにあった。

それまで、子どもの放火事案について、的を射た見解をあまり耳にしたことがなかった。後付け解釈で何とでも言えるのは、心理業界のアルアルだが、予防や対策について「なるほど！」と思わされた記憶は少ない。

軽度の知的障害を持つ児童(男児に偏っている)の火遊びからの不始末が多いことはどこかで読んだし、実感として納得の見解だった。

燃えてしまった被害物の大きさで、「放火」と「火遊び」に分けていると、警察関係者からだったかに聞かされたのは納得がいった。校舎が全焼していれば放火だし、貼ってあるポスターが燃えただけなら、火遊びというわけだ。

全家族面接へ

1983年、中京大学で開催された第二回心理臨床学会で、福岡教育大学にいた亀口憲治さんは、不登校児の家族療法を福岡県の児童相談所で実施し、結果を出していると報告した。半信半疑ではあったが、興味を持って参加し、羨ましさも手伝って、「上手くいかなかつたケースはないのか？」と質問もした。

すると、「初回面接の後、すぐ再登校し始めて終了になってしまったケースがある。それは家族療法としては失敗だ」と回答された。聞かされた私は、「なんだ、それは！」と腹立たしい気持ちで一緒に参加していた同僚達と憤慨していた。

その後、自分達の児童相談所でも全家族面接をビデオ記録と共に実施できる体制を整え、徐々にそこに誘導するようになった。

しかし低年齢の子も含まれる全家族面接は、一工夫が必要だった。会話中心の面接において、年少児童は置いてきぼりのお客様になってしまう。

そこを意識して、当時の全家族面接には頻回に「合同動的家族描画法(CKFD)」を含めていた。石川元著の小さな冊子「家族絵画療法(海鳴社刊)」がテキストだった。

非言語的素材での面接は、会話中心の面接と比較すると、表現能力の弱い子どもにも受け入れやすかった。加えて、知的障害のある家族員を含んだ面接場面でも有益な結果をもたらしてくれた。

パターン化したコミュニケーションスタイルも、得物を変える(言語から非言語に)と変化が起きる。そうなると展開も異なってくる。膠着したコミュニケーションパターンの問題は、非言語課題の提案で意外に簡単に変化した。現状改善のために指示や指導をしなくとも、ツールの変更が相互作用の質を変化させた。

*

ある中度知的障害のある入所施設在籍中の青年と、父親、兄との三人の合同家族面接のことだ。

問題行動の頻発に手を焼いた父親の要望で、短期間の施設入所中だった。自宅復帰のための準備に合同家族面接を実施した。

面接の前半父親が一方的に本人の力のなさや、不注意なことをまくし立てた。兄からのサポートイヴな働きかけもなかった。

そう気付いたセラピストは後半、「合同動的家族描画法」を実施した。「よく話し合って、家族で何かしているところの絵を描いてください」という教示のものである。

前半まくし立てていた父親は、絵を描くとなるとトーンダウンした。兄は弟の描画意向を確認

するように話しかけていた。そして本人のペースで画題が決まり、先ず彼からクレヨンを取つて描き始めた。

合同動的家族描画法

(CKFD conjoint kinetic family drawing)

この方法を取り入れるのに積極的だったのは、合同家族面接に参加してくれている子ども達への配慮だった。大人同士が、問題要件を話しているところに、本人以外の子ども達の登場する余地はなかなかない。

配慮したつもりで、「学校はどうですか?」など、社交のような質問をするのも馬鹿げている。限られた時間を有益に構成する義務が私達にはあるのだから、そこに工夫は必須だった。

絵を描くことに子ども達はあまり抵抗ないが、大人はおしなべてちょっと退く。会話で面接をすすめている時とは逆転の状態だった。家族が自覚できていたかどうかはともかく、公の場面ではあまり見せない特徴も数多く見られた。CKFDは非常に優れた家族の行動観察ツールだった。

一家で一枚の絵を描く所を想像してほしい。指示されたように一本ずつのクレパスを選び、あとは何を描くか自分達で決めるための話し合いをする。

そして四角い画用紙を前に、どの方向から、どういう順番で作業してゆくかも自由決定である。家族独自の特徴が見られるのは当然である。

とはいものの、実のところ、「家族で何かしているところの絵を描いてください」と教示されて描かれる内容の多くは食卓の絵である。家族で何かしているところと問われた家族は、

「一緒になることなんて、夕飯くらいかなあ…」などと語り合って、そんな場面に落ち着く。これは数多く実施してみての経験から言えることである。

*

雪子一家にCKFDを実施した段階で私には、まだそう多くの実施経験がなかった。だからそこで起きていたことが、とてもレアで特徴的だったことに気付いていなかった。

だからといってその特徴が、問題行動の原因であるなどと言いたいのではない。ただそのパターンは、意識するしないにかかわらず長年、この家族関係では繰り返されてきたものだということだ。

そんないくつかのパターン(土台)の上に、問題行動とされるものも乗っかっている。ならば、その土台に変化を提案してみるのは、なかなか賢明な策であろう。現状のどこかに変化が起きれば、それがなんであろうと構わない。改善は「変化」の中に含まれている。

雪子一家の合同家族面接も、前半の近況報告と後半の合同動的家族描画では、場の緊張感や気配りの案配は変化していた。

*

家族にCKFDを実施する。何を描くかを自分達で決めて貰う。この段階で、日常の家族の行動に少し変化を強いてすることになる。

絵を描くなど日常には行われない。とくに大人で日頃描いている人など希である。だから得意な行動ではない。人が馴染みのないものや苦手なことを強制されたとき、いつもとは異なった行動を取る可能性が高いのは分かるだろう。場には子どももいて、そちらは絵を描くのがそう特殊な話ではない。ここで通常とは違った事態が起きる可能性は高い。

画題を決める主導権のところで変化が起き、

着手するところでもそれは続く。父親が率先して絵を描くことは少ない。誰も手を出さない状況が起きたりすると、責任感で親が描き始める場合もあるが。

描かれていくものに確認を求めたり、口頭で工夫を助言したりする親は少なくない。手は出ないが口だけは出す親。両親のどちらにその傾向が強いかなど、いろいろ参考にはなる。

そんな中の気づきを後刻、明確化しながらフィードバックする。それによって家族行動の癖が自覚されたりする。

*

雪子の一家は、父40歳、母37歳、雪子(小5、11歳)、長男(小1、7歳)の四人。描画法実施のため用意した円卓に向き合って席についてもらう。「家族で何かしているところの絵を描いてください」と指示し、後は自分達で話し合って描いてもらう。

家族療法の技法というわけではないが、児童相談所では使いやすい課題だ。

この家族の初回の描画はとても印象的なものだった。『近所の公園に遊びに行っているところ』という題材に決めたのだった。弟が早々に描き始めた公園の情景。幼さは残るが、楽しげに公園の遊具や自分の姿を描いて行く。

ところがそこに、向かいに座った父親が、天地真逆の位置取りには構わず描き始めた。そして息子の描いた絵の上に、自分の描きたいように遊具や家屋を重ねて描いた。

母親も娘も驚いたように、何も描かずにじつとしていた。そして大分経ってから、画用紙の大半が重ね書きで埋まった絵の隙間を見つけて、母娘は公園のコートラインや、ベンチを描き込んで終了になった。

ここではみんなで一枚の絵を調和的に描くという意図は感じられない。描きたい人が描き

たいように描く権利は維持されている。そして圧倒されている人は、隙間を縫うように参加だけしていた。

まだ使い始めたばかりのCKFDで、こんな珍しいことが起きていることにも鈍感だった。このレアさに気付くのは、大分時間が経ってからのことだった。

次回以後の家族面接でも毎回実施したCK FDにおいて、四人の描き方にやがて調和が生まれ始めた。

なにを描くかの話し合い、一本ずつ選ぶクレヨン色と画題の付合性、それぞれが描いたものへの適切な加筆など、回を追って上手な絵になっていったのである。

*

この事と、放火の再発予防が、どう繋がっているかと問われても明言は出来ない。因果関係など、解釈の域を出ないだろう。

ただ、家族間コミュニケーションの有り様は、調和的な描画行動の獲得と共に、スキルアップされていったんだろうとは思う。初回のような母子の絶望感は急速に消えていった。四人居るところで、父親は他の三人の行動や意図を忖度できるように変化していった。

初期に妻に聞かされた父親のエピソードにこんな話があった。アウトドア派の父親は、暑い時期には毎日曜日、琵琶湖にウインドサーフィンに出かける。その時、男同士というので息子を連れて行くそうだ。それは母と娘は買い物に行きたいという希望を受けてのことらしい。

そうして出向いた湖岸で息子は、一日、父親がウインドサーフィンしているのを眺めているのだそうだ。およそ父子で出かけた情景とは似つかわしくない実態らしかった。おそらくそのようなことも変化していったのだと思う。

事実、来談する度に絵を描かなければならぬので、その素材を作るために、前週の日曜日は四人であちこち出かけるようになったと語っていた。

そんな変化が生活のあちこちに生まれていたに違いないが、自覚的にしてはいることではないので、どのようなことがあったかは断片的にしか聞き切れていなかった。

これが家族に起きた変化といえば変化だった。そして担当者としては、再発がなかったことで胸をなで下ろしたのである。

63・雨天延期に直面して

原町幼稚園園長 鶴谷主一（静岡県沼津市）

今まででいちばん？

先日、職場体験の中学生が「今まで幼稚園をやっていて、いちばんうわ～タイヘン！って思ったことはなんですか？」という質問をした。いちばんは、園舎改築の時にあてにしていた私学事業団からの借り入れ1億円が、旧園舎を壊した後で（自己資金が足りないと）却下されたことだったが、そんなこと中学生に言ってもピンとこないので、「運動会が雨で予備日もできなくて園庭でやることになったとき」と答えた。中学生は「なるほどー」と頷いていた。

今年の秋は、週末になると天気がぐずつき、日本各地でいろんな行事やイベント変更を余儀なくされたことでしょう。何十万、何百万人も集まる花火大会の中止などは運動会の比ではないと思えますが、当事者の私達にとってはかなり大きい出来事でした。なぜなら私が園長になって23年、はじめて園庭で行う運動会だったからです。

原町幼稚園の園庭では運動会を行う広さは取れず、毎年近くの小学校の校庭を借りて実施しています。1年前から申請を出して許可をもらい、前の週には校庭での予行練習も行い、前日にトラックに荷物を積んで準備万端にして当日を迎えます。小学校の校庭を何日も押さえることは不可能で、土日の2日が生命線だったわけです。
これまででは、雨が降っても、翌日グラウンドの水をとって開催したり、体育館を借りたりして、なんとか土日で実施できていたのですが・・・

今年は予定した10月25日（土）、26日（日）も絶望的に水溜まり状態で、ついに園庭開催を行うハメになったのです。

今回、マガジンでこのことを取り上げたのは、具体的な段取り云々よりも、日々起こりうるイレギュラーや予定変更の中で、園長（リーダー）としての判断と、発する言葉の重みを痛感したので、そのことを書きたいと思いました。

最低の雰囲気の中で

運動会当日は、職員は朝7時には現地入りしなければなりません。雨で延期になってしまじで、トラックに積んだ荷物を下ろしたり、片付けたりする作業を行わなければなりません。早朝5時台に家を出る職員もいる訳です。

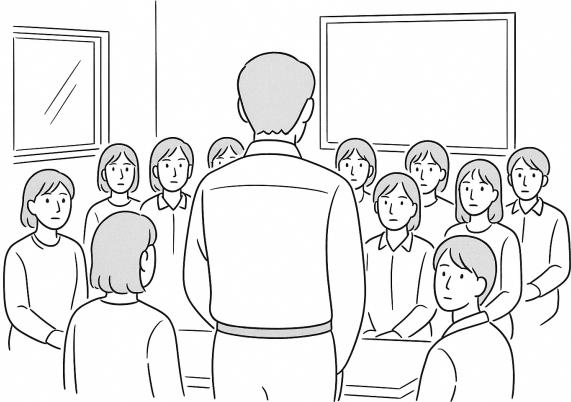
そして、雨の中むなしい気持ちで片付けを行うのですが、運動会で見せたかった子どもたちの成長した姿、楽しんでいる姿を披露する場がなくなったことで、職員の落胆は隠せません。どんよりとした雰囲気の中で、黙々と片付けをして、口からは「あ～あ…」とぼやきがついで出てきます。

振替の日程は前の週にすでに決めてあって、学年別に3日間かけて、火水木曜日に行うと保護者には連絡がしてありました。心のどこかでなんとかなる…と思っていたのでした。しかしなんの根拠もないその思いは砕けてしまい。当日まで具体的な段取りは何も決めていませんでした。

朝の荷下ろしがあらかた終わって全員で集まり、「さあ、これからどうする？」というとき、園長は何か言わなければなりません。職員の目が刺さるように自分に向かっていま

す。ふだんの朝礼ではこんなに鋭くないぞ…と思いながらも、底に落ちた職員のモチベーションを上げていかねばなりません。それが自分の役割でしょう。

「さあ、気を取り直してガンバロウ！」
じゃ力が弱くて伝わらない…
「子どもたちのために、もう一度園庭でやってみよう」なんて一般的で上滑り気味…



次にやることを明確に意義あるものにする

それが正解だったかどうか分かりませんが、私は考えた末にこう言い放ちました。

「来週行う運動会は、振替ではなく『園庭運動会』と名付ける！」

「全く新しい、園庭運動会を創造してくれ！」

全く新しくても、種目は同じなんですが、
振り替えのやっつけ仕事ではない
園庭を最高の子どもたちの舞台にしよう
いままでの概念にとらわれないで工夫してみよう、という気持ちを込めました。

「園庭で良かったね！と言われるようを考えよう」と付け加えました。

保護者の観覧や写真撮影と進行のスムーズさ
とりあえず消化したと思われない演出を考える。

そして、それぞれの学年でプログラムの順番や保護者の動き、演出など段取りを相談し、30分後に思いついたことを発表し合って共有し、良いアイディアを取り込んで再度自分の学年の計画を練る。ということを言い放って自分は保護者への手紙の作成に取りかかりました。

職員集団のベースとなるもの

ここで生きてきたのは、今まで園の業務で取り組んできた「マルチタスク」と「自分たちで考える」という態勢です。トップダウンではなくそれが考えたことが園の行事や活動に反映され、園で行われている業務を皆で理解し分配して行えるように見える化してきたことがベースにあったと思います。

一気に雰囲気は上向き、活発な話し合いが行われ、次々と私の思いつかないアイディアも生まれてきて活気づいてきました。

運動会で日頃の成果を発表するのは子どもたちですが、保育者がどんなモチベーションで向かい合っているか、どんな見せ方をするかで大いに違って見えてくるのが人を育てる現場だと思います。なので、職員のモチベーションがそこに向かっているということがだいじなのです。

後日聞いた話では、運動会が延期になったと聞いて泣いていた園児もいたそうです。そんな子どもの期待に応えるプログラム、不安を解消する対応も同時に考えていました。

結果は、お天氣にも恵まれ3日間保護者も全員参加してくれてとても良い雰囲気で園庭運動会を開催することができました。保護者との関係性もしっかり構築されていたことも良かったと思います。何より、次の経験値が高まりましたので来年から雨が降っても落胆しなくて良い気がします♪

職員が園庭運動会の段取りを一生懸命考えている間、私は保護者向けに発信するお便りを書きつつ、コーヒーを淹れて職員に配ったりして進捗状況を見守っておりました。
具体的な計画や段取りは添付しませんが、
お便りなどが参考になればと思いますので興味のある方はご覧下さい。

◆参考資料：保護者向けお便り（延期決定日の正午に配信）

原町幼稚園・保育園保護者の皆様

園庭運動会について

2025.10.25.

原町幼稚園 園長 鶴谷主一
原町保育園 園長 鶴谷由美子

本日は原小での運動会ができずに残念でした。来週の園庭運動会に向けて、狭い場所ですが慣れ親しんだ園庭ならではのプログラムを考えました。親子のプログラムも予定しているので、園庭運動会の日に参加できる方は、動きやすい服装でご協力お願い致します。

〈保護者の出欠については、幼稚園=あぶりアンケート、保育園=キッズリーにてお伺いします〉

10/28（火）年長運動会・他学年平常保育

10:15	オープニング歌	はっぴを着て歌のみ歌います
10:20	ソーラン節～親子ソーラン	ソーラン節の後、親子で踊ります
10:50	Jump Box 2025	いつもの練習の場所で跳び箱を飛びます
11:10	チーム対抗リレー	幼稚園と保育園の園庭を回って走ります
11:20	フリー撮影タイム（10分間）	お子さんの写真を自由に撮影してください。担任はNG
11:30	エンディング親子ダンス→終了解散	参加賞のメダルは子どもが持つて帰ります

10/29（水）年中運動会・他学年平常保育

10:15	オープニングダンス・歌	
10:25	花笠音頭	
10:35	まっすぐよーいどん	
10:50	Super flower brothers	保護者の方に一部お手伝い
11:15	フリー撮影タイム（10分間）	お子さんの写真を自由に撮影してください。担任はNG
11:25	エンディング親子ダンス→終了解散	参加賞を配りますのでお持ち帰りください

10/30（木）年少運動会・他学年平常保育

10:15	オープニングダンス・歌	
10:25	ジャンプジャンプゴー	
10:40	ラララトロピカーニバル	
10:50	フリー撮影タイム（10分間）	お子さんの写真を自由に撮影してください。担任はNG
11:00	親子リレー～離れちゃイヤよ♡～	親子でリレー遊びを行います
11:25	エンディング親子ダンス→終了解散	参加賞を配りますのでお持ち帰りください

☆次ページもお読み下さい

《参観について》

- ◆参観は実施する学年の保護者限定で、任意とさせていただきます。
- ◆参観される方は時間までにご来園ください。園庭ならではの親子種目を予定しているので運動靴でおいでください。
- ◆種目の都合で出欠は取らせて頂きますが、無理な方は職員がフォローするので大丈夫です。（スナップ写真撮影も行います）
- ◆運動会の学年以外の方の来園はご遠慮下さい。たまごろ園庭開放も午前中中止です。

《駐車場について》

- ◆運動会の進行にかかっているため、誘導や案内に出られません。各自で駐めて頂ますが混雑が予想されます。（満車時の電話案内もできません）できるだけ車以外でおいで頂き、満車の場合は近隣の有料駐車場等を利用する、相乗りで来園するなどのご協力をお願い致します。事故がないように気をつけておいで下さい、事故等の対応はいたしかねます。

《撮影について》

- ◆各学年の園庭運動会は園で動画で記録し後日配信します。
- ◆業者による運動会のDVD録画と販売は無しになります。（幼稚園はサブスクの調整を行います）
- ◆スナップ写真も園で撮影したものを後日販売いたします。
- ◆園庭運動会中は撮影可、終了後10分間の撮影タイムを設けます。
- ◆担任との2ショットは時間の都合でご遠慮ください。そのかわり運動会看板+園児+担任の記念写真を、園で撮影したものをアプリ「おうちえん」（DL可）にて配信いたします。



こちらの気持ちを赤裸々に伝える

10/27・園庭運動会前日に通信アプリの園長通信で配信した内容を紹介します。

「おうちえん」という園用アプリを使用しています、
このように堅苦しくなく伝えるツールが普段からあることは、
イレギュラーが起こった際にすばやくこちらの思いを伝えることができて。とても有効です。



10/27

明日から「園庭運動会」

子どもたちにはスペシャル運動会！と銘打って今日も園庭で披露するための配置、動きの変更を確認しつつ、盛り上がっておりました。原小での運動会ができなくて沈んだ様子で登園してくる人もいるのかなあ、と思っていただけに、ふだんと変わらない子どもたちの明るさには、こちらも元気をたくさんもらいました！お家できちんとフォローして頂いたのだと思います。

…土曜日の早朝は、どんよりした天気の中、先生達の空気もどんより沈んでおりました。準備した道具をトラックから降ろして。さあどうする？というときに「ただの振替じゃなく、園庭でやる新しい運動会として考えよう！」という気持ちで仕切り直し、計画を練り直してもらいました。「今まで子どもたちが積み上げてきたものを全て発表したい！」という思いから、あらかた片付けを終えた朝の7時前から始まつた話し合いは10時を過ぎていました。当初は学年だけの種目を予定していたんですが、オープニングもエンディングもできるだけやりたい！ということになりました。年少は園庭ならではの種目も加えたりして…

計画が形になるにつれ、だんだん雰囲気は明るくなってきました。

いちばん頭を悩ませたのは、運営面の段取りです。駐車場、観客スペースの確保、スムーズな誘導、プログラムの順番と子どもたちの動き。そして仕事で来られない方のために記録すること。考えることはいっぱいでしたが、知恵を出し合つて明日からの「園庭運動会」がどの学年もスペシャルになるように計画しました。

駐車場の件は申し訳ありませんが、手が回りませんでした。できるだけ歩きや自転車でおいで頂けると助かります。

雨という自然のおかげで、計画の変更を余儀なくされた訳ですが「できなかつた」ではなく「この形になった」という経験をすることで、「思い通りにいかないことがあっても柔軟に切り替えたり工夫すれば乗り越えられる」ということも子どもたちに伝えていたらいいな、と思う訳です。

明日から3日間、どんなドラマが展開されるかドキドキですが、園庭ならではの「よかったです！」もいっぱい発見しつつ、子どもたちが練習してきた成果をしっかり発表できるようにみんなで応援しましょう！

10/30 園庭運動会 ご協力お礼

火曜日から3日間の学年別園庭運動会がお天気に恵まれ無事終わりました！トラブルも苦情もこちらの耳には届いておりませんが、保護者の皆さんで上手に調整していただいたことでしょう。大きな感謝です！

幼稚園園児の欠席は都合で1名だけでしたし、保護者も全員参加することができたことは、仕事の調整をしていただいたことと協力してくれた職場の皆さんにも感謝です。

子どもたちも若干の緊張感を持ちながら（年長がいちばん強かつたような気がします(^_^;)）日々の成果を発揮することができたことは喜ばしい限りです。

園庭での運動会は僕が園長になってから初めてのことです。今まで体育館や雨上がりのグランドで時間を遅らせての開催など、なんとか出来ていたことがラッキーだったのかもしれません。ですから、今年もとりあえず振替日の日程だけ決めただけで内容は全くの白紙でした。

「園庭ならではの運動会！」という方針のもと先生たちは、それぞれ種目の位置や演出を園庭用にアレンジして、わずかな日程で子どもたちと変更点を確認していました。子どもたちも、よく短い時間で柔軟に対応できたものだと感心します。

皆さん間近で見ていただいているので、内容については触れませんが、保護者の皆さんも誘導に合わせて動いたり参加したり、ご協力いただけたこと、ほんとうにありがとうございます。

平日開催ということで、他のクラスは部屋で平常保育を行いつつ、昼食の時間がずれないように、11時半前には終わりたい、ということで急かしてしまったところもありますがご容赦頂ければと思います。

臨機応変に前向きに考え、工夫して取り組んでくれた職員たちにも感謝ですし、ポテンシャルを遺憾なく発揮してくれたと思います。

来年は、小学校ができると良いなと願いつつ、流れたら園庭もアリという貴重な経験値も得られました。皆さんのご協力ご参加ありがとうございました、心よりお礼申し上げます！



最後に、疑問に思われる方もいると思うので 「体育館を使用しないことについて」

過去二回両日雨天で体育館開催をしたことがあります。その経験をふまえて原町幼稚園の運動会は体育館での開催はやめようとした結果です。

- ・体育館の使用は、地域の活動を譲つてもらうことになるので両日終日貸し切るのは憚られること。
- ・室内の限られた空間では満足に観覧ができなかつたこと。
- ・室内で運動会の練習は行っておらず、子どもたちが慣れていないので上履きが脱げたり、濡れた床で滑って転倒も多かつたこと。雰囲気もずいぶん変わります。
- ・慣れていない空間で行うため、今まで練習してきた成果を十二分に発揮する環境を整えられず、とりあえず「やっつけ」のような力タチの開催になってしまふのは避けたい。

体育館での実施を踏まえた上で検証し、子どもたちの最大のパフォーマンスを発揮させるには「小学校でできない場合はいつも練習している園庭で」ということにしていたのです。

原町幼稚園 園長 鶴谷主一

H P : <http://www.haramachi-ki.ed.jp/>

「幼稚園の現場から」ラインナップ

- | | |
|-----------------------------------|--|
| 1号 エピソード (2010.06) | 33号 (休載) |
| 2号 園児募集の時期 (2010.10) | 34号 働き方改革・一つの指針 (2018.09) |
| 3号 幼保一体化 (2010.12) | 35号 働き方改革って難しい (2018.12) |
| 4号 障害児の入園について (2011.03) | 36号 満3歳児保育について (2019.03) |
| 5号 幼稚園の求活 (2011.06) | 37号 満3歳児保育・その2 (2019.06) |
| 6号 幼稚園の夏休み (2011.09) | 38号 プールができなくなる！？ (2019.09) |
| 7号 怪我の対応 (2011.12) | 39号 跳び箱 (2019.12) |
| 8号 どうする保護者会？ (2012.03) | 40号 幼稚園にある便利な道具〈紙を切る〉 (2020.03) |
| 9号 おやこんば (2012.06) | 41号 コロナ休園 (2020.06) |
| 10号 これは、いじめ？ (2012.09) | 42号 コロナ休園から再開へ (2020.09) |
| 11号 イブニング保育 (2012.12) | 43号 ティーチャーチェンジ (2020.12) |
| 12号 ことばのカリキュラム (2013.03) | 44号 除菌あれこれやってみた (2021.03) |
| 13号 日除けの作り方 (2013.06) | 45号 マスクと表情 (2021.06) |
| 14号 避難訓練 (2013.09) | 46号 感染予防と情報発信 (2021.09) |
| 15号 子ども子育て支援新制度を考える | 47号 親子ソーラン節 (2021.12) |
| 16号 教育実習について (2014.03) | 48号 親子コンサート (2022.03) |
| 17号 自由参観 (2014.06) | 49号 うんちでたー！ (2022.06) |
| 18号 保護者アナログゲーム大会 (2014.09) | 50号 子どもが育つ園庭・その1 木登りとブランコ (2022.09) |
| 19号 こんな誕生会はいかが？ (2014.12) | 51号 子どもが育つ園庭・その2 砂場 (2022.12) |
| 20号 ITと幼児教育 (2015.03) | 52号 子どもが育つ園庭・その3 ストライダーと Tonka (2023.03) |
| 21号 楽しく運動能力アップ (2015.06) | 53号 リスクと安全・園庭編 (2023.06) |
| 22号 (休載) | 54号 夏の音楽会・動画 (2023.09) |
| 23号 大量に焼き芋を焼く (2015.12) | 55号 クリスマス劇・動画 (2023.12) |
| 24号 お話あそび会その1 (発表会の意味) 2016.03 | 56号 こいのぼり製作 (2024.03) |
| 25号 お話あそび会その2 (取り組み実践) 2016.06 | 57号 この頃、気になること (2024.06) |
| 26号 お話あそび会その3 (保護者へ伝える) 2016.09 | 58号 お話あそび会動画解説《年少編》 (2024.09) |
| 27号 おもちゃのかえっこ (2016.12) | 59号 お話あそび会動画解説《年中編》 (2024.12) |
| 28号 月刊園便り「はらっぱ」 (2017.03) | 60号 お話あそび会動画紹介《年長編》 (2025.03) |
| 29号 石ころギャラリー (2017.06) | 61号 マルシェを開催しませんか (2025.06) |
| 30号 幼稚園の音楽教育 (その1・発表会) 2017.09 | 62号 夏の暑さ対策！日除け改良版 (2025.09) |
| 31号 幼稚園の音楽教育 (その2・こどものうた) 2017.12 | 63号 雨天延期に直面して (2025.12) |
| 32号 幼稚園の音楽教育 (その3・コード奏法) 2018.03 | |

►気になる記事・ご感想質問等ありましたら気軽に連絡ください。✉ office@haramachi-ki.ed.jp



福祉系対人援助職養成の現場から

63

西川 友理

外国ルーツの人と関わる機会が 増えてきた！

先日所用があり、15年ぶりくらいに週末の道頓堀に行ったところ、あまりの人の多さ、特に外国人観光客の多さに驚きました。場所によっては、日本語はほとんど聞こえず、様々な国の言葉が飛び交います。若い頃のように大阪の繁華街で遊ぶという事も長らくなかったので、完全に人波に飲まれ、翻弄され、とりあえず用事を済ませて、その場からはじき出されるように地下鉄の駅に入りました。ううむ、10年ひと昔ってこういうことか、なるほど…と感じ入りました。

2024年末で日本の人口の約3%が在留外国人であるという統計が出ています。コロナ禍を経て、海外からの観光客の数も、外国人労働者の数も、過去最高とのこと。年々、海外ルーツの人たちが日常生活に増加しています。ちょっと都会のコンビニエンスストアやファーストフード

ドのカウンターでは、半分くらいの確立で外国ルーツの店員さんに出会います。

そして私自身も、少し前から、海外ルーツの人たちに授業を教えることが増えてきました。福祉の現場、特に介護現場では外国籍の人も多く、現場研修を担当すると何名か日本語に不慣れな外国ルーツの人がいることは今や当たり前の状況になりつつあります。もちろん、これまでも、外国ルーツの学生は一定数いましたが、在日コリアンの2世、3世の方など、幼少期を日本で暮らしてきた人たちの割合が高かったのです。最近は、来日して数年という外国ルーツの留学生の割合が増えました。

留学生に 日本のこと家庭福祉を教える

少し前から、留学生のみのクラスで、「こども家庭福祉」という科目を教えています。実はそのクラスの学生達の主たる専門となる科目ではないので、正直あ

まり興味はないという学生が多い様子です。しかし、それでも教養科目として卒業に必要だからとこの科目を履修している学生さんに対して、さてどんな学びが提供できるかな……と頭を悩ませます。

いずれ大人になるのだから、いや、すでに大人も多いのだから、社会を生きる大人として知っておいてほしい子どもに関する事を伝えます。さらには日本で働く可能性が高いなら、この国の子どもと関わる者のひとりとして、知っておいてほしい日本の現状を伝えます。またもしかしたらいすれ父や母になる者として、最低限理解しておいてほしいことを伝えます。

授業構成の工夫として、いろんな国的学生がいるので、お互いの国の子どもたちの現状について紹介するコーナーをつくりました。これが思ったよりも意外な知識を得られる、大変有意義な時間になっています。

今回は「対人援助職養成の現場」ではないけれど、ちょっと寄り道して、この学生達とのやり取りを紹介したいと思います。

ネグレクト、って何？

児童虐待について説明していた時のことです。日本の児童虐待は法的に身体的虐待、心理的虐待、ネグレクト（養育拒否）、性的虐待という4種類があって……と説明していると、学生から質問がありました。

「先生、ネグレクトって何ですか。」

「子どもに対して、るべきお世話をしないってことです。例えば食事を用意しない、洗濯をしない、家に放置して閉じ込めておく、というような…」

と説明します、が、皆キヨトンとしています。

「え、どうして？だって、誰かいるでしょ、家の中に。誰かが世話をするでしょ？」どうもピンと来ていない様子。

「いや、ほら、例えば母と子どもの2人暮らしで、親が子どもを家に置いたまま外出して……」

「ええと……私の国では、子どもがいるのに大人と2人暮らしとか、ないです。」

「ない？」

「ないです。あるかもしれないけど、少ない。ふつう、誰かいるでしょ。誰かがお世話をする。」

と答えた学生はネパール人の学生。その隣でバングラデシュ人やカンボジア人の学生もウンウンと頷いています。

基本的に祖父母はもちろん、おじやおば等、同じ家で、大人数で暮らすのが普通だから、なんとなく手が空いてて、暇がある誰かが、子どもが泣いていたら、家族なんだからそりゃあ世話をするのが当たり前、とのことでした。

「日本ではそんなことがあるんですか！」と驚いています。じゃあ皆の国には虐待がない？と聞くと、彼らいわく、

「ありますよ、Child Abuseですよね。ええと、学校に行かせない！道でお花やお菓子を売る仕事をさせる。」

「私の国もそれがあります！問題になっています！」

「田舎の方や、貧しい家はそういう問題、けっこうある！！」

この地域の学生たちにとって児童虐待といわれて真っ先にイメージするのは、児童労働であるようでした。

「逆に日本ではあまり聞きませんねえ…あ、高校生くらいになったら、アルバイトしたお金を家計に回さざるを得ない、というのは時々あります。」

「それ、私の国ではもっと小さい頃からある問題ですね。」
とのこと。

授業後、調べてみると、ネパールの平均世帯人数は 2021 年で 4.37 人。日本は同年、2.37 人でとのことでした。なるほど、それでは「家の中にだれかがいる」というのが当たり前というのも頷けます。

文化背景の違いから知る様々のこと

同じクラスで、社会的養護について説明していた時のことです。

それぞれの国では、親がない、あるいは親と一緒に暮らせない子どもは、どこで生活するのかという話をしていた時に、多くの国の学生は「親戚と一緒に暮らす」「それが難しい場合は公共の施設で生活する」と答えていました。

その時、ミャンマーの学生が少し考えて言いました。

「今はおおやけの施設が多いけれど……ほんのちょっと前までは、一番多いのは

お寺でした。」

「お寺？！」

「はい、そういう子どもとか、困っている人とかを助けるのは、ミャンマーではお寺でした。」

「へえー！！」

これには他の国の中学生たちも驚いていました。

ウズベキスタン人の学生は、日本の少子高齢化について、しゃべり私に議論を持ち掛けます。

「日本人はね、もっと家族を大事にしないと！！離婚の数、すごく多いよ！子どもの生まれる数もすごく少ない！これは、大問題ですよ！！」

「お金持ちで子どもがいないより、ちょっと貧乏でも、子どもが多い方がいい！そんな価値観を持たないといけないですよね！！」

調べたところ、ウズベキスタンの合計特殊出生率は 2023 年で 3.5 とのことでした。うーん、そんな国から見たら合計特殊出生率 1.20 の日本には、言いたいことが沢山あるのでしょう。

日本の現状から、 出身国を顧みる学生たち

その一方、ほんの少し前の日本で見られた光景が、授業中に展開されることがあります。

各国の子どもの状況について、地域格差があることを話し合っていた時のこと

です。

各国の地図を出して、その国の学生を指名し、自分の知っている子どもの状況について解説をしてもらっていました。

「北の方は田舎で、凸凹道だから、障害がある子どもが学校に通うことが難しいです」

「親は都会の方に出稼ぎに来ていて、家族や親戚が子育てをしています」

等々、皆の発表に耳を傾けていた時、

「今は、男の子も女の子も、勉強したい子は勉強できる。男女差別はないです。」といった男子学生に対して、その国の女の子たちが、

「は？！あるよ！！！」

と叫びました。

「ないよ！むかーしはありましたけど、今は聞いたことないよ。」

と答える男子学生に対して、

「あるよ！聞いたことないのは、あなたが男だからだよ！先生、女の子の方が勉強とか進学とかしないでいいとか、するなって言われることが多いです。」

と答える女子学生。これには同じ教室にいたいくつかの国の女子たちも同意して「私の国もそうです！うちのお父さんとお母さんは違ったからこうして日本に来れたけど…」

「都会はそんなことないけど、田舎はまだそうみたいです。」

男子学生の中には、それは当然だよね、とでもいいたげな顔をした者も、戸惑う者もいます。特にその時に発表していた学生は、胸に手を当てながら、

「先生、私は、皆さん聞くまでそんなこと今もあるなんて知らなかった…。」と言っています。

「日本でも、まだ地域によっては、そして家の考え方によっては、そういうことがあります。女の子は勉強する必要がない、進学するなんてもったいない、と言う人も一部にいるようです。」

というと、皆考え込みます。

「どこの国もあるんですか…。」とつぶやく学生。

ヤングケアラーについて、ネパール人の学生に伝えた時の反応も印象的でした。

「ヤングケアラーという言葉を知っていますか？」

と聞くと、全員が「知らない」と答えます。

「家族の介護その他の日常生活上の世話を、過度に行っているとされる子どもや若者のことでね…」

と説明をすると、

「そんなケア、家族が担うの当たり前です！」

「家族で仲良く助け合うのが大事です！子どもが手伝うのは、普通の事です。」と口々に意見を出します。しかし様々な事例や統計を出すと、やがてだんだんと真剣に聞き始めます。

その日、授業後のミニッツペーパーには、

「私の国ではヤングケアラーという言葉はない、だけどケアによって遊ぶ時間や勉強の機会がこんなに奪われるるのは問題

だと認識を改めた」

という回答が非常に多く見られました。

また、

「ネパールにはヤングケアラーという言葉はない。でも、ヤングケアラーは、ネパールの家のほとんどにいると思います。特に貧しい家には必ずいると思います。でも、それが当たり前になっています。問題として議論することから始めないといけないと思います。」

「普通のことのように見えても、実は大変な思いをしている人がいるかもしれません。そのことに気付きました。」

「友人の兄は妻を出産で亡くした。赤ちゃんを一人で世話できなかった兄に代わり、友人がお世話を引き受けざるを得なかつた。彼女は学業を中断し、全ての時間とエネルギーを子供の世話に捧げた。彼女の愛情と献身は確かに赤ちゃんにとって有益でしたが、私は彼女の将来——夢や目標、個人的な欲求——について考えずにはいられなかった。友人が実際にこの経験をしたことを知るまで、このような困難を私は本当に理解していませんでした。」

このような感想があふれています。

まるで 2020 年前後、日本でヤングケアラーという言葉がやっと認識され始めたころの再現のようでした。

専門性を超えて、国籍を超えて

何年か前に、卒業を目前にしたある保育学生が、

「この保育の勉強、専門職教育じゃなくて、義務教育でやるべきだと思うわ。」と言いました。

「だって大人になつたら多くの人が子どもを儲けるでしょう。たとえお父さんやお母さんにならなくても、社会人として子どもに対応できる大人ではありたいじゃない。ピアノや工作の技術までは要らないけど、例えばこども家庭福祉とか保育原理とか社会福祉とか…専門性や職業にかかわらず、どんな大人になっても絶対に必要な知識やと思うねん。」

いやいや、昨今の留学生に向けた授業の様子を見るに、専門性や職業どころか、国境までも飛び越えて、必要な知識のようですよ。

いつもいつも学生に教えてもらつてばかりの私ですが、留学生対象の授業は特に毎週新鮮な驚きがあります。

この学生たちは、専門職にはならないかもしれませんのが、お父さんやお母さんにはなるかもしれません。少なくとも、大人として、社会を作っていく人たちです。最初はつまらなそうにしていた学生も、話題によっては教室が静まり返るくらいに集中して話を聞いていたり、おかしいと思った事には活発な発言が見られたり、と、授業をしていてとても楽しいのです。

もう 15 年以上、この連載を続けていますが、こんな新しい経験、新しい学びを、まだ学生たちが教えてくれるので。この仕事は本当に刺激的です。

ああ、相談業務

～あるカップルの話～

かうんせりんぐるうむ かかし

23

河岸由里子（公認心理師/臨床心理士）

かかりでは、様々な相談を受けています。多くは不登校相談や会社での不適応・鬱などであるが、時々カップルの相談が寄せられる。今回はそんなケースの一つを紹介しようと思う。

両親は健在で遠方に在住。早紀さんにも姉と弟がいて、それぞれ家族を持ち、姉家族が両親と同居している。

相談経過

家族

夫の武さんは51歳で会社員。妻の早紀さんは52歳、パート従業員。息子が二人。長男は27歳で会社員。遠方の大きな市にいる。次男は25歳、道外で一人暮らしをしている。現在夫婦二人暮らし。武さんの両親は既に亡くなっている。早紀さんの

雪が解け、新年度が始まるころ、武さんと早紀さんのお二人が相談室に見えた。武さんは、体格ががっかりとしていて、色黒で、目の大きなはっきりとした顔立ちで、精力的な感じの方だった。一方早紀さんは、やや細身、色白で、かといつてか弱い感じもなく、細面のしっかりした方だった。

先に早紀さんが入り、あとから武さんが入ってきて座った。自己紹介をした後、早紀さんが一気

に話し始めた。

20歳で結婚し32年子育てやら大変なことはあった。15年位前に、自分の浪費癖で武さんに自己破産させたという負い目はあるものの、仲良くやって来たと思っていた。しかし、昨年から夕飯は要らないということが増え、夜家を空けることも増えた。どうも武さんの行動がおかしいと思い、注意してみたらどうも浮気をしているらしいことが分かった。ある日パチンコに行くと言って出かけたあとをつけたら、パチンコ店ではなく、女性の家に行っていた。同じ会社の40代の女性で単身。早紀さんも知っている人だった。そこで、武さんにも浮気をしていることを知っていると伝え、白状させたら、もう5年くらいたき合っていることが分かった。5年も騙されていたことに腹が立ち、相手の女性のところにも押しかけて別れるよう話した。相手の女性は、母子家庭だったが、子どものことやら自分のことで相談にのってもらっていたところ、そういう関係になってしまったと詫びてくれた。許せはしないけど・・・。武さんにも、二度と相手のところにはいかない約束をさせた。でも同じ会社にいるので、また会うのではないかということと、長年騙されていたこと、武さんがどう思っているのかが良くわからないことなどでモヤモヤして、どうしても何度も武さんを詰ってしまい、その結果喧嘩になることを繰り返している。そこで、ここに相談に行こうと誘った。武さんはしぶしぶだったが来ることになった。というのが大体の流れである。

浮気か。そういう相談はちょくちょくある。夫の浮気も妻の浮気もあるが、今回は夫の浮気。それに対する妻の反応もさまざまである。絶対に許せないから浮気がばれた時点で即離婚となったケースもあれば、「離婚したら女のところに行くから絶対に離婚してやらない、ずっとこき使ってやる」という執念めいたことをいうケースもあった。さてこのケースでは早紀さんはどうするつもりか?そんなことを考えながら、早紀さんと武さんに色々質問を投げていく。直接的に訊くこともあれば、片方にもう一方の気持ちを答えさせると

いう円環的手法を使うこともする。

その結果わかったことは、武さんは、早紀さんに対する不満があったときについて感じたこと、早紀さんが離婚したいというなら応じること、また慰謝料も支払う気持ちでいること、ただ相手の女性に対しては慰謝料請求をしないでほしいという考え方がある事が分かった。一方早紀さんの方は、離婚をするつもりはないこと、相手の女性には慰謝料請求をするつもりであること、どうしても怒りが湧いてきて詰ってしまう事などが話された。

調停で言えば、夫婦円満調停のようなものである。武さんとしても離婚をしたいわけでもなさそうのが分かったので、まずは二人の関係性を良くする方法を考えていこうと思った。

そこで最近の二人の様子を尋ねてみた。今日来るときは車の中で何か話しながら来たのか?(遠方からの来談者で、住んでいるところから車で2時間以上かかる。) ときくと、殆ど無言だったとのこと。家での会話も少ないという。話すとつい早紀さんが怒りを出し、浮気のことに話が言ってしまって詰るので、武さんと口喧嘩になってしまふからという。

早紀さんの怒りは理解できるが、いつまでも詰って関係性を悪くするのは得策ではない。早紀さんの怒りに心理療法を用いて処理し、また怒りを感じたら心理療法を用いることを勧めた。次に、これから二人が関係を戻すためにどうすれば良いか考えてもらった。二人だけの時に詰るのをやめ、カウンセリングに来た時に不満や怒りを表出するというのはどうだろうかという話になった。武さんも、詰られなければ腹を立てることないのでそのほうが良いと双方このやり方を試してみたいと言った。

正直、感情をコントロールするのは中々難しい。怒らない、詰らないようにするという目標設定だと大抵失敗するだろうと思い、二人で楽しいことを一緒に楽しむ方が良いのではないかと話し、何か二人で楽しめそうなことは無いかと訊いてみた。

二人で話し合ってもらった結果、二人とも映画が好きなので、映画を観るということになった。映画はテレビでも DVD でも映画館でも良いことにし、二人の時間があるときは映画を観て、観た映画について、どこが良かったかという話をしてみてはと言ってみた。

それなら何とかできそうだというので、早紀さんは怒りを心理療法でコントロールしながら、二人の時間は映画を楽しむという形で納得し、次回まで続けてもらうこととなった。

3週間後に再来室していただき、この3週間の報告をして貰った。

最初の内は何とか映画を楽しむことができたが、やはり怒りは出てきて心理療法を使う前に怒りが爆発し、大きな喧嘩をしてしまった。言い合う中で、早紀さん自身も自己破産させたことなど迷惑をかけたことに思い至り、少し怒りが抜けたとも話していた。まだ武さんを許せる自信がなく、騙される不安、傷つく不安があると訴えた。

一方武さんは、早紀さんを傷つけたことは認めると、いつまでも繰り返し怒りをぶつけられるのもしんどい、もういい加減終わっても良いのではないかという考えていた。そこで、筆者から「何年もの間裏切り続け、だまし続けたことは、武さんの中ではそれほど大きなことになっていないのかもしれないが、早紀さんの中では、中々整理のつかない、とても大きな傷になっているということを理解してほしい。まだしばらくは詰られる覚悟をしてほしい。武さんが早紀さんの信頼を再び得られるには時間がかかるだろう。」と伝えたところ、理解してくれた。

ここで、前回二人が考えた、詰るのはカウンセリングに来た時だけという約束を再び持ち出して来て、それを実行してみたいとなり、それを支持した。と同時に改めて、早紀さんの傷つきに心理療法を施療し、怒りを感じたらその場を離れて心理療法を使うことを提案して、二回目の面談が終了となった。

1か月後に3回目の面談となった。二人の関係性は前回から今回までの報告の中でも、随分よい

雰囲気になってきてはいた。ただ早紀さんに言わせると、「関係は良くなつて来たけど夫婦関係が持てない」という。武さんに、関係を持ちたいという気持ちにならないのかと訊くと、そういうわけではないがどうしたらよいかわからないとのこと。その言葉をそのまま早紀さんに聞かせることで、早紀さんが受け入れられれば可能であることが早紀さんにも伝わった。二人の会話は以前のようなトゲトゲしたものは無く、自然で、食事も一緒に食べているし、寝るのも一緒にすることは分かったので、簡単なことを始めてみてはどうかと伝え、カップルの最初の関係性のように、まずは手をつないで寝てみてはという提案をしてみた。二人ともそれくらいならできるというので、寝る時は必ずそうしてほしいと伝え、3回目の面談を終えた。

更に1か月後、4回目の面談にいらした。手をつないで寝る事を続けるうちに、関係性が深まり、夫婦関係持てるようになったとの報告があった。早紀さんの中では、まだ少しモヤモヤが残つてしまはいたし、たまに喧嘩をすることもあるようだが、何とかやっていけそうというのでいったん終了とした。その後、早紀さんに電話で様子を確認したところ、うまくやっているとのことであった。

まとめ

このケースは、夫婦が両親になり、子どもたちが巣立って、再び夫婦二人だけに戻る時に問題が起きたケースである。夫婦には、危機と言われる時期が何度かある。

一つ目が夫婦になったとき。そこでは双方の文化・慣習などのぶつかり合いがある。食事中はテレビをつけるvsつけない、朝食はご飯vsパン、男性もトイレは座ってvs立ってなどなど、細かなところでもぶつかる事になる。生まれも育ちも違う者同士が一緒に住めば、いろいろ違いが出てぶつかるのも仕方がない。明治・大正の時代であれば、嫁は嫁入り先の文化に合わせなければな

らなかったからぶつからなかっただろうが、今の時代は双方主張するからぶつかる。ここが一つ目の夫婦の危機で、離婚になることもある。

二つ目の危機は、第一子が生まれた時である。妊娠から出産、そして赤ちゃんの育児というところで、母親はつわりを経験し、流産しないように気を付け、大きなおなかを抱えてしんどい思いをしながらも、少しずつ母親になっていける。そして赤ちゃんが生められたら、そこから母親としてあれこれしなければならないことが増えてくる。母親自身初めての子育てでいっぱいいっぱいになり、イライラしてつい父親に当たってしまう事さえある。一方の父親はと言えば、赤ちゃんを産むことも、母乳をあげることも、父親には出来ない。それゆえ父親は父親としての自覚を中々持てない。最近は父親も育休を取って育児をしていくことで父親としての自覚を育てている人も増えたが、育休を取っている父親はまだまだ少ない。自分は仕事があるんだ、外で稼いでいるんだ、疲れているんだと言って育児に参加しないと、母親の怒りを買うことになり、その結果夫婦仲が悪くなることもある。また、母親が赤ちゃんファーストで動いていると、赤ちゃんが生められるまでは夫ファーストだったのにと赤ちゃんに嫉妬を感じる未熟な父親になったりして、それもまた母親の怒りを買うことになり、夫婦関係が悪くなってしまうことになる。このように、第一子誕生時が二つ目の夫婦の危機と言われる。

そして、三つ目が、今回のケースのような子育てを終え、両親という役割が主体だったものが夫婦二人という生活に戻ったときである。両親としての役割を果たす中で夫婦の関係性は弱まり、子を鎌にしていた場合は、子どもが巣立った途端に離婚になったりする。熟年離婚が多いのはそういうことだろう。夫婦二人に戻るとなると、今まで我慢していたことも我慢できなくなる。よく聞くのは、奥さんの方が旦那さんの加齢臭が耐えられないというもの。実は奥さんの方も加齢臭があるのだが、気づいていないのかもしれない。自分の匂いは気付きにくいから。それこそ「坊主憎けり

や袈裟まで憎い」で、いったん気になりだすとあれもこれも嫌になってしまう。会話は減り、一緒に活動することも減る。これでは夫婦の関係が良くなることは無いだろう。

この三つの危機の頃に、浮気の問題も絡んでくることがある。新婚は平和かと思いきや、新婚早々浮気が問題となったケースにも会った。妻の妊娠中や出産で里帰りしている間に夫が浮気したというケースにも出会った。そして今回のように、子育てが終わった熟年夫婦のところで浮気問題が発覚したケースにも出会っている。

夫の側の浮気が圧倒的に多いが、妻の側の浮気もちょくちょくある。妻の浮気の場合夫が相談に来ることになるが、大抵妻を許さず離婚を決めている。相談内容は子どもの親権と子どもへのダメージについてになる。

昨今離婚のハードルは低くなり、気軽に離婚するようになってきた。離婚理由はそれぞれである。一組のカップルが、長期にわたり一緒に過ごして添い遂げることはますます難しくなった。というのも、各自が自己主張をし、自分を大事にしようとするからでもあると思う。人に合わせていくことは自分をある程度抑えることになる。それが耐えられないと喧嘩になる。喧嘩でどちらかが折れなければ決裂になる。どちらか一方だけが折れているといつかその不満が爆発する。我慢せたら何か埋め合せ的なものが無いとバランスはとれない。お互いに欠陥だらけの人間同士である。マウンティングをしている間はいざこざが絶えないし、一方が他方に依存しすぎても上手くいかない。割れ鍋に綴じ蓋の関係性が一番であろう。

本ケースは離婚することもなく、元の鞘に戻って、何とか二人で今後も過ごしていくこうという状態になった。また何かしら問題は起こるかもしれないが、その問題にどう対処していくのか？今回のことから何か学んでくれればと思う。

生殖医療と家族援助

～LGBTQ 支援にむけた対人援助の考察～

荒木晃子

対人援助学会での試み

2025年10月に開催した対人援助学会第17回年次大会では、「可視化する/されるを超えたLGBTQ+当事者の支援を考える—『私たちは、ここにいる』の声を集めてー」と題して、参加者の皆さんと共に考える機会を設けた。本年度の学会理事会企画として、壇上のゲストスピーカーの報告から、会場の皆さんと共に「対人援助者である自分以前に、隣人として、当事者にどう向き合えばよいのだろうか」を見つめ直す機会になることを願ってのことである。

本学会には、教育、福祉、行政、医療、様々な任意団体、ボランティア、学術ほか、実に多くの領域で対人援助に携わる方々が所属している。小規模の学会ではあるものの、学会員の所属領域は、社会にある対人援助システムの縮図といえるほど多彩な領域を包括しているのではないだろうか。しかしながら、所属する領域の専門性を持つ援助の実践者が、どれほど性に関する教育を受け、性に関しての情報が共有されているかは知る由もない。以前、直接、当事者から得た情報から、性と生殖に関して「援助者側への情報の提供と共有」は充実しているといいがたいと感じていた。相談をしても理解を得られない、相談したのに逆に質問されるばかり、病気扱いされた、嫌な顔や困った顔をされたなど、

LGBTQ+当事者の援助に関しては、対人援助学の未開発領域となっていた。

日本の公教育では扱わない「性」に関する知識のないままに、援助の専門性を習得した援助者が、「性と生殖に関する困りごとの相談」にどう向き合えばいいのか。実際に当事者支援を実践しているゲストスピーカーの報告から、会場の皆で考えようというのが本企画の目的のひとつであった。

性と生殖の相談を傾聴するということ

社会には、行政や民間機関による「女性の相談」窓口、医療には男性専門、女性専門の診療科、医療と行政、警察が連携した「性被害に関する相談」窓口等、男女二元論を前提に対応する機能が受けられる。

行政機関で性暴力の相談に対応する心理士からの情報によると、以前は、女性やこどもへの性暴力相談が大半で、性被害者に男性は含まれていないと考えられていたが、最近の傾向として、男性の性暴力相談も増加しているという。いずれにしても、警察には事件性、医療には治癒、そして相談支援には多角的な視点が求められることに変わりはない。なかでも、子どもへの性暴力には保護者との相談や、支援計画の都度、対応や対処に関する承諾等が必要となるため慎重に進めることに苦慮するのだそうだ。例えば、わが

子の将来を考え、(被害が)なかったことにしたい親、傷ついたわが子以上に怒り心頭の親、子どもの被害を悲しみ悲嘆にくれ子どもを支える力を喪失した親、など子どもだけでなく、自身への援助を必要とする保護者への対応には相当な労力を要するという。また、女性、男性、それぞれの性被害者への対応には、性別が異なる被害状況へ本人の自覚や、その後のトラウマの性質などが異なるため、男性被害者への対応には更なる研修が必要だという。いずれにしても、性被害者への救済過程に医療の側面支援は欠かすことはできず、特に、妊娠可能な年齢の女児と成人女性の被害者に関しては、「妊娠の可能性」を視野に医学的視点での治療、もしくは、妊娠が確認された際の「産む・産まない」の選択支援、産むことを選択した際の出産計画、出産後の新生児の養育に関する意思確認なども相談内容に含まれる可能性がある。「性暴力は魂の殺人」と呼ばれるほどに、被害者の尊厳を著しく傷つけ、長期に渡り心身に影響を及ぼす深刻な犯罪であることから、その後遺症への心理的かつ医学的サポートの重要性が確認されている。

性暴力ではないものの、性に関する医療の現状としては、男性専門、女性専門の診療科が設けられていたり、生殖医療施設のなかには、女性医師と女性スタッフのみで構成する女性専門の不妊治療施設があったりと、不妊=女性の問題として対応する医療現場も見受けられる。このように、とかく、性と生殖に関する悩みや相談、困りごとは、その専門性をもつ援助職が受け持つ相談業務と捉えがちである。そこに、性別を問わない性と生殖に関して、且つ事件性のない相談事への対応にまでは、支援や援助システムが構築

されていないのが実際だと考える。このような現状から、LGBTQ+当事者の相談には、男女二元論を前提とした思考や解決手段を用いると、クライエントの苦悩の本質を見失う可能性は否めない。女性ならこう思うだろう、男性ならこう考えるに違いない、起きた出来事への反応はおそらくこうだろうなどと、知識や情報を更新しないままラベリングした援助対応のみでは、クライアントの“出来事以前からある苦悩”を読み取れない危険が生じるかもしれない。本学会の理事会企画では、その点も問題提起する予定であった。

果たして、学会当日をむかえて・・

当日までに、2名のゲストスピーカーに登壇の承諾を得て、わが恩師のお一人に指定討論者として同席していただくことが決まった。ゲストとは事前に打ち合わせを済ませ、開始前には顔合わせの時間を持つことができた。ゲストのお二人は、それぞれ長年、当事者支援に携わってこられた方々であり、事前の打ち合わせの段階でも、我々が学ぶべきことは多く、予定を上回る参加者の方々に充実した時間をお過ごしいただけるだろうとの期待があった。しかし、いざ企画開始時刻になると、お一人の体調不良がピークを迎え、やむなく救急病院へ搬送。せめてもの救いは、大事には至らなかったことであった。

いくら周到に準備していても、こういった出来事は起こり得る。不慮の出来事は本人が望むと望まないにかかわらず起こり得るのである。会場の皆さんに、お二人のゲストスピーカーから援助の示唆をお届けできなかったのは、まことに残念であるが、如何せんトラブルは予期せぬ時に起きるものだとご理解いただければ幸甚である。

後日、体調を崩したご本人から丁重なお詫びの連絡を拝受したので、企画者としてもお詫びするとともに、この場をお借りして、当日の参加者の方々にお伝えする次第である。

補足

このような事情から、予定していた企画とは多少異なるゲストスピーカー、指定討論者、企画者による3者の対談となった。参加した皆さんのが感想はいかがだっただろうか、ずっと気にかかったままである。そこで、学会当日の代替案として、予定していたお二人のゲストスピーカーには後日、本学会の研究会企画でご登壇いただき、次はオンラインでの参加を可能とした時間を持つことを計画している。

年を越した来年の日程となるが、学会当日足を運んでくださった方々、気になっていたけれど当日の参加がかなわなかった方々にも、是非ご参加いただきたいと願っている。これは、お二人のゲストスピーカーの願いでもあることを付け加えておきたい。

路上生活者の個人史

第17回

竹中尚文

長野 治一郎 氏(仮名)

1970生まれ。55歳

私は岡山県倉敷市で生まれました。昭和45年生まれですので、今年55歳です。家族は両親と妹と祖母の5人家族でした。母親は私が5歳の時に癌で亡くなりました。妹は3歳でした。母親の記憶ですか？一所懸命に働いていた記憶しかないです。病気になって亡くなっていく記憶は、ほとんどないです。母親が亡くなつてからも、祖母と妹と3人で内職をしていました。内職の収入と祖母の年金で何とか暮らしていたのです。父親はサラリーマンでした。その給料は自分が遊ぶことに使っていま

した。

倉敷で小学校と中学校を卒業しました。生活がきびしいので、中学校を卒業すると就職しました。食品工場でした。私の勤務地が寮から遠かったので、始発の電車で出かけて、帰るのが終電でした。さすがに厳しい勤務なので先輩に誘われて、1年ほどでその工場を辞めました。16歳の時に、祖母が亡くなりました。その頃、父親は女の人と出て行きました。中学生だった妹は親戚に引き取られました。私は寮のある会社に就職しました。繊維関係の会社でした。繊維関係ですから、仕事は肉体的にはしんどくなかったです。ただ勤務時

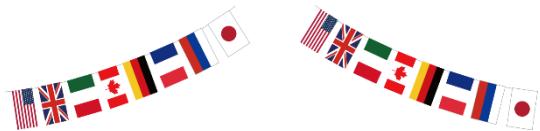
間は長かった。朝 8 時から翌朝 5 時まで仕事をしたことがあります。あの頃は、そんな勤務形態の所は珍しくなかったですよ。いくら働いても残業代は 1 時間分でした。こんな仕事は続きませんでした。2 年ほどで辞めました。18 歳でした。

それからは、派遣の仕事です。岡山を中心とした地域のあちこちで仕事をしました。21 歳ぐらいまで派遣の仕事をしていましたが、辞めて大阪に出てきました。建築会社で仕事をするようになりました。30 代半ばの頃に耐震偽装事件があって、建築の仕事が急激に少なくなりました。失業です。それからは日雇いの土木の仕事しかありませんでした。20 年ほどになります。最近は身体もきついし、なかなか続

かなくなっていました。そこで、ここに並んでいるのです。最近、なんとか生活保護をもらえるようになったので、アパートで暮らしています。生活保護の大半はその家賃で消えますが、トイレも使えないボロアパートです。食費はとても足りないので、こういった炊き出しに並ぶのです。

妹ですか？妹はわりに早く結婚しました。それから、あんまり連絡は無くなりましたね。私がこんな生活をしているからかもしれません。そうですね、家族？家族を持つ機会がなかったように思います。結婚なんて、考えもできませんでした。今、人生を振り返ってみるともうちょっとラクに生きてきたかったですね。

私たちの社会では、家族がそれぞれの個人の後ろ盾になっていることが多い。義務教育を終えたとはいえ、巣立ちの年齢を前にして家族を失った人は、どうすればいいのだろう。話を聞いて、お母さんはどんな思いで亡くなったのだろうと思った。おばあちゃんはまだ死ねないと思いながら亡くなったのだろうか。妹さんはどんな結婚をしたのだろう。



スポーツおじいさんに ないたい！⑦



『マネーボール』
(ベネット・ミラー監督・2011)

國友万裕



1. 文句を言う女・文句を禁じられる男

久しぶりに行ったジェンダー関連の学会でテレビ局についての発表に参加した。若い大学院生の人の発表だったのだが、テレビ局はいまだに女性は25%しかいないところが示された。

それに対して、俺は質問した。

「私の教え子の男の子が東京のキー局のアナウンサーになったんです。彼は特別な教え子で、4つも私の授業をとってくれていたし、本当にたくさん話もした。一緒に食事もした仲だったので、彼の局のアナウンサーのインスタをフォローしているんです。そうすると、女性の存在感が圧倒的に強いんですよ。いいね！の数も女子アナの方が圧倒的に多い。だから私はアナウンサーは女性優位の世界なのかと思っていました」と。

この俺の発言に対して、後ろの方に座っていた若い女性がちょっと反発していたみたいだった。そして、はっきりとは覚えていないのだが、次のようなことをおっしゃったと記憶している。

「採用するのは男性だから、そういうことになるのだと思うんです。今、『女子アナ』とおっしゃったけど、女性のアナをキャピキャピしたふうに写真に撮ってアップするからいいね！が多くなるんだと思うんです」

彼女は「女子アナ」という言葉も差別だと思っているみたいだった。俺は単に女性のアナウンサーという意味で言ったことであって、男子アナとも言うから、差別とは思っていなかった。だけど、ネットでググってみると確かに「女子アナは親父が言い

始めた言葉だから、セクハラだ」と思っている人もいるみたいだった。

しかし、俺は、この時「また始まった」と思ったものだった。何故、女性は自分たちの被害者の地位を必死になって守ろうとするのか。

おそらく女は所詮、装飾的な花添え的な役割をさせられると彼女は思っているのだろう。しかし、これは違っている。男だってアナウンサーなんかだったら、イケメンでなかつたら採用してもらえない。俺の教え子だった子はお父さんがアメリカ人で超イケメン、野球部で体つきもガッチャリしていたから、その点が採用の際に大きくプラスになったことは間違いないのだ。彼は自分のマッチョな上半身裸の写真を局のサイトに出したりもしている。男だって性的な見せ物にされているのである。

そもそも、全然、男を外見で判断しない女が世の中にいるのだろうか。女がテレビ局の中心になれば、不細工な男でもアナウンサーに採用してくれるというのだろうか。

それは絶対に違っていると思う。

俺が大学院の頃だ。当時、女子学生に人気のある男の先生がいた。その先生というのはまだ30代くらいで、イケメンで女性ウケしそうなタイプで、女の子たちはその先生にははっきり態度を変えていた。その先生の世話をするのが嬉しそうだったので。彼女たちの姿を見て、俺は他の男の先生たちに失礼だと思っていたものだった。その先生、自信過剰でちょっと気障なタイプで、俺はその先生に人間的な深みを感じなかった。おそらく男子学生に受けるというタイプではなかったのである。

教え子がアナウンサーになったことで、俺は他の男子アナのプロフィールも見てみたのだが、アナウンサーになっている男性たちは、やはり体育系が多い。これは明らかにスポーツができない男性に対する差別であり、是正すべきなのだけど、それは当然のこととして受け入れられている。フェミニストもそう言うのには文句を言わない。

教え子の女の子たちにジェンダーの話を振ると、大抵の子は「自分よりも背の高い男性がいい」という。もちろん、「それはあくまでも理想です」と彼女たちはいうのだけど、でも、「背の高い男性がいい」という心理を持っているというのは問題なのだ。自分よりも上の地位にいる男性、自分を庇護してくれる男性を女は求めているということなわけだから、男性差別なのである。

またほかのところで、こういう事件も起きた。

俺は来年出る予定の英語テキストでコラムを書いている。ルッキズムについてのコラムなので、今の男性がいかに見た目を気にするようになったかということを書いた。この頃は男性の脱毛も流行っていて、胸毛やすね毛のみならず、腋毛や陰毛まで全て脱毛して、ツルツルにしてしまう男子が増えていると書いたのだ。すると早速、女の先生からクレームが来た。「陰毛なんて書くと女の子が気分が悪くなる」というのだ。別にそういうコンテクストで書いたことではないし、大学生なんだからそれくらいはいいのではないかと俺は思ったのだが、彼女は譲らないので、その部分を削除することになった。

一つ一つのことは些細なことなのだが、

これだけ女人の人からうるさく言われるとなると流石に腹が立ってくるのである。では、女性たちはどうなの？俺は子供の頃から女子から「気持ち悪い」と言われ続けて、それが今でもトラウマになっている。先日、西井開さん他の新しい本『名著でひらく男性学〈男〉のこれからを考える』(集英社新書)を読んでいたら、他の男の人も「キモい」と言われるにはひどく傷つくんだと言っている。なのに、女性たちは一向に「キモい」という表現をやめようとはしない。

女性がどれだけ大胆な格好をしていたにしても、挑発的なポーズを取ったにしても、セクハラはしてしまったら男の方が悪いんだとフェミニストは訴えてきたはずだ。そうであるのならば、俺がどれだけ気持ちの悪い男であったにしても、「キモい」などという言葉で男性の悪口を言うのは女の方が悪いのである。

俺は、そのことをもっと女性にわからせるべきだと思う。男ももっと文句を言っていいと思う。男の文句も女は受け入れるべきだと思う。ポストフェミニズム時代では女は「文句を言う権利」がある。だけど、男は文句を言う権利を阻まれるのである。

そういえば、男性学関連の研究会に行つたときも、いきなり、司会の人たちが、「女性、性的マイノリティの人を攻撃する発言はお控えください」とおっしゃった。

これは男性差別である。女性を攻撃するのはダメだけど、男性を攻撃するのは構わないと言っているように聞こえるからなのだ。

今は女性センターも男女共同参画センターと呼称を変えているし、映画サービスも

レディースデーはなくなった。名簿も男女の表記をしなくなった。男性差別に対する意識が少しずつ芽生えてきているのである。

それなのにいきなり、しかも男性性の研究会ののけから、「女性」を攻撃するのはやめてくださいという前置きはおかしいと思う。「男性」であっても、安易に攻撃してはならないからだ。俺は弱者男性なので、その部分が気になって仕方がなかったのだった。

そんなことを考えているうちに高市早苗が日本初の女性総理になってしまった。

俺は最初は悪夢だと思ったものである。あんな右翼の人が日本初の女性総理だなんて・・・。しかし、よくよく考えるとこれで良かったのかも知れない。

俺がこれまでフェミニスト系の女性たちと接していて、腹が立っていたのは、自分たちは平気で男に文句を言うくせに、男が女を批判しようとすると、「男の人は見えない権力を握っているんですよ」とか「男社会ですよー」と話の次元を変えてこられることだった。俺は日常的なレベルでの男女関係のことを言っているのに、女に都合の悪いところになると社会の枠組みレベルに話を転化しようとするのである。

女は下位の者だから、文句を言う権利があるのでと彼女たちは思っている。「女は悪くない理論」「女は可哀想理論」である。しかし、実際にはそんな単純なものじゃないだろう。俺は、ジェンダーの問題は①社会レベル②個人レベル③心理レベルの3つの指標から考えるべきだと思っている。

社会の外枠のレベルで考えた場合は、男の方が権力を握っているケースははるかに

多い。しかし、個人レベルで考えた場合は権力を持っている男ばかりではないし、そういう男に使われている男の方が圧倒的に多いはずだ。そして何よりも心理レベルで考えた場合は、日本は男性よりも女性の方が幸せ度は高いということは色々なところで言われてきたことなのである。なのに、「男社会ですよー」という言葉で、何もかも男に責任転嫁できると思っているのだろうか。

でも、高市早苗が首相になったことでフェミニストたちも、もう「男社会ですよー」という言い訳はできなくなるのである。女性が日本の最高権力者になったのだ。これまで日本は先進国の中ではジェンダーギャップ指数が大きいことが問題になっていた。しかし、彼女が総理になったことで、この指数は大きく狭まるに違いない。

いよいよ、女性から被害者の権力を奪還する時がやってきたのである。

2. 男性運動から締め出された男 25 年目の真実

最近の一番大きな出来事と言ったら、かつて男性運動に関わっていた時に差し替えられた原稿が復刻本になって出るということである。

あれはもう 25 年も前だ。俺はあの時、自分の気持ちをどうすることもできなくてどん底だった。俺は 34 歳の秋から 36 歳の秋にかけて、2 年間たっぷり男性運動に関わった。

最初のとっかかりは中村正さんの非暴力ワークだった。30 代から 40 代の男性ばかり

り 30 人くらい集まって、男同士で手を繋いだり、あれこれ語り合ったり、それで 3 時間ほど過ごした。

勉強になるところはたくさんあった。ただ、俺がイメージしていた男性運動とは違っていた。俺はパートナーもないし、DV なんてどうでもいいのだ。参加者のおじさんたちも普通のお父さんみたいな感じの人で俺とはタイプが違っていた。正さんのサイドにいた人も、古着屋でしか服を買わない、年収 100 万もない B さんだと、西成の労働者の C さんだと、俺が親しくなるようなタイプの人ではなかった。

その中に 1 人、50 ぐらいのおじさん (A さん) が混じっていて、この人はその中では紳士的な人だった。話の仕方もソフトで、ちゃんとていた。この人だったら、付き合えるかも知れない。そう思って、俺は男性グループに足を踏み入れることになったのだった。

そこで、俺はたまたま始動した雑誌のプロジェクトに関わった。俺はあの当時強迫神経症で、常に緊張していて、常に何かしていなくては心が落ち着かないような心理状態に落ち込んでいた。その強迫症がプロジェクトを進める上の起動力になったのだった。俺は会計役をすることになり、助成金をおろした。最初の頃は自分が尊重されていると言う感覚があって嬉しかったものだった。A さんやプロジェクトの知恵袋であった Y さんは俺よりも年上で、様々な勉強や経験を積んで来ている人だったので、あれこれ吸収できるものはたくさんあったのだった。

その一方で、プロジェクトに公募で集まった 30 人ほどのメンバーは次々に抜けてい

った。今思えば、あのプロジェクト自体が無茶だったのだ。いくつかのグループに分かれて、雑誌を細かく定量分析していくのだが、普通の人は続かない。大して楽しいわけでもないし、なんの報酬が出るわけでもない。ああいうプロジェクトは、大学にポジションのある先生が、自分のゼミの学生を使って、やっていくべきなのである。ゼミの学生たちだったら、先生の手前きちっとやってくれるだろう。しかし、ただ一般人で、大学関連者でもない人たちは、お互いに親しいわけでもないし、楽しくもないから、なんかかんかで抜けていくのだ。何らかの報酬が出るのならば話は別だが、作業をやらされた上にカンパ金まで払わされるわけだから、自分たちは利用されているみたいな気持ちにもなっていくのである。

班長だった人が、1人また1人と抜けていく。するとその分の皺寄せは全部俺に来ていた。負担はどんどん重くなった。しかし、あの頃、自分の居場所が欲しかった俺は、Aさんの期待に応えるべく、必死で頑張っていたのだった。

ところが、次第に違和感が生まれていった。明らかにその男性グループの人たちと俺とではジェンダーに対する考え方方が違っているのである。

また、Aさんはどんどん俺に対する要求をエスカレートさせていった。とりわけ、NHKのテレビに出された時は相當に怒った。俺は当時、精神状態がちゃんとしていなかったので、テレビは困ると言っていた。しかし、半ば騙されたような形で出されたのだ。あれは35歳の夏のことだった。

そしてその後秋になって、故郷の弟が突

然死んだ。俺はその時点でプロジェクトにアップアップだったのに、そこに追い打ちをかけるように弟が死ぬと言うことになり、ますますパニックに陥った。俺と弟は歳が離れていて、弟は20代の若さで死んだのだ。

しかし、これでAさんは俺に負担をかけてこないだろうと思っていた。こんな一大事の時に、いくらなんでもさらに負担を押し付けることはできなくなるだろうと思っていた。

ところが、である。Aさんは俺が弟の葬儀を終えて、関西に帰ってくるや否や、次はその男性グループの研究会で話をしてくれと要求してきた。「あなたはすぐに見返りを求めようとする。それを話すことで見つめ直せ」と言うのである。

俺はこの時は相当切れて、Aさんを叱りつけたものだ。Aさんは、それまでもどうにかして、俺をその研究会に出そうとしていた。しかし、俺はその研究会は嫌いだということはこれまで何度もAさんに訴えていたのである。

その研究会は個性の強い人ばかりで、行っても居心地が悪いし、むしろ疎外感を感じて、いたたまれなくなる。しかも時間帯が日曜日の午後なので、せっかくの日曜日が丸ごと潰れるということになるのである。しかし、Aさんは「あれは宿題が出ないから、ただ来て話せばいいのだから」となんとか俺に話をさせようとしていた。

これはだいぶ後になってわかったのだが、どうやら、Aさんは俺があの研究会を本気で嫌っていた理由がわかっていないかったのである。俺が最初に研究会に行ったとき、参加者の人同士の間でちょっとした喧

喧嘩が起きた。ある参加者の若い男性が、Bさんと今は大学教授になっているDさんに恨みを持っていたらしく、ちょっと険悪なムードになったのだった。

Aさんはおそらくその男性のせいで、俺が研究会を嫌いになったのだと思っていたみたいだった。だからもう一押しすれば俺が出るだろうと思っていたのである。

しかし、そうではなかったのだ。

俺があの研究会で嫌いだったのは、その男性ではなく、コアメンバーの1人であるCさんだった。Cさんは学生運動世代で、その前線で暴れていた人だった。そのため、悪気は無いのだろうが、ことあるごとに相手を吊し上げるようなものの言い方をするのである。

俺が今でも腹が立っているのは、当時参加していた非暴力のプロジェクトの話し合いの時に、「あなたは正しいとか間違っているという考えをするから」と吊し上げてこられたことだった。

その時点では、俺とCさんはほんの数回プロジェクトの席で一緒になっただけのことと、Cさんは俺のことなんて、ほとんど何も知らない。それを、まるで俺のことを知っているかのような言い方。しかも、喧嘩をするようなシチュエーションでも無いのに喧嘩をふっかけるような言い方。あれでは、闘争のための闘争なのである。

AさんはCさんよりも僅かに年上だし、Aさん自身も学生運動に絡んでいた人なので、ああいう言い方で他人を吊し上げることが当たり前の青春時代を送っていたのである。だから、ああいう言い方をされることが、学生運動が大嫌いの俺の心をいかに傷つけるかということにピンときていなか

ったのである。

その後、Aさんと俺との関係は徐々に崩れていった。あれこれ起きて、翌年の夏、どうにか男性雑誌のプロジェクトは冊子を出せたものの、Aさんと俺は大きな亀裂を起こして、お互いを憎しみ合うようになっていったのだった。そして、決定的な決裂が秋に起きた。俺は完全にグループから村八分にされることになったのだ。

それからしばらくは、それまでの2年間を消化できずに悶々とした日々が続いた。それで切羽詰まって、Bさんのところにメールした。ちょうどその頃、BさんもAさんとの確執に悩んでいた頃だった。

そして、37歳の6月頃、そのグループのミニコミの原稿を書いてくれないかとBさんからメールが来て、早速書いたところ、それをAさんが差し替えるという事件が起きたのだ。それも表紙に書かれた俺の名前の上を一本線で消すという酷い差し替え方だった。

当時通っていた女性のカウンセラーの先生からは、「訴えたらどうですか。こんな差し替えの仕方をされたら、國友さんが期限通りに出さなかったからだと思われますよ」と言われたものだった。弁護士の先生に相談したところ、載せなかつことは訴えることはできないけれど、傍線で名前を消したことは訴えられると言われた。

その男性グループでも、このことを巡って、緊急運営委員会が開かれた。そして、Aさんの方に非があるという結論にはなったと聞いている。でも、その後、誰も俺に謝罪のメールは送ってこなかった。Aさんが処分されたわけでもなかった。もちろん、一旦出したミニコミを今更回収するこ

ともできない。男女共同参画センターには俺の名前が一本線で消されたミニコミが今でも眠っているはずである。

あれでは、運営委員会を開いた意味がないのである。

これ以上、詳しいことはここでは書くことができない。この後、その男性グループの人からインタビューを受けることになっているので、そこで詳しいことは話そうと思っている。ただ、俺の身の潔白を示すために、はっきり言っておかなくてはならないことは、俺はAさん以外のグループの人と喧嘩した覚えはないし、俺の方の事情を話したこともないということだ。

あれから早いもので、四半世紀である。

今回、復刻本が出ると聞いて、俺は差し替えられなかった分のミニコミを持っていないので、その分を元に戻して、復刻本を出すことになったのだ。25年たって、ついに幻の原稿が日の目を見るのである。

前に『天才作家の妻 40年目の真実』という映画があったけれど、それに捩って言えば、「男性運動から締め出された男 25年目の真実」となる。

復刻本は11月に刊行予定なので、もし順調に行けば、この原稿がアップされる頃には、俺の幻の原稿は日の目を見ているだろう。やっと25年間のわだかまりがある程度は溶けるのである。

今はドキドキものだ。また何らかのハプニングが起きるのではないかという心配がよぎるのである。

3. やはりスポーツマンはいい。

最近になって、近所のマッサージのチェ

ーン店で気に入っている人ができるて、その人を指名していた。ところが、この数週間、その人を指名しようにもアプリに出てこなくなってしまっているのだ。

他の人にやってもらうことにして、その人のことをちょっと訊いてみた。するとその人は大阪の方のチェーン店にいるらしい。元々大阪の人で京都でもやってみたいというので来られていたみたいだ。

思えば、その人が勤めていらしたのはほんの数ヶ月なのである。だけど、俺のツボにハマる人だったので、ここ1ヶ月くらいは必ずその人を指名していた。他の人たちも俺がその人を気に入っていることはわかっていたみたいだった。

「じゃあ、もう京都は辞められたんですか」

「辞めるというのではないのかも知れないとしづらくなっていますね」とのことだった。

おそらくああいうチェーン店みたいなところは登録制でシフトを登録しておいて、そこで日程が上手くはまればやってくれるということなのだろう。

なんとなく寂しい気持ちになったものだ。

「あの人、細かいところがわかってくれる人だったんですよ」

「あの方は、元々サッカーのコーチかなつかしている人だったんですよ」

俺はそういう人が根っから好きなのかも知れない。前のマッサージの人はスポーツクラブのインストラクターで万能タイプだった。その前の東京に去って行かれた鍼灸の先生は、ラグビーをやっていた人だった。そして、その前のタイマッサージの人

は柔道かなんかの人だった。

マッチョな男の人に体を癒してもらうと俺もマッチョになったような気持ちになるのだった。

11月、ほぼ1ヶ月以上ぶりにボクシングのジムに行った。トレーナーの元教え子が仕事が忙しくて、1ヶ月ほど間が空いてしまったのである。

久しぶりのボクシング。その日は他のお客様さんが来ていなかったので、俺は上半身裸になって1時間ほどトレーニングした。俺は自分が上半身裸になつたりするのが似合わないタイプだと思っていたので、子供の頃、それを強制されるのが嫌だったし、そういう欲望を抑えていたのである。

しかし、俺は、根はこういう体育会的なことをするのが好きな性分なのだろう。1時間ほど、上裸のまま、教え子にトレーニングしてもらい、その姿を彼のお兄さんが動画に撮ってくれた。楽しかった。

この動画をインスタに上げようかと思ったが、まだそこまではできない。インスタにあげるとしたら、女の子にも俺の裸を見られることになるからだ。そこまでは自信がないのである。でも、いつか堂々と上半身裸の写真をアップすることができる日が来ればいいなあと思っている。俺はやはりマッチョになりたいのだった！！！

4.『マネーボール』(ベネット・ミラー監督・2011)

ブラッド・ピット主演の実話に基づく野球映画である。

と言っても、現役の野球選手を描くものではない。プロ野球を引退した40代くらい

の男が、プロ野球の古色蒼然としたやり方を変革していこうとする話である。そして、彼の相棒となるのがジョナ・ヒル演じる、頭脳派の若い男ということになっている。

ジョナ・ヒルと言えば、太ったコメディアンで、こういう真面目な映画に出ることは滅多にない。でも、彼をあえて起用したところがこの映画の味噌なのである。

彼は一見しただけでも、野球選手タイプの人には見えない。むしろ運動神経が鈍そうで、実際この映画でもオタク系で、自分は野球経験はないけれど、野球を統計的に分析する能力には長けている人物という設定になっている。

これは実話だから仕方がない面もあるが、やはり、オタク系の鈍そうなやつはスポーツマンにはなれないんだと思って悲しくなったものだった。スポーツ問題は男性にとってはものすごく大きい。男性の場合は、まずその部分で値踏みされる。いくら勉強ができるても、運動神経ゼロのやつは主役にはなれない。三軍の男というレッテルを貼られる。

かつての俺はまさしくそういうタイプだった。この歳になってやっと上半身裸になって、トレーニングしても、周りの人から揶揄われないようなふうになってきたのである。

しかし、もう遅い。今頃になって、男として認められても、十分、自分の男の部分を楽しむことはできないのである。

スポーツ問題に取り組む。これから俺の就活はスポーツ映画と男性ジェンダーになりそうである。

役場の対人援助論

(53)

岡崎 正明

(広島市)

発表！役場の対人援助論的、要注意ワードランキング

②

さてさてお待ちどうさまでした（誰が？）。

今回の「役場の対人援助論」は、前回の第一弾に続き、「役場の対人援助論的、要注意ワードランキング」の残り 3 つを発表することとしたい。前回も述べたが、これらの言葉は私が対人援助の場でよく使うけれど、使い方に細心の配慮がいるなあ～と個人的に思う、“取扱注意” な言葉たちである。

第3位：反省

役場の対人援助職というのは、どうしても法律を根拠に働く場面が多くなる。「行政」という、法律を正しく執行するべき役割である以上、それは宿命的なものだ。そして法律を執行する側というのは「二権力を持って行使する側」ということであり、そこではただの「支援する側と受ける側」という関係だけでなく、「権力側と被権力側」という構図が生まれる。

特に児童虐待や高齢者虐待、障害者虐待、非行問題や依存症支援の現場などでは、支援を受ける側やその家族に、法的・倫理的な違反や問題行動があることが多い。そういう中で私たち支援者は、ルール違反や問題行動の再発をなんとか防ぎたい、止めたいと関わることになる。

そこでよく扱うことになるのが、この「反省」という言葉である。

「父親は今回のことへの暴力を『大変反省』しており…」「本人は万引きについて『深く反省』し、もうしないと述べ…」こんな記録や報告文を見ることがあるのだが、私はちょっとモヤモヤしてしまう。もちろん書いている方は相手との会話や態度などからそういう印象を感じ、素直に書いたのだと思う。私自身も現場でそんな風に感じる対象者に出会うことはあるし、新人時代は似たような報告を上司にしていたものだ。だから全然責めるつもりはないのだが、でもやはりちょっとこの言葉の使い方は危ういと思うので、

思わず「うん。分かるんだけど・・・。ただ“反省”って相手の心の中のこと、見えないじゃん？」と、訂正を入れてしまう。より正しく言うなら「本人は涙を流して謝罪するなど、反省の態度を見せ…」とか、「『ケガをさせたことは反省している』と父親は述べていた…」にしたほうがいいんじゃ?と。

長年矯正教育の現場を見てきた、臨床教育学者の岡本茂樹氏の著書『反省させると犯罪者になります』(新潮社)は、35万部以上売れたベストセラーだ。その中で岡本氏は、加害者にすぐ反省を求める、反省したフリばかり身に付けることになり、本当の反省につながらない。まずは「被害者の心情を考えさせない」「反省は求めない」「加害者の視点で考えさせる」方が、実はずっと効果的だと述べている。なるほど、と納得する内容が書かれた良書だが、個人的には加害者の心性について理解が深まる上に、私たち周囲や社会の“クセ”についても、鋭い示唆を与えている本だと思う。

こどもや高齢者、障害者などの弱い立場の相手にひどい行為をする。物を盗ったり誰かを傷付けたり、過度なギャンブルや飲酒で周囲に迷惑をかける…。そんな人に会うと、私たちはつい「なんて奴だ!」「自分のやったことが分かっているのか?」「どれだけ迷惑かけてると思ってるのか!」という心持ちになる。それは普通の反応だろう。だが支援者としてその態度にひっぱられることは、大変危険だ。なぜなら相手はそういう態度に敏感に反応しがちで、ある者は反発的になって支援を受け入れなくなるかもしれないし、またある者は、上手に反省のフリだけをして、その場をやり過ごしてしまうかもしれない。それは結果として効果的な支援(=再発防止)につながらないことを意味する。

まずいことをした本人が、「泣く」「自分の非を認める発言をする」「俯き加減に申し訳なさそうに語る」「謝る」「再発防止を誓う」・・・。おそらく私たちの社会は、自然にそんなものを求めるクセがある。だからそういう態度が表面上でも示されると「お! 反省しているんだな」と思ってしまいがちである。だがその態度だけで相手の反省の度合いを測ったり、再発防止の成否を論じることは、あまり正確ではないかもしれない。現場に長くいると、そんなことを感じる。

最近思うことは、真の反省というのは、後悔→懲悔→決心といった過程を経て形成される、なかなかに息の長いプロセスなのではないかということだ。ここで私がいう「後悔」とは、自分のやったことを振り返り「やるんじゃなかった」「やめときやよかったです」と悔いることで、どちらかというと「自分寄りな思考」である。自分が損をする、窮地に立たされる。そういう自身の身を守りたい心性がまず働くのは、生き物として当然だろう。

その次に出てくるのが「懲悔」で、自分の行いで相手や周囲にどんな痛みがあったかを想像・共感し、「申し訳なかった」と心から思い謝ろうとする、こちらは「相手寄りな思考」である。そしてその双方ができた上で、「もう繰り返したくない」「やらない!」という「決心」が芽生えてくる。だが、そう思いながらも自信が無くなったり、開き直りくなったり、不安に陥りそうになりながら、それでも自らを律していくと前を向く態度。それが本当の意味での「反省」なのではないだろうか。ヒヨエ~、我ながら考えただけでも大変な作業だ。

そういうわけで反省って、簡単には扱えない言葉だなあ、難しいなあと感じている。

第2位：虐待

この言葉が「あまり好きではない」という感覚は、結構共感してもらえると思う。それくらい良い響きの言葉ではないし、「戦争」とか「差別」といった言葉同様、正直あまり

聞きたくない言葉だろう。1位でもいいくらいだ。

しかし現在の福祉の現場において、残念ながらこの言葉が登場する場面はわりとあって、特に私が今いる児童福祉の分野では、日頃から使わないわけにはいかない言葉である。ご存じのとおり、児童虐待の相談件数は毎年過去最多を更新しているし、相変わらず死亡事件などがあるとニュースでセンセーショナルに取り上げられたりしている。

児童虐待防止法という法律では、虐待の定義は、身体的虐待・心理的虐待・性的虐待・ネグレクト（養育の放棄）という四種類であり、保護者など児童を監護している者による、比較的広範囲な行為を指すことになっている。例えば身体的虐待については、「児童の身体に外傷が生じ、又は生じるおそれのある暴行を加えること」とされているので、叩いたり蹴ったりはもちろん、つねったり物を投げたり、仮にケガをしなくても、ケガをさせる可能性のある行為は、法的には「虐待」という認定になる。他にも、子どもの前で大人同士が暴力やひどい暴言を伴う喧嘩をしても、それは「面前DV」ということで、心理的虐待の範疇となる。

それが子どもにとって良いことではないと誰もが思うし、私自身もその定義に異論を挟むつもりはない。ただやはり、一般の人の感覚からすると、「虐待」という言葉は相当に強い表現であり、例えば熱湯を浴びせるとか、凶器で殴打するとか、かなりひどい行為を指す印象があるようと思う。だからお母さんが子どものお尻を平手で1回叩いたとか、お父さんがゲンコツで頭を1発叩いたといった行為に、真正面から「それは虐待ですよ！」というと、「そんなにひどいことはしていない！」などと結構な反発を受けることになる。この法律用語と一般名詞としての虐待という言葉の使われ方の差が、なかなかに厄介な問題をはらんでいるように思う。

もちろん子どもの安心安全を守り、子どもの福祉の向上を責務とする立場から、保護者の言い分に「そうですよね。しつけの範囲ですよね！」と同調するわけにはいかないが、かといって全面的に対立すればいいというものでもない。私たちが「いいえ！それは虐待で違法行為ですから、即刻やめなさい！」と言えば、相手が「分かりました！」「ハハー！」と、水戸黄門の印籠を見せられた悪代官のようにひれ伏し、言うことを聞いてくれるのであれば構わないと、現実は大抵そんなことにはならない。

むしろ保護者との対立が深まってしまうと、支援拒否や虐待リスクの上昇が心配され、問題解決が遠のいてしまうことがある。虐待が起こる家庭の保護者は、自分から助けを求められないものの、実は子育てや生活に困っているという人が多い。私たち児童福祉の支援者の仕事は、悪い保護者を摘発・処罰して子どもを守る、という趣旨のものではなく、不適切な養育になるほどの困難を抱えた家族に介入・支援を入れ、子どもの権利侵害を防ぐことを目指すものであり、そういう意味で保護者もまた支援の対象者であり、子どもの安心安全を作っていくために欠かせない存在なのだ。「虐待」という言葉は、その支援者との関りを作る上で、なかなかの障害になってしまうことがある、要注意ワードなのである。なんでもオートマチックに「虐待ですよー」とやることも問題をこじらせるし、かといって虐待という言葉を避けすぎて、「お父さんもよかれと思ってだよね」「お母さんも困ってたんですね」だけで終わらせてしまうと、子どもの安全が守れない事態になってしまふおそれもあるため、使い方が結構難しい、劇薬のようなところがある。

そんなことを感じるのは私だけではないようで、子ども家庭庁では「体罰によらない子育て」というリーフレットを作ったり、虐待が脳に与える影響の研究で有名な、福井大の友田明美さんは「マルトリ预防」という言い方をしたり（マルトリニマルトリートメントで、「子どもの健全な発育を妨げる不適切な養育」という意味）と、いろいろな工夫がされているが、残念ながら広く一般に普及するところまではいっていない印象だ。「虐待」という強い表現までするのは気が引けるが、社会として啓発すべき不適切な養育状況。

それをどんな言葉で表現したらいいのか。まだズバッとハマる言葉は私の中でも見つかっていないが、最近結構いい線いっているのでは？と感じるのが「境界やぶり」という言葉で、性的虐待や暴言のほか、金銭持ち出しなど子どもの問題行動にも使える、汎用性の高さが良いな～と思っている。でも2025年11月の現時点では、ネットで「境界やぶり」を検索しても、今のところ土地の境界の話しか出てこないので、まだまだ普及には時間がかかる感じである。

第1位：指導

そしてなんとなんと。栄えある？第1位がこの「指導」という言葉である。「なんだよ～。そんな言葉？」と思われるかもしれないが、いやいや。なかなかどうして。この指導という言葉は、よく使わざるを得ない上に、正直厄介だなあ～と思う言葉なのである。

指導という言葉の意味を調べると「1. ある目的・方向に向かって教え導くこと。2. 柔道の試合で、選手の軽微な違反行為に対する宣告。4回受けると反則負け」といった説明が出てくる。2番目の柔道の話はさておき、1番目の方は概ね納得できるイメージだと思う。教育現場で先生から生徒へ指導がされる。スポーツの世界でコーチから選手に指導する。熟練の演出家が若手俳優の演技指導をする。そんな感じで、「指導」という言葉は、年齢・経験・技術・知識などが上位のポジションにある者から、下位のポジションにある者への教育や啓発、指南や指示といったものをイメージしやすいだろう。

これがさらに行政や医療の現場で使われるとどうか。公務員や医師からの指導というのは、逆らうとダメな根拠（法律とか健康への影響など）がありそうで、なんとなく従わないといけない感じがするし、どこか「冷たい」「事務的」「手厳しい」「容赦ない」といった印象がないだろうか？

実際の「行政指導」や「医師の指導」という言葉は、実は法的な拘束力はなく、逆らっても罰せられたりはしない。あくまで相手との協力を前提とした「お願い」や「助言」なのだが、権力や権威がある相手に指導と言われると、どうしても構えてしまいやすい。さらにこれが前出の虐待の現場などになると、そもそも助けて！教えて！と自ら相談したわけではない人も多いため、

「はあ？指導？なんでそんな上から言われないといけないの？」

「頼んでないわ！」

という反発や抵抗が強くなってしまい、関係を構築するのに非常に困難をきたすことになる。このあたりが、指導という言葉が要注意だと思う理由のひとつだったりする。

さらに私自身、相手を「指導」できる資格があるのか？正直自信がないというのが本音だ。さきほどのリクツでいくと、私たち子育て支援に関わる者は、相手（保護者や親）より子育てや躾の技術や知識が上位で、“達人”でなければならないということになるが、そんな判定はたして誰ができるだろう。そういう疑問が常にある。

だが役場の対人援助業務の中では、行政指導にあたる対応をしなければならないこともあります、あるいは若手にそういう指示をすることもある。それが現実だ。若い職員がその指示をストレートに履行しようとして、効果も見極めずに相手に「ダメです」「やめてください」なんて対応をする場面に出会ってしまうと、「確かに私が言ったんだけどね…」と、モヤモヤしてしまうこともある。

また、役場の対人援助現場でよく議論となるのが、「指導」と「支援」の役割を、誰がどう担うのか？ということである。さきほどから述べている様々な虐待問題や法的・倫理的不適切状態、セルフネグレクトなどの場面においては、生命身体の保護や実効性の

確保といった事情により、支援よりも指導を優先する関りが求められることになる。そしてその役回りは、基本的に権限のある側に求められることが多い。例えば高齢者虐待の現場なら、民間の介護事業所やケアマネジャーよりも、行政の委託を受けた地域包括支援センター、さらには行政本体である福祉事務所に。児童虐待の現場であれば、子ども食堂をしている民間のNPOや児童家庭センターよりも、福祉事務所の子ども家庭総合支援拠点、さらには児童相談所へ…。より法的権限を持った機関が、指導的役割を担うことになるのだが、その中で援助職や関係機関は葛藤にさらされることになる。

「だいぶ心配だけど、信頼関係も大事だし…」

「まだ支援的な関りでやれるのでは…いや、もう限界？」

「指導的に介入したら逆効果にならないか？でもほかに打開策はないか…」

「なぜ法的権限を持った機関はもっと積極的に動かないの？」

「支援アプローチに工夫が足りないんじゃ？指導的な対応はまだ早計だ！」

関わる人間・機関の間で、そんな疑問や想い、感情が渦巻き、ときには迷いや対立・衝突を生むことになる。これもまた、「指導」という言葉が生み出す現象のような気がする。

そしてよくよく考えると、こういう援助者間の対立が強くなる時というのは、互いに相手に対して「傾聴し、受け止める」支援的態度が薄まり、「(こちらが正しいと信じる)ある方向に導こうとする」指導的態度が濃くなっている。まさしく、援助職と対象者の間で起きている関係性が、援助職間で再演されているのである。

最近個人的に大変興味を持っているTIC(トラウマ・インフォームド・ケア)の視点も踏まえると、「指導」という言葉を取り巻く周辺がそんな風に見えてきて、あらためてその取扱いの難しさを感じる。やはり、まずは相手の話を聴き、受け止め、寄り添う姿勢で向き合う。なんだかんだいっても、結局そこから始めるしかないのだと思っている。

臨床のきれはし SHEET31

浅田 英輔

Developmental Disability

講師を頼まれるものの中に、「発達障害の人への接し方について講義してほしい」というものがある。中身はいろいろ工夫するが、タイトルを聞くといつもなんかあと思う。

発達障害という言葉もだいぶ認知されており、聴いたことがないという人はほとんどいないだろう。でも、「発達障害=困った人」ととらえられることもあるたり、逆に「困るやつはみんな発達障害だ」となっていたりするようにも思える。

自閉症や学習障害、AD/HDなどの診断名は聞いたことがあると思う。この3つだけでもかなり違うだが、「スペクトラム」という言葉で表されるように、連続体であり、コミュニケーション能力の問題が大きい人、多動の問題が大きい人、感覚の問題が大きい人など、個々の状態像はかなり違っている。

何を言いたいかというと、「発達障害の人への接し方」なんものは、「日本人への接し方」と同じくらいの幅広い意味を持つてしまうということである。日本人全てに当てはまる適切な接し方なんものはない。例えば、「典型的な自閉症像」はある。「AD/HDの人がやりやすい失敗」もある。でも、「発達障害の人に適切な対応方法」なんものはどこにもないのである。

「視覚障害の人の世界」や「聴覚障害の人の見え方」はまだわかる。それでも、全く見えない人、明暗は見える人、かなり視力は低いが近づけばわかる人などそれぞれの生活の仕方は違っているだろう。それをいつしょくたにしてしまうのは少々乱暴なのではないだろうか。

同じ問題として、「うつの人への接し方」「ひきこもりへの対応」「不登校児への対応」なんかも似ている。「うつになった人」はみんな同じなのだろうか。あなたがうつになったときに、「うつの人にはこういう接し方をしろって本で読んだから」という接し方をされるとどうだろうか。腹が立つのではないか。「不登校になるとみんな同じ考え方を持つ」なんてことはないだろう。

結局、「その人に合った適切な方法で接しましよう」ということに他ならないのである。自閉症だろうが AD/HD だろうが、その人がいやなかかわりかたはいやなかかわりかたでしかないし、どういう接し方がぴったりくるかは、その人と接してみないとわからないのだ。

ひきこもりへの対応として「引き出し屋」(屈強な男性が無理やり連れだし、"矯正施設"などで生活させる)が問題となつたが、これもひきこもりのとらえ方が一面的であることの影響と思われる。「いま引きこもっているその人」であり、決して「ひきこもりの人」ではないのだ。

もちろん、ひきこもりや発達障害の特性で苦しんでいる人など、課題が大きい人たちには被害的になつてしたり、言葉に敏感になつてたりはする。「バカだなあ」なんていう健康なときにはなんとも思わないような軽口でも「自分をバカにした」と思つてしまつたり、「見捨てられた」と思うことはあるだろう。でもそれにしても、「発達障害だから」ではなく、「孤立してしまつて過敏になつているから」という説明もできるだろう。

発達障害を理解するのに、「自閉症の特徴」「AD/HD の特徴」などを学ぶのは決して悪いことではない。「引きこもりの人はこう考えがち」というものもあるだろう。目が見えない人の世界のとらえ方はこういうものらしいとか、車いすで生活する人の困りごとは体験してみるとわかるところはあるだろう。多動で落着きがないのは、「コントロールするのが難しいらしい」という知識を持つておくことは必要だろう。

だからといって、「その人」を見ずに状態像の特徴だけで接すると、必ずうまくいかない。状態像だけみていると、「その人自身をみること」が抜け落ち、表面的な接し方になってしまふ。

管理職の人に「部下が発達障害のようなだが、どう接すればよいのか」と聞かれて、専門職として端的な返答は「しらんがな」である(そんなことは言わないけど)。その部下がどういう人で、どういう場面で管理職が困って、どういう事態が起きてしまっているのか、それについてどういう対処をしてきたのかなどを聞かなければならない。「発達障害なんですね、こうすればいいですよ」「AD/HD なんですね、ならこうしましょう」なんていう答えはないのだ。結局のところ、細かい話を聞かなければならぬし、その人がどう考えてその困った行動を起こしているのかわからなければならぬのだ。よく聞いていくと、発達障害だからどうこうなのではなく、その上司と部下の関係性が課題だったりもする。

「うつになって休職していた部下が復帰するのだが、どう接すればいいのか」も同じことだとわかるだろう。「うつから復帰した人にはがんばらせちゃだめだから、簡単な仕事からやらせましょう」なんていう答えは、その人を馬鹿にしているだけと言ってもいいだろう。どういう仕事をしていてどういう状況でダウンしてしまったのか、どの人とどういう関係性なのか、仕事の内容はどれがどうなのか、そもそも本人はどういっているのか、などなど、いわば「全部ケースバイケース」なのである。

「不登校だった不登校支援者」「うつだったカウンセラー」なども同じ問題をはらんでいる。「私は不登校だったから、不登校の子の気持ちがわかる」ことを前面に出してはいけない。なぜなら、不登校の状況はみんな違うからである。当然、「不登校のときの気持ち」もみんな違う。安易に「僕も不登校だったからわかるよ」なんてことはないのだ。「うつになつたら全員が同じ気持ちになる」わけではないのだ。もちろん、「そう思っちゃうよね、わかるわかる」と共感できるところなんかはうまく活かせばいいのだが、全面的に理解できるなんてことはない。それは傲慢であり、相手に失礼である。

心理職の初学者が「あなたはそう思うんですね」と教科書通りの対応をしたら「バカにしてるのか」と思われるのも同じ理屈である(私も憤慨されたことがある)。確かに教科書にはそう書いてあるが、その人を見ずに「クライエント」「患者」としか見ていない場合はそうなるのは当然なのである。ネットに『カウンセラーと話していく、「あなたはそう思うんですね」とかの共感モードになられるバカにされている気がする』みたいな書き込みがあった。「共感モード」は大事であることが多いが、相手に合っていないと、怒るのも当然なのである。傾聴って、きちんと聞く技術を身につけ、相手に興味を持ち、相手に向かい合う姿勢をもたなければならないなど、結構難しいものなのである。

カウンセリング場面では顕著であるが、それ以外の広い意味での対人援助場面において、「学んだ知識」を先に持ってくると、たいていは相手を軽んじることになってしまう。まずはきちんとその人の話を聞かなければならぬ。

対人援助場面ではとしたが、一般的な対人関係でも同じである。あなたの仲のよい友人にも、発達の偏りがある人はいるだろう。その人に対して、「こいつはそそっかしいからなー、ここでフォローが必要かもなー」と思うことはあっても、「発達障害だから適切な対応が必要だろう」と思うことはないだろう。

Sheet28 でも書いているが、対人援助職の役割は診断することではなく、その人に適切な支援をみつけることなのだ。診断名は大事だが、診断することは目的ではない。

啓発するときに、ことさらに「発達障害を知ってもらおう」とすることは、分断を進めることになっていないだろうか。最近は、障害や特性がどんどん細分化していっている。特徴を捉えるために大事だという側面はもちろんあるのだが、「障害ごとに別々の支援制度を作らなければならない」となると、「あの障害はこの制度があるのにこの障害はないのか」とか、「こっちの障害は軽くみえるけど、とても困っている人がいるのだ」とか、障害の大変さ自慢になってしまっているのではないだろうか。

知的能力の低い自閉症の人たちは、一人で生活していくことはなかなか難しいだろう。じゃあ、知的に高い自閉症の人のはうが「障害が軽い」といえるのか？アスペルガーの人の中にも、課題を抱えながらも社会で仕事をしながら生きている人もいる。なかなか仕事が続かなくて、障害者制度をたくさん活用している人もいる。

制度も障害理解も大事なのだが、「その人のことをちゃんと考える」という姿勢を一番大事にしていきたい。

発達検査と対人援助学

㉗ AIの問い合わせから考える発達相談 その2

大谷多加志

前号では Microsoft の AI である Copilot に『現代の幼児期の発達障害のアセスメントに関する課題点を挙げ、それらに対する改善の方針を、①わずかな改善につながる水準、②具体的改善につながる水準、③中長期的、組織的に取り組むメタレベルの水準でそれぞれ提案してください。』とお願いし、前回は①の「わずかな改善につながる水準」

に対して生成された回答について論じてみました。今回はその続きで、②「具体的改善につながる水準」で生成された答え（なぜか“問い合わせ”になって返ってきましたが）について論じてみようと思います。生成された問いは以下の3つです。なお、文中に出てくる KSPD2020 という語は、新版 K式発達検査 2020 の略称です。

💡 具体的・研究的な問い合わせ(検査の妥当性・活用方法に関する疑問)

- KSPD2020 の得点は、他の発達検査（例：WISC、MSEL）とどの程度相関するか？
→ 交差的妥当性の検証。
- KSPD2020 の領域別得点（姿勢・運動、認知・適応、言語・社会）から、支援ニーズの予測は可能か？
→ アセスメント結果と支援計画の接続可能性。
- KSPD2020 の得点変化は、療育・教育的介入の効果指標として有効か？
→ 介入研究におけるアウトカム指標としての妥当性。

1. KSPD2020 の得点は、他の発達検査とどの程度相関するか？

まずは他の検査との相関についての問い合わせです。この問い合わせは現場で検査を使っている方からも問われることがあります。AI が生成した内容には若干怪しいものが含まれたりすると言いますが、今回の問い合わせで言えば、まず MSEL という検査には聞き覚えがない

です。また、KSPD2020 の得点と書かれていますが、K式に限らずほとんどの検査は得点(粗点)を発達指数などに換算して検査結果を示します。そのため、検査結果と言えば指数を表すことがほとんどなので、ここも若干の違和感があります。本稿では、AI の問い合わせにおける「得点」は、おそらく「指数」のことを指しているのだろうと仮定し、ここからの議論を進めていきます（最近では

指標得点など、言い方が異なる場合もありますが、ここでは指数で統一します)。

さて、KSPD2020 と他の検査の相関についてですが、これについては「ある程度の相関はある(おそらく)」と考えられます。相関のデータを取るには、同じ人に 2 種類の検査を実施しその関連を確認する必要があるため、データ収集の労力が大きく、十分なデータ数が揃っていない部分もあるのですが、例えば WAIS-3 との相関については調査が行われており、KSPD2020 の解説書に結果が示されています(K 式発達検査研究会, 2020)。

問い合わせに対する答えは「多分ある」になるのですが、おそらくこの問い合わせに本当の意味で答えるためには、問い合わせの背後にある疑問やニーズに焦点を当てる必要があると思われます。つまり、背景には『仮に他の検査を実施した場合、K 式の検査結果とほぼ同等の結果になると見てよいのか』『K 式と他の検査とで結果の食い違いが生じた場合、どのように考えればよいのか』という問い合わせがあるのではないかでしょうか。では次のこの 2 つの問い合わせてみようと思います。大前提として、実は“相関関係がある”からと言って、直ちに双方の検査でほぼ同等の結果が出ることが保証されるわけではありません。相関関係でよく例に挙げられる「身長と体重」を題材にして考えていましょう。身長と体重には相関関係が認められ、相関係数としては .70 程度の強い相関があるとされています(相関係数は 0-1 の数値を取り、1 が最も大きいです)。身長が高い人ほど、体重も重い傾向にあるというのは、一般論として納得できるところだと思います。一方で、「身長 180cm」という情報だけで、そ

の人の体重を言い当てることは難しいでしょう。おおよそあたりはつけられるかもしれません、予測が当たる時もあれば、大きく外れることもあるはずです。.70 という非常に高い相関関係がある場合でさえ予測には限界があるわけですが、一般に検査同士の相関は弱い相関 (.30 程度) や、中程度の相関 (.50 程度) に留まる場合がほとんどです。つまり結論としては、K 式と他の検査との間には相関関係があり、ある程度近似した結果が出る傾向は認められるが、必ずしも同一の結果になるとは限らない、ということになります。

では、もう一つの問い合わせてみてましょう。検査によって結果に違いが生じた場合、それはどのように考えればよいのでしょうか。この時「どちらの数値が正しいのか？」と、いずれかの数値が真の値で、一方が誤りの値と考えられてしまう傾向がありますが、個人的には「どちらも子どものある側面については正しくとらえた数値」と考える方が子どもの実態の理解につながるように感じています。

例えば、K 式の特徴のひとつに『検査課題の実施順序に定めがない』というものがあります。一般に、客観性を確保することを考えれば、検査の実施順序という変数は統制しておくに越したことではなく、実際、他の検査では決まっていることが多いです。K 式は 1 歳児など、こちらの枠に乗ってくれると限らない年齢の子どもも対象としていることから、子どもに合わせて柔軟に対応できるように実施順序には規定が設けられていません。検査結果に対して、この特徴がプラスに働く可能性があります。また検査課題の数も多いため、目先が変わって

常に新鮮味が感じられることが子どもの注意持続に奏功するケースもあるでしょう。一方で、反対にウェクスラー式の検査のように、実施順序が決まっており、検査項目数も限定期の方が適応しやすい子どももいます。つまり、『子どもの個性×検査の特徴』によって、多少なりとも結果に影響が生じる可能性があり、それが極端なケースではある程度大きな数値的な結果の違いにつながる場合もありうるということになります。

2. 『KSPD2020 の領域別得点から、支援ニーズの予測は可能か?』

では次の問い合わせである『領域別の検査結果から支援ニーズの予測は可能かどうか』についても考えてみましょう。これに対する回答は面白みも何もないですが、『予測できる部分もあるし、予測できない部分もある』というところでしょうか。例えば、言語・社会領域の発達指数が相対的に低ければ、言語発達やコミュニケーション場面における困難が予測されます。『先生の指示理解に困難があり、活動の導入でつまずく』、『友達とのコミュニケーションで行き違いが生じ、トラブルが起こる』などの支援ニーズが生じる可能性が考えられるでしょう（あくまでも可能性です）。また、認知・適応領域の発達指数が相対的に低ければ、お絵描きや工作などの手作業の場面で、苦手さが表面化したり、うまくできないことが自信の喪失などの二次的な問題につながり、支援を要するケースが出てくることも考えられます。

反対に、数値的な結果では大きな問題はなさそうなのに、現場では支援ニーズがあ

る、というケースもあります。つまり、検査の数値的な結果と支援ニーズが直結しないケースです。検査場面は基本的に大人と一対一の場面で、かつ子どものペースや関心に応じて課題が進められていきます。このような個別的対応の状況ではうまく適応できる子どもであっても、集団場面にうまく適応できるかどうかはまた別の話です。集団場面では『大人1人と子ども複数』という状況や『子ども同士のやりとり』『たくさんの子ども（集団）と自分とのやりとり』など多様な関係性の中でコミュニケーションを取り、活動していくことが求められます。このような違いから、集団場面ではコミュニケーションの苦手さが顕在化する場合もあります。

また、自閉スペクトラム症の診断は、（知能検査などで測定される）知的発達の水準とは独立して、自閉スペクトラム症の特徴を評価し診断することになっています。つまり、特に自閉スペクトラム症などの特徴でもあるコミュニケーションの問題は、検査の数値的な結果に必ずしも反映されるわけではないということです。このようなケースでは、当然ながら検査結果から子どもの支援ニーズを予測しきることは難しいでしょう。

また、極端な話で言えば、一般的に発達検査の受検に至るケースというのは、日常の生活場面において何らかの支援ニーズが顕在化している場合がほとんどです。検査から『このような場面での支援ニーズがあると考えられます！』と言っても、既にそれはみんな知っていて、だから相談に来た…ということもあるわけで、『検査結果⇒支援ニーズ』のつながりを探ることは、それほど優

先度が高いわけでもないかもしれません。

3.『KSPD2020 の得点変化は、療育・教育的介入の効果指標として有効か?』

これは何度も重ねられてきた問い合わせですが、答えとしては『療育や教育的介入の効果指標としては、基本的にあまり向いていない』と考えられます。

理由はいくつかあります。ひとつは、必ずしも発達的变化が数値に反映されるとは限らないからです。発達検査は、その特性上、検査課題を達成できるか否かによって数値的な結果が左右されます。つまり、どうしても「スキル」としての側面で評価される部分が大きくなるわけです。子どもの持つ特性や障害によっても事情は異なりますが、時にはどのような療育や教育的関わりによっても、スキルの部分には顕著な変化が生じにくいケースもあります。では、そのようなケースでは、療育は無意味で効果が無いのかと言われれば、それは違うと明言できます。療育的な関わりの中で、子どもが自信を育み、自分なりのペースでスキルを伸ばし、意欲や関心を広げ、そして必要に応じて適切に援助を求めながら活動していくように変化することは、非常に大きな成長であり、療育の成果と言ってよいと思います。このように子どもの様子からは明確な変化が観察される場合でも、検査上の数値的な変化は限定的な場合もあるわけですが、これは『療育の成果がない』ということを意味するのではなく、検査の指数が効果指標として機能していないからであると考えた方が適当だと思います。

一方で、一部の療育事業所などで検査の指數を効果指標として利用し、事業所の取り組みの有効性のアピールに使っているケースも散見されます。個人的には、こういう事業所はあまり信用しない方がよいと思います。半世紀以上昔から言われていることですが、検査の数値を上げるだけであれば、検査課題と似たような活動を繰り返し練習することで、数値を上げること自体は可能です。ただしこれは必ずしも子どもの発達の伸びを意味するわけはありません。

『介入前の発達評価⇒療育・教育的介入⇒介入後の発達評価』という流れによって効果を検証しようという発想自体は自然なものですが。一方で上記の限界を考慮すれば、効果測定への利用については慎重である必要があるでしょう。

以上、今回はAIが生成した【具体的・研究的な問い合わせ(検査の妥当性・活用方法に関する疑問)】に関する回答について考えてみました。次回は最後の【中長期的、組織的に取り組むメタレベルの水準】で生成された回答について考えてみようと思います。

文献

新版K式発達検査研究会 (2020), 新版K式発達検査 2020 解説書(理論と解釈). 京都国際社会福祉センター.

講演会＆ライブな日々④

古川 秀明

『般若心経とオープンダイローグ 4』

「死ぬのが怖い」「死んだらどうなる?」「宇宙の果てには何がある?」「何で僕はここにいて、この先どうなる?」

こんなことを寝る時に考え出すので、不安の恐怖で全く眠れませんでした。

息が苦しくなり、胸がドキドキして、冷や汗が出てくる。

恐怖のあまり両親を起こすと、ひどく機嫌が悪くなる。

ひとりで眠れない夜と戦わなくてはならない。

大人の不眠症は辛い、しかし子どもの不眠症はもっと辛いです。

生まれてまだ十年くらいしか生きていないので、世の中を上手く把握できません。

夜中に起きているのは世界中で自分だけだという妄想に憑りつかれます。

窓の外の月を見ていると、なんだか鬼か悪魔の顔に見えてきます。

今にもマグマ大使に出てくるゴアにたいな怖い悪者が出てきそうに思います。

あまりの恐怖に父の腕に咬みつくと、父は「いた～、なにすんねん！」と飛び起きました。

その声に他の家族もびっくりして起きだし、茶の間に集合しました。

みんな私が死ぬのを怖がって眠れないのを知っていましたが、夜中に起こされることに少なからず怒りを覚えていました。

私の歯形のついた右腕をさすりながら、父は明日から私を兄や姉のいる部屋で寝かせようと提案しました。

睡眠不足になると仕事に支障が出るので、そうするしかないと言う意見にまとまりかけました。

しかしその提案に姉と兄が反対しました。

自分たちも学校があるから、夜中起こされるのはしんどい…。

例え、姉と兄が賛成しても私に行く気はありませんでした。

もし悪者が来たら、兄と姉ではいささか頼りないので。

困り果てた時に姉がある提案をしました。

「これはきっと夜泣きに違いない。夜泣きにはひやきおーがんを飲ませれば良いのではないか？」

翌日、母はさっそくひやきおーがんを買ってきました。

そして、「赤ちゃんに飲ませる薬だろうけど、もう大きくなったので、たくさん飲ませよう」

という薬事法違反極まりない姉の意見に従いました。

用法用量は正しく守りましょうという発想はなく、たくさん飲ませればたくさん効果があると思ったのでしょうか。

その結果、私はぐっすり眠れるようになりました…なんてことにはなりませんでした。

私の体にはなんの異変もなく、死ぬのが怖いという考えに変化はありませんでした。

そんなある日、困り果てた両親の前に強力な助っ人が現れます。

(次号に続きます)

シンガーソングカウンセラー

ふるかわひであき

療育手帳の向こう側

5.内と外

坂口 伊都

はじめに

前回は、養育者の多くが子どものかわいい部分を話したがっていることについて書きました。それは、親御さんと出会う度に感じています。先日も家の様子を伺うと、子どもの行動は意表を突くものばかりだと熱弁するお父さんがいました。

「もう本当にすごいですよ。想像を超えてくることをするから見たら驚きますよ、きっと」

と大変さをアピールしながらも

「もう、慣れましたけどね」

と笑っていました。

日々の驚きや大変さも事実としてありますが、そこを含め子どもの成長を素直に喜び、かわいいことが伝わってきて、聞き手側も自然と笑顔になっていました。

子どものかわいさを感じながら、同時に将来への不安を感じるのも親の性というものです。毎日いっぱい食べて笑顔で過ごしてくれたらそれでいいと思いながらも

「宿題はしたの？」

「遊びに行くのは宿題してからと言っているでしょう」

と子どもに言つていませんか。親が宿題や勉強をしなさいと口酸っぱく言っても、子どもはやりたがらないだけでなく、「あーあ、今やろうと思っていたのに言わされたからやる気なくした」と可愛げのない

態度で跳ね返されることもあります。宿題親子バトル、嫌になります。療育手帳の聞き取りの場でも宿題の話題が出ます。

【その1】

母 「宿題はしますが、それ以上の勉強を一切しないです」
援助者 「宿題はするのですね。嫌がらずにするのですか？」
母 「いえ、宿題があるだけでイライラして癪癩を起しながらやっています」
援助者 「宿題が終わると癪癩は収まるのですか？」
母 「はい、機嫌が良くなります」
援助者 「宿題やらないということはないのですか？」
母 「根が真面目なので、しないといけないと思っているようです(苦笑)」

【その2】

母 「書き取りプリントの宿題で、マスから少しでもみ出されるとそれが許せなくて全部消してしまうのです。消す力が強くて紙が破れてしまうと、そこから大泣きして本当に大変です」
援助者 「その様子を先生に相談していますか？」
母 「他の子より宿題を減らしてもらっているから言いにくくて」

【その3】

母 「家では癪癩を起して全くしないと先生に話したら学校で宿題をさせるので家でしなくていいですよと言つてもらって、任せています」

どこの家でも苦労していることが伝わってきます。自分を振り返ってみても、押し付けられていると感じたら勉強に身が入らず、そこに意味を見出すと頑張るものです。知的なハンディキャップがあると、同じ学年の子と比べ理解がゆっくりで、できない自分を責めてしまうこともあります。【その1】は、宿題をしていることが頑張りですし、【その2】は、是非先生と相談して、この子ができたと思える内容になることを願います。今回は、家から見えない子どもの外の世界について考えてみようと思います。

好き嫌い

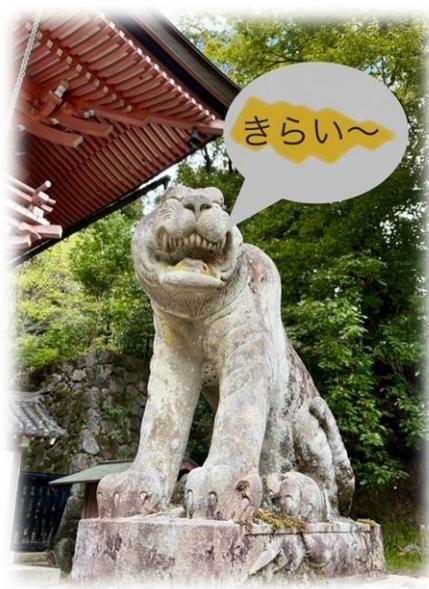
家で宿題をやりたがらない以外にも偏食があつて困っている話題がよく出ます。偏食がきついと、白米やパン、麺類しか食べられないと言います。その中でも炊き込みご飯やふりかけがかかると白米でも食べないという子もいれば、逆にふりかけをかけないと食べてくれない子もいて、子どもによって好みが違います。野菜嫌い、初めて見るものは口にしないという子も多く、野菜は細かく刻んでもその小さな野菜を一つひとつ選り分けていくすご技をやってのける子もいました。

給食では周りの子どもにつられてか、食べようと頑張る子が多いようです。なかなか食べられなければ、最初に減らしてもらっています。そこで「よく給食は食べてくるが、家では絶対に食べない」という母の嘆きを聞き、その理由として

- ① 「私の料理が不味いからかも知れません」
- ② 「家では甘えているのか、全く食べないです」
- ③ 「親の言う事なんか聞かなくて困っています」

と3パターンで語られます。

- ① は冗談で言う方や自信をなくしている方もいます。
- ② は子どもの甘えを仕方がないですねと諦めモード。
- ③ は怒りと悲しみの両方の感情がこもっているように感じることが多いです。



どれにしても親が作った料理を食べてもらえないのは、悲しい出来事です。親は、身体のために何でも美味しいと食べて欲しいと願います。「給食は食べてくるけど家では食べないという話される親御さんは多いですよ」と伝えると、「そうなのですか」とホッとした顔をされます。

給食をほとんど食べられない子もいます。味覚や触感に対して過敏に感じると、受け付けるものが偏りやすくなり、こちらが美味しいと思っても全く受け付けられない味ということもあります。不味いものを美味しいと言われても食べられません。

給食は食べると褒められますが、他の子どもの手前頑張っているのでしょうか。子どもにとって保育園や学校は頑張る場所で給食にチャレンジし、食べられたという自信をつけています。家でも食べられるものが増えたという喜びの声も耳にします。

勉強も食事も外の世界だと気合を入れてチャレンジしているんですね。

保育園や学校と家

保育園や学校での様子を尋ねると
「学校ではいい子なのですが、家では暴れることが多くって」
「家では問題ないのですが、学校では全体の指示が入らない、集中力もないと言われて」

と、保育園や学校と家の子どもの様子が真逆になっていると聞くことがあります。どちら

のパターンでも親御さんの戸惑いは大きく、先生と子どものイメージを共有できず心細い思いをしています。

「家では、癪癩を起して大変だと何度も説明しても信じてもらえないで、動画を撮って見てもらったらやうと信じてもらいました」

「家では問題なく過ごしているのに学校だとあれもこれもできないと言われ、本当にそんなにできないのかと落ち込みます」

子どもが見せる行動が保育園や学校と家で正反対に出ていると気になります。その両極端の行動で、体力を一番使っているのはその子自身だからです。

それでは、子どもに何が起きていると考えられるでしょうか。

- ① 音に敏感で教室の音がうるさくて気になって仕方がない
- ② やっていることを中断させられて、嫌なことをしろと言われる
- ③ 周りの言っていることがわからない
- ④ 自分なりにやっているのに叱られる

①は給食の時にも触れましたが、感覚過敏を持っていると子どもの騒ぎ声やざわざわした音がとても大きく聞こえ、特に休み時間には叫び声も交じり教室にいること自体が辛くなります。

②は、誰でも好きなことには夢中になれます BUT 気乗りしないことに向き合えない経験があります。その度合いが強くなり、食事をするのも忘れてしまうほど集中することを過集中と呼びます。切り替えが難しく、次の日課になかなか移れず苦労している話もよく聞きます。



③は、写真や絵などで説明されるとわかる、短い文章に区切られればわかる、やることを一つに言及してもらえばわかるというように、伝え方によってその子の理解度が変わります。私たちも話を聞いて、この人は何を言っているのかわからないまま聞いていることが日々起きていますし、周りはわかっているのに自分だけわかっていないのではないかと感じると焦ります。周りに聞きやすい人がいればいいですが、知らない人ばかりだとわからないままになってしまい、困ってしまいます。

④は行動の結果ですが、①～③は子どもの特性から起きていることで、子どもの努力で何とかなるという種類のものではありません。その子なりに立ち回ろうとしているのに叱られてしまうのは理不尽です。そして、面白くないし、自

信を失っていきます。また、年齢が低いほどそれらの行動は顕著に出やすいようです。失敗することや注意を受けることを頑なに拒否する子どもに出会うと、この子はこれまでにどのような体験をしてきたのだろうかと考えてしまいます。

溜まったストレスをどこかで発散しないといられなくなっている状態だとしたら、そのストレス緩和をまず考えるべきでしょう。

そして、そのストレスを発散している時、子どもは自分の気持ちを落ち着けて欲しいと懇願しています。しかし、パニック状態になっていると周りは困惑します。これ以上癪癩がひどくならないように大人がおどおどした態度で接すると、子どものイライラを煽る結果に陥ります。あなたが慰めて欲しい時、相手がおどおどしていたら、あるいは大したことではないと鼻であしらわられたと感じたら、余計に傷つきませんか。私なら、大丈夫だよとおおらかに受け止めてもらいたいです。

小さい頃は上から押さえつけられ、身体が大きくなると恐れられると子どもは途方に暮れます。親御さんの中に子どもの行動がひどくて困っている、私は精一杯やっているから悪くないということを無意識に訴えている方がいます。この親御さんは、いっぱい傷ついて疲れているのでしょうか。子どもを大らかに受け止めるためにまずは傷を癒していただきたいと思っています。

子どもは、保育園や学校と家と気持ちを使い分けている大人は多いです。子どもが意識的に入っているわけではなくても、先生や子どもが大勢いる場所と自分のテリトリーである家にいる時は気持ちのあり様が違います。甘やかして大丈夫ですか？という質問を受けますが、その時の甘えのイメージはその方によって様々です。その子の特性に配慮した環境を考える、休む時間を作る等は必要です。それでは、ここは譲れないと思うことは何でしょうか。その部分を保育園や学校、家で共有し子どもに根気強く教えていくことが子どもの成長を促します。子どもの見えにくい頑張りをみつけられる皆が笑顔になれる感覚を感じています。



周辺からの記憶 49
2023年 東日本・家族応援プロジェクト+
村本邦子（立命館大学）

2025年9月、プロジェクトで福島を訪れたばかりだったが、10月30日から11月2日、現在、広島でサバティカル中の人類学者 Moradi Fazil さんを連れて、福島を案内した。いつものコースである沿岸部の視察と出会った人々のインタビューであるが、今回は、特別なアポなしに、その場の流れに任せて調査することにして、双葉屋に宿を定めた。1日目は、古滝屋考証館の里見喜生さんのお話を聴き、ヘリテージツアーに一部参加させてもらった。あちこちから来たという年配女性たちのグループと一緒に、2泊3日で炭田や風力発電などあちこち回るという。ずいぶんと熱心で、いったいどういう人たちのかしらと思ったが、渡辺一枝さんの講演を聞いて興味を持った人たちらしい。ネットを調べみると、たしかにこれは一枝さんのアイディアで始まったものらしい (<https://maga9.jp/221012-3/>)。

2日目以降は、「おれ伝」の中筋純さん、今回、初めて知り合った「おれ伝測定所」の白鬚幸雄さんのインタビューもさせて頂いた。夜の双葉屋には、研究者や実践者などさまざまな立場の人たちが国内外から集まっていて、お酒を呑みながら、あれこれ語り込んでいた。良い出会いとなり、フィールドワークはやっぱりこうでなくてはいけないよな～と思った。院生たちの教育プログラムとして来ると、限られた時間でいろいろ見て欲しいと思うので、なかなかこんなふうな動き方はできない。授業としてのプロジェクトは今年で終わるので、来年からはのんびり行こう。



9月1日（金）山元町フィールドワーク

今年のプロジェクトは、院生4人、総勢8人で、9月1日（金）から5日（火）の4泊5日で開催した。

まずは、やまもと民話の会の方々の案内で、戸花慈母観世音をお詣りした。これはやまもと民話の会の代表だった庄司アイさんが、家ごと漂流し、一夜を過ごした奇跡の場所で、アイさんたちの強い願いで、2014年10月に建てられた。東北お遍路巡礼地にも選ばれ、私もアイさんに案内してもらったことがある。でも、アイさんはもういない。



それから、宮城県山元町震災遺構中浜小学校を見学した。山元町は常磐線沿いの最南端の町で、600名以上が津波の犠牲になり、中浜小学校は、4億7千万をかけて震災遺構として残されたそうだ。10分後に10mの高さの大津波が来るという速報に、20分かかる避難所への移動をせず、海拔10mの屋上に上がる決断をした校長先生の話に身震いする思いで、その階段を上った。ここは何度か訪れているが、「中浜小学校物語」という紙芝居に、小学校の歴史や町の人々の思い、学校の屋上で瞬く星を見て一夜を過ごした子どもたちの話を知っているので、その光景が眼に浮かぶ。



やまもと民話の会との交流

その後、ふるさとおもだか館（山元町防災拠点・坂元地域交流センター）にて、やまもと民話の会の6名の皆さんとの話を聞いた。震災から13年目を迎え、長くおつきあいしてきた方々が一人、また一人と鬼籍に入られていく。やまもと民話の会を率いていた庄司アイさんももういらっしゃらない。時の流れに寂しさを感じる。

はじめに、寺嶋重子さんが、山元町の伝説「下田沼の大蛇」を語って下さった。山元町

坂元に、下田沼という沼があり、それを見下ろせる御狩屋崎という丘の上に立派なお寺があった。この寺には、器量もいいしお経を唱えるのも上手、人柄もいい、笛の達人の若い和尚が住んでいた。ある月の夜、笛の調べに引き寄せられた美しい姫が現わされた。それから月の美しい夜にはいつも姫が通ってきて、楽しい時を過ごすようになる。やがて二人は深い仲になり、赤ん坊が生まれたが、赤ん坊は大蛇の姿だった。実は、姫は下田沼の主の大蛇だった。姫は子を抱いたまま下田沼に身を隠し、残された若和尚は何も手につかず毎日ぼんやり過ごしていた。ある夜、大蛇が現れて和尚を殺してしまった。その場所には和尚さんのお墓が祀られ、和尚壇と呼ばれるようになった。そのうち、寺は無くなってしまったという。



それから、「宝下駄」を語ってくれた。昔、貧しいが親孝行な息子と母親が暮らしていた。息子は金持ちのおじさんにお金を借りて、薬を買って母親に飲ませたが、良くならない。もう一度、お金を借りに行くが、kしてくれない。困った息子が八幡様の境内で思案しているうちにうとうとと眠ってしまった。夢の中に、白い髪を生やしたお爺さんが出てきて、この1本歯の下駄をやるという。これを履いて転ぶと小判が出てくるが、

そのたびに背が小さくなるから、やたらと転ぶなどと言う。目が覚めたら、一本歯の下駄があったので、早速これを履いて転んだら小判が出てくる。息子がおじさんの所に小判を返しに行き、事情を話すと、おじさんは借金を帳消しにしてやるからその下駄を貸してくれと言う。翌日、下駄を返してもらおうと、息子がおじさんのところへ行ってみると、庭先に小判が山積みになっていたが、オンちゃんの姿は見当たらなかった。小判は息子のものになり、母親と一緒に幸せに暮らしたということだ。

どちらも「えーっ」と声の出る話だった。和尚さんは死んで愛する妻子の元に行けたのか、欲張りなおじさんは、小さくなつて、その後どうなつたのか。ほんと、民話は面白い。

それから、庄司アイさんの娘さんである萱場裕子さんを中心に、『巨大津波』(やまもと民話の会、2013、小学館)作成の時の話を聞かせてもらった。震災から2ヶ月後、証言集を作ることを決めたやまもと民話の会の会員6名は、アイさんを中心に、手分けをして、身近な人を訪れて、話を聞くことを始めた。新聞の折り込み広告の裏紙などに鉛筆でメモを残し、家や避難所に帰つてから、その日聞いてきた話を文章化していく。アイさんはワープロを持っていたので、第1集はほとんど自分で打っていた。ところが、話を聞く方も同じ体験をしてしまうような感じなのか、証言を聞いて帰つてその作業をすると、ぐったり疲れて、その後3日間ぐらい寝込んでしまっていた。

裕子さんは、55歳で早期退職したので、ワープロを打つぐらいだったらできるからと手伝い始めた。聞くのに徹して聞いて、家

に帰って思い起こして書くということで、アイさんは字が上手な方だったが、娘にも読みにくいびっちりと書いてある神を渡されて、それをワープロで打ち込む作業は大変だった。自分も被災して復興していくかなければいけないのに、なぜこんなことをやっているのかとも思ったが、不思議なほどみなさんパワフルだった。「今考えてみると、母は、この仕事を残すために助けられた十年の命だったのではないかと思う。それがどんなふうな形で後世に伝わっていくのかわからないけれど」と裕子さんはおっしゃった。

本当に命をすり減らして、よくぞこのような貴重な記録を残してくださったと胸が痛み、感謝の念が堪えない。

時代とともに環境も変わって、若い人や子どもたちに民話を聞いてもらうためにはいろいろ工夫が必要であるというお話も出た。方言もわかってもらいたいと思うと、説明が行き過ぎてしまうことがある。そうすると昔話の雰囲気というか、形がちょっと崩れてしまう。話し方によっては何となくなんとなく伝わる。アイさんがしゃべるのを聞いていると、方言でも子どもたちはしっかりと受けとめていた。一生懸命説明するというのではなく、伝え方なのだということだった。



多賀城メンバーとの交流会

9月1日の夜は、今は多賀城プロジェクトを率いてくれている丸山隆さんと黒川恵子さんと打ち合わせを兼ねた交流会を開催した。楽しいひとときだった。



9月2日（土）みやぎ民話の会との交流

9月2日（土）の午前は、仙台メディアテークの見学をした。メディアテークには、「311 わすれないセンター」の展示に録音小屋や記入シートなど「コミュニティ・アーカイブ」を残す仕掛けが工夫されており、数々の小さな声に触ることができた。



仙台市民会館にて、みやぎ民話の会のみなさんとの交流会を開催した。今年発行された飯館村の菅野テツ子さんの語りからなる長正サツキ・島津信子・山田裕子共編『飯館村菅野テツ子のむかし語り 語ってくんちえ 聞かせてくんちえ』(私家版)制作のお話を聞かせて頂いたが、テツ子さんの語りは、2014年、丸森で開催された「みやぎ民話の学校」で、私も聞いたことがある。飯館村には何度も足を運んできたし、ある程度、イメージを持っているが、今回、『語ってくんちえ 聞かせてくんちえ』をあらためて読む中で、村の細部が生き生きとより立体的に見えてきた。そのテツ子さんも、この冊子の完成を待たず亡くなられたという。

長正サツキさんは飯館村に住み、20年以上前からテツ子さんや彼女の母キクさんのお宅を何度も訪問し、キクさんのむかし語りを聴いていた。そこにはテツ子さんもいたのだが、ただ黙っているだけで、長正さんもキクさんの話を聞くのに精いっぱいで、それが誰などかなど、ほとんど関心が向いていなかった。キクさんが亡くなり、弔問に行って、テツ子さんと言葉を交わし、娘さんだと知った。振り返れば、よほど話を聞くのが好きだったのだと思う。テツ子さんは、いつも、じっと黙って母キクさんの話を聞いていた。

原発事故で避難生活を余儀なくされ、2013年に当時、松川町の仮設住宅にいたテツ子さんのもとに、島津さんや山田さんと一緒に訪ね、むかし語りを聞かせてほしいと頼んだ。テツ子さんは、「母親の真似事」と、キクさんの十八番を語ってくれた。それが、キクさんの語りそっくりそのまで、

本当に驚いた。テツ子さんは、キクさんが亡くなるまで、人に語ったことはなかったそうだ。

島津信子さんは、2014年8月に開催された丸森町での「第8回みやぎ民話の学校」の実行委員として、丸森は福島県と隣接していることもあり、他のメンバーと相談の上、「福島の部屋」と題する分科会を設けた。そこに福島からの語り手を招いて、むかし語りとともに、事故後の避難生活についても語ってもらうことにした。テツ子さんにもお願いしたが、語り始める最初にも、「これは母の真似事です」とおっしゃられた。これはキクさんのだから、自分は母親のようにはとてもできませんと最初におっしゃって、謙虚だった。

その後も、「福島の部屋」を一緒に担当した島津さん、長正さん、山田さんの三人は、何年間にもわたって何度もテツ子さんの住む仮設住宅や避難先、飯館村の宿泊施設などに足を運び、彼女からたくさんの中を取り、飯館村の暮らしを残したいと、この本を出版した。ちなみに、この表紙カバーの文字は長正さん、イラストは島津さんによるものだという。



長正さんは、現在、飯館村に帰還されており、若い人たちには、帰還して大規模な農業経営を始めている人もいるが、高齢者は避難先で最期まで過ごすことを決めているという人が圧倒的に多い。飯館村には病院やクリニックもなく、車の運転もできなくなるし、現在利用しているところに通うことも難しくなるためだ。高齢者だけが帰還して子どもたちと離れて暮らすと、緊急事態が起きた場合、子どもたちに迷惑をかけることにもなる。わがままは言えない、帰りたいのはやまやまだけど仕方ないと、多くの方が考えているそうだ。



それから、長正さんが本書に収載されている「婿の杵枕」を朗読し、ご自身の「狐に化かされた話」を聞かせてくれた。

小学4、5年生の頃、遠足の弁当に入れる稻荷寿司を作つてもらうために、夕方、自転車で油揚げを買いに行った。道中は、狐がよく出ると言われている山の中を抜けていく砂利道だった。店で買い物を済ませて、前のカゴに入れて帰る途中、なぜか急に自転車のペダルが重くなり、タイヤが動かなくなった。仕方なく自転車を押して引きずりながら帰った。下り頃になった時、母が迎えに来てくれて、「サッコかあー」と呼んだ。「かあちゃーん」と返事をした途端、タイヤがクルクル動き出した。あれはきっと、狐に化かされたに違いない。もしあの時、母が呼んでくれなかつたら、油揚げは狐に取られていたに違いない。「あれは絶対、狐だった」と。

この話は面白かった。思い出してみれば、私の田舎にも河童や人を化かす狸がいたものだった。河童の鳴き声を真似て教えてくれた父も一昨年、逝ってしまった（そして私たち子どもは、たしかにその声を聞いたことがある）。

昼食には、それぞれの畑で取れたトマト、きゅうり、なすと、飯館村で除染が済み2年前からとれる様になったお米で炊いたおこわを頂いた。とても美味しいくて、ほっこりする。長正さんたちも、後半にはテツ子さんを訪ねると、そのたびに大きなお鍋に煮物をどっさり作って待っていてくれるそうだ。「そんな関係ができた」とおっしゃっていたが、民話には土地のおいしい食べ物がおまけについてくるらしい。そんな関係を私たちにも持たせて頂いていることに感謝の気持ちでいっぱいだ。



お話を聴きながら、「聴かせて頂く」ということに対する民話の会のみなさんの真摯な姿勢に居住まいを正す思いだった。院生たちとともに私自身も、あらためて学び直さなければならない。

多賀城フィールドワーク

午後は多賀城へ移動し、震災当時市役所の職員として避難所運営の指揮に当たられた丸山さんのお話と、おおぞら保育園の園児たちを無事避難させ、トレーラーハウスで園を再開させた黒川先生のお話を伺った。

黒川さんは、震災当日の保育園の様子から、保育園の再開、保育を継続するためにトレーラーハウスの購入を思いついたこと、トレーラーハウスでの保育など、12年経過する中での変化についてお話くださった。丸山さんは、震災時、避難所で責任者として

経験したこと、これからの防災についてお話をされた。できる人ができることをやる、必要に応じて柔軟な対応をするなかで、被災者を主体的存在として避難所運営を組み立てること、支援者は支援するために「寝ること食べること」を確保しなければならないことなど、支援者として忘れてはならないことを話してくれた。また、防災のための資料を頂いた。

その後、末の松山など、多賀城市内を案内頂いた。2012年から毎年足を運んできた土地だが、あらためて大きく変わった街並みに時間の経過を感じる。





9月3日（日）白河プロジェクト

9月3日は白河市立図書館「りぶらん」にて、「東日本家族応援プロジェクト+（プラス）2023 in 白河」を開催した。午前は「団士郎の漫画トーク」、午後は「あそびとおはなしのひろば」、その後、現地でご準備頂いた浪江町出身者への「震災の記憶を書き書きする」だった。

多くの人が立ち止まって漫画を眺めている様子が見られ、トークでは、家族をテーマにした話があった。「あそびとおはなしのひろば」では、小さな子どもや高校生、大人も一緒に手玉遊びをし、しらかわ語りの会の鳴島さんの語りに聴き入った。子どもを惹きつける巧みな語りや言葉かけ、まなざしに学ぶことが多かった。世代を超えた楽しい交流の場となった。





「震災の



「震災の記憶を聞き書きする」は、EMANON 青砥さんのプロデュースで、浪江町で被災された避難者たちに、震災にまつわる大切なものをご持参いただき、高校生や大学生がそれにまつわる体験を聞き書きするという内容だった。今の高校生は震災当時 3～5 歳で、震災の記憶が残る最後の世代になる。

大学院生がサポートする形で、グループで話を聞いた後、全体でどのようなことが語られたのかを発表、共有した。貴重なお話をたくさん聞かせて頂いたようだ。

たとえば、浪江町で陶芸をやっておられる大堀相馬焼の 13 代目窯元の男性である。江戸時代から続く歴史を背負っているにも関わらず、避難先の東京のハローワークで生まれて初めて仕事を探すと、相馬焼以外の経験がなく、何の資格もないからと、公園管理や倉庫片付けの仕事しか紹介してもらえなかつた。やむなく町役場で臨時職員になり、公共施設の草刈りなどやった。草刈りする時にスズメバチは白が嫌いだからと、蜂に刺されないよう白いシャツを着ていたと、そのシャツを持ってこられていた。「浪江を離れ、生まれて初めて面接を受けて仕事した時のシャツ。今でもたまに夜中に目が覚めると、なんで今ここにいるんだと思う。何もしていないと、気が狂いそう。それで、毎日家内に作ってもらった弁当を持って、気を紛らわす」ということだった。

原発ができる時、彼は高校 1 年生で、父の代わりに地区の集まりに行ったことがあった。いまだに覚えているが、その時、「東京で使う電力をここで作ってロスはないんですか」と質問した。送電線の技術が発達しているからロスはありませんという答えだった。

嘘だと思っていた。

あの日、3月11日の夕方、磐城の方に行く山の線が渋滞したから何かあったなと思って、妻を連れて逃げた。地震の日の5時頃、あの日に逃げたのは浪江ではほとんどいないと思う。無我夢中で、逃げないと危ないと思った。嫌いな東電で死にたくないという思いだった。

「どこにぶつけていいかわからない憤りで12年が経った。いつかは東電に仕返したい、今でもそう思っている。それは、俺が74歳まで生きる糧、団塊の世代だから闘争本能が強いのかもわからない。何ができるのかもわからないが、合法的に痛めつけたい」とおっしゃられたそうだ。すごい言葉だな思うし、そんな強い思いがあるからこそ、ここまで頑張ってこられたのだと思った。その背後には、いかばかりの怒りや無念があることか。

彼は、その後の努力で、彼は移住先の白河で窯元として仕事を再建し、現在は大堀相馬焼を広めている。

もうお一人、窯元の方があった。父が馬の絵付けの名手で、彼は子どものころから父が馬の絵を描く姿をずっと見ていたが、自分で描いたことはなかった。亡くなる十年ほど前から癌を患い、自分が馬の絵を描いてしまうと、父に長くないのだと思わせてしまうと思い、ずっと描かずにいたそうだ。それが、震災後の東京で、父が亡くなり、人に頼まれて初めて描いてみたら、驚くほどうまく描けたのだそうだ。飯館村のテツ子さんの話と重なった。伝承、継承というものは、意図せずとも、繰り返し接するなかで身体に乗り移るものなのかもしれない。

彼が一番気にかけていたことは、子ども

たちが転居先の学校に馴染めるか、いじめられないかであり、避難先の東京の家に、小学生の長男の友だちが遊びに来た時、「助かった」と思ったそうだ。これも辛い話だ。



それから、当時は大学生で仙台に住んでいたが、春休みで浪江の実家に帰省した時に被災したという女性。彼女は、自宅近くの保育所でボランティアをするためのオリエンテーションの帰り道で地震が起きた。立っていられず、田んぼから砂煙が立ち、電柱が波打つように揺れ、少年野球チームはグランドでパニックになっていた。何とか無事に家に帰ったが、震災についての状況はわからず、家族はそれぞれが避難できる所に避難し、電話も通じなかった。家族がどこでどのように避難生活を送っているかはなかなかわからず、伝言ダイヤルで状況を知り、友人らとの連絡はSNSを通じて行った。

とくに両親は福祉施設で働いていたため、それぞれが職場ごとバスで遠方へ避難し、どこにいるのかもわからず連絡が取れたのは約1か月後だった。テレビは見られなかったが、3~4日後にYouTubeで沿岸部の様子を知った。原発事故のことは友人から聞いて知った。浪江の自宅は震災の影響で破損することはなかったが、原発事故により避難を強いられ、転々とし、学校が5月に始まったためその時に仙台に戻った。

彼女は、震災にまつわるモノを3つ持ってきててくれた。1つめは「当日使っていた連絡用携帯」、2つ目は「お金で買えない家族写真」、3つ目は「震災後の生活を支えてくれた電子レンジの写真」だった。避難する時は、携帯電話と財布、寝泊まりできるだけのものを持ち出しただけだった。携帯電話で電話はつながらなかつたものの、mixi（SNS）やYouTubeを使えたし、伝言ダイヤルで家族の近況を知ることがで

きるツールとなった。家族写真は、震災後避難はしていたものの、規制がなく自宅へ入ることができたため、両親が「お金で買えないもの」として子どもたち3人が1年生だった時に写真館で撮った家族写真を持ってきた。両親は少しずつ使えそうな衣類や食器を持ち出し、中学校から吹奏楽部に所属していたので、買ったばかりのクラリネットを持ってきてもらった。3つ目の電子レンジは、避難してから支援物資でもらったものだった。たくさんある支援物資のひとつで、日本赤十字と書かれたシールが貼られていた。震災から12年経過して、ちょうど3日前に使えなくなった。結構頑張ってくれた。最後に電子レンジで調理したのは人参だった。

彼女の祖父は、震災前も認知症のような症状があったものの友人とゴルフなどをして交流はあったが、震災によって「こんなところに住まないといけないのか」と思うほどの狭さのアパートなどに転居せざるを得なくなり、趣味のゴルフ仲間もいなくなり認知症が速く進んだように思う。現在は、ご両親、祖母と一緒に暮らしている。震災により浪江を離れ、家族がバラバラになってしまったが、今は白河町で家族一緒に住んでいるとのことだった。



原発事故当時、高校生だった女性は、避難時に持ち出した漫画本と避難所で書いていた日誌を持ってきてくれた。原発事故が起きたものの、すぐに帰れると思い何も持たず避難したため、弟が持ち出した漫画本を長く続いた避難所生活で何度もきょうだいで回し読みした。



院生は、参加した高校生からも当時の話を聞いたそうだ、保育所にいるときに震災を体験し、保育園の先生がパソコンを守っていた記憶や水道管が破裂し泥水が噴出した。また、震災の思い出のモノとして「ガラスバッヂ」の写真を見せてくれたという。ガラスバッヂとは個人用の線量計である。小学生の時は学校の先生からつけるよう言われてつけていたが、どういうものかはわからないままつけていたし、結果について何も言わなかった。以前は、検診

車で全身検査を受けたことや県民健康調査の用紙が今年は送られてきたこと、一度甲状腺の検査で指摘を受けたが問題なかったそうだ。そして、県外に行った人はいじめられることもあったようだ。

いろいろと課題もあったようだが、高校生が原発事故についてインタビューするという企画は良い案だと思った。

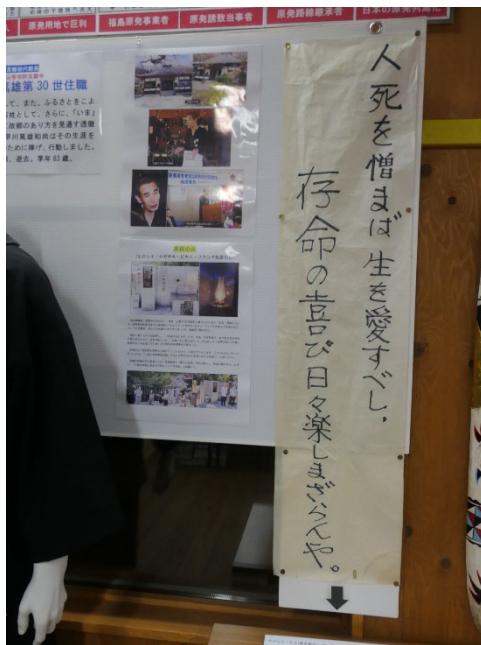
終了後は、EMANON で交流会。美味しいお料理を頂きながら、楽しいひとときだった。



9月4日（月）伝言館

午前は、檜葉町宝鏡寺の伝言館を訪れた。ここ数年は、毎年、宝鏡寺にある伝言館を訪ね、早川篤雄和尚と安斎育郎先生にお話を伺ってきたが、早川和尚もいなくなってしまった。和尚は第30世住職で館長だったが、去年12月29日に呼吸器科で亡くなった。83歳だった。

昨年9月、早川和尚があまりに痩せておられて心配になったが、頭脳明晰、声も大きく張りがあり、相変わらず愛と情熱にあふれておられた。今回、早川和尚に関する展示がたくさん加えられており、「人死を憎まば生を愛すべし。存命の喜び日々楽しまざらんや」の手書きの文字に和尚のお顔が浮かび、涙が出た。



安斎先生も大切な同士を失ってがっかりされている様子だった。早川和尚との出会いなど語ってくださいました。

安斎先生は東大工学部の電子工学科第1期生だった。1962年に電子工学科が開校

して、当時日本は電子工作級の技術者を養成するためにわざわざ東大に作った。東大に。1960年にできて、最初の2年間準備期間で、62年から学生を募集した。15人の中の1人だったが、勉強しているうちに反原発になった。このお寺は1395年に創建された室町時代の古い浄土宗のお寺。彼と知り合ったのは1973年。最初、福島の人々は1960年ぐらいから原発に関心を示して、アトミーポリス構想と言って、原子力で町を栄えさせるという構想にみんな乗つかった。「原子力明るい未来のエネルギー」ということで、住民そのものが原発地域に誇った原子力開発に協力する時代だった。

反対運動も何度かあっても、60年代、70年代、73年になってこの町、檜葉町と隣の富岡町に福島第二原発が来るとなつた。早川和尚も他人事から自分事になり、住民運動を始めた。その時に、原子力について何にもわからないから、東大の安斎さんを呼ぼうよとなって、初めて来たのが73年だった。

69年ごろから住民運動に関わるようになって、勉強もしていた。日本学術会議で初めての原発問題でシンポジウムを開いた時に、若干32歳で東大医学部の助手だったけれど、基調報告を頼まれて、日本の原発を点検する健全性・不健全性を点検する6項目を出した。それで凄まじいアカデミックハラスメントを体験することになり、研究教育から一切外された。そんななかで力を合わせて一緒に裁判もやってきた。

今回、安斎先生が、放射線の影響は医学的影響（身体的影響・遺伝的影響）だけではなく、心理的影響、社会的影響、生存意欲毀損効果が大きく、事態は科学的に安全

か否かだけでの問題ではないのだとおしゃったのには少し驚いた。

このたび、伝言館には新たに丹治杉江さんというパワフルな事務局長が加わった。丹治さんは、原発事故で群馬に避難した。原発から 34 キロだったが、自主避難と言われる。「何が自主避難か、自力避難だ」と言っている。自分で考えて、自分で様々なところから避難した。こんな思いをして、国も責任を取らない。裁判で闘った。避難者訴訟の戦闘に立って国や東電と闘い、最高裁でも 2 回も陳述したが、国の賠償責任は認められなかった。

最後に決まった賠償は 25 万円、1 回だけ。正直言って、裁判代にもならないし、交通費にもならない金額だが、それでも、戦うなかで、原発の本質が見えた。エネルギーは他の手段では作れるし、汚染水だって他に処分方法がある。なぜ、わざわざ人類に危険なものを選ぶのか。最高裁で負けたが、早川和尚が亡くなられ、その悔しさを手伝わざるを得なかった。避難先の群馬県の前橋市からいわきに戻って、いわきから 70 キロの距離を車で通っている。

丹治さんは、せっかく漁業ができるようになったのに、処理水放出でまた魚が売れなくなると、ALPS 処理汚染水の差止め訴訟の事務局長もやっておられるそうだ。



おれたちの伝承館

午後は自由なフィールドワークの時間となり、私は、南相馬市小高区にある「おれたちの伝承館」を訪ねた。オープンするのを知り、行かなければと思っていたところだ。

おれたちの伝承館は、アートで忘却に異議を唱えるとして、2023 年 7 月 12 日にオープンした。2016 年 7 月 12 日に小高地区は避難解除となった。倉庫を改装した館内に、原発事故を題材としたアート作品が所狭しと並んでいる。館長の中筋純さんは写真家で、2007 年からチェルノブイリをテーマに写真を撮り続けてきた。福島には 2013 年から浪江町に入り、本格的に撮影を始めた。また、原発事故をテーマにする作品展

「もやい展」を 2017 年からあちこちで開催してきた。

場所は、小高駅前で双葉屋旅館を営む小林友子さんが提供した。小高区の全住民が避難し、人生を替えられた無念を伝えなければならないという想いでいたところ、中筋さんの構想を知って後押しした。

入口には富岡町夜ノ森の桜並木の写真。中に入ると、和紙で作られた牛の死体。避難できず餓死した牛たちで、木の柵はかじ

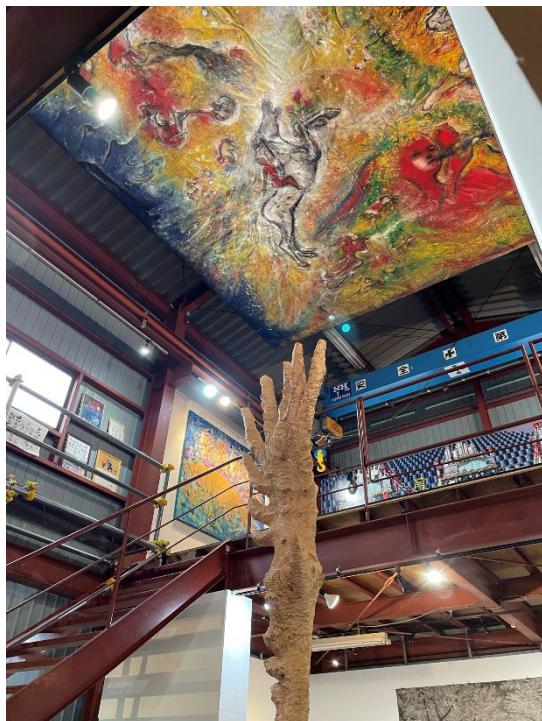
られている。中央には吹き抜けがあり、見上げると黄色と青の一面に馬や魚が描かれた天井画がある。そこに向けて大地から手を伸ばしたような、あるいは羽を広げているような木製の彫像。「鳳凰」だそうだ。

あらためてアートの力を感じる。さまざまな形で受け渡されるものがある。福島の物語は、もっともっと多様に立ち上がるべきなのだ。来年のプロジェクトは、院生たちを連れて来ようと思う。



院生たちは、伝言館の丹治さんの案内で大熊町や双葉町を見て回ったようだ。

夜は古滝屋に泊り、院生たちと美味しい食事を頂き、フィールドワークの共有、振り返りをして温泉に入った。



9月5日(火) 考証館Fツアー

この日は、湯元温泉古滝屋にある原子力災害考証館のFツアーに参加した。まずは、考証館。やはり一番インパクトがあるのは、木村紀夫さんによる造形だろう。原発事故のために我が子の搜索ができなくなり、5年以上たって、ようやく歯とあごの骨を発見するに至った。次女の汐凪ちゃんは当時7歳、遺骨が発見されるまで5年9か月、今も生きていればちょうど20歳になっていたとのことで、木村さんは大学生が考証館を訪れて汐凪ちゃんの物語を聞いていくことを喜ばれるそうだ。

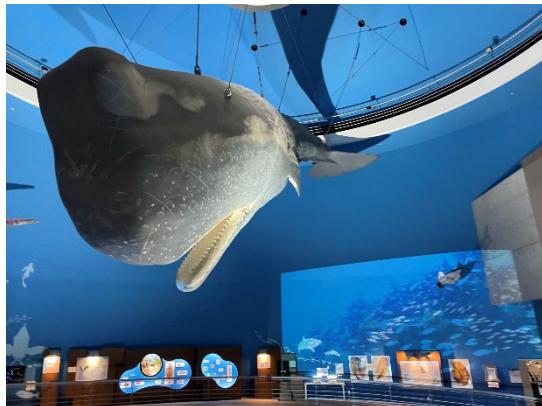
マイクロバスでのフィールドワークでは、コメ作りができなくなった田んぼに、置かれたたくさんのソーラーパネルを観た。ソーラーパネルは20、30年で使えなくなり、有害物質を含んでいることから廃棄も難しいので、結局これも未来に負の遺産を残していることになる。そういうことを考え、今は使えない田んぼであっても、ソーラーパネルの置き場所として貸すことなく、いつか来る日のために、手入れを続いている農家さんもあるそうだ。

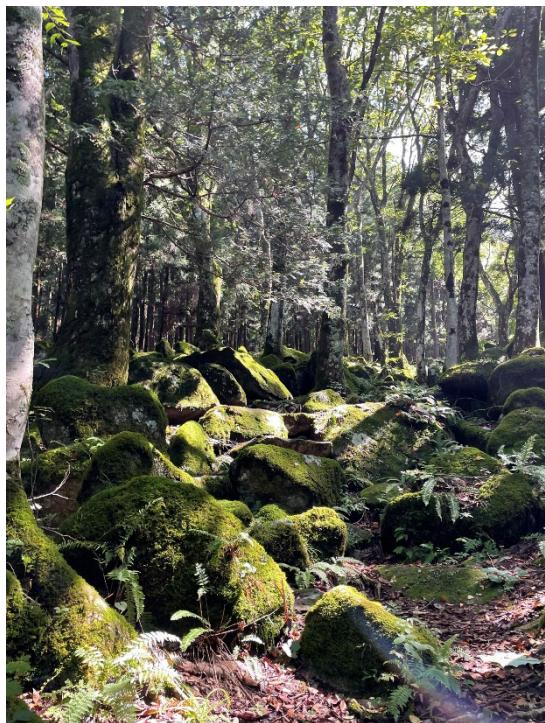


おまけ

プロジェクト終了後、事務局の平田さんと一緒に、シンポジウムで流すビデオレターを撮るために、気仙沼や大船渡に立ち寄り、宮古と遠野を訪れた。2011年、2012年の頃を思い出す場面が多く、胸にじんとくるものがあった。

以前より気になっていた山田町の「鯨と海の科学館」にも立ち寄ったが、度重なる災厄とそれを乗り越える人々の力を確認した。





懐かしい人々と再会するとお互い嬉しくてたまらなくなる。災害は怖ろしいが、こんな素敵なものをそっと置いていってくれる。あらゆることに感謝したくなり、生きる勇気と自信が湧いてくる。まるで奇跡のようなものだ。そんなことを多くの人々に伝えていけたらと思う。

つづく



精神科医の思うこと⑩

臨床研修医制度

松村 奈奈子

先日、旦那の通院で市民病院についていいたら、主治医の先生が「今日は研修医も同席でよろしいでしょうか？」と話され、隣には若い研修医が2人、メモ帳を手に診察室に座っていました。そうそう、私も研修医の時は上司の外来に同席したし、ちょっとベテランになってからは研修医を同席させて診察をしました。我々医師は、大学卒業後に2年間研修をする事になっていきますが、この臨床研修医制度、2004年に大きく変化して、その後も試行錯誤を続けています。私はいい感じに変化したと思っているのですが、いろいろ思う事があるので、今回のテーマは臨床研修医制度。

30年前、私が研修医の頃は、大学卒業後に国家試験に合格すると、大学病院などでは直接志望する科に就職し、2年間を研修医として過ごす医師が多かったです。ただ、関東を中心に、現在の研修医制度に様に最初の1~2年を内科・外科・小児科・産婦人科など身体管理に必要な主要な科で研修してから、自分の選んだ専門科目に進むというコースもありました。

私は関東の大学だったので、同級生の半分はいくつかの科で研修するコースに行っていました。先輩からも「いきなり精神科で研修医をするより、全身管理ができる医師になってから専門に行く方がいいよ」とアドバイスされました。

もちろん学生の頃に、全ての科を医学実習という形で1年程をかけてまわります。しかし、しょせん学生なので注射や採血さえもできず、ただただ見学が中心で何もできません。なので、現場での身体的な対応もできる医師になりたいという思いがあり、内科や外科での研修もしたいと思っていました。しかし、就職先の当時の大学病院の上司に相談すると「直接精神科での研修を始めた方が、精神科医としての視点が身に付く」「内科や外科の研修は必要ない」と言われ、私は、就職した大学病院で精神科に所属し、精神科だけを学ぶ研修医としてスタートしました。ただ、いざ医師として仕事が始まるとき、精神科の患者さんの身体的な急変で救急対応を求められる時もあり、そのつどあたふたをしてしまい、やはり身体的な科での研修は必要だったなあと感じていました。

おそらく、研修医制度を考える偉い先生方も現場での問題を把握され、医師として何を学ばせるべきかを考え2004年に内科・外科・救急と小児科・産婦人科・精神科・地域医療(保健所など)を必修科目とする臨床研修医制度が始まりました。つまり、2年間の決まった初期研修をしないと自分の専門としたい科に進めない事になったのです。

このラインナップを見た時、「ええっ、精神科が必修科目？」と精神科医が驚きました。いやー、もちろん、われわれ精神科医は全ての研修医に精神科の現場を見てもらいたいし、視点の違いを理解してほしい気持ちはあります。ただ、精神科は医療業界の中ではマイナーな感じで、総合病院などでも少数派です。我々の思いが伝わるとは思ってもいませんでした。当時、精神科の同期の食事会でも「いやー、必修になるとは思わんかったね」と盛り上がりました。

しかし、2010年にさらに変更あり、内科と救急と地域医療は必修ですが、外科・麻酔科・小児科・産婦人科・精神科はその中から2科選択の選択必修となりました。つまり、精神科は必修ではなくなりました。その後、2020年にまた変更があり、期間は各科ちょっと異なりますが、内科・外科・救急・小児科・産婦人科・精神科・地域医療が現在は必修科目となっています。精神科は再び必修になりました。精神疾患の増加や医療現場での精神科的視点の大切さを認識された事が、背景にあると言われています。

この制度が始まった2004年、私は総合病院の中のたった1人の精神科医として勤務していました。院長先生が「うちにも研修医がきてくれるよ、よろしく」と嬉しそうに話し、毎年数人の研修医を指導する立場となりました。ただ、当時は精神科の研修は精神科病棟での研修も必須なため、2週間は私の外来についてもらい、その後2週間は連携する別の精神科の病院で研修するというスケジュールでした。

基本は2週間ずっと外来で同席して診察を見学します。さらに、私はできるだけいろんな現場を見せたいと思い、特別支援学校や知的障者更生相談所の嘱託医もしていたので、支援学校の授業や発達検査の場面、ついでに児童相談所や母子寮(母子生活支援施設)なども見学してもらい、「こんな機会がないと、一生見る事は無い場所だったと思います」と研修医はけっこう喜んでくれました。2週間もずっと診察につくと、思春期の子どもの患者さんもいたので、精神科の患者さんは成育歴や家族背景が症状や治療に大きく影響している事を感じてくれたよう思います。最終日が近づくと、自然にひとりひとり研修医自身が自分の家族の事などを話し始め、なんとなく生い立ちを振り返る機会となることも多かったです。

そんな話の中で、ある時やってきた3人組の研修医の事が今でも忘れられません。

3人組、ひとりは精神科にやってきてすぐ「自分の父親は病院経営をしていて、僕は跡継ぎなんです」とさわやかに話す坊ちゃん研修医、もうひとりはじっと静かに話を聞いているが多い大人しい女性の研修医、3人目は挨拶をしなかったり、ちょくちょく遅刻したり質問をしてもやる気のない返答をする男性のぶっきらぼう研修医の3人でした。いつも女性の研修医が真

ん中に座り、坊ちゃん研修医とぶっきらぼう研修医は離れて座り、ふたりは会話もしません。ある日、ぶっきらぼう研修医が遅刻した時に、坊ちゃん研修医が「あいつ研修医の飲み会とか誘っても1回も来ないんです」「話しかけても、反応悪いし」とぶっきらぼう研修医を非難します。確かに、なんだか毎日がつまらなそうな、投げやりな感じの研修医でした。私も気になっていて、いつかゆっくり話をしないといけないかなって思っていました。

2週間の研修も終わりに近づいた頃、早めに外来が終わったので、なんとなくみんなで雑談になりました。坊ちゃん研修医が自分の成育歴や家族事を話し始めました。先週は地方に住む両親が京都で研修する自分に会いに来てくれて、家族でご馳走を食べた話をします。大病院の坊ちゃんとして大事にされてきた人生でした。女性の研修医もゆっくりこれまでの人生を話始め、お嬢様として大事に育てられたんだなあと伝わる内容でした。最後に、ぶっきらぼう研修医がぽつりぽつりと話し始めます。自分は母子家庭で、母親が父親を追い出した後、医師になる事を半ば強制的に決められて、教育を受けてきた事、研修医の給料も一部母親に渡していく事を話しました。聞いていた私を含む3人は、『彼が飲み会に参加しない理由』や『医師という仕事に真摯に向かえない理由』を理解しました。“そうか、金銭的にも厳しいし、育ってきた境遇の全く違う同僚とは話もなかなか合うわけもなく、宴会に行かないのか”“医師になる事は自分の意志ではなかったのか”と。そして、坊ちゃん先生を見ると“今まで何も知らずに非難して悪かった”という思いが表情から伝わりました。その後、3人は精神科の病棟のある病院に2週間の研修に行き、どう過ごしているのかなあとちょっぴり気になっていました。

3人組が精神科病院での研修を終えた頃、残業でひとり外来でこもっていると、大人しい女性の研修医がノックして診察室に入ってきました。「先生にお礼が言いたくて」と言います。「精神科の研修が楽しかったので、母親に話したら母親がぜひお礼を持って行きなさいと言うので」と豪華なクッキーの箱を抱えています。そして「あの後の事も、先生に話したくて」と彼女は続けます。ぶっきらぼう研修医が自分の人生を話した後、坊ちゃん研修医とぶっきらぼう研修医は仲良くなつて、その後の精神科病院での研修はとっても良い雰囲気だったそうです。研修先の精神科病院の近くに偶然、ぶっきらぼう研修医の離婚したお父さんが住んでいて、食事やカラオケに誘つてもらってとっても楽しかった事を面白そうに話します。近くの工事現場で働いていると思われる作業服姿のお父さんが用意した食事会は、決して豪華ではなかったけど、息子の同僚を一生懸命もてなそうと、いっぱい話しかけてもらって、とっても嬉しかったと彼女は続けます。お父さんは職場の仲間も呼んできて、カラオケではお父さんが軍歌を歌いだし、初めて軍歌を聞き、ぶっきらぼう研修医もこれまで見たことのない笑顔で楽しんでいた、という話でした。離婚した父親には母親の反対でなかなか会えなかつたと聞いていたので、へんぴな場所にある精神科の病院が、そんな再会の場を与えてくれた偶然にもびっくりしました。それは、久しぶりに会う“医師”になった息子を、大切にそして自慢に思う父親の純粋な思いが伝わるとってもいい話でした。そんな事になっていたのかー、想像を超えた展開に驚きました。「ほんとうに、あの2人、仲良くなつたんですよ」と念を押すように言い、彼女は笑います。寡黙で大人しい研修医でしたが、ちゃんと仲間の心の動きを感じとり、見守っていたんだなあと思

います。そして気になっていた私に、わざわざ報告しに来てくれた事にとても感謝し、この展開に私は感動しました。私はこの3人組の研修医に出会えて、本当によかったです。

臨床研修医制度が変わって、2週間ずっと一緒に過ごし、そこそこ仲良くなつて一緒にご飯にいったりと、若い研修医との時間は私にとっても面白かったです。そして、逆にいろんなことを教えてもらったな、と思います。たまたま研修医で来た先生と仲良くなつて20年、今でも毎年会っている元研修医もいます。また、研修医がいろんな科で研修するので、研修医が「先生、眼科の先生と話が合うと思いますよ」と眼科や他科の先生と繋いでくれて、病院内でも女子会ネットワークを作ってくれたりと、この制度のおかげで病院内に仲良し女医が増えました。研修医が繋いでくれた眼科の先生とは、今では家族ぐるみのお付き合いをしています。

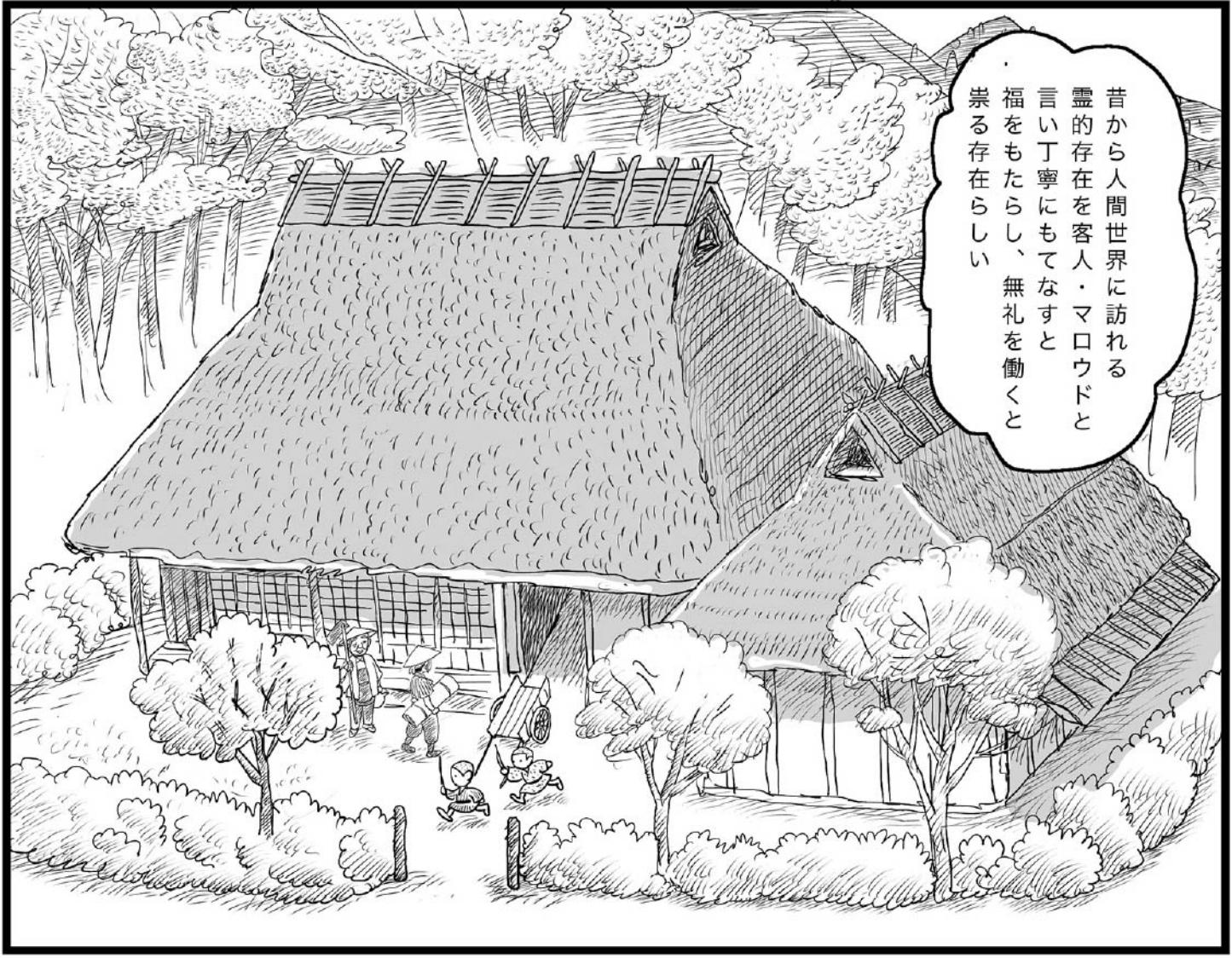
研修医が同席していると、患者さんは緊張して治療的には進まないし、患者さんの症状や経過の説明を研修医にするため、仕事量は増えるしでとっても大変な2週間です。しかし、研修医には精神科の視点での見方を学んでもらい、私も研修医との交流で多くの事を学んだし、多くの人と繋がる事ができました。ほんと、この制度に感謝しています。

ただ、小さな総合病院だったので、ひとりの精神科医が研修医に密に関わる形となりましたが、大学病院などでは複数の精神科医が専門分野別に教育するのでアカデミックでかなり違った感じの研修となります。研修医がいろんなタイプの研修を選べるので、その点もいいと思います。

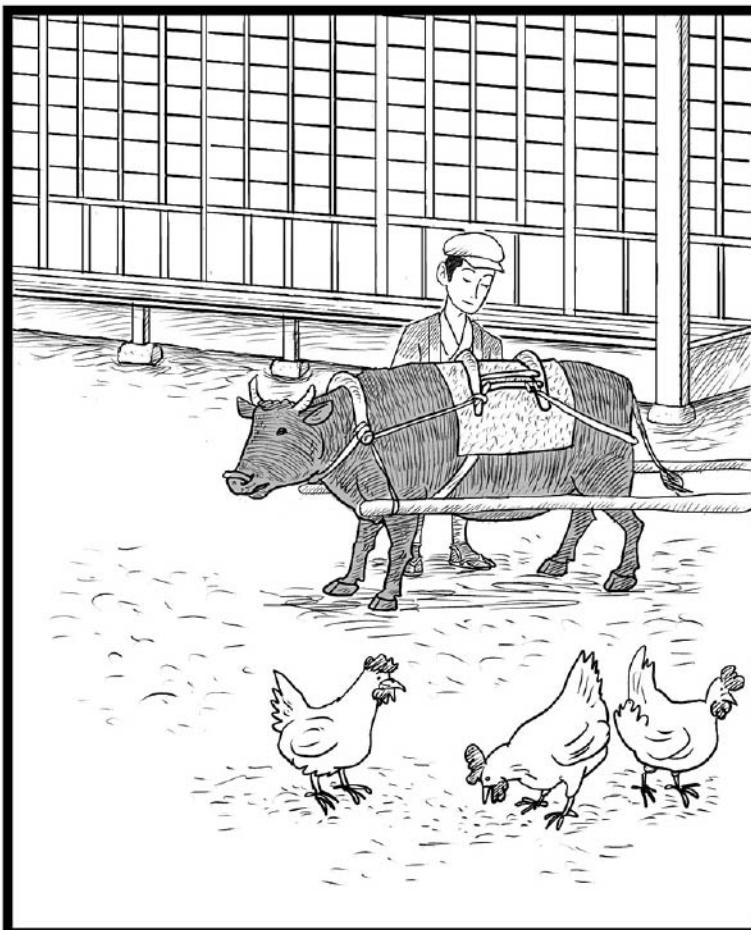
この臨床研修医制度、もちろん問題点が無いわけではないけれど、ほんと、今後も続けていいなと思っています。

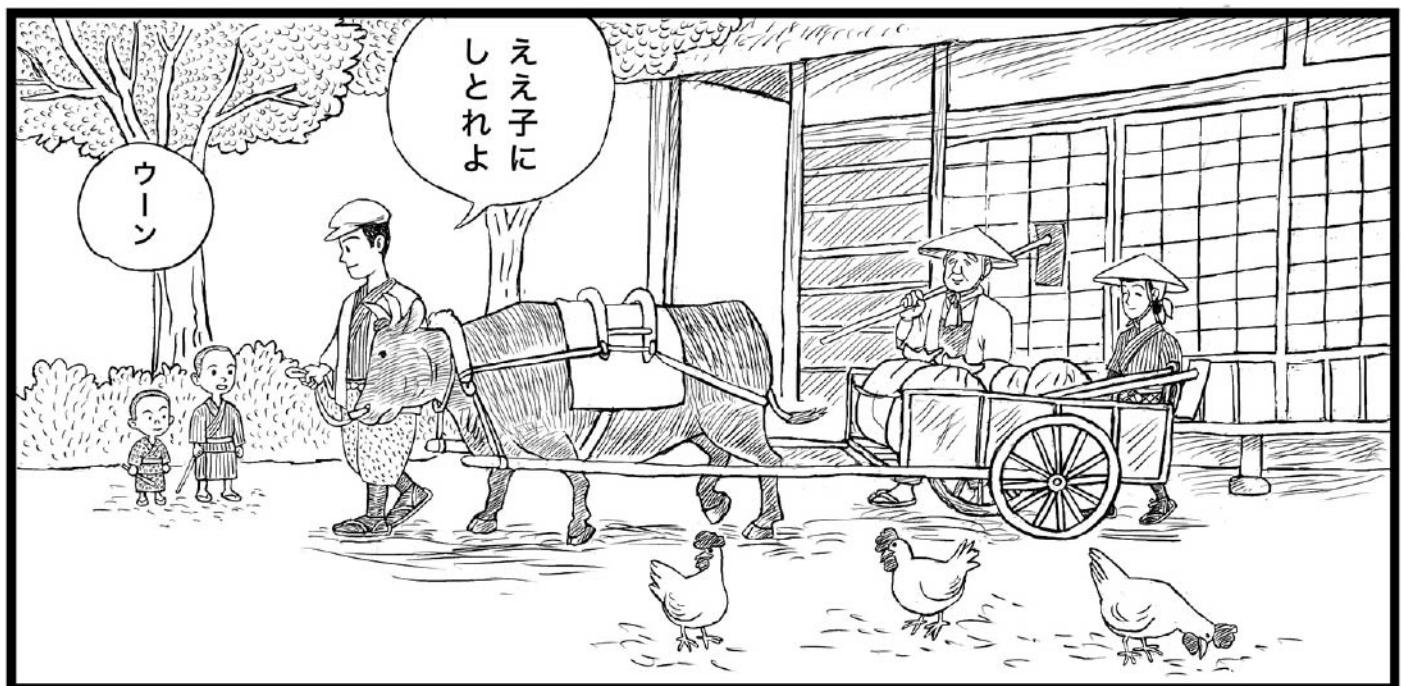
お客様

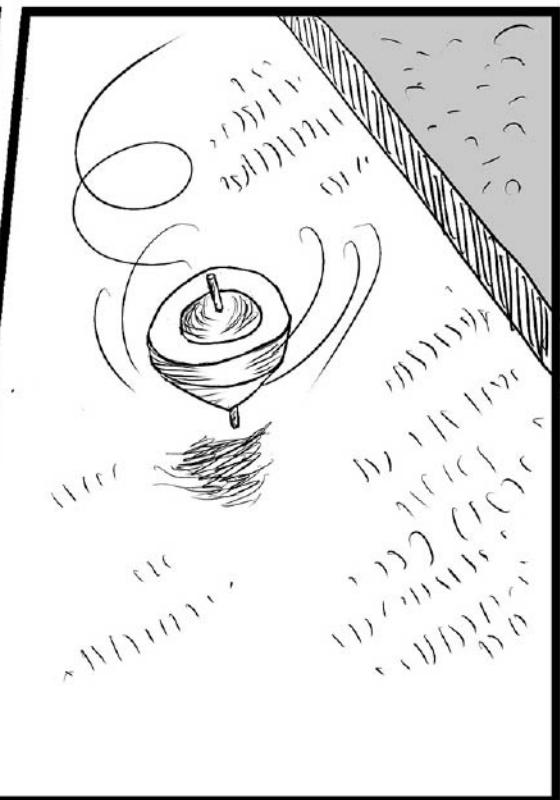
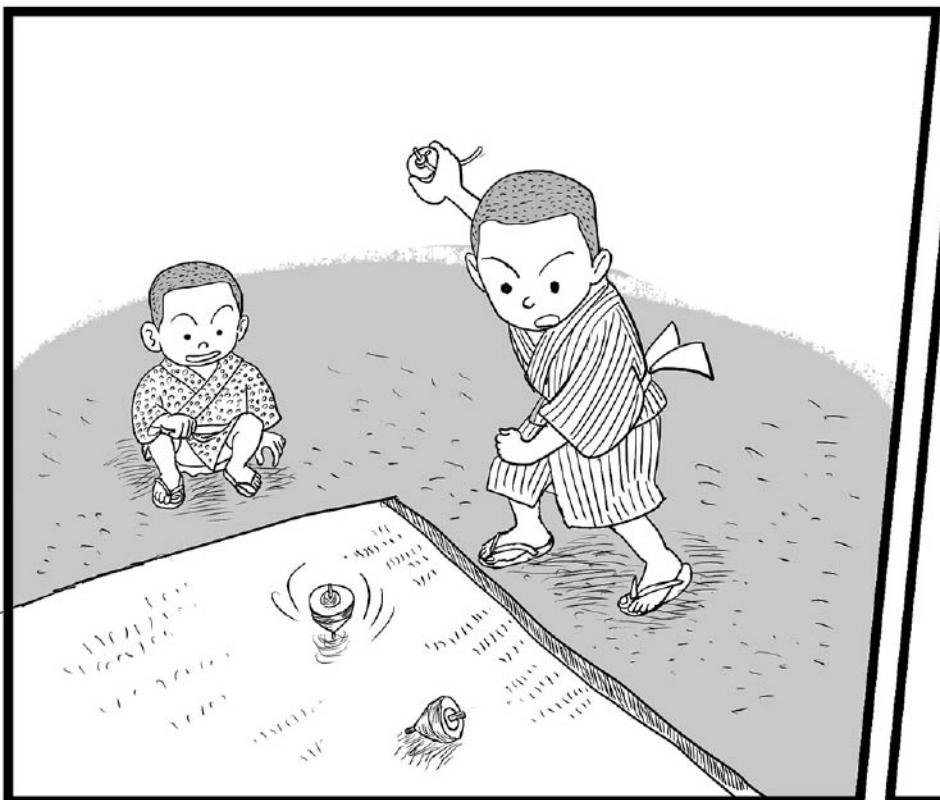
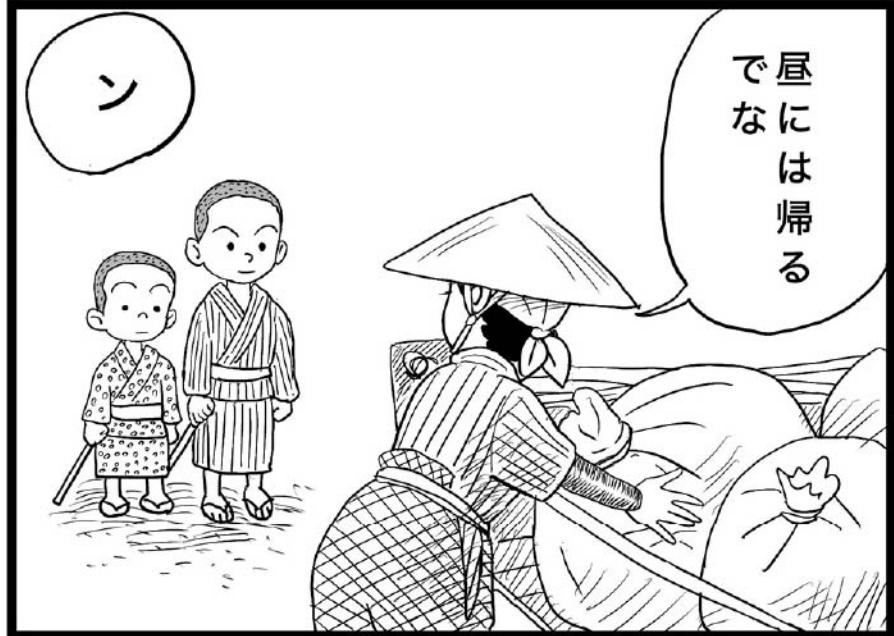
「座敷ぼっここの話」 宮沢賢治
脚色・漫画 柳たかを

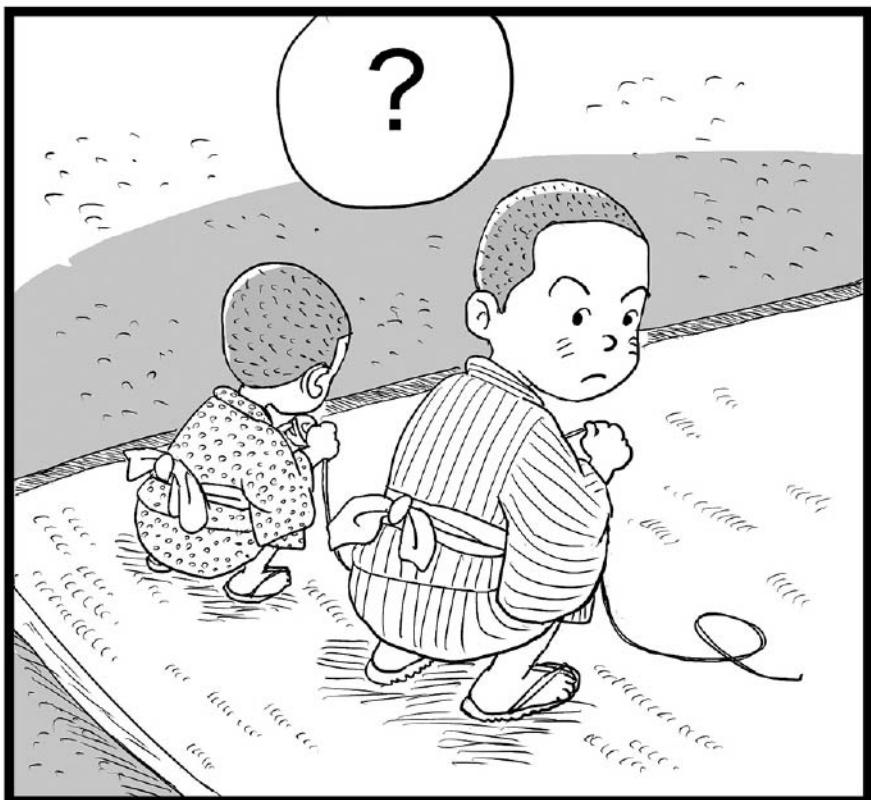
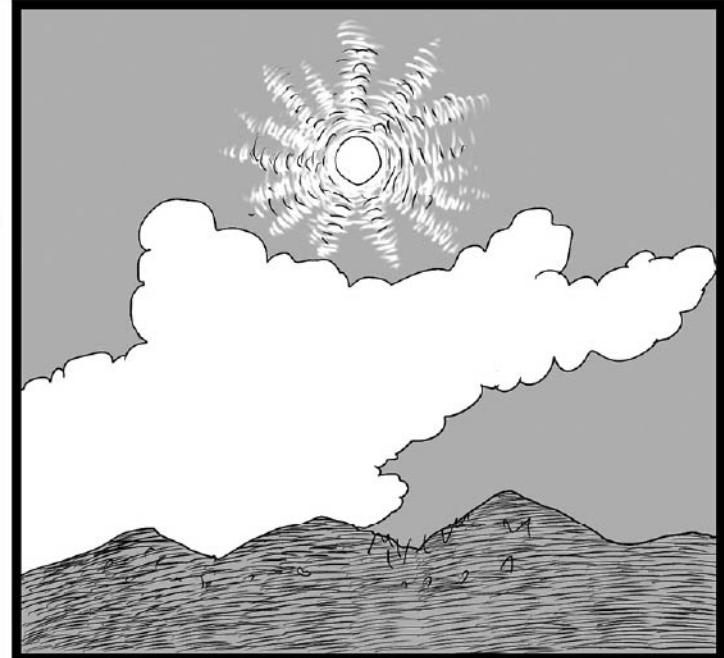


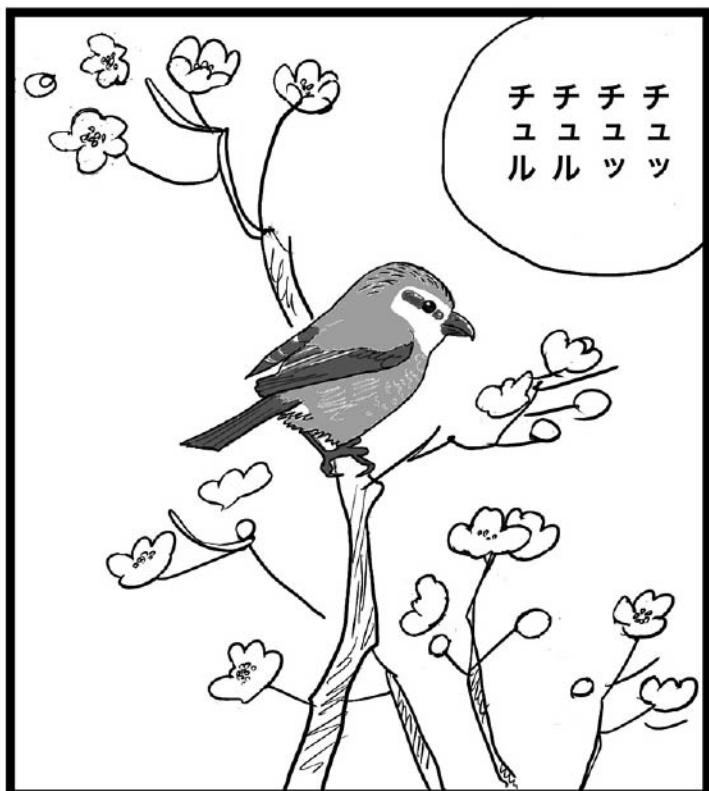
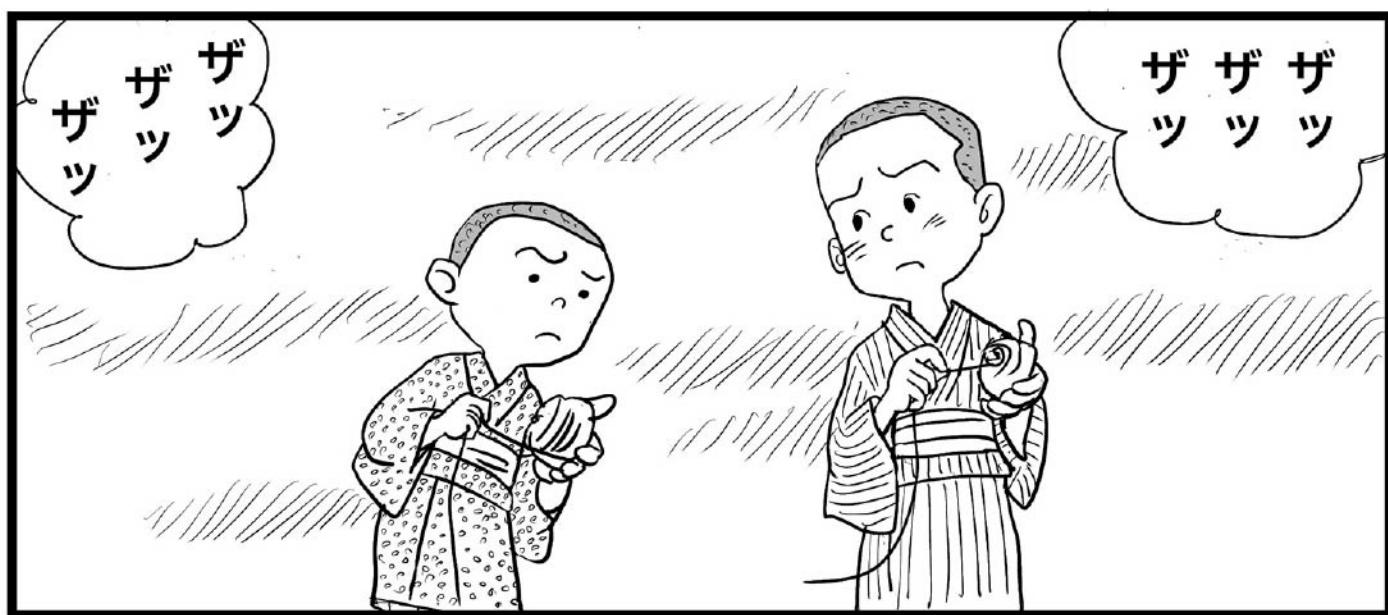
昔から人間世界に訪れる
靈的存在を客人・マロウドと
言い丁寧にもてなすと
福をもたらし、無礼を働くと
祟る存在らしい

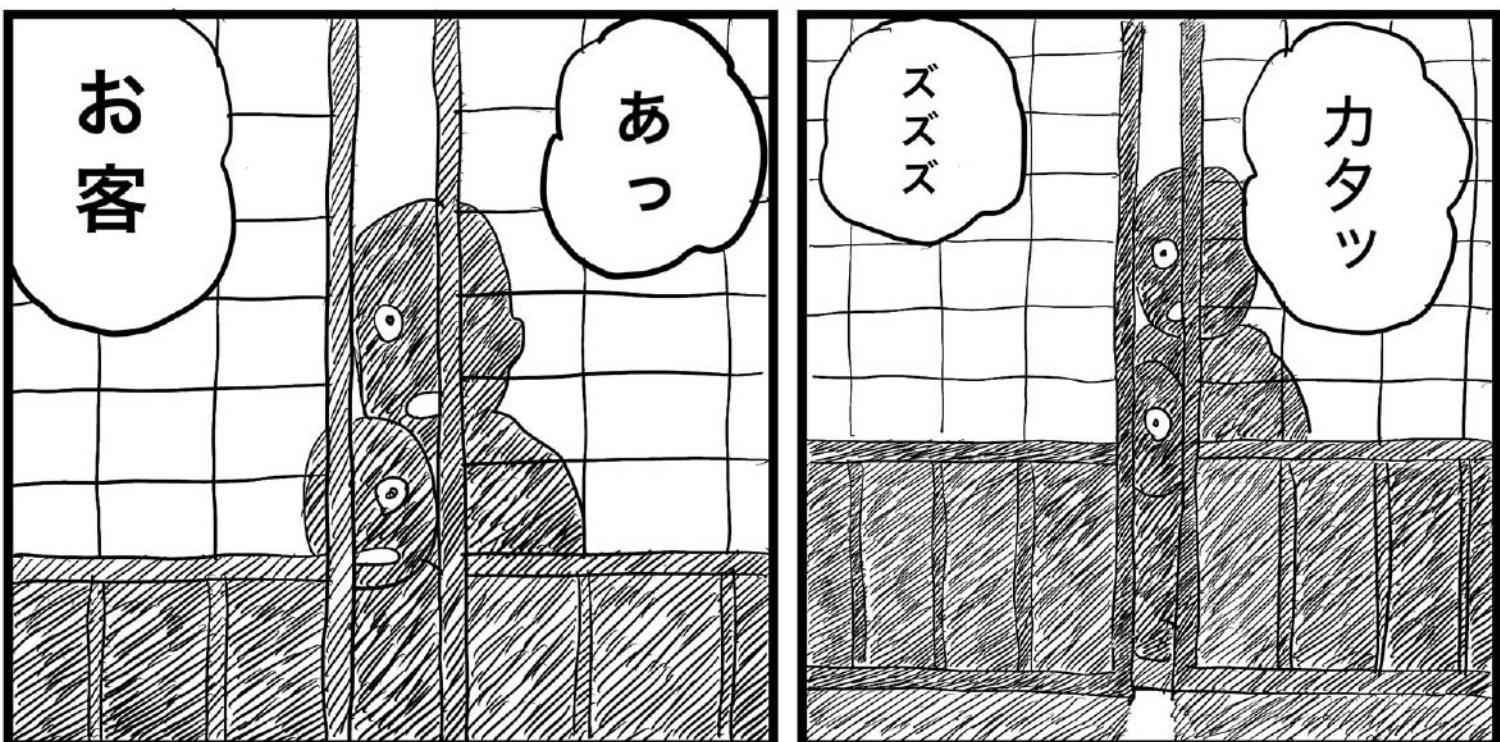
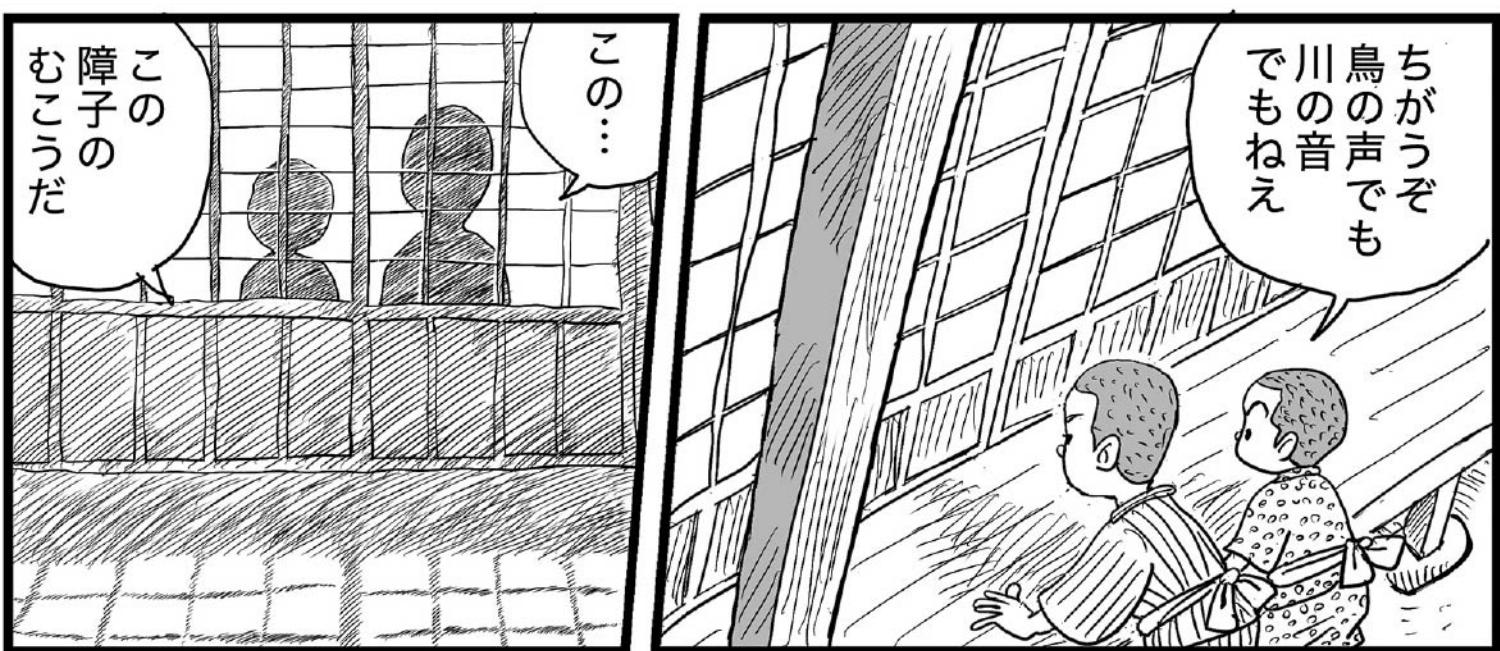
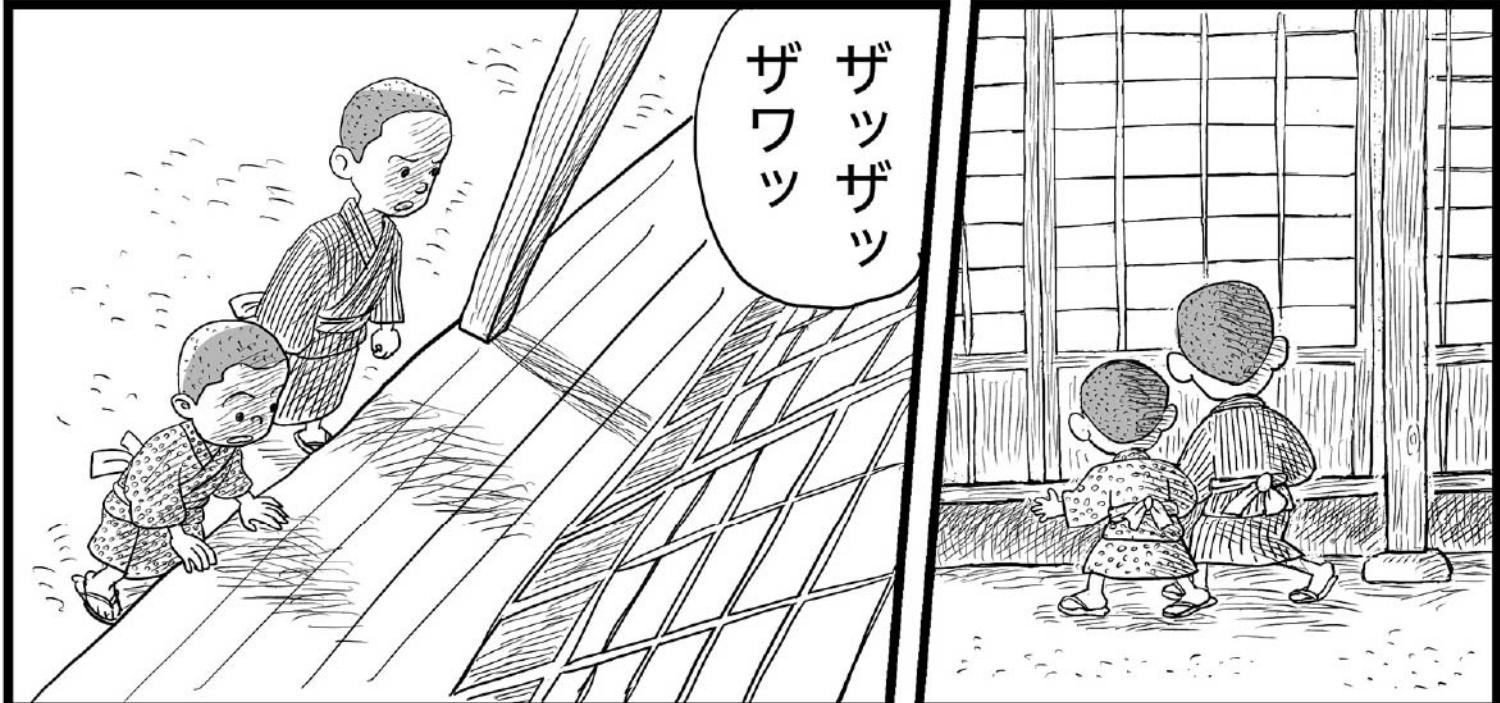






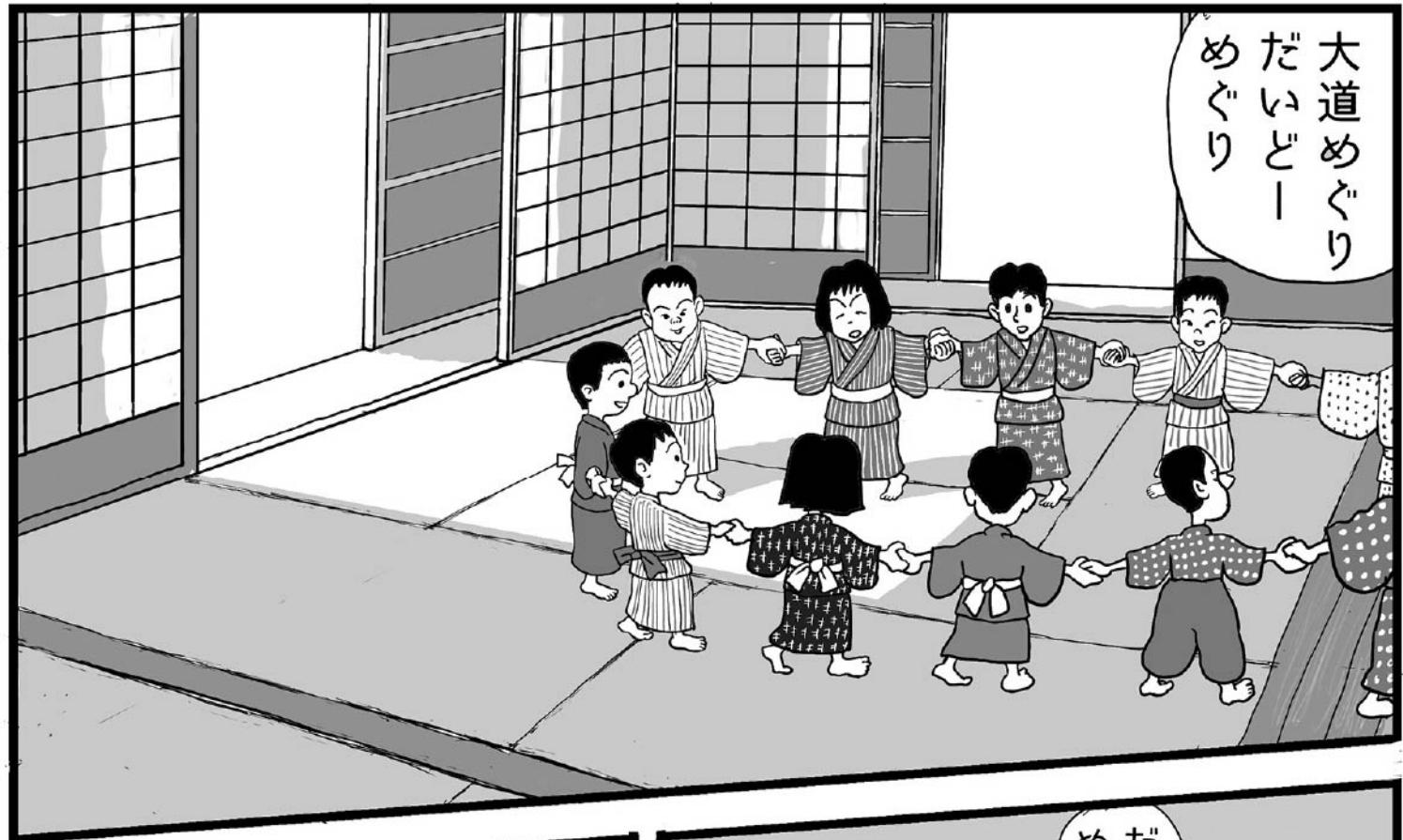


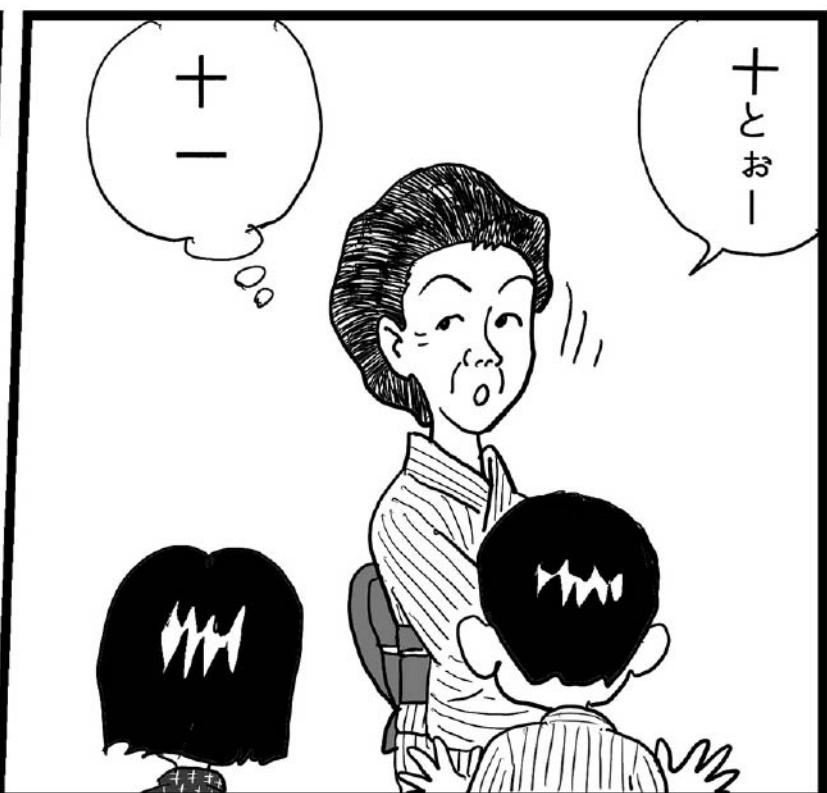
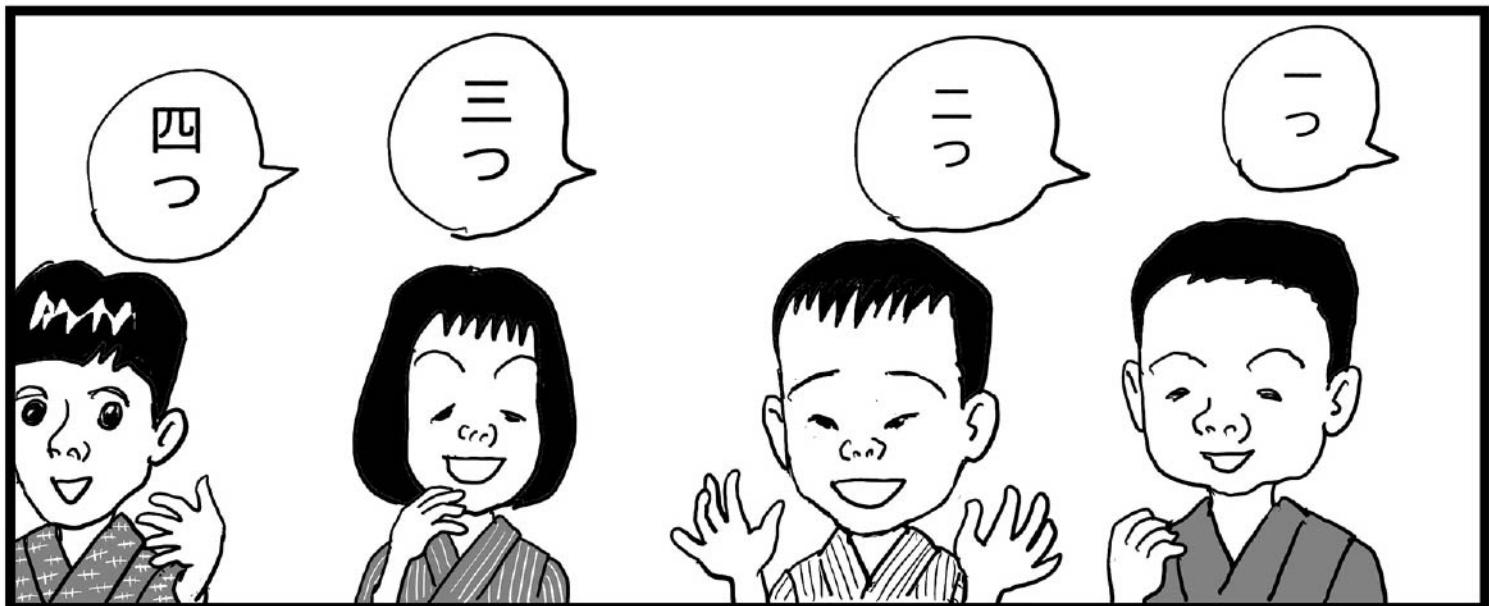




お客
・
11人いる

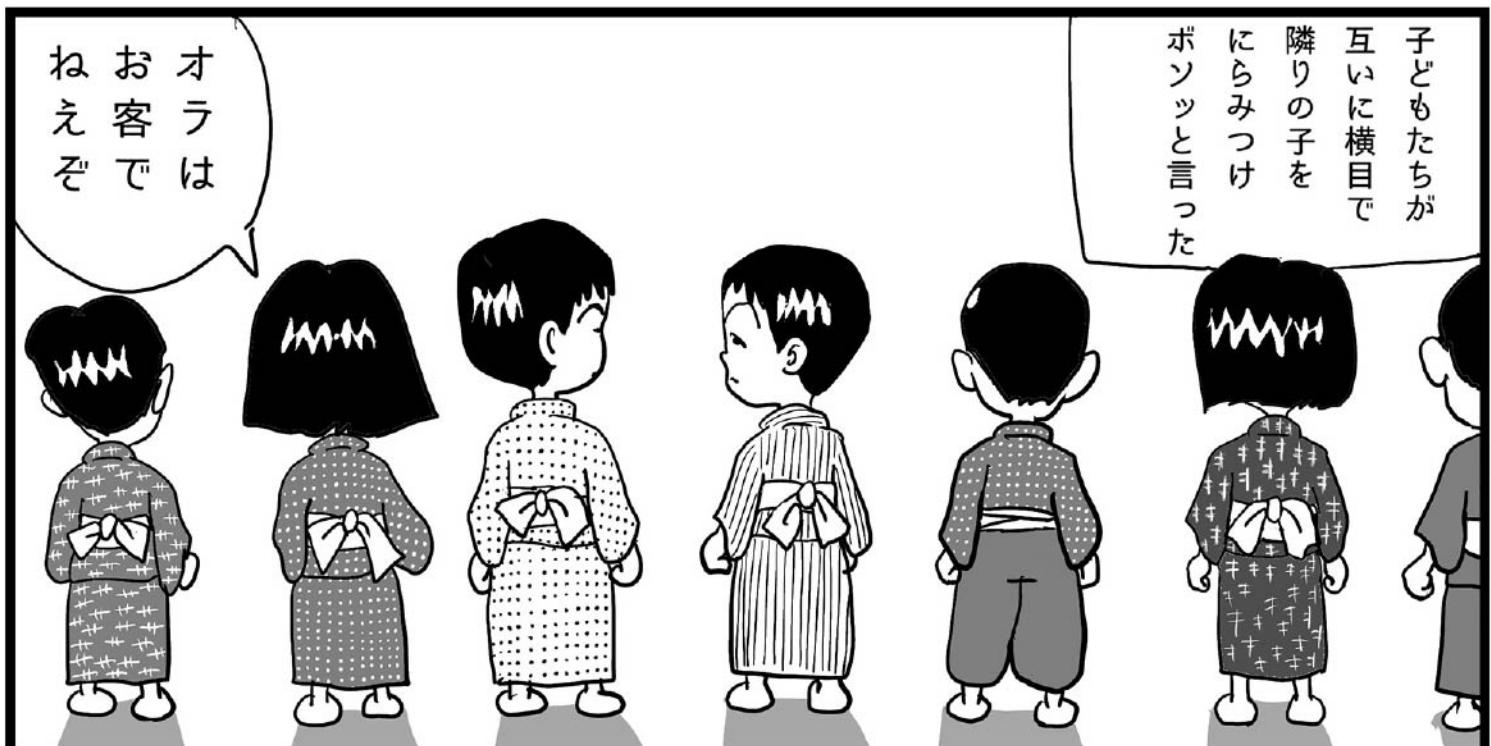
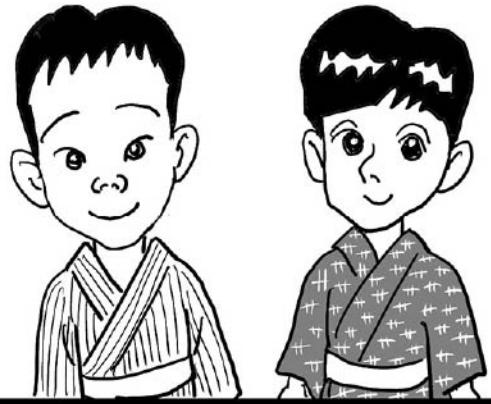
「座敷ぼっこの話」 宮沢賢治
脚色・漫画、柳たかを





4
3
にん

ひ
ふ
ひと
た
あ
一
り
り
もういつ
ぺん
数
えるかね





こんなのがお客様です



つづく



ねおオ
え客ラ
だでも

ねおオ
え客ラ
ぞでだ
つて

あおオ
る客ラ
もでが
んか

心理コーディネーターになるために Vol.20

山下桂永子



☆SSW(スクールソーシャルワーカー)からの電話

数年前のあるとき、小学校の SSW の先生から電話があった。学校で男子児童 A さんが問題行動を頻繁に起こしており、教育センターにつなげたいというものであった。

A black and white line drawing of a young child sitting in a high-backed chair at a desk. The child is wearing a light-colored shirt and dark pants. They are leaning forward, resting their chin on their hands which are clasped together on the desk. The desk has a lamp and some papers on it.

Aさんは小学4年生である。低学年のころからトラブルが多く、同学年の子に暴力をふるったり、学校の備品を壊したりするという。学校は保護者と話し合い、医療受診をすすめて Aさんは ASD(自閉スペクトラム症)の

☆教育相談申し込みと初回面談

SSWからの電話の数日後、母からの教育相談の申込みがあり、初回面談が設定された。

初回面談の母の話によると、母は3人の子育てと仕事で多忙を極める中、Aの起こすトラブルによって、何度も小学校に呼び出され、謝罪、相談、医療受診に行脚する日々。学校からのトラブルの報告の連絡が毎日のようにあり、「先生もお仕事だからしょうがないんですけど、Aが悪いことしてるからしょうがないんですけど、もう先生と話をするのもしんどくて。。。」

A 自身も、粗暴なイメージが周囲に定着してしまい、人間関係がうまくいかないこと、トラブルによる先生からの指導が続いたことで担任や他の教員に対して不信感を抱いてしまい、余計に学校ではかんしゃくを起こしてしまう。Aの「どうせ先生は聞いてくれへんしわかってくれへん」という言葉に母も同じような気持ちになってしまふ。先生との関係もよくない、母としては、服薬させても叱っても諭しても改善が見られず、「学校に言われて病院に行ったけど、薬も本当は飲ませたくない。依存してやめられなくなるんじゃないかなと思つて」「A は『先生が話を聞いてくれない、わかってくれない』というけれど、私もAのこ

とが全然わからない」と固く疲れた表情で話されていた。

☆学校からの紹介

学校からの紹介の場合、連絡を頂くのは SSW か管理職からが多い。最近ではそれに加えて、学校の生徒指導や支援コーディネーターの先生からのこともあるが、紹介内容を伺ったあと、まずは、教育センターへの紹介が、ケース会議など校内の管理職や関係者によって検討、共有されたものであるのかどうかを確認する。



その検討と共有がなされていないと、教育センターに来ることが誰のニーズで、誰からの発信であるのかが曖昧になる。曖昧なままの紹介だと、教育センターにつなぐ意図と必要性が保護者にも子どもにも曖昧なまま伝わることになる。

結果として保護者が「教育センターで発達障害かどうか見てもらえるから行ってみてと懇談で先生に言われた」などという、誤解をしたまま教育相談を申し込んでくることになってしまう。もちろん学校の先生は決してそんな雑な言い方はしていない(はずな)のだが、「誰が困っているのか、その困りごとに対して、学校の指導はどのようなものであったか、なぜスクールカウンセラーや他機関ではなく、教育センターへの紹介なのか」ということを丁寧に説明してもらわないと、保護者の受け取りも雑になってしまう。

そうなると教育センターとしては、その雑な理解を訂正しなければならないのだが、そうすると保護者の方にしてみれば、勇気を出してセンターに連絡したのにどういうことなのか、結局どうしたらいいのかと混乱させてしまうことになるのである。

Aさんの場合は、SSW が病院受診や教育センターへの紹介などを母に丁寧に説明してくれていたため、スムーズに紹介から教育相談申し込みが行われたが、そもそも学校と家庭の関係がうまくいっていない場合は、学校からの紹介電話があっても、保護者から連絡が来るのは半年後などであったり、そのまま連絡がないこともある。



☆学校と家庭のコミュニケーション

教育センターに、担任不信や学校不信になってしまった保護者や子どもが来ることは多い。大抵は、学校と家庭のコミュニケーションがうまくいっていない、そもそもコミュニケーションが取れていないことが多い。

近年、保護者と学校の先生が顔を合わす機会は以前に比べると格段に少ない。先生と子どもは毎日会っていても、先生と保護者は何か問題がなければまともに顔を合わすことはない。欠席の連絡はスマホアプリから行われ、参観は仕事で出られない保護者も多く、家庭訪問は希

望制で行われていなかつたりもする。働き方改革は大事だが、それによってさまざまな関係性が失われているのも事実である。

そんな中で何か問題が起きてしまうと、問題解決にむけての家庭と学校で協力体制を作ることは難しい。顔も知らない、まともに話もしたことがない人たちが急ごしらえで集まって、子どものトラブルという無理難題に挑まなければならないなんて心細いことこの上ない。しかも何とか家庭と学校の協力の元、子どもの問題行動が落ち着いたとしても、また年度が変わって、新しい担任やクラスメイトとの中でうまくいかないことがあると、昨年度はうまくいった対応も、次はうまくいかないこともある。いくら昨年度からの引継ぎがあっても、引き継がれるのは客観的事実がほとんどで、昨年度うまくいった指導の意図や、前担任との関係性が引き継がれるわけではないので、関係づくりからのスタートである。



☆Aさんのその後

Aさんと母は母子並行面接で教育センターに通うことになり、母は多忙な中でも、休むことなく、毎回電車に乗り、急な坂道を登って来所してくださっていた。そのことについて労うと「菓子折り持って謝罪行脚に比べれば全然楽です」と笑って話されていた。また、教育センターに来るときは必ず学校に連絡をして、Aの学校での近況を担任に聞いてから来られるようになり、これも敬服して労うと、「トラブル

の話もあるんですけど、学校からの電話にビクビクするより、こちらから聞いておく方が楽かなと思って」「ここで先生から聞いてきたAのことを話すことって謎解きみたいなんですよね」とくだけた表情で話されるようになった。

そんな中で、学校と教育センターでAさんについて定期的に情報交換を行うようになった。特に学年が上がるときは、母と話し合った上で、誰と仲が良かったか、誰と、あるいはどんなシチュエーションでのトラブルが多くかったのか、母の思い、子どもの気持ち、教育センターでの様子などを学校に伝えていった。

その後、Aは中学校では部活で友人ができ、担任との関係も良好になり、トラブルもかなり少なくなっていました。中学校2年の終わりごろには「初めて1年間学校からトラブルの電話がなかったんです！」と母が嬉しそうに話し、A自身も、以前はなかなか自分の状態や心情について語ることができなかったのが、徐々に「どうすればよかったか」「どんなときにうまくいかないのか」など意識をもって話をすることができるようになっていった。

服薬についても「自分はテンションがあがるとやらかしてまう」と言い、部活の試合や、大きなイベントのときなど自分の意志で服薬をするなど、自分の状態を理解したうえで服薬コントロールをするようになっていった。

☆意図の橋渡し

学校との連携においては、子どもへのアセスメントの結果や保護者の思いを伝えるだけでなく、先生からも学校での様子やトラブル時の指導とその意図を伺うようにしている。指導そのものよりも、指導の意図が保護者や子どもに伝わっていないことで、先生と子ども、学校と家庭の関係性がうまくいかないことが多いと感じるからである。どんなに適切な指導であっても、その意図が伝わっていないと子どもには単なる嫌がらせのように感じてしまうことがあります。それを聞いた保護者にとっても、我が子への理解がないと感じてしまうリスクが高いのである。そして、その意図をいつもより少しだけ丁寧に説明をしてもらうことで、先生が保護者や子どもに声をかけやすいようにしていくことを目指している。



また同時に、保護者には、不信感をそのままにせず、どういう意図をもってその指導がなされたのか、それを受けた子どもの状態を「困り感」として先生に伝える方法や、「我が子への理解」という学校への要求を「提案」として伝える方法と一緒に模索して、先生とコミュニケーションを取りながら、お互いの意図が伝わりやすくなるような工夫を考えることをしている。そうすることで家庭と学校のコミュニケーションの橋渡しができればと思っている。

Aさんの母親は、担任とコミュニケーションを取るように努めていた。そうすることで、担任も母にAのことを報告するためにより意識的にAさんの様子を丁寧に見守ってくれるようになったのではないかと思う。そして学校の先生もそれに応え、Aさんや母にもよく声をかけてくれていた。特に中学校においては、(Aさんにとってはトラブルが起きやすい)行事のときに、Aさんだけでなく母にも担任以外の生徒指導や部活の顧問なども声をかけにいってくれていたらしい。そうすることで、子どもも親も落ち着いて行事に参加できたように思う。

教育センターの教育相談は、学校にとっては外部機関なので、学校とは異なる援助ができる一方、お互い何をやっているのか見えにくいので、それぞれの援助がバラバラすぎても児童生徒やその保護者を混乱に陥れたり、妙な学校と家庭のパワーゲームに巻き込まれるリスクもある。児童生徒やその保護者が教育センターに相談に来ることが、学校と家庭の間に溝を作ることがあってはならないといつも肝に銘じていなければと思っている。



先人の知恵から

50

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸由里子

今回は「ふ行～ほ行」まで以下の10個。今回で50回！長々引っ張っているなど反省しつつ、途中で辞められない性格なので引き続き飛ばし気味で書いていきます。最後まであと少し、どうぞお付き合いください。

- ・冬来たりなば春遠からじ
- ・故きを温ねて新しきを知る
- ・付和雷同
- ・下手が却って上手
- ・下手な鉄砲も數打てば当たる
- ・下手の考え方休むに似たり
- ・咆哮する者必ずしも勇ならず
- ・坊主憎けりや袈裟まで憎い
- ・墨子糸に泣く
- ・仏の顔も三度

＜冬来たりなば春遠からじ＞

今は不幸でつらくても、それを耐え忍んで頑張れば、やがて幸せがやってくるということのたとえ。寒く厳しい冬が来れば、その次の暖かく明るい春が来るのも遠くはないという意から。

出典 シエリー

最近、子どもたちは白黒のみで判断する傾向があるように感じる。辛いことが一つでもあると、「もう立ち直れない」、「もう無理」とあきらめてしまう。その結果が不登校の増加ということにもつながっているだろうと思う。辛い時期というのは誰にでも、いつでもあります。其処を耐えたり何とかやり過ごしたりすれば、楽しい時期も来るのに、そこまで我慢が出来ないようだ。そこでこの諺を紹介する。みんなが生まれるす

っと以前から、人は同じことに悩み、苦しみ、時を過ごしてきたのだと。日本は四季がある。冬の次は春、そして巡り巡ってまた冬は来る。それでも冬のあとには必ず春が来る。ずっと春ということは無いが、ずっと冬ということもない。今が辛くても、そのあと必ず楽に思える時、楽しいと思える時が来るとわかつてもらえるように。

英語では・・・

When winter comes, spring is not far away.(冬が来れば春はそう遠くない)

元々は、If winter comes, can spring be far behind?の一節。

<故きを温ねて新しきを知る>

前に学んだことや昔の事柄をよく調べ研究して、そこから新しい知識や道理を発見すること。孔子が先生の資格として述べた言葉の「温故知新」を読み下したもの。「温ねて」は、「あたためて」とも読む。

出典 論語

この頃思うのは、昭和は良かったということ。それを言うと年寄りの戯言と言われかねないが、昭和の50年代ごろまでが良かったと思うのだ。先ず携帯電話が一般的では無かった。世の中の動きは今よりずっと緩やかだった。頑固おやじがちゃぶ台をひっくり返す時代だった。親に反発して子どもが暴れる時代だった。子どもと大人の境界がはっきりしていた。カードローンよりも現金主義が主流だった。分相応ということが普通だった。情報に翻弄されることも少なかったし、情報源は新聞とテレビ・ラジオニュースだった。裏アカだとか、ネット

でのいじめだとか、悪い噂が一瞬で広がることもなかった。今みたいに夏が暑くなかった。紙媒体が主流で、漫画も含む本を買う時代だった。フェイクニュースなんてなかった。ゲーム依存やネット依存などと言う病気も無かった。ググることはできなかつたから、地道に図書館や辞書で調べた。そこには無駄があった。無駄はゆとりでもあった。

新しいことが悪いというわけではない。新しいものはとても便利であるし、時短にもなる。今ではAIがなんでも答えてくれる。フェイク動画を素人で高齢の私でも作れる。科学の力は凄い。情報の伝達スピードも、ナノテク等で更にアップしている。パソコンやスマホは本当に便利で、今の我々の仕事にとってなくてはならないものになっている。でも新しい機器は大人の仕事や生活を効率化し、向上するための物なのではないだろうか？ゲームは大人も子どもも楽しめるし、その内容、リアル感はどんどんレベルアップして、それはそれで良いとは思う。楽しみはいつの時代も必要だし、内容は時代とともに変遷するのは当然である。

ただ、子どもたちのためには、スピードや便利さだけではなく、無駄も必要だと思う。ゆとり教育という時期があった。それが失敗だったと人は言う。教育内容にゆとりを持たすことではなく、速さだけを求める、子どもの時はじっくり考えたり、試したり、遊んだり、失敗したりする時間のゆとりが必要なのではないだろうか？

我々は、過去に何を学んできたのだろう？そして、そこからどんな新しいことを発見してきたのだろう？科学の発達と人の心の豊かさは比例しないのかもしれない。

子どもたちを子どもらしく過ごさせるための手立ては、過去に学ぶべきなのではないかなとつとに思う。

＜付和雷同＞

自分にしっかりとした考え方がない、軽々しく他人の意見に同調すること。単に「雷同」ともいう。不和＝わけもなく他人の言葉に賛成すること。雷同＝雷が鳴ると万物がそれに応じて響く意から、むやみに他人の言葉に同調すること。

出典には「^{そうせつ}動説する母れ、^{なか}雷同する母れ。
(他人の説を盗んで自分の考えとしてはならない、むやみに他人の説と共に鳴してはならない)」とある。「尻馬に乗る」「同じで和せず」は類語。

出典 礼記

ネット情報に安易に同調し、いいねをおしまくり、拡散する人々をけん制する諺である。それゆえ、子どもたちや父母たちに伝えることが多い。いじめ問題も絡む。

これだけ様々な情報が流れいたら、何が真実かわからない。フェイクニュースもある中で、有名人の誹謗中傷に安易に同調したり、あそこの何々がおいしいという情報を得て、店前に長蛇の列ができる様子を見ていると、時々怖いなと思う。某国と某国が日本を分割するなどと聞いたら、防衛をもっとしっかりして、攻撃力を上げなければと思う人が出ても何の不思議もない。いきなり他国に攻め入る国がある世界情勢の中では、さもありなんといったところだ。

しかし、他人の意見やあふれる情報に左右されすぎると自分を見失わないと不安になる。特に子どもたちは未熟な状態であ

る。信じ込みやすいし洗脳もされやすい。大人は子どもたちを守るために、もっと慎重に情報を聞き分け、子どもたちにその情報の真偽のほどを説明できるように、先に学んで行かねばならないのではないか？

付和雷同が、良い意味でつかわれることは無い。警告、注意として使われる。筆者もスマホを手放せない子どもたちに、YouTubeばかり見ている子どもたちに、注意を促す意味で、この諺を使っている。勿論保護者達にも、子どもたちを間違った方向に導かないために、この諺を紹介している。

＜下手が却って上手＞

自分が下手だと思っている人は、良い仕事をしようとして念を入れるので、上手なものよりかえって仕上げが巧みなことがある。また、下手だと、無理をせず危険をおかないので、身の安全を保つことがあるということ。

自分は取り柄がない、不器用だし、ルックスもいまいちだし、センスも悪いし、頭も良くない、運動も苦手、そんなことを訴える子どもに度々会う。何でもできる器用な人は一握りしかいないが、一際目立つから、比較対象になりやすい。そんな人と比べるから自分がみじめになり嘆く。その嘆きの先には「生きていても仕方がない。死にたい。消えたい」となってしまう。非常に短絡的だが、人から自分がどのように見られているか、どう受け止められているかに過敏な子どもたちは、自分に取り柄がないことで存在価値を見出せなくなってしまう。

目立ちたいわけではない。目立つといじ

められる可能性があるから、目立つことに消極的である。程々に存在感を持ちたいのである。いるのかいないのかわからない、空気みたいな存在になりたがる子も多いが、それでも心の奥底では認められたいと思っている。

どんな子にも取り柄はある。よく気が付く、優しい、真面目、丁寧など。目立たないところで良さを發揮している子は沢山いる。そういう子についてはよく観察していないとその子の良さは気づかれない。特に不器用な子については、この諺を使って「そんなに自分を卑下することは無い」と伝えている。不器用な子は、本当に一生懸命頑張って、根気強く何かを成し遂げようとしていることが多い。時間が足りないことがあるので、それを保証してあげると、面白いもの、素敵なものを作り上げることができるし、出来栄えはさっさとできた子よりずっと丁寧だったりするのだ。

そういう意味で、この諺は、何の取り柄もないと思っている子に使っている。

＜下手な鉄砲も数打てば当たる＞

数多く何度もやっていれば、成功することもあるということのたとえ。下手な鉄砲打ちでも、数多く打っているうちには、まぐれで命中することもあるという意から。まぐれあたりをひやかしたり、自分の成功を謙遜するときなどに用いる。「下手な鉄砲も数打ちや当たる」ともいう。

物事を一回失敗するとあきらめてしまう子どもや大人に、この諺を伝えている。繰り返し頑張っていると、何度目かには成功する、上手くいく。それはゲームでも、スロー

ンでも、勉強でも、何にでも言えることだろう。さっさと諦めて次にいこうという人が増えたように思う。でも一方で、粘り強く頑張っている人もいる。どちらが良いということではなく、たまにはちょっと繰り返し頑張ってみても良いのではと思うから。一度成功すれば、もう少し頑張ってみようかなという意欲にもつながるだろう。

＜下手の考え方休むに似たり＞

良い考えが浮かばないので、いつまでも考えているのは、時間の無駄であって何の役にも立たない。何も考えずに休んでいるのと同じであるという事。囲碁や将棋で、相手が長考しているのをからかっていこうとば。

この諺は度々使う。とにかくぐるぐる思考の子や大人が多いので、この諺を伝えて、脳のエネルギーの無駄使いをやめようと言っている。脳が疲れ果てれば鬱に移行しやすい。眠れなくなることも多い。しかも考えすぎると大抵悪いほうにしか思考が向かなくなる。マイナスに向かう思考であるならやめたほうが良いのだ。やめさせるためにはこの諺が便利である。古くから言われていることは真であると捉えやすい。以前にも伝えたが、発達障害がありそうな子は結構諺にはまってくれるし、そういう子にぐるぐる思考が多いから。

英語だと「馬鹿の考え方」となってしまうのであまり使えないが、日本語の方はそういう意味合いにならないので使いやすい。

英語では・・・

Mickie fails that fools think. (馬鹿の考

えていることは大抵物にならない)

＜咆哮する者必ずしも勇ならず＞

わめきたてたり、ほえたりして強そうに威張り散らしている者は、本当の勇者とはいえないということ。咆哮=たけり叫ぶこと。猛獸などがほえること。出典では、この後に「淳淡なる者(大人しい人)必ずしも怯(いくじなし)ならず」と続く。

出典 抱朴子

発達に問題を抱えた子が中高生くらいになると、突っ張るのが格好良いと思って、大声を出して周りの子を威嚇したりすることがある。大声に周りはびっくりするので、その様を見て自分が上に立ったような気になっているのである。そういう子にこの諺を伝える。ついでに「淳淡なる者～」の話もする。誤学習をしてしまうと、中々修正が効かないのだが、何度も繰り返し、根気よく、この諺を使いながら説明している。「弱い犬ほど良く吠える」というのも同様に使う。

また、世間でも SNS や YouTube でいろいろわめいている人が居るが、そういう中でも匿名で他人を批難しまくる人も、咆哮であり情けない人だと思う。そのことも加えて子どもたちに伝えている。匿名という隠れ蓑に身を置いて、言いたい放題言っているのは、決して強くもないし、正義を貫いているとも言えない。言うなら堂々と実名で言えばよい。そこにフェイク動画を使っている人もいる。これは最悪である。世の中する人が、そこそこ多いということだ。子どもたちにはそんな人になって欲しくない。

＜坊主憎けりや袈裟まで憎い＞

ある人のことが憎くなると、その人に限りのある物がすべて憎らしく感じられるとのたとえ。坊さんが憎いと思うと、その坊さんが着ている袈裟まで憎く思われるという意から。「法師が憎ければ袈裟まで憎し」ともいう。袈裟=僧が衣の上に左肩から右腋下にかける長方形の布。

幼稚園や小学校で入園・入学時にあの家の子と同じクラスにはしないでくれという保護者が時々いる。母親同士の関係が悪くなつたから一緒にクラスになりたくないのだ。でも子ども同士は仲良しということはよくある。そんな時に、母親がその関係の悪い母親の子のことを悪く言って、我が子とその子との関係性を壊そうとしたことがあった。「あんな親の子なんだからろくなもんじゃない。つき合われたらたまらない。」といっていた。子どもには何の罪もないし、親と子は別物である。親同士は特に付き合わなくても、子ども同士は園や学校で遊んだらよいのだ。家を行ったり来たりという付き合いは難しいかもしれないが。

例えば、嫌いなタレントがエルメスのバッグを持っていたら、エルメスが嫌いになってしまふなどと言うのは良く聞く話だ。エルメスには何の問題もないにもかかわらず。人とは本当に心の狭い生き物だとそういう時には感じる。その人と同じペットは飼わない、その人が行く店には行かない、その人と同じ色の車は厭だ等。自分が買った車と同じ車を嫌いな人が買ったから買い替えたという人もいた。

反対に、好きな人が持っているもの、着ているもの、行く店、何でも真似て一緒にしよ

うとするのも反対の意味ではあるが同様だと思う。自分が好きか嫌いかではなく、その人が好きだから、嫌いだから、その人の持っているもの、着ているもの、行く店、ペットに至るまで好きになったり嫌いになったりする。

人と物は別だが、その人を好き・嫌いの中に全部含まれるというのも面白いというか、あほくさいというか・・・。「被った」というのも同じような発想ではないだろうか？

人を嫌いになるのは仕方がないが、その人に属する物や子どもには何の罪も害もない。長年諺としてこういうものがあり続けるというのは、人がいかに愚かなものかという話になる。人の感情というのは厄介なものだ。

保護者や子どもたちに、無意味な、不合理な嫌い方をしないよう、この諺を伝えていく。

英語では・・・

Love me, love my dog.（私を愛するなら
我が愛犬も愛せよ）

＜墨子糸に泣く＞

人間は環境や教育によって、善人にも悪人にもなるということのたとえ。墨子が白い絹糸を見て、染め方によってどんな色にもなることを思って泣いたということから。墨子＝中国の戦国時代の思想家。平等に人を愛する兼愛説と非戦論を唱えた。

出典 淮南子

子どもを育てる上での環境と教育はその子の将来にとってとても重要な要素となる。子どもは白い絹糸のようなもので

ある。どのようにでも染められてしまう。だからこそ、保護者は最良の環境と最高の教育を受けさせようと必死になる。白い絹糸をただ染液につけてそっと染めていくのなら糸も傷まないが、ごしごししたり、引っ張ったり叩いたりしていれば糸そのものが傷ついてダメになってしまう。

同じ白い絹糸でも、強い糸も弱い糸もあるし、白さにも差がある。その糸に合った染料を使い、その糸を傷ませないやり方で染めていかねばならない。

子どもを育てることは、正にこの白い糸を染めるようなものである。その子に合った教育を施し、その子にとって安心安全で成長を促すような環境を保証することが大切である。

そんな意味でこの諺を保護者たちに伝えている。

＜仏の顔も三度＞

どんなに温厚な人でも、何度も無礼なことをされれば怒るというたとえ。仏さまといえども、一日に顔を三回もなでつけられれば腹を立てるという意から。いろはがるた（京都）の一つ。

どんな人でも、嫌な事を繰り返されれば怒るのが当たり前である。しかし、自分を出せない子どもたちは、ただひたすら我慢している。怒ってはいけないと思っているし、怒ったら関係が壊れて修復できなくなるとも思っている。嫌な事を何度もされているということは、相手は本当に友達なのかと聞いてみると、ほかに友達がないことが多い。「この子と離れたらボッヂになってしまい、だから嫌な事をされても我慢

している」と。

そんな我慢を続けていたら、おなかが痛くなったり吐き気が出たり、学校に行きたくなくなったりするだろう。

人には我慢の限界というのがある。ずっと我慢して風船が膨らむようにたまって言ったら、ある日爆発するだろう。そうなると言わなくて良いことまで言ってしまって、修復できないような喧嘩になってしまう事さえある。

この諺を伝えて、我慢も三度くらいにして、四度目には怒りを出してはどうだろうと話す。それがその子のためにもなる。嫌だと思っていることを知らせられるし、何度も繰り返したら私だって怒るということをわかってもらえるし、あなたのやっていることは人を嫌な気持ちにさせているとわからせることになる。だから、ずっと我慢するのは辞めよう伝えている。

出典説明

シェリー・・・Percy Bysshe Shelley (1792-1822) イギリスのロマン派詩人。小説家のメアリー・シェリーは妻。「冬來たりなば・・」は「西風に寄せる歌の一節に由来している。

論語・・・二十編

儒教の経典。「大学」「中庸」「孟子」とともに四書の一つ。孔子の言行や門人たちと

の問答を記録した書で、講師の死後に門人たちが編集したものと言われる。孔子は諸国を回って仁の徳による政治を説いたが、本書は孔子の人物や思想を知る上で極めて重要な資料である。

礼記・・・四十九編

儒教の経典。五經の一つ。前漢の戴徳が集録した「大戴礼」を甥の戴聖が編集し直して「小戴礼」とし、これが現在の「礼記」となった。周末から秦・漢時代にかけての礼に関する諸説を集めたもので、日常の礼儀作法、冠婚葬祭の儀礼から生活のあらゆる面に及ぶ礼の記述があり、当時の制度・習俗を知る貴重な資料である。

抱朴子・・・八巻

中国の道教の書。著者は東晋の葛洪。317年ごろに完成。道家思想に基づく不老長生術や薬の処方などを述べた内編二十編と、儒教的な立場から道德・政治・社会を論じた外編五十二編から成る。

淮南子・・・内編二十一巻

紀元前二世紀、前漢の武帝の初期に成立した哲学書。編著者は、前漢の高祖劉邦の孫である淮南王劉安。無為自然の道家思想を中心都市、政治・軍事・天文・地理などにわたって諸学派の説を収めている。内編二十一巻・外編三十三巻があったとされるが、現存するのは内編二十一巻。

参考文献：以前にも掲載したが、此処に載せている故事・諺及び出典説明は「新明解 故事・ことわざ辞典」三省堂編修所編 より転載させていただいている。

うたとかたりの対人援助学

第34回「言文研2025連続講座を振り返って」

鵜野 祐介

はじめに

今年（2025年）10月、立命館大学国際言語文化研究所2025年度連続講座の統括コーディネーターを務めた。総合テーマを「ユニバーサルデザインとしてのヴァナキュラーな歌と語りの人類学」を掲げて、10月10日、17日、24日、31日の4回にわたって対面とオンラインで開催した。

本号では、この講座の趣旨とプログラムを紹介した後、終了後にお寄せいただいた発表者や参加者の方々のコメントを掲載し、講座のねらいがどこまで実現できたのかについて振り返ってみたい。

原則として、元の文章をそのまま引用したが、プライベートな内容に関わる箇所などを一部削愛・修正させていただいたことをお断りしておく。

講座の趣旨とプログラム

この講座の趣旨について、案内チラシに次のように記した。「ユニバーサルデザインとは、高齢者も子どもも障害者も、異なる社会や言語文化の成員も、できるだけ多くの人びとが使えるように想定してデザインするという考え方である。民間に伝承されてきた歌謡や説話をはじめとするヴァナキュラー（《俗》）な歌や語りには、自分とは異なる世界や社会にある他者と繋がるためのユニバーサルデザインの可能性がある。今年度の連続講座では、多様な世界や社会におけるヴァナキュラーな歌や語りの実演を交えながら、多文化共生社会の実現に向けての具体的な方策を提示すると同時に、人はなぜ歌い、語るのかという人類史的な問いを提起することを企図する。」

次に、各回のテーマと発表者や内容について紹介しておく。

第1回「触文化とろう文化における歌と語り」

- ▷広瀬浩二郎（国立民族学博物館教授）「触文化とユニバーサル・ミュージアム」
- ▷半澤啓子・穀田千賀子（仙台市、手話民話の語り部）「手話で民話を語る」
- ▷藤岡扶美（吹田市、手話うたパフォーマー）「ろう者も聴者も一緒に歌い演じる」
- ・コーディネーター・司会・コメントーター：鵜野祐介（立命館大学文学部教授）

——視覚障害者の触文化、聴覚障害者のろう文化、両者はそれぞれマイノリティ社会における独自の歌や語りの文化的伝統を持ちつつ、常に生成し続けている。両者はマジョリティ（健常者）社会から差別され疎外されてきた歴史を持つが、その一方でマジョリティとの対話や交流の歴史も持っている。二つの社会の「架け橋」を志向する活動は、今日において全国各地でどのように行われているのだろうか。発表者たちの歌や語りの実演を交えながら、多文化共生社会の実現に向けての展望を模索する。

第2回「多感覚で楽しむストーリーテリング」

- ▷ニコラ・グロウブ（イースト・ロンドン大学重度重複障害インクルーシブ・リサーチ教授）「マルチセンシリー・ストーリーテリングの重要性」
- ▷高野美由紀（兵庫教育大学教授）「障害等のある子どもとのストーリーテリング」

- ▷光藤由美子（松山おはなしの会会長）「英国などの民話を多感覚で楽しむ」
・コーディネーター・司会・コメントーター：岡本広毅（立命館大学文学部准教授）

——人間は誰もが歌や語りを聞くことが好きだし、また誰でも歌や語りを自分の中に持っている。知的障害や重度の障害を持った人たちももちろん同様である。彼ら／彼女たちが歌や語りを共有するための手法である「マルチセンソリー・ストーリーテリング」を実践する英國の語り部と、彼女の理論と方法を学び、日本でその普及や新たな展開の活動に取り組んでいる2人の発表者たちが、この理論と実践について、語りの実演も交えながら紹介し、今後の可能性を展望する。

第3回 「在日コリアンのアイデンティティ形成と伝承歌謡・説話」

- ▷黒川麻実（愛知県立大学准教授）「在日コリアンが語る韓国朝鮮の昔話—在日コリアンの活動—」
▷安聖民（立命館大学講師）「パンソリ演唱《興甫歌（ホンブとノルブ）》」
・コーディネーター・司会・コメントーター：庵治由香（立命館大学文学部教授）

——ヴァナキュラーな歌謡や説話はコリアン・在日コリアン・日本人、三者のアイデンティティ形成の独自性・多様性と共通性・連繋性のためのツールとなってきた。戦後日本において韓国朝鮮の昔話が絵本として出版され、国語教科書にも掲載されてきたが、在日コリアンの作家たちが重要な役割を担ってきた。また、大阪を中心にパンソリライブを長年上演してきた在日コリアンがいる。こうした活動はユニバーサルデザインとしての歌や語りの試金石となることを確認するとともに、今後の可能性を展望する。

第4回 「スコットランドと山形における〈魂呼ばい〉の歌と語り」

- ▷マーガレット・ベネット（スコットランド王立音楽院教授）&アラスター・ホワイト（グラスゴー大

- 学講師）「スコットランドの子守唄と弔い唄」
▷渡部豊子（語り部、日本民話の会会員）「山形の子守唄と弔い唄・弔い語り」
・コーディネーター・司会・コメントーター：山崎遼（立命館大学産業社会学部准教授）

——死の世界と生の世界とのあわいにある存在、それが生まれたばかりの赤ん坊であり、息を引き取ったばかりの死者である。前者に向けて歌われる「子守唄」、後者に向けて歌われる「弔い唄」や「弔い語り」、これらは共に、言葉の壁や生死の境を越えた〈魂呼ばい〉の歌と語りである。ユーラシア大陸の東西端に位置する2つの地、英國スコットランドと東北山形の〈魂呼ばい〉の歌と語りに、「人はなぜ歌い、語るのか」という人類史的視座から、ユニバーサルデザインとしてのヴァナキュラーな歌と語りの原像を探る。

発表者のコメント

＜第1回 広瀬氏＞

鶴野先生、ご返信ありがとうございます。感想も読ませてもらいました。とりあえず、好評だったようで、ほっとしました。僕の発表は「語り」ではなく、「話」が中心だったので、やはり手話パフォーマンスのインパクトには勝てませんね。瞽女唄や平曲のCDを聴いてもらうことも考えましたが、今回は持ち時間が限られていたので、あきらめました。

最後、質疑応答の所で、時間があれば発言したかったのですが、手話の語りは基本的には目で見て理解し、楽しむものです。つまり、直接的には僕には伝わりません。一方、僕のユニバーサル・ミュージアムでは積極的に「音」を使います。もちろん、いろいろ工夫はしますが、音そのものは、ろう者には楽しんでもらえません。しかし、ユニバーサルには多様なスタイルがあっていいし、視覚障害者発のユニバーサルと、聴覚障害者発のユニバーサルは違っていて、いいと思います。この辺がユニバーサルの難しさ、奥深さですね。

＜第1回 藤岡氏＞

【広瀬先生のご講演をお聴きして】

「点字」を「手話」に、「盲」を「難聴・ろう」に置き換えるながらお聴きすると私には分かりやすく、そ

うそう！と納得したり、へぇーっ！！と気づきがあったりで時間があつという間でした。瞽女と山奥に住む人たちとの「互換」のお話も深く響きました。「自立」「自律」、「始点」「支点」「視点」、「触覚」など 広瀬先生の言葉選びがやさしくて分かりやすかったです。どうもありがとうございました。下記は、拝聴しながら特に書き留めたメモです。

- 「わたしたち」と言う時、そこは”閉じた世界”か”開かれた世界”か。…発信する側の意識が大切
- 備わっている「5感」をみんながフルには使っていない（使えていない）。それぞれのバランスで使っている。視覚以外の感覚で成り立っている情報（第6感）を使う。…きこえない人たちも「勘が良い」と言われる人が多いです。納得！
- 見えないものをみる…テレビをみるとおっしゃっていたのがとてもびっくり！バッティングの「音」で「当たり」の見当をつけるお話、印象的でした
- 「インクルーシブ」「ユニバーサル」
- 「点字を使えない不自由」「点字を使わない自由」…手話の世界でもまさに！！どちらの言葉も身をもって実感しています
- 小学4年生で点字・手話に触れる。現状は福祉的文脈で「助けてあげましょう」の一辺倒。「日本語が唯一の方法ではなく、そこに優劣はなく、その方法を使っている人たちがいるんだよ」の視点から。…人権教育の講師として小学校へ行かせていただく時に感じていた心のモヤモヤが晴れました！

【半澤啓子さん・穀田千賀子さん手話民話語り】

まるで絵本のページをめくって絵を見ているかのように、登場人物が分かりやすく自由自在に変化していて（それはもう半澤さんの身長や着ている服も変わっているのでは？と思える程に）、兄弟の会話や、継母が子を叩く音や、観音様の指についてご飯粒などの「声」「音」「もの」も目に飛び込んでくるよう！観音様が継母を叱るシーン圧巻でした。

後からお聴きしたら、穀田さんは登場人物に合わせて声音を変えておられて、半澤さんはその声を聴いて演じ分けておられるとのこと。私には穀田さんのお声が聞こえないので残念でもったいないことでしたが、半澤さんの全身で表現される手話から、穀

田さんが発しておられるお声がきこえてくるようでした。お二方で研究されながら磨きあげてこられた表現、本当に素晴らしいあんな間近で拝見させていただくことができて幸せでした。どうもありがとうございました。あえて字幕は出されなくて声と手話だけでのパフォーマンスでしたが、グイグイひきこまれて拝見しました。内容もよく分かりました。

<第2回 光藤氏>

岡本先生、鶴野先生、学生さんのコメント、ありがとうございます。皆さん、しっかり講義を聞いて自分なりにつかんだことを表現していて素晴らしいと思いました。ニコラさんもきっと喜ばれると思います。Zoomで参加した友人から、私への励ましの感想もあり、今回企画に参加させていただいたこと、本当に感謝申し上げます。

<第3回 安氏>

金曜日は楽しく有意義な時間ありがとうございました。庵治先生、字幕に司会に打ち上げまで、本当にお世話になりました。とても美味しかったです。

<第3回 黒川氏>

コメントの共有ありがとうございます。大変励みになります、引き続き色々頑張って参りたいと思います。貴重な学びと温かな交流の場をいただき、心より感謝申し上げます。打ち上げのお食事も本当に美味しかったです。

参加者の感想

<第1回>

・民話の語りに伴う手話、先生のおっしゃる通り「手」のみならず全身で表現されていて、惹きつけるを感じました。「目で見る民話」という印象を受けました。

また、最後の質疑応答で触れられた、「手話のリズムと日本語のリズムの違い」という点、私はそういうものがあるのかと初めて知りました。ちょうど今、小学生に日本語を教えていまして、日本語のリズムについて考えているところでしたので、とても興味深く思いました。

さらに、「歌詞の言葉を示すだけではなく、意味を

伝える手話」という視点も、そのようなことを考えたことがありませんでしたので、目を開かれるような思いがしました。

幼稚園や小学校でも、子どもが歌に手話をつける試みがされていますが、こうした視点は大事だなとあらためて思いました。

・琵琶なし琵琶法師の教授も、手話語りの二人も、手話歌の方も、スーパー・パフォーマーの方々でした。今回連続講義に参加しなかったら、そういう方々の存在を知らずに一生過ごしたことでしょう。

・目から鱗、でした。広瀬氏の話は、なかなか良かったですね。健常者では気づかなかった点を話しておられ、なるほどと納得です。

「手話で民話を語る」も、なるほどでした。東北方言の民話の手話でしたが、右側で文字が出ていたので理解できたと思います。

手話うたパフォーマンスも画面が美しく、歌もみごとでした。語りにもいろいろな立場で、別な言語表現があることが理解できたのは収穫でした。



・民博の広瀬先生のご発表、私にとってはとてもタイムリーで参考になることが多々ありました。視覚支援学校に関わっておりますので、「見る」と「みる」ことの違い、inclusive を目指すことでかえって失われる独自の文化、など考えさせられました。

それから、穀田さんと半澤さんの語りと手話表現にも魅了されました。穀田さんの語りも、いつまでも聞いていたい味わいのある語りで、気仙語が思った以上に伝わってきて嬉しかったです。

・広瀬さんの講座を大変興味深くお聞きしました。

インクルーシブ教育の優れた面とこぼれ落ちる面、五感と多様性（互換と他用性）感覚のバランスについて、触るマナーについて、当事者主権のこと、視覚を使わない自由、考えさせられること、気づきが多くありました。

二部の「こまもり観音様」、方言が心地よく、全身での手話があることで、お芝居を見ているようにおはなしの映像が浮かび、楽しませていただきました。

藤岡さんの手話歌は「手話は空間の絵であり芸術である」と言われた通り美しく感動的でした。



・半澤さんの民話の手話語りは、迫力がありました！ 東北の地域の言葉は味わえませんでしたが、手話に魅了されました。素晴らしいです。もう一度、字幕だけを見て、東北地域の言葉を味わってみようかなと思います。

藤岡さんはメイシアターでの手話うたコンサートでは字幕がバックや左端にあり、藤岡さんは舞台いっぱいに身体で手話で表現されるので全く聞こえない私も聞こえる人と一緒に楽しめます。今回は藤岡さんが作られた字幕がパソコン画面全面にアップされていて、藤岡さんの姿が画面の右上端にありましたので、歌の雰囲気が伝わりませんでした。画面を反対にできないかと思いましたが、動かせませんでした。それがちょっと残念な気持ちです。

・トップバッターの広瀬先生のお話は、吟遊詩人とリンクするような盲目の女性旅芸人というテーマもさることながら（博論を書いていた頃は女性詩人の生き方、「声」に関心があり、サッフォーや豊饒、即興詩人なども連想しました）、レジュメのポイントの提示の仕方また話のまとめ方がとてもスマートで、とても参考になりました。

半澤さんと穀田さんのパフォーマンスは、語り担当・手話担当のどちらもお互いにものすごく合わせているはずなのに、それを感じさせることなく自分の「ことば」の表出に力を込められている点に圧倒されました。

藤岡さんの手話うたパフォーマンスについては、以前うたかたネットで催しのご連絡をいただいた時に調べていたのですが、一緒に手話をしながら歌うのが、純粋に楽しかったです。とともに、ものすごく体力を使うことに気づき、藤岡さんのタフさに敬服しました。「30歳（でしたか？）まで手話を知らなかった」とのお話に、今の時代であれば（極端な表現かもしれません）教育弱者となる、あってはいけない話だと衝撃を受けました。



・1回目の視覚と聴覚障害の方々のお話や実演で考えさせられるものがありました。広瀬さんの話は先日ラジオで聞いて、興味を持っていたのでより鋭く伝わってきました。博物館が視覚障害の人にとってもわかりやすく、「触る」博物館にしたこと、健常者にも人気が出て訪れる人が増えた話などは、聞いただけで行ってみたくなります。

また、「手話は見ても美しい表現、美しい言葉で、空間に絵を描くように表現していく」という言葉通り手話うたに感動を覚えました。私たちがあまりにも視覚に頼りすぎて五感を十分に使っていないことに気づかされます。

・とても良かったです。穀田さんの方言読みも半澤さんの手話表現も素晴らしい、涙ポロポロ流しながら見ました。ありがとうございました。

・東北の民話を30年間、よくぞ続けていただいたと思います。懐かしい訛りの数々。今は東北も方言が消えつつありますが、以前NHKで方言の特集をしていた時に語っていた人の言葉を思い出しました。「それは、使わなくなった人が増えたから、使わなくなった現代の私たちの責任だ。方言には、方言の素晴らしい伝達がある。消してはならない」これって手話とおんなじだなあと改めて思い返しました。感動しっぱなしです。

・手話民話とーーーっても素敵で目が離せないというか、惹き込まれました！！字幕がなくても十分お話伝わりました。

・半澤さんお1人で手話されているのに何人も登場人物がいるようで、見入ってしまいました。

・宮城県出身の姑が、一緒に動画を見てとても懐かしそうに、嬉しそうにいろんな話してくれました。

<第2回>

・ニコラ先生のお話の中でPMLDの人々のことを“too disabled to count as people”とみなす人の存在があり、憤慨しました。先生のダイナミックな視座、ストーリーテリングの技術だけではない人生や生き方、この世界の本質に関わるお話に魅了されました。“Multisensory storytelling is a tool for changing the world,” “Stories change minds,” “Facts do not change mind”という言葉は、ずっと忘れないと思います。

高野先生と光藤先生のお二人はうたかた研で一緒にさせてもらっているので、親しい気持ちでおきました。高野先生のお話からは、ニコラ先生の理念に共感しながらも日本のコンテクストに応じて子どもたちに無理なく取り組んでもらおうとする姿勢がうかがえました。光藤先生のお話にはマザーグースが登場し、「マルチセンソリー」というのは何も小道具を使うことだけではなく、パターンの繰り返しを多用する話を用いてオーディエンス参加型にするのも該当するのだ、と身をもって学びました。

・ストーリーテリングはとても興味深く、本も購入しました。日本でストーリーテリングというと、なんとなく、石井桃子さんや松岡享子さんの東京こども図書館の「おはなしのろうそく」のストーリーテリングが正道で、道具や身ぶり手ぶりを使ったものは邪道というような認識があるように思います。(なんとなく…ですが)

スマホ時代の子どもたちとはいえ、おはなしのおもしろさは引き込まれるので、支援が必要な子かどうかにかかわらず、多感覚で楽しむストーリーテリングも可能性があるように思いました。

・(学生のコメント) ニコラ先生の話の中で、マルチセンソリー・ストーリーテリングのお話をききながら、見る・聞く・嗅ぐ・味わう・触れる・体験する、これらすべてが語りの一部として機能するという話がありましたが、どれも一部にすぎず、どんな人に対しても伝わる表現方法はないのかと考えていました。しかし、「ひとつの表現方法で人間のコミュニケーションが完全にカバーすることはできない、だから多様な表現が共存する文化が必要だ」ときいて、非常に納得しました。



・(学生のコメント) 高野先生のご発表で、ニコラ型のMSSTのことが良い点や強みという面で深く理解できました。多感覚で楽しむことでその子どもの成長や発達の助けになることが分かりました。確かに自分の幼い時を振り返っても、さまざまな感覚を使った経験の方が覚えやすく、記憶に残っていると感じました。マナハナちゃんれんじのお話では、自分で考えたりお話をつくったりすることで、伝える力や想像力だけではなく、あきらめない力までも得られるという点がおもしろいなと感じました。



・(学生のコメント) 光藤先生はいくつかのストーリーテリングをして下さったが、「おばあさんと豚」の話がとても面白かった。高野先生の話で学んだ、ストーリーテリングには繰り返しが多い形式を、体験できてよかったです。私自身も、動物の時(「雨を降らせたスズメの話」)に鳴き声で参加できてうれしかった。この体験を通して、とてもうれしい気持ちや楽しい気持ちになったので、誰であっても、何歳であっても、お話をきいたり語ったりすることはとても重要な楽しいものなのだ、ということに気づかされる経験ができました。ありがとうございました。



<第3回>

・韓国の昔話の資料、国の歴史に従ってお話の内容が変わっていくこと、などなど。またパンソリの安聖民さんの張りのある大地に根付いた声に圧倒されました。

・在日コリアンのお話は、実は自分とは一番遠いところにあると感じて、あまり期待していませんでした。ですが、若さとやる気に満ち溢れた黒川先生を拝見し、またテクスト分析もここまで徹底的にやらなければ、と分野を違っても同様にテクスト分析をするのであれば見習わないといけないと心から感じ

ました。

パンソリ、元気をもらわない人はいませんね。すべてを投げ出してパンソリ修行に出られた安先生の生き方に脱帽です。オーディエンスを巻き込む力は、いろんな場面で活用できますし、参考になりました。

・今日はありがとうございます。毎回すごいお話やらパフォーマンスやらを見せて、聞かせてもらっています。黒川先生は探求心旺盛な方で、一つの昔話が朝鮮半島と日本でどのように伝わって来たのか、興味をかき立てられます。最近、国民の不満を背景に、日本でも他の国でも「まず自國」という妙な風潮が広がりつつあります。こういう時だからこそ、黒川先生のようなユニバーサルな活動は一層今後が楽しみです。



安さんのパワフルな口承によって、日常的な場から一瞬にして大陸を渡る空の旅に連れ出される、不思議な気分を味わうことができました。「太鼓をたたいた方が」と言っておられたのが、非常に印象的です。中世以来の芸能である「祭文」を唱える人も、ただ称えるよりも「弓」の弦をたたきながら唱える方が、唱えやすいと言っている例があるからです。太鼓をたたく行為にも、弓の弦をはじく行為にも、ある場所を非日常的な空間に変える上で大事な働きがある気がします。

インドの『ジャータカ物語』と朝鮮半島の伝承、日本の昔話の関係についての話も、おもしろかったです。



・在日コリアンが朝鮮と日本を意識すると否とにかかわらず架け橋となって逞しく過ごしていることと、朝鮮の民話「三年峠」がわが国の低学年の教科書で親しまれていることを微笑ましく思いました。解説付きのパンソリ演奏もなかなか良かったです。ありがとうございました。

<第4回>

・鵜野先生からお聞きしてご著書も拝見したことのあるマーガレット先生に直接お目にかかるのは残念でしたが（とは言っても、オンライン参加だと二重に画面越しというだけで、良く考えるとあまり変わりませんね）、lament の唄を唄つてばかりではなく、「life must go on」という表現をお聞きできたのも幸いでした。

ホワイト先生は講座の趣旨に沿ってしっかりとお話を組み立てられていたのですが、私がゲール語を理解しようと懸命になるあまり、話の筋がつかみにくくなってしまいました。ですが、ペットボトルを手に取られる時に“*I've got to take a wee drink of water*”と生きたスコットランド英語を聞き、興奮しました。





渡部さんは、本当にリラックスされてお話をされていたのが印象的でした。「ねろねろ」と歌っているだけの子守唄や何にでも「～こ」をつけたり「食べなさい」「かゆい」「髪の毛」のすべてをイントネーションだけ変えた「け」で表現するという小話も面白く、tiktok やインスタというようなメディアでショート動画にしても若者受けもすると感じました。

渡部さん推したと公言されていた先生が渡部さんの語りに心酔しておられるのを見たのも、嬉しい時間でした。

・スコットランドの子守唄、弔い唄はベネット先生の生声は聞けなかったものの、今回のために準備くださったお声を聞けて良かったと思いました。ホワイット先生のケール語での子守唄など聞かせて頂き、そのメロディラインと歌声が、その土地に住む人々の魂から出ていることに気づきました。

最後の渡部さんの話は深く心に響くものでした。山形弁だからこそ伝わってくるものはやはりその土地に伝えられている多くの人々の声であり、思いでいるのだということを再認識させられました。

＜全体を通じて＞

・もうこれで連続講座が終わりなのか…とロス感にとらわれていました。今回の連続講座では、一方的に研究成果を発表する普通の形のものと全然ちがう経験をしたと感じます。鵜野先生が「語りは東北地方の人の心に元気を取り戻した」ように言っておられたと思うのですが、その意味が少し分かった気がします。私は知識を得るために参加させもてらったつもりだったのですが、毎回単なる知識以上の「元気」のようなものを受け取って家路につきました。

・講演とパフォーマンス、理論と実践のような組み合わせで、頭にも心にも楽しいぜいたくなひとときを過ごさせてもらいました。2回目の後日のビデオ視聴で、後はリアルタイムのオンラインで参加しました。ビデオ視聴は自分のペースで速度を変化させたり、気になった箇所を繰り返し視聴できたりという利点がありますが、リアルタイムオンラインだと資料の配布があるのがいいですね。

鵜野先生のご定年前の集大成の1つであるイベントが無事に幕を閉じたこと、お祝い申し上げます。貴重な機会をありがとうございました。この体験で考えたこと、学んだこと、得られた知見を、私自身公私にわたる場面でフル活用していく所存です。

・今回の講座を通して、私たちのやっていることはほんの限りのあることで、いつも自分の認識以外に沢山の人がいてみんな表現していることに気づくこと、それが今私たちに必要だと痛感しました。いつもたくさんの情報を送ってください感謝します。これからもよろしくお願いいいたします。近かったら、ぜひ安聖民さんのパンソリを聞きに行きたいと思いました！

・4回にわたる講座、どの講座も鵜野さんが出会った方々から直接話を聞いての構成、素晴らしいと思いました。理屈でなく実践している方々の思いがじかに伝わる、よい講座でした。お疲れ様でした。

おわりに

今回の連続講座には、各回のコーディネーターとして岡本広毅先生、庵治由香先生、山崎遼先生がご尽力下さった。また、国際言語文化研究所職員の野村道子さんをはじめ、会場設営やオンライン配信や文字通訳など、大勢の方々がスタッフとしてご参集下さったおかげで、無事終了することができた。

ただ一つ、会場での対面参加者が少なかったのが残念だった。より効果的な広報の方法を模索していくことが次回への課題だと感じている。

講座の内容は、言文研の紀要にて刊行される予定で、多くの方に読んでいただけることを願っている。

本当にありがとうございました。

ああ、 結婚！

—婚活日記—

第36回

黒田長宏

<2025年9月14日>

Youtube「マーサとクッピのチャレンジトーク」を共同ではじめたマーサがやりたかった水槽を設置してウーパールーパーを楽しんでもらうプロジェクトのコンセプトが具体的になってきた。これでいこう。有名なクラウドファンディング会社に提出したり、東京都や自治体の公の起業コンサルタントと接点を持ち始めた。今日現在、悔しさとドキドキするのがクラウドファンディング会社への提出で3連敗している点である。だけど実現したら面白いと思う。維持するのはマーサで大変な試みだとは思うが。

<9月28日>

スタートアップというのか、スタンドアップというのか、起業の手伝いを始めてしまったので、それに時間が費やされている。『マーサのウーパールーパーしあわせ計画』である。婚活アプリをはじめたら詐欺師だらけで、今度は本物の女性なのだが、婚活ではなく、プロジェクトと一緒にする人になっている。しかし実現したら面白い。対人援助もできる。

<https://share.yoor.jp/door/maasauuparuupa>

<10月29日>

マーサのウーパールーパーしあわせ計画というチームを実現維持するための設定と営業に苦心しているところ。思いがけずこういう展開になっているが、これが成功すれば、対人援助という点でも関わることになると思う。実践だ。

<11月13日>

気がつけば58歳になり、もう子孫も無く(と決めつけているが)、途中心筋梗塞にもなり、一体なんなのかという人生にしてしまったが、このマガジンにもなんだかわからないような思弁的な時期もあったりしたのだが、マッチングアプリからマーサと結婚相手探しだったはずがなぜだかYoutubeコンビになった上に、「マーサのウーパールーパーしあわせ計画」という、ウーパールーパーのいる水槽を多くの人に見てもらい癒しをあげたいという不思議な望みの設計を担当することになり、ここ数か月、そればかりやってきた。会員制の組織にして、会費で水槽代から運営費を賄おうという企画を立てた。クラウドファンディングを目指そうとして、その過程もあったが、それに合格できず、自力でなんとかしようと、サロンサイトを作り、マ

ーサのバレエ教室に新聞折込をするも効果が無く、ここ数日に急に、バーチャルサロンを作り、かるたブースのあてが某商店街に出来そうにもなっていて、さらにいろいろと考えている。結婚難をテーマに始めたものの、その方面ではまったくどうしようもないが、想定外のところで、マーサの望みから、対人援助という言葉に接近していくような、企画を立て、試行錯誤していることになっている。こうした事を始めてしまったのでエネルギーが足りなくなり、婚活もやめてしまっていたのだが、数日まえの新聞に、茨城出会い系センターの成婚が3000組みとか書いてあったようなので、再開しようかと思っているところ。

[PBLの風と土 第35回]

隣で<これ何ですかね…>と言つたら

山口 洋典（立命館大学共通教育推進機構教授・立命館大学サービスラーニングセンター長）

【前回までのおさらい】

筆者は2017年度にデンマークのオールボー大学（AAU）で学外研究の機会を得ました。AAUでは1974年の開学当初から全学でのPBL（Problem-Based Learning）の導入で知られており、現地から本連載を始めました。

連載2年目はアイルランドで刊行されたPBLの書籍をもとにAAU以外での知見を紐解きました。連載3年目からはサービス・ラーニングとの比較を重ね、4年目はコロナ禍での立命館大学の科目への影響を、5年目からは米国での大学・地域連携の教育に関する理論を解題し、8年目からは再び筆者の教育実践を紹介中です。

1. 「これ」と「アレ」のあいだ

しばしば、「これ」は何かと問われる場面に身を置くことがある。好奇心が旺盛と言えば聞こえはよいが、対話の幅を広げることへの関心が高いため、直接問われていない場面でも周囲の会話に入り込み、「それはね…」とつい言葉を重ねてしまうこともある。しかし、この夏、学生と訪れたレストランでの夕食の際、「これ、何の肉ですかね…」という呟きを耳にしたとき、とっさにどう返すべきか戸惑った。最初に浮かんだ返答は「見てわからないなら、食べてみたら？」であったが、そもそもなぜそれが気になるのかという点が気にかかり、「アレルギーがあるの？」などと踏み込んで尋ねれば、かえって答えにくい問い合わせ突きつけることになるのではないか、と案じたのである。

「これは何の肉か？」という問には、宗教や文化の違いから「自分が何を口にするのか」を慎重に確かめたい場合も含まれる。しかし、この場



写真1：ホテルでの「おまかせ定食」の様子
(筆者撮影、2025年8月20日、一部トリミング)

面は「肉」か「魚」を選ぶ「おまかせ定食」において、単に「肉とは何の肉なのか」という素朴な疑問が生じただけのようであった。遠目には照り焼きのように見えたので「おそらく鶏かな？」と答えたが、よく見ると生姜焼きのようでもあり、「もしかしたら豚かもしれない」と言葉を重ねた。筆者は魚を選び、提供された鯖の味噌煮であることは見た目からも味覚からも明らかであったが、肉を選んだ学生は「最後までわからなかつた」という結果となり、いわば正体が判然としない一皿を前にすることになった。

社会心理学、なかでもグループ・ダイナミックスを専門とする筆者にとって、「これ」が何であるかを説明できるということは重要なテーマの一つである。[杉万（2013）](#)によれば、「これ」が何かを認識しているとは、「場所的・時間的・特個的なコレが、超場所的・超時間的・普遍的な意味として現前する」（p.123）ことである¹。すなわち、われわれが目の前の対象を説明できるとき、その物理的性質だけでなく意味的側面もあわせて理解している。したがって、「これ」を「あれ」あるいは「別の何か」との共通性や異質性をもとに区別し、時に関連づけながら特徴を説明することが可能となるのである。

前回の連載の結語で筆者は、「日常の実践のなかでふと立ち上がる素朴な疑問が、どのように学びの出発点となるのか」に触れつつ、「探究の大切さに焦点を充てる」と記した。例えば筆者は「この肉」が何の肉かを知りたいという学生の関心に対して、日頃からコンビニエンス

ストアやファミリーレストランなどの食事が主となり、提供されるメニューから選ぶ習慣が定着しているため、むしろ食材そのものの目利きができていないのではないか、といった想像を巡らせる。このように、食べ物の一つの疑問からでも生活や自己のあり方に関わる問い合わせと昇華できるとともに、そうした問い合わせを掘り下げるプロセスが具体的な体験としてさらなる学びと成長の手がかりとなる。そこで今回は、本連載の第32回で概略のみ示した立命館大学のサービスラーニング科目「現代社会のフィールドワーク」を事例に取り上げ、「これ」が何かを意味の側面まで説明できるようになることの意義について検討していく。

2. キュレーションメディアから離れる

今回取り上げる「現代社会のフィールドワーク」は、立命館大学の教養教育カリキュラム改革を契機として2012年に開講された科目である。フィールドワークは厳密には研究法の一つであるが、それを参加型学習の教育法に組み込み、80名規模の授業として設計した。開講当初は2名の教員が2キャンパス（衣笠キャンパス、びわこ・くさつキャンパス）で担当していたが、2015年の大阪いばらきキャンパス開学を経て3名体制となり、2025年度には4名で担当している。到達目標は全クラスで共通としつつ、構成や内容は担当教員が工夫している。筆者のクラスでは、2012年度から一貫して授業の導入部において、「『複雑に入り組んだ現代社会に鋭いメスを入れ、さまざまな謎や疑問を徹底的に究明する』というフレーズはテレビの中だけのものではなく、むしろ誰もが率先して『問い合わせ』に向き合うための合い言葉として携えてよい」と示している²。

特に関西圏の文化に馴染みのある読者は、ABCテレビ『探偵！ナイトスクープ』における冒頭の口上がここに埋め込まれていることに気づくだろう。この「謎や疑問を徹底的に究明する」ために、筆者は2012年度の初年度から「まわし読み新聞」と呼ばれるワークを導入してきた。これは、筆者が当時身を置いていた浄土宗寺院「應典院」（大阪市天王寺区）において、総合芸術文化祭「コモンズフェスタ」に実

行委員として参加していた陸奥賢さんが1998年からの活動を背景に考案したものである。2012年8月の企画会議で「新聞を使って遊ぼう」と持ち込まれたアイデアが端緒となり（[まわし読み新聞実行委員会, 2014](#)）、複数回の試行を経て、その手法が確立された（図1）。

筆者がこの「まわし読み新聞」を授業に取り入れた理由は、受講生にキュレーションされたメディアから距離を取る体験を提供するためであった。一般にキュレーション（curation）は芸術作品の収集・選定に携わる専門職（curator）に由来するが、この概念は現在、インターネット上の情報の整理・選別にも転用され、メディアリテラシーの観点でも用いられている（例えば、[中橋, 2017](#)）。スマートフォンでの情報収集が日常化している大学生にとって、ブラウザのキャッシュやCookie、アカウントに紐づいたデータに基づき、ユーザーに「賢く」情報が提示される状況は便利である反面、情報の取捨選択や信頼性判断を自ら行わずに、受動的な情報消費者、場合によってはフェイクニュースの再生産者となる危険性を孕んでいる。

そこで筆者は、受講生が持参した新聞を「まわし読み」し、興味記事を切り抜き、壁新聞風に再編集するという実践を通じて、キュレーションされたメディアとの距離感を調整する機会を設けてきた。同じ日の同じ地域の新聞であっても、紙面構成や記事の論調、扱い方が異なることを体験的に学ぶことができるためである。コロナ禍で対面授業が制限された2020年度には、受講生向けに「一人まわし読み新聞」の作り方を提示いただき、感染症法上の位置づ



写真2：「まわし読み新聞」の様子
(筆者撮影、2012年11月13日、立命館大学衣笠キャンパス)

図1：「まわしよみ新聞」の作り方（陸奥賢さん提供、<http://www.mawashiyomishinbun.info/about/>にも解説あり）

けが「5類」となった2023年度まで、対面・非対面を問わず提供し続けた。仲間との「まわし読み」でも、一人での「まわし読み」でも、複数のメディアを単に「見る」のではなく「読む」、さらには「読み込む」ことで、ポスト・トゥルース時代におけるファクトチェックの意義を実感できると伝えてきた。2024年度の受講生から寄せられた感想には、「他のメンバーの関心を知ることができ、貴重な体験だった」（国際関係学部3回生）、「興味がなくても目

を引かれる記事が多く、それに巡り合えるのが面白い」（文学部1回生）、「世の中の出来事に切り込む力や知識を蓄えることの大切さを実感した」（産業社会学部1回生）など、その意義を示す内容が見られた。

3. 留学生の投稿記事でロールプレイ

筆者が担当する「現代社会のフィールドワーク」では、2013年度以降、考案者の陸奥さんをゲストに招いて「まわしよみ新聞」を実施してきた。しかし2025年度は、筆者からの日程調整が遅くなり、授業の開講日である火曜日に立命館大学衣笠キャンパスへお越しいただくことが叶わなかった³。そこで、冒頭で紹介した「これ、何ですか…」のエピソードが思い起こされた。実はあの場面は、筆者が参加するJSPS科研費22H00671のプロジェクト「多文化共生を考える夏合宿 in 大崎」（2025年8月20日～21日）での一コマであった⁴。その記憶から、「自らの想像力をどう磨くか」「新聞記事を別の形で活用できないか」と考えるようになった。

JSPS科研費22H00671のテーマは、「理論と実践の往還を通した越境的学びによる日本語教師養成プログラムの開発と検証」である。筆者は、市民性教育を重視した複数大学での科目設置に向け、多文化サービス・ラーニングの開発にアドバイジングを行ってきた。その過程で、共同研究者である東北大学・澤邊裕子教授より、河北新報の投書欄「留学生の視点」を活用した

■「一人まわしよみ新聞」の作り方

①新聞を用意する。なるべく、いろんな新聞を読んでみよう。日付もいつでもかまいません。古新聞でも可。またフリーペーパーも可とします。

※五大新聞…読売、朝日、毎日、産経、日経

※地方新聞…京都新聞、大阪日日新聞、神戸新聞など

※スポーツ新聞…大阪スポーツ、デイリー、サンスポなど

※業界新聞…機関紙…赤旗、聖教新聞、仏教タイムス、朝雲新聞、木材新聞など

※フリーペーパー…市町村の広報誌、阪急沿線情報紙 TOKK、リビング京都など

②いろんな新聞を読んでみて「面白いと思った記事」「なんとなく気になった記事」「なんだこれは？と疑問に思った記事」「調べてみたいと思った記事」などを切り取ってください。広告やコラム、写真など何でも可です。また何枚、切り取っても構いません。目安としては3枚～5枚ほど。

③切り取った新聞をA4用紙に張り付けて、自分だけのオリジナルの壁新聞を作りましょう。そのさい必ず「新聞のタイトル」と「つぶやき（記事に対する感想）」を書き込んでください。記事がたくさんあってA4用紙1枚で記事が入りきらないときは、2枚目、3枚目を使ってください。イラストや四コマ漫画、コラムなどを書いても構いません。新聞の編集長になった気持ちで「読者」を意識して作ってください。

④作った「一人まわしよみ新聞」をスキャンしてデータを送ってください。

図2：「一人まわしよみ新聞」の作り方
(陸奥賢さん作成・提供、2020年10月1日作成)



授業のアイデアを共有いただいた。そこで、立命館大学での実施にあわせてタイムテーブルを検討し（写真3）、2025年9月4日の紙面を入手した。そして、図3のワークシートを作成・配布し、5名（最大6名）のグループワークとして実施した。その結果は次ページの図5に示している⁵。

今回のワークのポイントは、「他者になる」体験を重視したことである。まず6名の留学生が日本での生活で抱いた違和感、具体的には(A)コンビニ周辺にゴミが散乱していた、(B)家族とのビデオ通話でお米価格の高騰が話題になった、(C)区役所では自分の名前を長いカタカナ表記での手続きが求められた、(D)店内アナウンスが頻繁に流れるために何が重要かわからなかつた、(E)エレベーター内が静かすぎて緊張した、(F)学食の揚げ物が多く栄養が偏ってしまいそうだ、これらの投書をグループで「まわし読み」する。その後、話題とする記事を一つ選び、ワークシートに沿って(1)どんな場面か、(2)留学生は何を発見したか、(3)何に疑問を抱いたか、(4)どのような意見を述べているか、状況、事実、感覚、提案の4つの観点を区別しながら記事を要約する。さらに、多文化共生の観点から何が問題となりうるのか、投稿者以外の環境ともどう関係しているのか、そして「自分がもしその場にいたらどうするか」を考える。これらをグループ内で擦り合わせ、最後に寸劇として表現する、という流れでワークを行った。

4. コレは何かよりアレとの関係を探究

このワークの本質は、市民性の涵養にある。本連載第21回では、市民性教育を「専門性に対する幅広い知識・スキル・態度の習得を通じた模範的な人格形成」と位置づけた。今回の実践では、その模範的な人格形成を、留学生による新聞投稿を手がかりとして、多文化社会の共創という観点から捉え直した。図4で共有した受講生の省察は

現代社会のフィールドワーク 第2回（西原樹子G401）

新聞記事読み解きワークシート

【】グループ （参加者名：_____）

1. 要約 (A)ごみ (B)お米 (C)名前 (D)アナウンス (E)静けさ (F)学食

この記事は（_____）人が以下の事を記した

場面 (状況)	
発見 (事実)	
疑問 (感覚)	
意見 (提案)	

2. 読み解き 【個人の問題、組織の問題、社会の動向の問題、誰の責任でもない問題を区別】

(1)この記事の中で問題になっていることは？

(2)それは社会全体にどう関係している？

(3)自分がその場にいたらどう感じ、どう行動するか？

3. ロールプレイ（下巻）【記事の状況をもとに、2~3分程度の会話を作って演じる】

例：ここのコンビニでゴミが散らしている場面を再現
お米一袋留学生が手に持つと、店員が「おはようございます」と話しかける場面を再現
名前一区役所で名前が記入される場面を再現
アラカルトメニューを注文する際のマネージャーとの会話の場面を再現
静けさ→エレベーターを押して降るまでの静けさを再現
学食一食堂で学生が「揚げ物ばかりですね」と友人に話す場面を再現
ポイントは、会話の中に「自分などどう応答するか」「市民としてできる行動」を盛り込むこと！
その上で、「2.読み解き」や「1.要約」が適切にできているかを確認してみよう！

10/21 (第4回) のフィールドワーク先（行ってみたい場所、陇れてみたい場所、見てみたい状況）の候補は？

図3：新聞記事読み解きワークシート（筆者作成）

長大であるが、「学生たちが地域の現場で違いを越え互いを対等な仲間として思いやることのできる関係性を経験し、その関係性から見える社会を想像すること」（澤邊ほか、2025, p.45）ができていたと読み取れる。事実、学生から寄せられた感想のうち、積極的に共有を希望したものの中には、「五感で感じながら考えれば、もっと気づけることがあるのではないかと思い、若干のもどかしさを感じた」（産業社会学部2回生）や、「思いやりの形が一面的になると、かえって他者を排除することもあるのではないかと感じた」（文学部1回生）といった記述が見られた。

一方で、学生らによる省察からは、これらのワークが単に成果物を作成する演習に留まらない学びの過程にあることが確認できる。切り抜いた新聞記事を貼り付けて壁新聞風に再編集した四つ切り画用紙や、グループディスカッションで用いたワークシートなど、「成果物」そのものを作ることが目的ではない。あくまで、物の見方を豊かにすること、そして安易にインターネットで「正解」を探すのではなく、謎や疑問を徹底的に究明するフィールドワークを実践することに目的がある。読み解きは、問い合わせ設定し、研ぎ澄ますための手段にすぎない。作家・高橋源一郎は、『サンデー毎日』の連載「こ

対人援助学マガジン63号 第17巻3号「PBLの風と土:(35)隣で<これ何ですかね…>と言つたら」

1 第2回コミュニケーションアンケートの共有

第2回授業で説明のとおり、今回の取り組みは、北出慶子先生(文学部)を代表とした**研究プロジェクト**(越境的学び)の実験から、グループワークを組み立てました。それぞれ、丁寧に体験を言葉にしていただき、ありがとうございました。匿名で集計した以下の結果について、立命館大学生らの見解として、今後、参考にさせてください。

1. 河北新報の記事「留学生の視点」の読み解きについて

(1) 選んだ記事 (61人回答)

1. ごみ…15
2. お米…0
3. 名前…0
4. アナウンス…6
5. 静けさ…6
6. 学食…34

(2) その記事を選んだ(決まった)理由 (59人回答)

1. 記事で取り扱っている問題が自分も感じているものだったから…30
2. 記事の内容は個人の感想に收まらず大きな社会問題と感じたから…14
3. その場面にもし自分がいたらどうするかを考えてみたかったから…15

<具体的な理由由由> (40人記述)

1. ごみ (10人記述)

1. 記事で取り扱っている問題が自分も感じているものだったから (5人記述)

1. ゴミを拾う人もいれば捨てていく人もいるというのが、社会の諸問題の原因をあらわしているようだと考えた。(文1)
2. ごみ拾いについてしゃしゃう考えることがあったため (法1)
3. 最近は多くて、10年前の日本は純粋だったから。(文4)
4. 自分自身ゴミが散らかっていても拾つたりしなかったので、記事を読んでとても実感したから。(社1)
5. 日本文化としての良さを感じたから (法1)

2. 記事の内容は個人の感想に收まらず大きな社会問題を感じたから (3人記述)

1. この散乱やポイ捨てはその場の景観や治安だけではなく、環境問題や海洋汚染など地球規模の問題に発展することと思った。(文1)
2. コンビニのゴミ袋が満杯で周辺に散らかっているという状況は稀ではないと思いますが、記事にてきたようにちゃんとごみを拾う男がいる一方で、留学生を含めて「汚い」と感じているにも関わらずほとんどの人が見て見ぬふりをするという現状がよくないと考えたから。(法2)
3. なぜばげて捨てる人がいるのか、またその事について大半の人があれもしないことを深掘ってみたいと思ったから。(文1)

3. その場面にもし自分がいたらどうするかを考えてみたかったから (2人記述)

1. ゴミ拾いに心がけたかったが、海外の人の观点を知ると思ったから (法2)
2. 周りの怠慢で自然と決まっていったが、自分のなかの理由としては、自分がその場に居た時は、新聞記事のおじさんと違う行動を取ったかなと考えたので、その記事について考えてみたかった。(法4)

4. アナウンス (1人記述)

2. 記事の内容は個人の感想に收まらず大きな社会問題を感じたから (1人記述)

1. 日本の商店や電車内は、他国と比較すると静かで、どちらかといふと日本人が外国人の話し声などをうるさく見ることが多いと思っていたため、アナウンスのかたさんありうると思う外国人の存在に驚いた。(社3)

5. 静けさ (6人記述)

1. 記事で取り扱っている問題が自分も感じているものだったから (2人記述)

1. にぎやかな場所と静寂な場所でにぎやかにするか静かにするか、いろいろ考えさせられるなと感じたため。(文1)
2. 国民性の違いを感じたから。／自分は日本の文化に慣れているが、外国人の文化にも良さを感じ、それだけでついて考えてみたかったから。(社2)

2. 記事の内容は個人の感想に收まらず大きな社会問題を感じたから (3人記述)

1. この文章では、電車や公共の場で静けさを保つという日本人の習慣を、単なるマナーとしてではなく「他人を尊重する行動」として書かれている。私自身も、公共の場の音を遮るし声に敏感になることが多い、この問題で生活を深く関わっていると感じた。(文1)
2. 日本人が快速で感じている躍動が、必ずしも他の国の人々も同様に感じる訳ではないということに気づかされたから。(法1)
3. 日本人は、公共の場で静かにすることが礼儀儀式だと思っているけれど、ネバーハーの人にとては静けさが寂しいといった、静かにすることだけが正義ではないのかと思ったから。(法1)

3. その場面にもし自分がいたらどうするかを考えてみたかったから (1人記述)

1. 一個人的に自分も消極的で実際に他人に話しかけるのが下手で自分でそもそもそういう雰囲気の中にいてたらどうするのかが気になって話してみたかった。(文1)

6. 学食 (23人記述)

1. 記事で取り扱っている問題が自分も感じているものだったから (15人記述)

1. 一人ひとりつあるという方式で、グループ内の半数がまず自身も感じていることであることに挙げ、それが全員を感じさせることが最もやったため。(社3)
2. おかげでよくて野菜の量は過多ではないから。(法1)
3. この選択以外の問題については、今までに高校の授業や大学の授業さらには、テレビで取り上げられていたことがあったので、初めて見る問題である「学食」にしました。(文2)
4. スポーツをしており、体重管理・健康管理を行っているため、学食で野菜の少なさを感じたり、揚げ物の多さを感じることが多かった。(社2)
5. フルーツが高い (文1)
6. 外食をする時に、野菜を使った料理の美味しいお店をあまり見かけず、ラーメンやハンバーグなどばかり食べるから (法2)
7. 学食のアンケートに実際に野菜の種類を増やしてほしいと書いたことがあり、共感できたから。(文2)
8. 私たちの行動で解決できそうな問題だったから。(法1)
9. 脂質に気をつけていることもあり、学食のメニューを選ぶ際に揚げ物が多いことをいつも感じていた。(社3)
10. 実際に立命館大学の食堂の野菜が少ないと感じたため (法4)
11. 他のものよりも、疑問の明確で、自分に疑問に思える内容だったから。(法2)
12. 大学の食堂に新鮮な野菜がキャベツしかないという言葉共に共感した。立命館の場合はオクラも新鮮だと思いつか新鮮な野菜は野菜に少ない。(法1)
13. 日常に感じていたことだとだから。(社1)
14. 立命館大学の学食でも野菜はないように感じたから。(文3)
15. 立命館大学の学食でも揚げ物が多めに提供されているで、もう少し品数が増えたらいいなと思ったからです。(国1)

2. 記事の内容は個人の感想に收まらず大きな社会問題を感じたから (4人記述)

1. これは食事に限らず、そもそも日本人が野菜を食べることに疎いのではないかと考えが広がる気がしたから (社3)

2. 学食で野菜が少ないという問題は健康に関連した問題であることは事実だが、それ以上に宗教に関連したムスリムメニューなどの配慮が日本の中で欠けていることに関係しているなと気づいたから。(文1)

3. 食堂で買っているという問題が新聞記事になっていたことが珍しいと感じたため。(文1)

4. 単に日本一いやうるさいと大学食堂の健康意識の差だけでなく、異文化共生に関する問題も内包している話を感じたからです。また、班員の一人が、実際自分が学食でアルバイトをして感じていた問題点や疑問を話してくれて、さらに興味深かったです。(文2)

3. その場面にもし自分がいたらどうするかを考えてみたかったから (2人記述)

1. 学食での問題は、今の私たちに一番困り問題であると感じた。学食を利用している私たちが積極的に取り組むことで意味があるのではないかと感じたから。(社1)

2. 実際に知り合いにそういう課題を持つっている人がいるから。(法2)

選択なし (2人記述)

1. 学食としてい身近な場所に困る問題だったから (社2)

2. 自らの経験を踏まえて、討論しやすかったから。(文1)

図4：河北新報「留学生の視卓」でのリフレクション結果（2025年10月14日、匿名で集計し共有、マーク部分のみ）

れは、アレだな」（高橋, 2022）で、「気になつた『これ』に似ている『アレ』を森羅万象の中から探し出す」（p.219）という楽しみを綴っている。それは「これ」が何であるかの答えを掘むより、別の「アレ」との関係を探りながら問い合わせていくプロセスが「世界を豊かにしてくれる」（高橋, 2022, p.3）という姿勢である。

今回、冒頭で紹介した「これは、何の肉…」のエピソードを環境教育を専門とする知人に話したところ、「記号接地問題」と関連づけて捉えてみてはどうかと助言をいただいた。「記号接地問題」については、発達心理学者・今井むつみと言語学者・秋田喜美の共著『言語の本質』（2023）に平明な解説があり、そこでは「身体感覚を経験につなげられていない（接地していない）記号同士を操作して、言語の本当の『意味』が学習できるのか、という問題」（p.253）と整理されている⁶。さらに今井（2024）は、著書『学力喪失』で、生成系AIの

【引用文献】

- 今井むつみ. 2024. 学力喪失：認知科学による回復への道筋. 岩波書店
 今井むつみ・秋田喜美. 2023. 言語の本質：ことばはどう生まれ、進化したか. 中央公論新社
 まわしよみ新聞実行委員会（編）. 2014. まわしよみ新聞のすゝめ. まわしよみ新聞実行委員会
 中橋雄（編）. 2017. メディア・リテラシー教育：ソーシャルメディア時代の実践と学び. 北樹出版
 邁邊裕子・北出慶子・新矢麻紀子（2025）市民性の涵養を目指した日本語教師養成：多文化社会の共創と日本語教育の接点からの展望一. 日本語教育(19), 34-49.
 杉万利夫. 2013. グループ・ダイナミックス入門. 世界思想社
 高橋源一郎. 2022. これは、アレだな. 毎日新聞出版
 山口洋典・小辻寿規・秋吉恵. 2025. 立命館大学におけるサービス・ラーニングと地域連携：キャンパス特性を活かした学びと成長への教育実践とキャンパスを横断した地域貢献. 立命館高等教育研究(25), 1-18.

【注】

- ¹ この背景には、対象を捉える上では実体よりも身体との関係が鍵となる、という前提がある。この前提は、廣松涉（1982）による『存在と意味』（第1巻）の四肢構造論に拠っており、杉万（2013）の第6章で詳しい解説がなされている。
- ² 全キャンパスで各クラス共通としている到達目標は次の3つである。(1)大学以外での学びを体験し、NPO等の組織マネジメントやリーダーシップなどへの関心が高まる。(2)現代社会の問題群に対する自らの関心を明らかにし、問題の当事者と解決の担い手が誰か理解する。(3)今後自らが習得すべき専門分野を踏まえ、問題解決への接近にどのような学びが重要を見つけだす。なお、立命館大学におけるサービスラーニングセンターの取り組みについては山口ら（2025）を参照されたい。
- ³ 2012年は手法の開発時期ということもあり、筆者が進行役となって試行的に実施し、陸奥さんに大学で実施した際の受講生の反応や大規模人数での展開可能性などについてフィードバックした。
- ⁴ ホスト校である宮城女子学院大学による報告記事「【日本語教員養成課程】「多文化共生社会」と「防災」をテーマに夏合宿を実施しました」が2025年8月22日に公開されている。（<https://news.mgu.ac.jp/jl/news/5631.html>）
- ⁵ 本連載第21回でも立命館大学教養C群科目「現代社会とボランティア」の2021年度GAクラスで受講生による自己評価の結果を紹介したが、今回も株式会社朝日ネットのmanabaの掲示板で受講生と共有した内容を、了解を得て掲載する。
- ⁶ 今井（2024）は「『記号接地』とは人工知能と認知科学における長年の未解決問題である」（p.196）という。この問題がどのように成立したかを参考するため、以下に引用を付す。「1990年にスティーブン・ハルナッドという認知科学者が、当時のAIを批判して、記号接地問題（Symbol Grounding Problem）ということばでAIを特徴づけた。当時のAIは今と異なり、記号（ことば）を操作する記号アプローチが主流だった。記号の意味は人間が定義を与える。しかし、コンピュータはひとつひとつの記号（ことば）の意味を他の言語で記述しなおしているだけで、コンピュータが意味をほんとうに理解しているわけではない。」

時代において「AIはどんな概念も『（人間にとて）あたかも理解しているように思える答えを出力している』だけで、『理解する』という状態をもたない」（p.198）と述べる。これに対し、人間は「個別の単語の意味を自分で推論することで学びながら、同時に語彙についての暗黙知である『スキーマ』を学び、身体化していく」（p.220）という。

すなわち、今回の実践で目指したのは、情報を集めて正答を導く「知識型の学び」から、他者や環境との関係性の中で意味を手繕り寄せる「記号の接地を伴う学び」への転換である。こうした関係性の中で生まれる意味づけこそが、市民性教育における経験の核心である。そこで次回は、「これ」が何かをフィールドワークで探るプロセスに浸る中で、どんな学びが得られるのか。令和6年能登半島地震から2年を、筆者がどのように迎えたのかという事例を手がかりに記してみたい。（gucci@fc.ritsumei.ac.jp）



続々・数値化、3分割すると説明できる

J R 茨木駅近くの接骨院が、私の仕事場です。

全員が当院の患者さんという御家族がいらっしゃいます。

「おうちでされているのは、寺田先生ごっこでしたっけ？」

「はい、家族で先生のやり方を真似して、寺田先生ごっこをしています」

「私のやり方を真似してくださってありがとうございます」

「でもね、最近、失礼なんですけど、先生っていうのが抜けることが多くてですね・・・」

「はい？・・・」

「もう、てらぴーごっこしようとか、なんなら、てらぴーしようと短くなっています」

「へー」

「うちでは、先生のことをてらぴーって呼んでまして」

「そうなんですか」

「カレンダーには予約してある日に、寺田接骨院じゃなくて、てらぴー、てらぴー、てらぴーって書いてます」

「ほー、そのほうが早く書けますね」

「我が家ではてらぴーごっこを何年もやってるんですけど、最近、だんだんと孫が大きくなってきましたね、脚を持ち上げながらマッサージするっていうのがしんどくなつきました」

「無理して体を傷めないでくださいね」

「いつも何気なくされているけど、先生は重労働されてい るんだなあとわかりました」

「慣れてますから、大丈夫ですよ」

「いやあ、たいへんだと思います」

「ちょっと違う話ですけど、アナグラムって知ってます？」

「アナグラム？ 知りないです」

「名前の文字の順番を入れ替えて、別の単語をつくると、その人の使命とか特徴が現れるんですって」

「へー」

「濁音の〃と半濁音の〇は、とってもいいし、つけてもいいし、「は」は「わ」、「へ」は「え」と読んでもいいらしいです」

「なるほどー」

「私も、家族全員やってみたんですけど、それぞれその人らしいなっていうアナグラムが出てくるんですよ」

「おもしろいですね」

「ちなみに私の「てらぴしたろ」になりました」

「ええー、ピッタリですね」

「ご家族のアナグラム、つくってみてください。面白いのができますよ」

「やってみます」

てらぴーごっこと聞いて、いいことを思いつきました。

「ごっこにすれば、私の方法がみんなに伝わりやすいのではないか」と。

今まで、どちらかというと専門家の先生に伝えようとしてきました。

でも、なかなかうまく伝わりません。

いろいろ理由は考えられます。

一番の理由は、あんまりお金儲けにつながらないからでしょうか。

よく治る（と私が思っているだけかも）ということは、売り上げが減ることにつながります。

病気を治すことではなく、病気を管理する医療（あるいは医療類似行為）こそが、儲かるのです。

一生懸命に治すということは、一生懸命患者さんを来なくていよいよしているわけです。

すなわち流行るのは、患者さんを治せる方法ではなく、患者さんを管理できる方法なのです。

今でいうサブスク（subscription）ですね。

当院のように、保険診療を中心にやっている接骨院はずいぶん減ってきました。

実費で料金の高いところや、クレジットで何ヵ月分か一括払いさせるところが増えています。

30年間、保険診療での施術料はほとんど改定されておらず、むしろ支給条件が厳しくなった面もあります。

一方で最低賃金は2倍以上になり、従業員を雇うには売り上げを増やすなければならなくなりました。

治す方法より、儲かる方法のほうが、昔以上に求められる時代なのです。

先日も元医療関係者の患者さんに言われました。

「先生、そーとーむずいことやってるんとちがうん。こんなもんもっと高い料金とってやらなあかんで」と。

そうです。もし、専門家の先生に私のやり方を採用してもらおうと思うなら、もっとお金儲けをして、高級外車を乗り回して、ブランド物を身に着けて、お金が儲かっているところを見せつけないといけないので。

そうすれば、どうぞ先生のやり方を教えてくださいと教えを乞う専門家の先生が寄ってくるでしょう。

私は、ブランド物は嫌いだし（もらったら身につけますけどね）、車は必要なときにレンタカーを借りればいいと思

っています。「儲かってる」演技は、できない者の負け惜しみですが、やりたくありません。

残り少ない人生、やりたくないことをやってる暇もありません。

私は、自分で考案した方法を、できるだけ、たくさんの人
に使ってもらいたいと願ってきました。

しかし、私がイメージしていたのは、見も知らぬ専門家の
先生方に、私の方法を使ってもらうことでした。

いくら私がそう願ったからといって、私は一介の柔道整復
師です。

そして世の中には様々な治療法がごまんとあり、私の方法
に気づいてもらうことさえ簡単ではありません。

ましてやそれぞれご自分の治療方法をお持ちですから、私
の方法を使っていただくことは至難の業と言えます。

いっぽう、当院の患者さんの中には、私のやり方を真似し
てやってますとおっしゃる方がたくさんいらっしゃいま
す。

言葉ではなかなか効果を伝えることは難しいです。

言葉で伝えなくても、真似していただけたのは、私のやり
方に効果があることを実感してもらえたからなのです。

誰かに使ってもらえばと思って、このマガジンにも施術
の仕方を書いてきました。

だんだんと回を重ねるにつれ、踏み込んだことまで書くよ
うになってきました。

一般の方にはわかりづらいのではないかということは自
覚しています。実際「最近の内容はさっぱりわからない」
というお声もいただいています。

ただ、わかりやすく書くことに拘泥すると、現場で役に立
たないものになってしまいます。

ですから、このマガジンには、たとえわかりにくくても「書
き残しておくべきだ」と思ったことを書いていきます。

また、このマガジンとは別に、てらびーごっこを日本全国、老若男女にしてもらうにはどうしたらいいのか考えてみます。

プランができたら、お知らせいたします。

パラドキシカルストレッチングと パラドキシカルコントラクティング (6)

さて、患者さんに、家でやっておくといいことをたずねられたとき、以前は、次のようにアドバイスしていました。
「縮みすぎているところを伸ばして、伸びすぎているところを縮めてください」

しかし、患者さんには、縮みすぎているのか伸びすぎているのかがわからないのだそうです。

解剖の知識がある私でさえ、縮みすぎか伸びすぎか判断に迷うことがあります。

縮みすぎでもあり、伸びすぎでもあるという状態になっているところも少なくありません。

一見伸ばすような縮め方もあるれば、一見縮めるような伸ばし方もあります。

それを私はパラドキシカルコントラクティングあるいはパラドキシカルストレッチングと呼んでいます。

コントラクティングなのか、ストレッチングなのか判定がつけがたいケースもあります。

極論すれば、体の状態が良くなりさえすれば、縮みすぎか伸びすぎかは、わからなくとも構わないのです。

ですから今は、「痛みが少なくなる姿勢をして、痛みが少ないほうにさすってください」とアドバイスしています。

では、もう少し、今回も数値化を用いて、パラドキシカルストレッチングを説明していきます。

前号・前々号の繰り返しになりますが、縮みすぎの度合 t を次のように定めます。

もっとも筋肉が縮みすぎている状態： $t = 100$

もっとも筋肉が伸びすぎている状態： $t = -100$

中間のどちらでもない状態 : $t = 0$

筋肉が正常に縮んでいる状態 : $30 > t > 0$

筋肉が正常に伸びている状態 : $0 > t > -30$

筋肉が縮みすぎている状態 : $100 \geq t \geq 30$

このうち $40 \geq t \geq 30$ は無症状（境界）

筋肉が伸びすぎている状態 : $-30 \geq t \geq -100$

このうち $-30 \geq t \geq -40$ は無症状（境界）

筋肉は通常 $30 > t > -30$ の範囲で伸び縮みしています。

t の絶対値が 40 を超えると、痛みなどの症状が現れます。

筋肉はたいてい 2 つの骨を連結しています。

3 つ以上の骨を連結していることもあります、ここでは説明をシンプルにするために 2 つの骨で説明していきます。

筋肉が骨にくっつくところは、骨盤に近いほうを起始、遠いほうを停止と呼びます。

筋肉が短縮すると、起始と停止が近づき、筋肉が伸長すると、起始と停止が遠ざかります。

骨と骨のつなぎ目を関節と呼びます。

起始と停止の間に関節が 1 つだけの場合（単関節）と、2 つ以上ある場合（多関節）があります。

関節は、前後・左右（内外）に曲げ伸ばしされたり、左右（内外）にねじられたりします。

前後に曲げ伸ばしする運動は左右の軸（左右軸）を中心におこなわれます。

左右（内外）に曲げ伸ばしする運動は前後の軸（矢状軸）を中心におこなわれます。

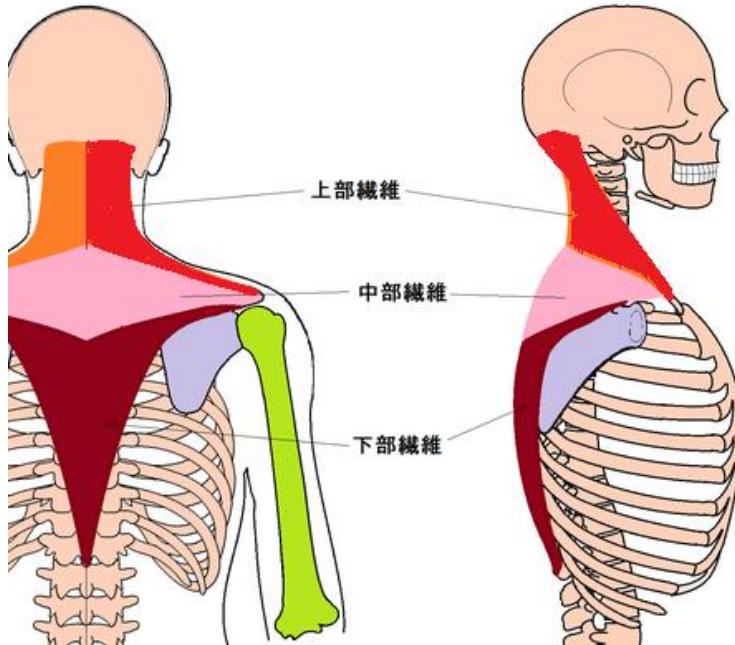
左右（内外）にねじる運動はと上下の軸（垂直軸）を中心におこなわれます。

関節運動は、これらの 3 つの軸運動に分解することができます。

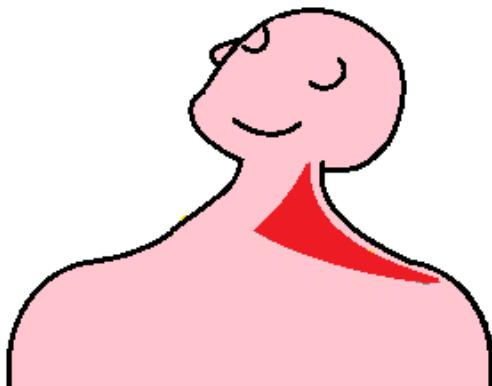
それぞれの運動をどのような名前で呼ぶかは、関節によって異なります。

骨同士が近づいたり遠ざかったり、ずれる動きをしたりすることもありますが、ここでは3つの軸運動に絞ります。

右の僧帽筋上部線維（下図の赤い部分）を例に、パラドキシカルストレッチングを説明します。



この筋肉が縮むと、頭頸部は右前に曲がり、顔は左に向きます（屈曲・右側屈・左回旋）。下図



起始側から縮めた状態（コントラクティング）

停止側から縮むと、肩甲骨は、外側（肩峰）が挙がり、後ろに引かれ、外にねじれます（外転・伸展・外旋）。

この筋肉が伸びると、頭頸部は左後ろに曲がり、顔は右に向きます（伸展・左側屈・右回旋）。

肩甲骨は外側の肩峰が下がり、前に出て、内にねじれます（内転・屈曲・内旋）。

話をシンプルにするため、肩甲骨はここでは動かないものとし、起始側の頭頸部の動きだけを考えます。
実際には、たいていの場合、停止側の肩甲骨の動きも考えなければなりませんが、ここでは省略します。

筋肉は $30 > t > -30$ の範囲で正常な伸び縮みをします。

t を 3 つの軸運動によって分割します。

左右軸の運動（屈曲・伸展）で生じる伸び縮みを x
矢状軸の運動（右側屈・左側屈）で生じる伸び縮みを y
垂直軸の運動（左回旋・右回旋）で生じる伸び縮みを z
 $t = x + y + z$
 t は筋肉が縮む度合いなので、縮むときは+（プラス）になり、伸びるときは-（マイナス）になります。

筋肉が縮む場合、屈曲・右側屈・左回旋が均等に起こるなら、 $x = 10$ $y = 10$ $z = 10$ の短縮が起こります。
これは通常のコントラクティングです。

これ以上に短縮すると、筋肉が縮みすぎになります ($t \geq 30$)。さらに短縮すると痛みなどの症状が出てきます ($t \geq 40$)。

筋肉が伸びる場合、伸展・左側屈・右回旋が均等に起こるなら、 $x = -10$ $y = -10$ $z = -10$ の伸長が起こります。

これは通常のストレッチングです。

これ以上に伸長されると、筋肉が伸びすぎになります ($t \leq -30$)。さらに伸長されると痛みなどの症状が出てきます ($t \leq -40$)。

ただ、実際には、不均等に短縮や伸長が起こります。
そのため、例えば、 $x = 0$ $y = 30$ $z = 0$ の短縮や、
 $x = 0$ $y = -30$ $z = 0$ の伸長も起こります。
 x 、 y 、 z の符号が違うこともあります。

$x = 50$ $y = -20$ $z = -10$ の短縮や、 $x = 20$ $y = -10$ $z = -40$ の伸長も起こります。
 x, y, z の符号が違うなら、それぞれの絶対値が 30 を超えても、 $30 > t = x + y + z > -30$ の範囲なら、正常な短縮や伸長になります。

さらに、停止が起始に近づいてくれば、短縮できる量が減り、伸長できる量が増えます。

反対に、停止が起始から遠ざかれば、短縮できる量が増え、伸長できる量が減ります。

ケース 1 2

右下で横向きに寝ていて、枕から頭が前に落ちて、首が右前に曲がり、顔が天井に向くようにねじれ、首を寝違え（捻挫）したとします。

このとき右僧帽筋は、 $x = 10$ $y = 40$ $z = 10$ という縮みすぎになったとします。

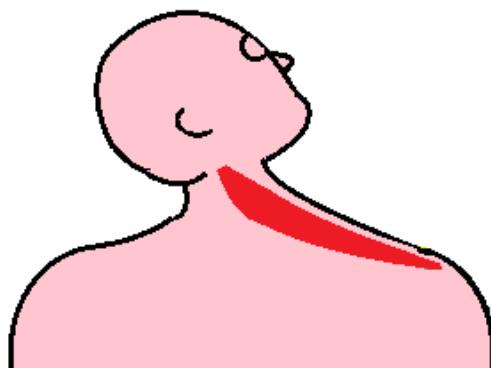
首を前屈・右側屈・左回旋しすぎて、右僧帽筋が縮みすぎたケースです。

この寝違えを元に戻すには、 $x = -10$ $y = -40$ $z = -10$ のストレッチをすればよいと思われるかもしれません。

しかし、そうすると $t = -60$ のストレッチになり、こんどは伸ばしすぎになってしまふかもしれません。

これは危険なので、まず痛みが少なくなる位置をさがしてみます。

おそらく $x = -5$ $y = -20$ $z = -5$ のような、安全な範囲でのストレッチになっているでしょう。下図



通常のストレッチング

この状態で、縮みすぎになったところをもんだりさすったりします。

ひどい炎症や組織破壊が起きていなければ、症状が軽減されるでしょう。

ケース13

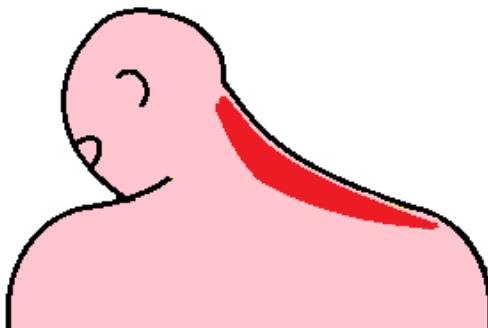
右下で横向きに寝ていて、枕から頭が後ろに落ちて、首が右後ろに曲がり、おでこが布団につくようにねじれ、首を寝違え（捻挫）したとします。

このとき右僧帽筋は、 $x = -10$ $y = 80$ $z = -10$ という縮みすぎになったとします。

首を右に側屈をしそぎて、右僧帽筋が縮みすぎたケースです。

賢明な読者の方は、この寝違えを元に戻すには、 $x = 5$ $y = -40$ $z = 5$ のストレッチをすればよいと思われるでしょう。

そうすると $t = -30$ のストレッチになり、安全な範囲でのストレッチができます。下図



側屈を優先したパラドキシカルストレッチング

この状態で、縮みすぎになったところをもんだりさすったりします。

ひどい炎症や組織破壊が起きていなければ、症状が軽減されるでしょう。

もう、賢明な読者の方はお気づきですよね。このケースが一見縮めるような方向に伸ばすパラドキシカルストレッチングになっていることに。

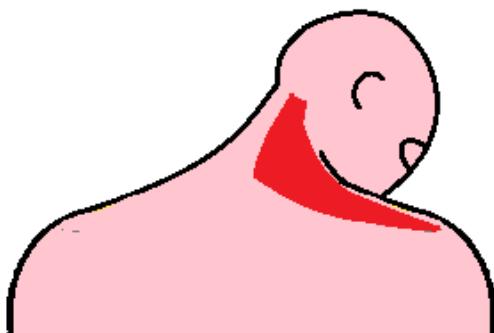
ケース14

仰向きに寝ていて、枕から頭が左後ろに落ちて、首が左後ろに曲がり、顔が左に向くようにねじれ、首を寝違え（捻挫）したとします。

このとき右僧帽筋は、 $x = -10 \quad y = -10 \quad z = 80$ という縮みすぎになったとします。

首を左に回旋しすぎて、右僧帽筋が縮みすぎたケースです。賢明な読者の方は、この寝違えを元に戻すには、 $x = 5 \quad y = 5 \quad z = -40$ のストレッチをすればよいと思われるでしょう。

そうすると $t = -30$ のストレッチになり、安全な範囲でのストレッチができます。下図



右回旋を優先したパラドキシカルストレッチング

この状態で、縮みすぎになったところをもんだりさすったりします。

ひどい炎症や組織破壊が起きていなければ、症状が軽減されるでしょう。

このケースもパラドキシカルストレッチングになっています。

ケース15

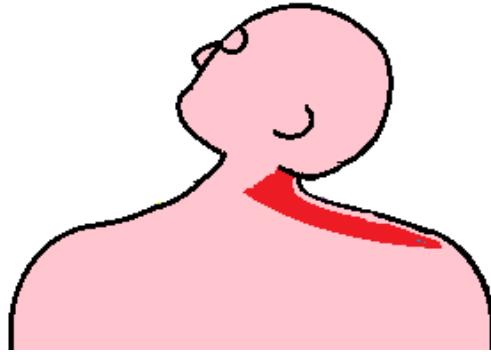
左下で横向きに寝ていて、顔は天井のほうに向いたまま、枕から頭が前に落ちて、首が左前に曲がって、首を寝違え（捻挫）したとします。

このとき右僧帽筋は、 $x = 80 \quad y = -10 \quad z = -10$ という縮みすぎになったとします。

前屈をしすぎて、右僧帽筋が縮みすぎたケースです。

賢明な読者の方は、この寝違えを元に戻すには、 $x = 5 \quad y = -40 \quad z = 5$ のストレッチをすればよいと思われるでしょう。

そうすると $t = -30$ のストレッチになり、安全な範囲でのストレッチができます。下図



後屈を優先したパラドキシカルストレッ칭

この状態で、縮みすぎになったところをもんだりさすったりします。

ひどい炎症や組織破壊が起きていないなければ、症状が軽減されるでしょう。

このケースもパラドキシカルストレッ칭になっています。

比較表

ケース	x	y	z	t	改善する方法
12	10	40	10	60	通常のストレッ칭
13	-10	80	-10	60	パラドキシカルストレッ칭
14	-10	-10	80	60	パラドキシカルストレッ칭
15	80	-10	-10	60	パラドキシカルストレッ칭

このように、縮み具合 t を、3つの軸運動で分割すると、ある軸運動では伸びながら、全体としては縮みすぎている場合に、パラドキシカルストレッ칭が有効になってくることが説明できます。

一見縮める方向に伸ばすことで、症状が改善するのは、このようなメカニズムなっているからだと私は考えています。

長年、患者さんに施術をしてきて、痛みが消えるストレッチングは、必ずしも筋肉が解剖学的に縮むのと反対の方向に伸ばすストレッチングとは一致しませんでした。

通常のストレッチングで改善することもあるが、それとは違うストレッチングで改善することもあります。

もちろん、ストレッチング以外の方法でなければ改善しないこともあります。

なかなか改善しないケースでは、むしろ医学的知識が、改善の妨げになっていたということがありました。

教科書も大事ですが、教科書どおりにやっているだけでは改善しないことが多いのです。

常識（医学的知識）をいったん捨てることで、改善のきっかけをつかめたということが何度もありました。

パラドキシカルストレッチャやパラドキシカルコントラクティングに気がつき、30年近くたって、やっと言語化することができました。

コロンブスの卵と一緒に、聞いてみれば、大したことでもないのかもしれません。

てらびーごっこで痛みが消えることもあります、必ずしも言語化は必要ではありません。

むしろ、医学的知識を持たずにやったほうが、うまく解決することもあるでしょう。

しかし、説明できるということは、様々な症状に対して解決の手順を早く組み立てられることにつながり、患者さんの苦痛な時間を少なくするのに役立ちます。

長年うまく説明できず、ずっともやもやしていましたが、このマガジンのおかげで説明ができるようになり、私が試行錯誤したことが後世に残せます。

ありがとうございます。

まだ、説明できていないことも残っていますので、それはまた、次号以降に書いていきます。

私の考えた説明と方法が、いつか同じような疑問を抱えていらっしゃる専門家の先生の参考になり、そして、いつか誰かの苦痛を減らす一助になればとてもうれしいです。

ではまた

現代社会を『関係性』という観点から考える⑯

更生保護官署職員 三浦恵子（社会福祉士・精神保健福祉士）

連載 34(マガジン 62 号)では、「若者と薬物依存」について、地域社会でどう向き合うのか」という点について述べさせていただきました。その冒頭で記載しましたが、私は「薬物依存(症)当事者と家族支援」を、入職後間もない頃からのライフワークとしています。

今回は標記について私見を述べさせていただきます。

「現代社会を『関係性』という観点から考える」というテーマでの連載ですので、本稿でもそれを意識しています。これまでの連載については末尾に記載しています。

1 はじめに

私が保護観察官となって間もないころ、「二度と覚醒剤には手を出さない」「妻子のことが大切」と「固く誓った」はずの対象者の「突然の」再犯に強い無力感を感じることが重なりました。就労や家庭生活が順調であり、保護観察官や保護司との接触が保たれているなかでの再犯はなおのこと、それは「突然」であると私には感じられました。

当時(平成初期)、「立ち直り(更生・社会復帰)にはまず自分自身の意思の強さが大切」という考え方方が主流で、かつ、依存症について自分の業務以外の事項を学ぶ機会は今ほど多くありませんでした。大学時代の私の専攻は「社会病理学」でしたが、社会福祉士養成課程において実習等も重ねていました。しかし、当時の養成シラバスでは依存症について取り上げられることはなかったと記憶しています。

20代前半で保護観察官となり、更生保護や周辺分野の法制度を学びながら処遇の現場に立っていた私は、「依存症は治らない」というニュアンスが込められた当時の社会的な言説はやはり真実かもしれないと感じつつ、より充実した処遇を行うため、依存症に関する知識を求めて、書物などを閲読していました。そんな折、先輩職員に誘われ、近畿地方で初めて設立された DARC の1周年記念の催事に参加しました。

それは私にとって、回復を目指す当事者や彼らを支え DARC 設立に尽くした支援職の生の声を聞く初めての機会でした。そして私は、書物や講義から知識として「知る」というレベルではなく、人としての生きざまに向き合うという、人生観を揺さぶられる体験をしたのでした。そしてその体験自体が、保護観察官として、人としての大

きな転換点となりました。

その会場で DARC スタッフに声をかけていただき、家族会のお手伝いをはじめ、その後、運営委員会（その後理事会）への参加等、当事者の方と共に「動く」体験を重ねていきました。平成期前半は依存症当事者や家族が利用できる社会資源は現在ほど多くはありませんでした。そこで民間団体（その後 NPO 法人化）の強みを生かし、「薬物依存電話相談（30 年以上継続 令和 6 年度をもって終了）」「家族のための勉強会」「弁護士会と連携したインターベーション」などのサービス・事業の創設、「ドラッグコートに従事するアメリカの裁判官を招聘した講演会の開催」「各種講演録の発行」等を通じて支援職の学びや交流の機会をつくっていきました。日本嗜癖行動学会（令和 5 年度末で解散）、日本アルコール関連問題学会にも参加し、各種発表・研究を通して他の地域・分野の方との交流を重ねてきたことも大きな財産です。

それから約 30 年、DARC 等のグループが各地に創設されていきました。各種制度やサービスの依存症当事者や家族が支援につながるための仕組みづくりにも力が入れられ、現在は依存症当事者や家族を地域社会でどう支援していくかということが課題となっています。

2 薬物依存当事者の方々から得た大きな学び

ここからは、日本嗜癖行動学会秋田大会（令和 5 年度）で発表した内容をベースにしたものです。

① 刑事政策の構造上、回復者は地域社会にフェードアウトしてしまうがゆえに、処遇場面での再会は再犯となるという構造がある

一般に、薬物事犯者が再犯に及ぶ率は決して低くないと考えられているかもしれません。事犯が発生した際の過熱した報道ぶり、ドラマその他での誤った演出もまだ散見されるところで、「依存症問題の正しい報道を求めるネットワーク」では薬物報道ガイドラインを策定しています。改訂版 薬物報道ガイドライン（2024/11/20）（依存症問題の正しい報道を求めるネットワーク HP 参照）では、「望ましいこと」として「薬物依存症の当事者、治療中の患者、支援者およびその家族や子供などが、報道から強い影響を受けることを意識すること」等が、「避けるべきこと」として、「『白い粉』や『注射器』といったイメージカットを用いないこと」「薬物への興味を煽る結果になるような報道を行わないこと」「『人間やめますか』のように、薬物使用者の人格を否定するような表現は用いないこと」等が挙げられています。

薬物事犯者に対する刑事政策における取組も充実が図られてきました。私が働く更生保護官署においては平成後期から簡易薬物検出検査、そして認知行動療法をベースにした専門的処遇プログラム（現在の名称は薬物再乱用防止プログラムという名称であり、覚醒剤以外の薬物にも対応しています）などが導入され、実践と効果検証が積み重ねられてきました。

プログラムは改正が重ねられ、現在では、地域の社会資源に「つなぐ」ことがより重視され、そこで回復支援施設のスタッフやメンバーと更生保護官署職員が接する機会も増えてきました。更生保護官署職員が各種催事や各種学会に参加すること等により初めて依存症当事者、地域社会で回復に向けて努力している者と出会うことができた時代と比べると大きな進歩だと感じます。

なぜなら、刑事政策における「再会」とは、再び犯罪を行って刑事政策の手続に乗ってくる、すなわち「再犯」ということであり、保護観察処遇を終えて地域社会に復帰していった者の予後については、そこに介入する手立てもなく、知る機会もありませんでした。ただし、同じ地域社会で生活している保護司の方々は、結婚等の機会に元対象者等から喜びとともに連絡を受けたり、街中でいさつを交わしたりといった経験をなさっています。

つまり、再犯者の体験に触れる機会は再度の処遇課程において数多くあっても、保護観察を終えたその後の体験に触れる機会がほとんどないため、「薬物事犯者の処遇は難しい」と考える向きもあったのかもしれません。

「薬物事犯者、薬物依存症者の地域社会での立ち直り」についてその真実に触ることは極めて重要です。たとえば DARCなどを保護観察対象者に勧める際、書籍等で得た知識ベースで「説明する」とこと、自身で回復者に会った経験ベースで「伝える」とことは、説得力という点で差が出ると私は考えています。

② 「当事者と一緒に活動することを通じて、依存症者の方のイメージが変わること

DARC 等の催事などを企画し運営する過程においては、資料準備や会場設営の丁寧さなどにおいて、依存症当事者の方の真面目さを実感する場面が多くありました。一般的に抱かれがちな「だらしない」等の依存症者のイメージを良い意味で裏切るものであり、「人は回復できるものである」ことを改めて実感しました。

私は保護観察官として働きながら精神保健福祉士短期養成課程（通信）で学び国家資格を取得していますが、当時の養成課程（最も初期のもの）に依存症に関する事項は少なく、刑事司法と精神保健福祉それぞれの現場における連携には工夫が必要だと感じました。

障害者自立支援法（当時）等の導入や法人化等、平成 10 年代後半には DARC も変化を求められる時期を迎え、「仲間としての語り」がその活動の中心であった場に細かな事務処理・会計処理が入ることで当事者スタッフが負担を感じやすいことも実感しました。

私が理事を務めていた DARC では、こうした点を踏まえた役割分担・運営を行い、特に回復途上にあるスタッフに過度なストレスがかからないような配慮も行われていました。

③ 当事者の体験に根差した声のなかに必要なニーズがあるということ

活動を共にしていくなかで、「支援職からのこうした言葉かけはしんどい」「この

段階ではこうした支援が欲しかった」という意見を率直に聞かせていただけるようになり、それも貴重な経験でした。「(再使用をしないために)薬物関係者とは接触しない」という指導はもちろん行っていましたが、「喉が渴いてコンビニで飲み物を買うときはお茶等にしている。ペットボトル入りの水は、それを使って覚醒剤を使用していた時のことを思い出してしまって、水は買わないようにしている」という体験談に触れることも複数回あり、支援者が考えている以上に、再発・再使用の引き金は日常生活のなかに多くあると感じました。

また、DARC 等へのアクセスのみならず、各種福祉サービスの利用について戸惑いを覚えるという声も少なくありませんでしたので、刑務所出所後を想定し各社会資源との関わり方をガイドするDVDなども作成していました。

私が参加していた DARC の運営委員会(後に理事会)には、当事者と支援者が対等な立場で参加していましたが、その場では、当事者のみならず他の支援職の方から、本音ベースで多職種連携の在り方の基本、ケアマネジメントの在り方を学ぶことができました。

当事者やその家族のニーズにより接しやすい場に身を置き、民間団体の身軽さを生かした様々なサービス(薬物依存電話相談、司法手続に関するパンフや回復支援のためのワークブックの作成、刑事司法に特化した家族グループの運営など)を企画・運営することで、更に協力者を増やしていくことができたことも貴重な経験でした。

④ 家族支援の重要性

相談のハードルが高い薬物使用ということについて、家族が匿名で相談できる電話相談を設置したのは平成9年です。この電話相談は30年間継続しました。この相談窓口で得られたニーズから、平成10年代以降刑事手続に関わっている当事者の家族向けのミーティングなども設置しました。インターネットによる相談窓口の検索、オンライン相談等が普及する時代まで、こうしたサービスを無料で、長期間にわたり安定して提供することができたのも、民間団体ならではのフットワークの軽さ、様々な職域の援助専門職がプロボノ活動として運営に関わってきた強みもあると考えています。

また、困難を抱えている家族が孤立しないということも極めて重要です。これは私自身が後に、家族介護従事者として「認知症の人と家族の会」への参加したときに改めて実感します。

⑤ 援助専門職として慢心せず謙虚であること

これが一番の学びといえます。人間には回復する力があるということ、それには人と人との関わりが重要であるという体験を重ねたことで、専門職としての自負を持ちつつも慢心することなく謙虚に他者と連携することの重要性について考えさせられました。

このことについては次回以降で詳しく記載してきたいと考えています。

参考

依存症問題の正しい報道を求めるネットワークHP

これまでの連載

- 30号：連載1：更生保護制度とは何か
31号：連載2：更生保護を支える人々
32号：連載3：つながる・つなげる～現代社会とボランティアについて～
33号：連載4：「共同体」における「排除」と「包摶」という関係性 「遠野物語」から考える（前）
34号：連載5：「共同体」における「排除」と「包摶」という関係性 「遠野物語」から考える（後）
35号：連載6：介護は誰が担うべきか～家族・親族・地域社会の関係性を踏まえた一考察～
36号：連載7：対人援助の場面における「専門家」と当事者等との関係性について～家族・親族・地域社会の関係性を踏まえた一考察～
37号：連鎖8：「地域」を支える縁のかたち 血縁・地縁、そして「新たな縁」
38号：連載9：「29人と19人」～この数字が示すもの
39号：連載10：血縁あるいは家族について
40号：連載11：対人援助職が家族のケアを担うとき(1)
41号：連載12：対人援助職が家族のケアを担うとき(2)
42号：連載13：「開く」と「閉じる」こと
43号：連載14：『「開く」と「閉じる」こと』
44号：連載15：『つながりが支えるこころ』
45号：連載16：『「見える」と「見えない」こと』。
46号：連載17：「地域社会」との「関わり方」を考える
47号：連載18：「地域社会」で生きるということ
48号：連載19：「自分は誰かとつながっている」という感覚があるかということ
49号：連載20：『関係性』をメンテナンスをする～「当たり前」と思うことの陥穬について、50号：連載21：SocietyからHomeへ矮小化していく社会
51号：連載22：「自助、共助、公助」の他に、制度が既存のものとして含んでいる「家族助」について
52号：連載23：自分が「知っている」だけの世界で生きることの危うさ
53号：連載24：「知らないことが不安や排除につながる」ということ
54号：連載26：「今の社会」に対する若者の不安に、大人としてどう向き合うのか
55号：連載27：「理想とされる家族は今や『描かれるもの』の中にあるものなのか」
56号：連載28「自分には支えてくれる人がいる」「まだできることがある」と誰もが感じることができる社会へ（連載29と記載していますが28）

- 57号：連載 29「選べない日々」を過ごす人々への「まなざし」
- 58号：連載 30 改めて「介護は誰が担うべきか 家族・親族・地域社会の関係性を踏まえた一考察」
- 59号：連載 31：非行とは行うものなのか巻き込まれるものなのか
- 60号：連載 32：家族における「ケア」の在り方 映画「どうすればよかったです」から考
える
- 61号：連載 33：みまもり「みまもる」ということば
- 62号：連載 34：「若者と薬物依存」について、地域社会でどう向き合うのかと
- 63号：連載 35：今号

『余地』

～相談業務を楽しむ方法 32～

<目的地>

杉江 太朗

～京都から東京に行く方法～

毎週、職場で勉強会を実施している。そのときに京都から東京に行くための方法を参加者に問い合わせ、順に挙げていってもらった。新幹線、車、バス、徒歩、ランニング、自転車、飛行機、船、一輪車、ヘリコプター、ヒッチハイク、タクシー・・・と様々な方法があげられる。当然、現実的かどうかは別の話。学生だと夜行バスで行ったよねとか、社会人になってお金に余裕が出てくると新幹線一択・・・そういうえば、青春18切符を利用して、鈍行で行ったこともあったなんて話も出た。これは東京にどうやって行くかという話ではなく、目的を達成するためには様々な方法があるという例えの意味で扱った。

相談援助の現場には様々な相談事が寄せられるが、その解決方法は1つではなく、数多くの手段があることを伝えたかった。相談が寄せられたとき、多くの人は、すでに一般的な解決方法を試している場合が多いのではないだろうか。困ってから何もせずに相談に来たのではなく、まずは多くの人が選択したであろう

解決策を試し、それでもうまくいかなくて相談に来ているはずである。

例えば、子どもが不登校で困っているという相談を受けたときに、「学校に行きたくない理由を聞いてみたらどうですか?」と提案したとする。多くの場合、すでにその方法は取られているだろうし、そんな簡単な方法で困りごとが解消するのであれば、わざわざ相談には来ていないだろう。

京都から東京までどうやって行けば良いかと聞かれたときに「新幹線」と提案することを『ど真ん中ストレート過ぎる』と設定して、今回の連載を始めていく。

～質問のバリエーション～

とある人から「最近、付き合っている人が・・・」と言われたことがあったとする。そのとき、え!? どんな人と・・・? そんな興味を持つかもしれない。

その場で「その人の名前は?」聞ければその人の名前はわかるかもしれないが、さすがに直球過ぎる質問ではあるし、そ

れに加えて、もし名前がわかったとしても、それ以上広がるものがない・・・なんてことを私は考えている。

もし、これが相談援助の場であれば、その人が安心・安全な人なのかアセスメントする必要が出てくるかもしれないし、その人を特定するための手掛けを得るためにどうすれば良いのか・・・と考えることもあるかもしれない。

もし面接場面でそのような場面に出くわしたらどうするのか。私の場合、面接をしているとき、頭の中で、どんな風に話を進めていけば、目的地（今回で言えば、付き合っている人の人柄）に到着出来るのかを常に考えている。相手から発信される言葉のどこに焦点を当てるのか、どんな質問を返すのかなど、常に頭の中で質問のバリエーションを増やしていくことに集中しつつ話を聞いている。

さらに頭の中で思いついた質問をどのタイミングで投げかけるかは、話の流れや、相手との間合い、その場の空気を感じながら判断する。

そのとき考えることは、ど真ん中ストレートではうまくいかないことが多いということである。いかにど真ん中には放らずに、変化球でも遅い球でもワンパンでも敬遠でもなんでも良いので、気付いたら抑えられていたというのが理想である。

～頭の中（思考）と「質問」～

例えば、Aとの面接の中で、「付き合っている人がいて」という話題が出たとする。そんなとき、実際にどんなやり取りをしているのか思考と実際の質問とに分けて考えていきたい。当然、このやり取りは筆者の作話である。

A「彼氏が出来た・・・」

筆者（頭の中でどんな人が知っておかないと・・・取り敢えずどんな人が知りたいし、後から調査するために名前くらい聞いておきたいな・・・と考えつつ、でもすぐに名前を聞くのは直球過ぎるからとりあえず探りを入れてみよう）「へえ、何者？」

A「何者って（笑）」「えーっとアルバイト先が一緒で・・・」

筆者「何している人なん？」

A「大学生」

筆者（一度、聞きたいことから話を遠ざけるために）「アルバイト何してるんやっけ？」

A「居酒屋」

筆者（聞きたいところではないところを聞こう）「ホール？キッチン？」

A「ホールが多いかな～」

筆者（その話をもっと掘り下げてみる）
「居酒屋のホールか、明日とか金曜日やし、忙しいやろうね」（金曜日に居酒屋が忙しいのは当たり前）

A「めっちゃ」

筆者「酔っぱらいに絡まれたりしな

い?」(酔っぱらいは絡んでくるものだけ)

A「まだ大丈夫かな」

筆者(そろそろ聞きたいことに話を戻すために布石を打つ、そのためにアルバイト先のメンバーの話に移す)「酔っぱらいに絡まれたらアルバイト同士で助けあったりするの?」(始めたばかりならそんなの知らないだろうけど)

A「わかんないけど、たぶんそうなのかな?」

筆者(よし、もう少し聞きたいことに近付けてみよう)(でも絡めたことはないみたいだから)「もしかしたら絡まれるかもしれないし、絡まれなくても、たぶん続いているうちに、裏で店員があだ名で呼ぶようなお客様も出てくると思う。例えば〇〇とか」「杉江さんが居酒屋でアルバイトしているときは・・・」(自分の経験を話して、アルバイト先の客の名前に触れてみる)

A「へえ」

筆者「アルバイト同志はどう呼び合ったりしてるの?」

A「えっと、あだ名?とかかな」

筆者「でも最初から覚えられないよね」

A「名札にそのあだ名が書かれているから、それ見たらわかるんだ」

筆者(まだ交際相手には触れないように質問を)「じゃあAの名札にはどう書かれてるの?」

A「普通に下の名前でAって」

筆者「そうなんだ」(そろそろ本題に突っ込んでみよう)「ちなみに彼の名札はどうなってるの?」

A「数字の数って書いてある」

筆者(普通に興味を持ったことを質問してみる)「数字の数?何?算数が好きとか?」(少しボケも入れつつ)

A「名前が数哉っていう名前だから」

筆者(苗字も聞きたいけど直球過ぎるので、思ったことをそのまま)「数哉って珍しい漢字だね。(珍しいに焦点を当てて)苗字も珍しいのかな?」

A「いや、それがめっちゃ普通やねん」

筆者「(普通の代表的な苗字をボケで)鈴木とか?」

A「ちがう田中」

筆者「めっちゃ普通!」

という風に、最終的に付き合っている人の名前が「田中数哉」だと判明していく。一度、本題から離れ、徐々に本題に戻すための布石を打っていく。最初から「その人の名前何ていうの?」と聞けばすぐに教えてもらえるかもしれない。ただ、それだと名前を知ってどうするのかと感じさせてしまい、尋問された感が強くなってしまう可能性がある。

それよりも私自身は、話の中で自然に聴取できるのが理想だと考える。今回のやり取りは、アルバイト自体にも興味を持つつ、語られる言葉に反応し、結果として必要なことも聞いていく。最初か

ら本題に触れてしまうと、それ以上の内容が語れない可能性もあるだろう。

また、直接名前に興味があるという聞き方ではなく、漢字の一部の珍しさに興味を持っているという反応を見せたり、苗字を聞きたいのではなく、珍しい苗字なのかどうかを知りたいと質問をしたりと、わざと本質から逸らすような質問もしている。

～目的地を見失わない～

何よりも大切なのが、目的地を見失わないことである。また、目的地への行き方はバリエーションが豊かである方が良い。バリエーションを増やすためには、いろいろな方法があることを知ることである。SV を受けることも然り、他の人の面接に同席することも然り、方法を知るための機会は作ろうと思えばいくらでも作れる。普段の会話の中でも、頭の中の思考と実際に発する言葉を意識しながら話をしている。ラジオのパーソナリティーの掛け合いを聞いて、言葉の選び方を学ぶ。コメディアンがバラエティで、ゲストの言葉のどの部分を取り上げるのかを見る。全て、意図した質問をするための訓練である。

1つの方法にとらわれず、こんな方法もあるのかと気付くことは、その人の技の幅を広げることに繋がるのではないだろうか。そのことが、援助の幅を広げ、それぞれの生活の質を高めていくと考え

ている。



統合失調症を患う母とともに生きる子ども ～ゆりの日常～

プリンセス —17歳からはじまる—



松岡園子

1997年秋。

赤や黄色の葉が舞う道を、ゆりはゆっくりと歩いていた。右手には茶封筒。中にしまわれている一枚の紙切れが、ゆりの1年間を物語っている。

「日商簿記検定 合格通知」

2週間前、職員室前のことだった。簿記担任の佐藤先生がゆりの顔を見るなり駆け寄ってきた。

「合格や！ 2級！」

「……やった！」

小さな歓声とともに他の先生や友人たちが集まってくる。

「おめでとう！」

「よかったです！」

周囲の祝福より、まずはほっとした。これで夏子を心配させずに済む。でも本当の勝負はこれからだ。

夜の授業を終えた後、高校の職員室に寄ったゆりの背中を、懐かしい声が包んだ。

「わあ、ゆりちゃん！ 卒業以来やね」

「……智恵ちゃん！ 久しぶり！ 大学の帰り？ 髮形が変わってて一瞬、誰かわからんかった」

茶色に染まった髪のせいか、すごくお姉さんに見える。

「大学の授業って朝から夕方まであるねん。高校の時は夜だけやったやん。それにサークルにも入ったから…大学生って結構、忙しいで」

「わ、すごい！」

大学生…智恵美の話している内容も、ぐんとお姉さんの会話のように感じる。

「でも……奨学金借りて、やっとかな。両親からは『働け』って言われてるし」

「じゃあ、私も頑張らんとな。私は定時制と通信制を両方取ってて、3年で卒業する予定やから来年、卒業」

ゆりは脇に抱えた参考書をパラパラとめくりながら答えた。先週、先生と進路の話をしていた時に、夜間大学に行かないかと勧められた。簿記の資格を取ることができたゆりは推薦枠を利用して受験できるということだった。

家に帰ると夏子が笑顔で迎えた。数か月前に再び症状が出た時は心配だったが、今は以前よりも安定していた。

「今日もちょっと早めやねえ」

「うん、今、お母ちゃんの好きなポトフ作ろかな。明日、食べて」

台所で野菜を刻みながら話を続けた。

「あのね、私……大学受けようと思ってる」

夏子の手が止まった。

「大学生？ ゆりが？」

「うん。夜間の大学やけど。働いて勉強して、将来ちゃんとしたい」

夏子は少し黙ったまま、少し笑っているように見える。

「行けたらいいね」

◇◇

翌春、ゆりは高校の指定校推薦で国立の夜間大学の経営学部に入学できた。家庭に事情のある学生は基準以上の成績を収めることが条件になるが、授業料が減免される制度もあるとのことだった。

入学式の朝、夏子は淡い黄色のワンピース姿で玄関まで見送りに来た。この花柄のワンピースは、久しぶりに見る夏子のお気に入りだった。

「お姫様みたいや」

自然と口に出てしまった。

「ええ？」

「いや……その服、よく似合ってるよ。行ってくる」

「がんばってね」

電車の中でゆりは夏子を思い浮かべた。お姫様は、今も昔も、そしてこれからも夏子らしい存在だと思う。

◇◇

夜間大学での最初の学期が終わりに近づいている初夏。ゆりは昼間、宅配会社の事務作業やコンビニでのアルバイトをしながら大学に通った。休憩時間に大学の課題に追われて

いることも度々。

「吉田さん、これお願ひ」

「はい！」

顔も見ずに返事だけすると、店長が笑っていた。

「大学生って大変やね」

「はい……でも楽しいですよ」

「そうか。勉強しながら働くのって大変やね」

「ありがとうございます」

ゆりはにっこりと微笑んだ。帰りの電車の中でふと考へる。私が大学に行くなんて、考へてもみなかつた。自分には縁遠いと思っていたことが現実になつてゐる。でもまだ先は長い。あと3年半の大学生活。その後は就職もある。「もっと稼げるようになせな」という思いで大学の授業で指定された本を読み込む日々だ。

家に帰ると、夏子が台所に立つてゐた。

「お帰り」

「ただいま。今日は私がご飯作るよ」

「大丈夫よ、私が……」

「いいから」

夏子は少し寂しそうに台所から退いた。それでも文句ひとつ言わない姿が、今の夏子だった。

「お母ちゃん、最近の調子はどう？」

夕食の席で、ゆりが尋ねた。

「うん……最近は頭の中の声も減ってきたわ」

「そうか……良かった」

「ねえゆり」

「うん？」

「あのね……私ね……ゆりが大学行ってくれて嬉しかったよ」

「そう」

「うん……でもね、実は少し怖いの」

「何が？」

「ゆりが大人になっていくのが」

夏子の言葉に胸が締め付けられる。

「別に、どこにも行かへんで。一緒におるやん」

「ありがとうございます」

その夜、ゆりはベッドの中で過去を振り返つた。幼い頃は夏子が全てだった。夏子が英語教室を開いていた頃は華やかに見えた。でもその裏には苦勞もあった。夏子は時々情緒不安定になり、家にこもることが増えた。そして中学生の頃に始つた症状……。夏子はほとん

ど家事をしてくれなくなった。それでも「お姫様」と呼ぶべき存在であることに変わりはなかった。

翌朝。

「行ってくるね」

「気をつけて」

玄関まで出てきた夏子に手を振る。昨日の夜、考えていた昔の夏子のことを思うと、見送ってくれるだけでも奇跡のように感じる。この春から始まった新しい生活。夜間大学の講義とバイトの掛け持ち。でも不思議と苦にならない。大学のキャンパスにはさまざまな年代の学生がいる。社会人入学の人も多く、みんな必死だ。

◇◇

時間が流れるのは早かった。ゆりは大学3年生になった。授業料減免制度のおかげで経済的にも安定してきた。

ある日、夏子が突然言い出した。

「私、英語教えたい」

「え？」

「ちょっとだけ、週2日くらいで……小さい子どもたち相手に」

驚いたが同時に嬉しかった。

「いいんちゃう？」

「でもね、また調子悪くなるかも」

「無理せん程度にやつたらええやん」

ゆりの言葉に夏子は涙ぐんだ。

週末、夏子の英語塾が自宅の1室で始まった。5人の小学生を集めて英語を教えるスタイルだ。生徒たちと接している夏子は楽しそうだった。

ゆりも「最初だけ……」と、一緒に補助の先生役をしてみることにした。

「お母ちゃんの仕事姿見るの、初めてかもしけん」

皆が帰った後、ゆりは机を乾拭きしながら夏子に言った。

「そっか……いつも教室の中には入れなかつたもんね」

「うん。でも無理せんとつてな」

「ありがと」

◇◇

夏の暑い夜。バイト帰りに自販機の前で立ち止まつた。コインを入れようとするとき、後ろ

から声がかかった。

「ゆりちゃん？」

振り向くと大学で同じ授業を取ったことのある山本さんが立っていた。

「あれ？ なんでここに？」

「私の家、この辺やねん」

笑顔が爽やかだ。

「そっか……バイト帰り？」

「うん。これからコンビニで夜勤」

「私もコンビニバイトしてる、夜勤って、頑張ってるなあ」

ゆりは山本さんと並んで缶ジュースを開けた。

「なあ、夏休みはどうするん？」

「就活の準備かな……でもバイトもあるし」

「そうか……私は地元に帰る予定」

「京都やった？」

「うん。ゆりちゃんは？」

「実家……まあ特には予定ないけど」

しばらく黙って二人で空を見上げた。

「ゆりちゃんてさ……将来の夢とかあるの？」

「うん。まだぼんやりしてるけど……会計の仕事に興味ある」

「へえ、すごいね」

「山本さんは？」

「私はマーケティング……かな」

「そっか。お互いがんばろ」

「うん」

山本さんと駅前で別れた。

◇◇

2003年3月。

大学卒業式。

まだ冷たい風が吹き抜けるキャンパスで、卒業証書を受け取ったゆり。この4年間はあつという間だった。働きながら学ぶという、楽ではない道を選んだが、そのおかげで多くの価値観を得ることができた。

式典後、校門の前で記念写真を撮っていたとき、遠くから夏子が走ってくるのが見えた。

白いカーディガンと淡いブルーのスカートという出で立ちはまるでお姫様のようだった。

「ゆり！ 卒業おめでとう！」

息を切らしながら駆け寄る夏子。その姿を見て思わず笑ってしまう。

「お母ちゃん、そんな急いで来なくてええのに」

「だって大切な日やから……」

周りにいた同級生も拍手してくれた。

帰り道、母娘は肩を並べて歩いた。川沿いの桜並木はまだ蕾だったが、暖かさを帯びた風が頬を撫でる。

「ゆりちゃん」

「うん？」

「ありがとうね」

「何が？」

「こうして……ここまでやって来てくれて」

「当たり前やん。私のお姫様やもん」

冗談めかして言うと、夏子は照れたように笑った。

◇◇

ゆりは就職活動の結果、市役所の事務職に採用された。配属先は数字を扱う給与部門だった。就職が決まったとき、夏子も大喜びした。

「よかった……本当によかった……」

その言葉に込められた重みをゆりは理解していた。夏子にとって娘の就職は単なる職業決定以上の意味を持つのだろう。

しかし喜びも束の間、4月になると夏子の調子が再び崩れ始めた。朝起きられなくなり、幻聴がひどくなったという。

「今日も英語塾は休んだ」

台所で一人コーヒーを飲んでいるゆりに、夏子が消え入りそうな声で告げた。

「そうか……ゆっくり休んでな」

「……うん」

ゆりはため息をつきつつも、「また同じ展開か」と冷静に考える自分に気づいた。一旦始めた仕事も、病気のためにダメになる。過去にはこの繰り返しに翻弄されていたが、今は違う。医師ともしっかり連絡を取り合い、状況によっては精神科に同行することもある。そんなことが続いていたある夜、ゆりが仕事から帰ると夏子は布団の上で膝を抱えて座っていた。

「お帰り」

「ただいま。晩御飯、食べた？」

「うん……ゼリーだけ」

「ちゃんと食べなあかんよ」

「わかってる……」
その声は震えていた。
「ねえお母ちゃん」
「うん？」
「私な……」
ゆりは少し躊躇った後に続けた。
「実は昨日、2階で机の整理してたらさ、私が3歳ぐらいの時にお母ちゃんが教室やってた時代の記録を見つけたんよ」
「え？」
「あの頃の資料って、結構残ってるみたいで……」
「……そうなんや」
「私な……お母ちゃんがあの頃、頑張ってたことを忘れてないよ」
「……」
「だから……また教室ができるといいなって思う。今度は私も手伝うから」
夏子の目から涙が零れ落ちた。
「ありがとう……ゆりちゃん……」
「お姫様も復活せんとな」
軽口を叩いてみると、夏子は小さく笑った。

◇◇

季節は巡り、秋を迎えていた。ゆりは市役所での仕事に慣れ始めていた。午後5時の閉庁まで集中して業務を行い、その後は図書館や自習スペースで勉強をする日々。ある土曜日、昼下がりに夏子が珍しく外出すると言って支度をしだした。

「ちょっと出かけてくる」
「一人で大丈夫？」
「うん……近くやから」
夏子は、薄い緑色のワンピースを着ていた。かつての「お姫様」スタイル。
一家に帰ってきた夏子はテーブルの上に封筒を置いた。
「これは？」
「英会話教室の求人票」
「え！？お母ちゃんが！？」
「うん……パートで週3日から。子どもの英会話教室なんやって」
「無理せんとってな」
「大丈夫。少しずつなら……それに……」
「それに？」

「ゆりちゃんが手伝ってくれるって言ってたやん？」

「ああ……確かに言ったけど」

「やから……頑張る」

決意に満ちた表情だ。

その夜、ゆりは机に向かいながら母の勇気に感動していた。自分の母親としてではなく、「一人の人間」として尊敬の念が湧いてきた。同時に、ゆり自身の心にも変化があった。「早く社会的地位を確立しなければ」という焦燥感は薄らいでいた。

母が病気を抱えていても、再び前に進もうとしている姿を見ることで、ゆり自身も焦らずゆっくり成長すれば良いと思えるようになった気がした。

◇◇

冬休みに入ったある日曜日。夏子の元に連絡が入った。英会話教室の面接を通ったとのこと。

「来週から行くことになった」

「ほんま！？」

「うん。先生が私の病気のことも知ってて、無理せず少しずつやっていくつもり」

「よかったなあ……」

ゆりは胸が熱くなった。夏子が自信を取り戻しているように見えた。その日から夏子の様子が変わった。毎朝早く起きて身支度を整え、出かけるときには必ず淡い色のワンピースを着るようになった。まるで本当に「お姫様」のようだ。

「ねえお母ちゃん」

「なに？」

「やっぱりお母ちゃんは素敵やな」

「……恥ずかしいわ」

照れながらも嬉しそうな夏子の姿を見て、ゆりは安堵した。

◇◇

2004年初夏。

ゆりは23歳になっていた。就職してから1年。安定した収入と同時に、将来に関して夏子のサポートができればと考え続けていた。ある夜、ゆりは夏子と台所でアイスクリームを食べていた。

「ねえお母ちゃん」

「うん？」

「私な……考えたんやけど」

「なに？」
「将来的には、お母ちゃんと英語塾と一緒にできたらええなって」
「……ゆりちゃん」
「私な……簿記の知識もあるし、お母ちゃんの教室を経営面からサポートできると思うねん」
「でも……そんな簡単に……」
「簡単じゃないのは分かってる。でも可能性はあるやんな？」
夏子は目を丸くしてから笑った。
「ゆりちゃん……本気で言ってる？」
「うん。だから……待ってて」
「待ってるって……？」
「私な……まず子どもへの勉強の教え方を学ぶ。苦手な数学も勉強し直す」
「ええっ！？」
「そしたら……一緒にやりたい」
その瞬間、夏子の目から涙があふれ出した。泣きながら笑っている。
「ありがとう……ゆりちゃん」
「お礼なんてまだ早いわ。これからやから」
「うん……うん」
「私たち……一緒に何かを始められるね」
窓の外では梅雨明けを告げる青空が広がっていた。ゆりは机の引き出しを開け、中学数学の参考書を手に取った。

エピローグ

2008年春。
ゆりの家の門に、「プリンセス英会話スクール」と書かれた看板が掲げられていた。
ピンク色のワンピースを着た女性が入口に立っている。夏子だ。
ドアを開けて入ってくるのは数人の子どもたち。彼らを迎える夏子の表情は生き生きとしている。
「今日も頑張ろうな」
「うん」
4ヶ月間の準備期間を経て、ついに教室がオープンした。夏子が英語を教える一方で、ゆりは英語以外の教科と経理を担当する。扉が開く音と共に新たな生徒が入ってきた。
「こんにちは。体験レッスンですか？」
夏子の笑顔が輝く。

ゆりは母を見つめながら思った。

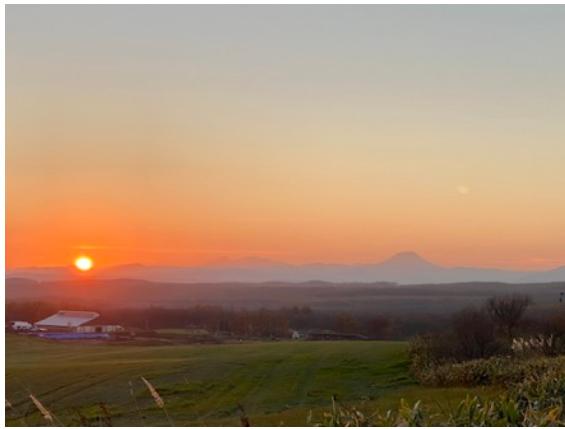
(私の「お姫様」は、本当に美しい)

ホワイトボードの前に立つ母の手には、赤と黒のマーカーがある。それを持って教壇に立つ姿こそが、最も輝いていた。

ふたりの新たな挑戦が始まっていた。

※この物語は実際の体験と、それを探求する虚構の物語をもとにしています。

実在の人物及び団体のプライバシーに配慮し、作中では架空の名称をあてています。



10月の終わり、短い秋が通り過ぎようと、気温がグッと下がった日

お風呂の給湯器が壊れました。18年も使ったしそろそろ寿命がきちゃうかなと思っていた矢先でした。給湯器をまるまる入れ替えることになり、工事が来るまで時間がかかりそう…仕事柄、埃だらけで帰ってきたらすぐ洗い流したく、ぬるいけどシャワーだけは使えたので我慢して使っていたものの、一向に修理は来ないぞ?となって車で10分の温泉に通うことになりました。夜はもう一桁気温。お風呂に通うだけでも脳天まで冷えてイヤでしたが、温まらないと体調を悪くしそうだし渋々行きました。銭湯のような気軽な雰囲気と価格の掛け流しモール温泉。田舎に住んでる醍醐味を感じつつ入つてみたらすべすべのお湯が素晴らしい、露天風呂もサウナもありポカポカに温まりました。先に入っていた人が出ていかれて、私一人貸切だった日。寒い外仕事も温泉が待ってると思うと頑張れるなあ、今日も無事終わった~と満たされまくって脱衣所へ上がると、ドライヤーをしているご婦人に「ここって打たせ湯ありませんでした?」と話しかけられ「サウナのあった所が昔そうだったかもです」と答えたのをきっかけに身支度しながらしばらく話をしました。ご婦人は根室まで帰る途中に疲れを癒そうと寄った温泉が定休日でちょっと道を逸れたこの温泉までたどりついたとのこと。「本当に疲れがひどくて」とその理由をポツポツと話されて。「夫をね、5年自宅で介護してまして。最近施設に入ったんだけど。自分が食べることも忘れて、夫に食べさせなきゃと一所懸命にやってたものだから、自分はすっかりやつれでね、胃も小さくなって食べられなくてね、すっかり老け込んで髪も薄くなってるでしょ。82歳なんだけど…」「えっ! 82歳、全然見えませんよ! いいお湯で生き返りましたよね!」

私は酪農家なんですけど、仕事が終わったらすぐお風呂に入りたいのに壊れてしまって久しぶりに来たんです、ここ。昔と雰囲気変わってて、来て良かったと感動してたところです。湯上がりの効果か全く疲れて見えないです、ツヤツヤですよ～」と事実を伝えるとちょっと笑顔になってくれました。「まだ介護が終わったわけじゃないけど、少し楽になった分、自分を立て直して元氣でないと、と思ってるの」

私の親世代にあたるご婦人の老老介護の心境や不安が伝わってきました。

「この温泉は効果ありそうですよ、私も大阪から来て20年近くたって今52歳で一番の働き盛りですが、体力はピークすぎてるので、休みなく働くってやっぱりこたえますよ、でもなんかこの温泉、効いてます、元気でてます！」と言うと「私もそう思う！」と同意してくださって。それぞれの世代の大変さを分かち合ってる気持ちになりました。どんどん身支度が進んでご婦人の服が不思議と田舎っぽさがなく素敵に感じて、そう褒めると、神戸にいる妹が着道楽で定期的に送ってくるおさがりを着てること。

ノーカラーの羽織にヒョウ柄ドットのマフラーがよくお似合いでした。

私といえば上下ジャージで褒める所はひとつもないのですが、52歳を申告した時には「82歳！見えない！」のお返しに「見えない！」と言って欲しかった（笑）うそそう、お世辞を言わないうご婦人が本当に好ましかったです。偶然居合わせて、たまたま話をして、相手は何も知らない人だったので、すっぴんの飾らない自分がふと今の心境を吐露できて、日々の辛い大変なことも温泉のポカポカが優しく包み込んでくれたから、さあ、また航海へ出発しようか。と気持ちが上がった夜でした。

確かに田舎は周りみんなが知り合いだから、何か言うと心配されすぎたりすぐ噂になったり。知らない人の方が話しやすい場合がありますね。

最近は物騒なことも多く、他人に声をかけるのも、かけられるのも一瞬身構えます。そんな中、久しぶりの嬉しい一期一会でした。「楽しかったですねー」と言いながらロビーへ出ていくと、夫とご婦人の息子さんが、遅かったね、何かあったかな？と心配顔でいましたが、ハツラツと元気な足取りで出てきたご婦人を見て、驚いた顔をしていました。

これはまさしく湯治ですね。

「お元気で、またここでお会いしましょう！」と私が言うと
「家のお風呂が直ったらもう来ないでしょ？」と最後まで社交辞令を
言わないご婦人には笑ってしまいました。私は、会いたい人にはまた会える
を信じていて、社交辞令ではなかったのですが。
それぞれに続く航海。この癒しの船着場でまたお会いできますように。

筆者 原田 希

1973年 大阪府吹田市生まれ

2006年 酪農家との結婚を機に北海道標茶町へ

2017年 北海道農業士に認定

北海道指導農業士の夫とともに

新規就農者の支援や女性農業者向けの勉強会のお世話係を担当



私の頭の中のまだエンピツ⑤

そだちと臨床研究会 川畑 隆

役に立つということ

よかつた対応

前号で「自分（たち）の考えで進めていることは、実はその考えに操られている結果ではないのか」と不安になつたと述べました。私たちが取り組んでいた『対応のバリエーション勉強会（以下、対バリ）』の趣旨に含まれる「対応に正解はない」という考えがその不安の対象でした。そして、操られているかいなかではなく、また対応に正解があるかないかでもなく、イメージしていることをそれ以上でも以下でもなく言葉にしたつもりです。この「それ以上でも以下でもなく」というところに戻れることが、それが自分で責任のもてる言動であるかどうか（全面的に操られているかどうか）の私の照合枠になつていています。

さて、対バリで扱う「対応」についてもう一点取り上げたいことがあります。それは行われた対応の「よかつた（役に立つた）ところ」をどの段階で評価するかということです。

前号では、対バリの実際の内容を紹介するロールプレイ場面での面接者役の対応（質問）が「よかつた」と明確に見えたわけではなく、「そこで

そんなことを尋ねるか？」と意外に思われる可能性のある「不思議」で「不可解」な質問だったことを紹介しました。

対バリのロールプレイには大体十分間前後とそんなに長い時間はかけませんから、面接者からの対応を受けて面接が進行しているその初期の段階でストップになります。そして、感想を求められたプレイヤーは面接者からの対応についての感想を語ります。そしてプレイを観ていた参加者からは対応の「こんなところがよかつた」と評され、面接者役は自分の対応のは対応の「こんなところがよかつた」と評され、面接者役は自分の対応の意図やその後の展開についての見通しも含めて発言します。対バリでは、そういう流れでさまざまな対応を試しその対応の役立ち度を浮かび上がらせようとしています。そして、そこから参加者それぞれに自分の面接力・対応力の向上に資するものを持ち帰つてもらおうとしているのです。

しかし、その役立ち度をはかる対象となる面接の実施・観察時間はごく短いものです。件の対バリの紹介場面での対応も、進行している面接の短時間内の文脈において「不思議」「不可解」と評されたわけです。でもその面接をその後も丁寧に続けることによって役立ち度を上げる道筋はあつたかもしれませんし、入口が「不可解」なその対応だったからこそ作ることのできた展開だったと、後から評される場合もあることでしょう。

こう考えると、面接のある部分だけを取り上げてその善し悪しを言うことはなりません。対バリの実施の仕方についても、面接によつてはより長い時間をかけたセッションを取り入れることも必要かもしれません。ただ、現行のままでその価値はあるように思っています。「うまくいかない面接の中で起きている可能性のある自分と相手とのやりとりの悪循環を回避して、少しでも良循環でうまくいく（役に立つ）ような面接の起点や転換点となる対応を見つけること」への貢献です。

ポジティブなどらえ

対バリで観たロールプレイへの参加者からのコメントは「対応のよかつたところ」に限っていることとその訳については、すでに述べました。

このよかつたところに焦点を当てる「ポジティブ」志向は、「ポジティブ心理学」（認知行動療法も含まれているのかどうかは知りませんが）という言葉もあるように、流行っているように思います。でも、物事にはポジティブとは反対のネガティブな側面もありますから、そこに目をつぶつてあえてポジティブを押し出す（ポジティブに言うためにポジティブに言う）ことには、少し歯の浮く「おべんちやら」みたいな感じももたれるのではないかでしょうか。また、ポジティブに評価するのは相手に優しいように見えるけれどもそれはちょっと無責任で、厳しくネガティブに指摘して相手にちゃんとその内容を引き受けさせること、そちらのほうが実は相手に優しいのではないかという意見もあることでしょう。

さて、私たちは「よいところ」「わるいところ」と簡単に考えてそういう口にしているだけで、何がよいかわるいかという「倫理学的？」な内容やそういう評価する客観的基準に興味があるわけではありません。「ほめられるかどうか」の日常生活的感覚で、ただ両者を分けていいだけです。

私たちは大体においてほめられたら嬉しいし、叱られたらそうじやありません。でも、「ほめる」「叱る」対象となる相手の言動は、常識的に誰もが共通に選択するようなものだけではありません。各人が恣意的にとりあげ、その根拠には誤解や曲解も含まれていたり、あまり誰も目を向けないところに着目したものもあります。総じていえば「そうかもしけないがそうじやないかもしえない、そうじやないかもしけないがそうかもしけない」

見解がそこには含まれていることでしょう。

そのような中で、私たちにとつて「ほめられる」と「叱られる」のどどちらが将来に向けた少しでも明るい展望を開いてくれるでしょうか。

叱られると心が縮みます。叱られたところを改善しようとして頑張つてはあつても心は縮みっぱなしです。心は縮むよりも嬉しくて伸びるほうがエネルギーをくれるでしょうから、「ほめられる」ほうに大きく分があるように思います。そしてここにも差が出てきます。評価される根拠が誤解や曲解にもとづいているときなどです。「ほめられる」場合は誤解や曲解はよい（心がさらに伸びる）方向に作用するように思われます。何故なら、ほめられる場合に縮む）方向に作用するようになります。何故なら、ほめられる場合は新しい可能性の芽を見つけてくれるかもしれないし、叱られる場合はあらゆる芽も摘んでしまいかねないからです。

問題を抱えて悩んでいる人だけではありませんが、よくないことが起きていると思っていると何ごともネガティブな意味づけをすることになりがちです。私たちは、人が生活や業務の中で少しでもよい道筋や物語を作つていくことを支援する手段として、「ポジティブ」のよいところを採用し、「ネガティブ」のわるいところを回避しようとしています。「ポジティブ」という楽観主義を唱えているつもりはありません。

私のポジティブ

「私は、朝に何か失敗したりうまくいかないことがあると、『よし、今日はいろんなことがうまくいく』と思います。一日のうちに起きるわ

るいことの総量は決まつていて、朝にわるいことがあると後はよいことばかりだというわけです。これは楽観的ですね。反対に『朝からこうなんだから、今日は最悪な日だ』と沈んでしまうのは悲観的な考え方です。そして、樂観的に思うと『ホラ、午後からはうまくいったでしょ』とよかつたことに注目してピックアップし、反対に悲観的だと『ホラ、やつぱり今日はダメなんだ』と、よかつたかもしないことには目もくれず、わるかつたことが拾い上げられます。朝の失敗そのままの事実は同じですが、それについての意味づけが違うと次の展開がこのように異なります。私たちがものごとを認識するのは、自分の身の周りの事実についての意味づけによってです。先ほどの『朝の失敗』がたとえば『朝バタバタして親から小言をもらった』ことだった場合、『朝バタバタして親から小言をもらった』事実はなく、『朝バタバタしたことに対して親から何か言われたことを「小言をもらつた」と意味づけた』ということです。これをもつて『世の中には事実があるのではなく、意味づけがあるだけだ』と言つている人もいるぐらいです。』（拙著『要保護児童対策地域協議会における子ども家庭の理解と支援』明石書店、一部改変）

「ポジティブ」に操られているのではなく操つているつもりで、それは相手の役に立つためです」と書きました。もしかしたら「操られているのではないことを証明する必要がある」という考えに操られているかもしれません。本稿①に書いた「オリジナリティとは何か」にも通じますが、「私がそう考へている」と言えることを一点でも見つけることが大切なかなというのが、脱稿時のいま思つてることです。

(了)

応援、母ちゃん！ 23

～パンと本と、そしてバラを——バケットリストを叶えた母子旅の記録～

たまむら ふみ

玉村 文



はじめに——バケットリストの終わりに見えた「始まり」

「人はパンと本とバラが必要」という言葉が心に残っています。
この意味は、パンは生活の糧、本は心の糧、そしてバラは美や喜びの象徴。

私は長い間、このうちの「パンと本」で生きてきたように思います。仕事や学び、日々の生活。どれも必要で、大切で、誇れるものでした。けれど、いつのまにか「バラ」への出費——心を満たすための時間や経験——を後回しにしていたように思います。

子どもを育てるようになって、気づきました。お金を「モノ」ではなく「体験」に使うことで、家族の中にはあたたかい記憶が積み重なっていく。そのことが、私自身のウェルビーイングを大きく高めてくれる。

そんな「バラのようなお金の使い道」を、少しずつ見つけられるようになってきました。

この原稿では、2025年のバケツリストに書いた「母子旅に行ってみたい」という願いを叶えた記録をお届けします。

終わりに書いた「叶えられた喜び」を先に少しお話しすると——それは、忙しい日常の中で「やりたい」と思う自分を信じ、少しの勇気で動き出した先にあった、ささやかな奇跡のような時間でした。

1. 「母子旅に行きたい」—リストに書いた小さな願い

私の手帳には「やりたいことリスト」、いわゆるバケツリストがあります。

死ぬまでにやりたいことを、思いつくまま書き留めているノートです。

今年の手帳には100個書き出せるようになっていて、「Da-iCEのライブに行きたい」「万博に行きたい」などの項目に混じって、53番目に書いていたのが「母子旅に行きたい」。

この言葉を書いたときの私は、末っ子がまだ1歳。

「そんな余裕あるかな」「いつかできたらいいな」と、どこかで諦めながらも書き留めていました。

でも、書いておくと、心がその方向を向くのです。

そして2025年秋、ついにその願いが形になりました。

2. きっかけはオンラインコミュニティ「MIRAI'S」

2024年度に参加していたオンラインの育休コミュニティ「MIRAI'S」。

全国の同世代のママたちが集まり、子育てや働き方を語り合う温かな場でした。

「いつかリアルで会いたいね」——そんな声から生まれたのが、伊豆高原での一泊二日のリアル会。

関東や九州のメンバーも集まると聞き、思いきって「行ってみよう」と思いました。

仕事の都合で土日は難しかったので、前乗りの金曜から土曜の一泊二日に。子どもたちも保育園児なので、平日を休ませることに大きな抵抗もありません。「来年には小学生になるから、今しかないかも知れない」——そう思ったとき、行動のスイッチが入りました。「もうこんな機会はないかも知れない」という“貴重さ”は、私の原動力になるのです。

夫は今回は不参加。でも、「一人時間ができるなら残業したりゆっくり過ごせるね」と伝えると快く送り出してくれました。そして、約 2か月前にホテルを予約。準備が始まりました。

3. 出発までの道のりと、小さな工夫

未就学児 3 人を連れての母子旅。「大丈夫かな」という不安はもちろんありました。けれど、計画と準備を丁寧に進めることで、心の余裕を保てました。

- **新幹線の指定席を事前予約。**
3 日前から空席を確認しつつ、最終的に前日にチケットを確保。
当日の体調不良リスクを見越してギリギリまで様子を見ました。
- **スーツケースではなくベビーカーを優先。**
大人 1 人なので、荷物はできる限り軽く。服やおむつは圧縮してバックパックに。
1 日目の服は「捨ててもいい服」で気軽に。
- **「行けたら行こうね」と伝える。**
子どもたちには直前まで確定しないことを伝えておき、
行けたときの喜びが倍増するようにしました。

結果的に、誰も体調を崩すことなく出発できたのは、本当に奇跡のようでした。

4. 母子旅のハイライト

出発は京都駅。新幹線「ひかり」と「伊豆踊り子」を乗り継ぎ、約 3 時間半の道のり。子どもたちは新幹線を見るだけで大興奮。

車内では、テーブルでお弁当を食べたり、タブレットでゲームをしたりしてご機嫌でした。

現地のイベントは、親子50組が集まるにぎやかなリアル会。

「ボヨヨン行進曲」や「それもいいね」など、Eテレの名曲をダンスする時間もあり、子どもたちの笑顔があふれていました。

久しぶりに再会した仲間たちとの時間は感動そのものでした。

「包み込まれるような雰囲気は変わらないね」と言ってもらえた言葉が、心に残っています。

夜はホテルの家族風呂でゆったり。

おむつの子も一緒にに入る温泉で、肌も心もリフレッシュ。

「この時間のために来たんだな」と感じるほど、静かな幸福感に包まれました。

5. あえて“諦めたこと”

もちろん、完璧な旅ではありません。

いくつか、手放したことありました。

- **写真を撮ること。**

両手がふさがる母子旅では、シャッターチャンスより「今ここ」を優先しました。
でも、レストランでお店の方が撮ってくれた一枚が、宝物になりました。

- **ゆったり移動。**

次男が歩きたがるので、座席指定のチケットは購入していたけれど、ほとんど立ったまま。

それでも安全に目的地に着けたことが、何よりの成果。

- **節約より安心を選ぶ。**

「最安値」ではなく、「迷わず動ける」ことを優先。
タクシーを使う、チケットは早めに押さえる——そんな“保険としてのお金の使い方”を選びました。

この「諦め」もまた、ウェルビーイングの一部だったと思います。

6. 終わりに——人生の「バラ」を咲かせる

こうして、バケツリストの53番目「母子旅に行きたい」にチェックがつきました。
「Da-iCE のライブに行きたい」「万博に行きたい」など、他の項目も今年はいつも叶いました。

実は、どれも一度は「無理かも」と思っていたこと。
第3子を妊娠したとき、「復職後は余裕なんてない」と自分で線を引いていました。
でも、書いておいた。
“書くのはタダ、本音だから”。

そして不思議と、機会が訪れたのです。
万博はチケットを譲ってもらい、ライブはリセール枠で奇跡的に入手。
「行けない」と決めていた頃には見えなかった道が、「行きたい」と思った瞬間に開けました。

バケツリストに書くことは、「願いを行動に変えるスイッチ」を押すようなもの。
やりたいことを可視化し、実行すると決めて動く。
それが、人生のバラを咲かせる力になるのだと感じました。

散財に見えるかもしれません、すべて予算内。
「自分の心が満たされること」に使うお金は、後悔ではなく充実を残してくれます。

今回の母子旅は、未就学児3人を育てながら働く母として、
「好きややりたいを諦めない」という小さな挑戦の記録です。

パンと本で生きてきた私に、バラをくれた旅でした。

HITOKOMART

No.22

篠原ユキオ

1948年 東大阪市生まれ
京都教育大美術科卒
京都精華大学名誉教授
(公社)日本漫画家協会参与
FECO JAPAN 会長



映画を見たことのない人でも気付いていただけだと思うが、これはハリウッド映画『E.T.』のポスターのパロディ作品である。
宇宙人とサンタを入れ替えたのだが、サンタも宇宙人も不確かな存在だ。

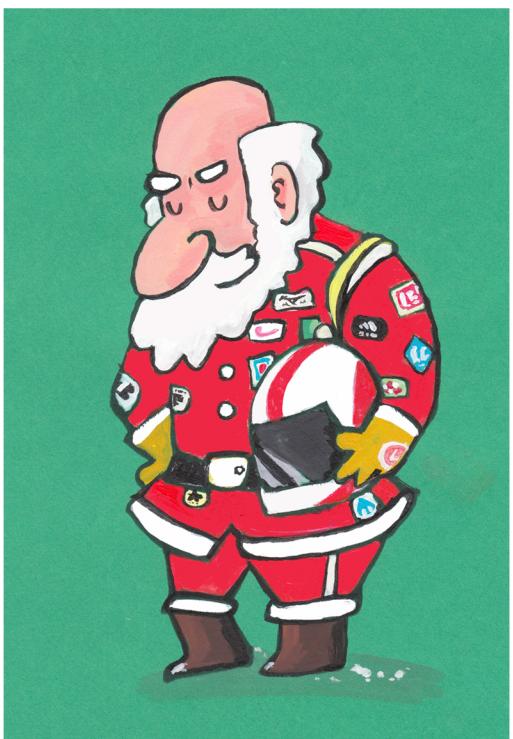
サンタ映画でいつも思い浮かぶのは『34丁目の奇跡』と『素晴らしきかな人生』である。ともに1946～7年に制作されたモノクロのアメリカ映画だが、イブの出来事がメインとなる名作である。

サンタクロースは本当にいるのかと云うのは今も昔も子どもたちにとっての永遠のテーマだが、この映画はなかなか含蓄のあるシーンや台詞でその問い合わせてくれる。
12月はいつもこれらを観たくなる。

最初のサンタクロース

子どもの頃、家の近くの商店街にあった玩具店の店先に年末にはいつも巨大なサンタ人形が飾られていた。その姿は幼なかった私には見上げるほどの大男に見えた。前を通る度にそっと近寄って背伸びしながら綿できたヒゲの先やコートにタッチしたものだった。同じような子どもたちも多かったのだろう、白いヒゲやコートの袖口から出ている指先はうっすらと汚れていた。その姿はクリスマスソングが流れる賑やかな商店街の情景とともに70年近く経った今でも鮮明に覚えている。そんな訳で私の描くサンタクロースはその時代の記憶がベースになっていると言える。





クリスマスセーターの思い出

アニメーターであり多摩美術大学の教授だった片山雅博君に初めて会ったのは1982年の冬、お互いにまだ30代だった。確か銀座での漫画展の打ち合わせで上京して新宿で待ち合わせたのだった。

当時彼は日本漫画家協会の事務局長を務めていて、漫画界の裏話をたくさん聞かせてくれたが、それよりもその日彼が着ていたセーターの方が私には印象深かった。

赤と緑の太めの毛糸で編まれたボーダー柄だったので12月には最もふさわしいデザインだなあと思ったものだ。帰りの新幹線の中で自分も同じようなセーターを買おうと心に決めていたから、彼のセーター姿に魅了されていた訳である。

帰阪後はさつそく大阪中のメンズショップを何軒も見て回り、ラルフローレン『POLO』の店で思った通りのセーターを見つけた時はワクワクした。それ以降、毎年12月にはクリスマスまでの限定着用のセーターのひとつとして愛用してきた。

それは43年経った今もヨレる事なく毛玉もほとんど無い状態である。彼が56歳で亡くなつてもう15年が経とうとしている。

毎年、衣替えでこのセーターを衣装ケースから出す時、いつもあの日の片山君を思い出す。



クリスチャンだった頃

大切な部分には赤線を引いて暗記した。クリスマス会ではろうそくを手に聖書の1節を朗読した。聖書にはその時溶けて落ちた口ウの跡が今も残っている。中学校に入ると教会とは疎遠になつたが全く後ろめたさは無かつた。ソロバン塾をやめるのと同じような感覚だった。教会とは無縁になつたが、歳とともにクリスマスは大切な日となつた。サンタクロース役はまだ辞められない。

中学校に入るまで近所にあった教会の日曜学校に毎週通っていた。

たまたま当時の友達の何人かが通っていたのでちょっと覗いたのが最初だった。聖書のお話を聞いてその一説が書かれたカードをもらつて聖歌を歌つて帰る。献金は大抵30円程度だった。毎回、懺悔の時間があって、反省しないといけないことを探すのがちょっと面倒だった。

1年皆勤で通つたら宣教師の先生から分厚い聖書をプレゼントされた。



川下の風景⑯

～人生は川の流れのように～

米津 達也

【初めてのフルマラソンはドラマチックだった】

2025年11月2日秋の快晴。初めて挑んだフルマラソンはドラマチックだった（普段、“人生はドラマじゃない”というコラムを書いているのに）。

42.195kmを走るために、7月～10月に積み重ねた距離は764km。所謂、ランナーという人から見れば少ない距離だ。10月半ばに最長距離で走れたのは28km。それも後半は脚が痛くて、歩く始末。レースまで半月、ハーフ走のタイムは2時間40分。本番の制限時間は5時間5分だから大幅オーバー。この時点で、まあ無理だろう、来年リベンジしよう、と遠すぎた42kmを噛みしめていた。

レース本番3日前。担当している授業でサプライズがあった。授業が始まる前に、学生の皆さんがあわやトイボードにイラストとメッセージを記載してくれた。そういう背中の押し方をされたのは初めてだった。どうリアクションして良いかわからないが、その時に決めたのは「覚悟」だった。まあ、来年、という気持ちではなく、たとえ閥門閉鎖に間に合わなくとも、ゼッケンを外しても、這ってでも、ゴールに辿り着くという「覚悟」だった。

レース本番。緊張も気負いもなく、集団後方からスタート。5kmほど走った感じで、漠然と行けるだろという確信があった。なんだろう、この安心感。練習は常にひとり。レースでは、大勢のランナーと共に走るという安心感に似たものがある。18km、脚の痛みに備えて痛み止めを服用。30km、オーバーペースだったランナーが歩き出す。腕時計が刻むペースを注視し、ひたすら同じペースで走り続ける。35km、用法用量を守らず痛み止めを噛み碎く。これも学生から頂いたものだ。沿道の応援がただただ有難く、元気をもらえる。最後まで走り続けて、42.195kmを完走。初マラソンは4時間48分。無事、制限時間内にゴールできた。かつて、野口みづきさんが「走った距離は裏切らない」という名言を残しているが、ゴールして思ったのは、本当にそうだったな、としみじみ感じた。

私は普段、あまり他者と共に何かを成し遂げるということをしてこなかった。ひとりでやる方が早く、他者とペースを合わせることを億劫に感じてきた。仕事においてはチームマネジメントが必要なのでそもそもいいかないが、それでも信頼するという気持ちがあったか甚だ疑問だ。学生とのコミュニケーションもそうだ。12年も同じ科目を担当しているが、毎年、学生は変わるとは言え、彼らとどれだけ言葉を等しく交わしてきたんだろうか。そういう他者と自分との関係性において卑下してきたようなことが、この夏の積み重ねと42kmの行程で大きく変化したような気がする。ひとりでは見られなかった世界がある。

ったのが、「買取〇〇」という質屋の出張ブース。

【世の中の流行りごと】
外回りをしていると、最近よく見かけるようにな

スーパーの入り口に陣取り、行き交う高齢者に盛

んに声を掛けて「自宅に不用品ありませんか？」

と熱心に営業している。折しも世の中は物価高。年金暮らしの高齢者にとって、家のタンスに眠っている古いブランド品や装飾品は過去の思い出。終活ブームの意識も高まり、生きているうちに処分できるものはしてしまおうか、と若い営業社員に声を掛けられれば世間話程度から足を止めてしまう。欲しているのは、お金だけでなく社会交流もあるのだ。もちろん、買取業者も時代遅れのブランド品や装飾品に端から興味はなく、そんなものは二束三文で引き取り、網を広く張って、高価で売れる金などの類を探り当てているのだろう。私から見れば、手当たり次第に高齢者に「オレ、オレ」と電話を掛けている状況とさして変わらないように映る。

ケアマネジャー不足と言われ始めて久しいが、時折、人材紹介会社を通じてケアマネジャー求職者の紹介がある。人材紹介会社を通じて採用すると、当然、紹介料を支払う。職種や契約によってまちまちだが、およそ年収の20~30%といったところか。面接したケアマネジャーであれば、紹介料として60~70万支払うことになる。こうなると、採用ハードルも上がるし、今、人材に困っているわけではないから、そこまでコストを掛けて採用する必要がない。これは、逆を言えば70万掛けてでも、今すぐケアマネジャーが欲しいと思う事業所があるということだ。そんな事業所は大抵、慢性的な人材不足、つまり定着率が悪い。求職者からすれば、安易に登録したのかも知れないが、結果的に人生の選択肢を狭めていることを理解しておくべきだ。優良事業所は人材紹介会社に多額の紹介料を支払ってまで採用しようとしている。テレビCMでは盛んに「転職エージェント」が云々とキレイごとを言っている。そこにビジネス、お金が介在する限り、本気で他人の人生を考えてくれる人などいない。それを分らず、自分の価値

をエージェントに委ねているというのは大リーガーにでもなったつもりだろうか。

人生の選択に、将来の正解、不正解を予測することなどできない。それは今現在の「正解」であって、10年後の「不正解」であるかも知れないわけだ。それだけ私たちは大なり小なり、様々なことを選択して生きている。だとすれば、大事の時だけ他人に人生を委ねず、常日頃から自分の考えをしっかり据えておくことが懸念だと思う。そうすれば、あてにならない社会の流行りごとに右往左往することもないだろう。

【ドラマチック】

「家族愛」「夫婦愛」「兄弟愛」「仕事愛」「組織愛」など世の中は沢山の愛が溢れているが、私はどちらも信じていない。愛していないわけじゃない。安く使われる言葉が嫌いなのだ。毎年夏休みの終わりに放送される「愛は地球を救う」というのも、愛が地球を救えるかどうか、人を救えるかどうかは問題ではなく、「愛で救おうぜ」という包括的な総合的概念に共感が持てない。

先日、週1回の講師業で京都に出向いたが、少し早く到着したので大衆的なカフェで軽食を取った。街は外国人だらけだが、店内は意外に空いていた。席に座って珈琲とサンドイッチを食べていると、店内が割に静かなものだから、隣の男女の会話が勝手に耳に入ってくる。カップルと言っても、私より少し年上っぽい落ち着きだが、そこに婚姻関係があるのかどうかは分からない。本を片手にと思っていたが、意識が一度そちらに取られると、手元の活字に戻すのは難しいし、やや薄暗い店内では、残念ながら老眼が少しづつ進んだ眼では思うように文字を追えない。そこで、聞くことなしに隣のカップルの会話を聴いていた。

男性が主に会話の主導権を握っていて、女性は彼の話に割り込んで耳を傾けている様子だ。彼は彼女に対して「お前は」と繰り返し、かと言って罵倒しているかと言えばそうでもなく、「お前はそういうだから、俺が守ってやってるんだ」という趣旨を刻々と語って聞かせる。

私も我が子や、気の知れた後輩に対しては知らず知らずに「お前」と言っているが、こうやって客観的に聞かされるとだんだん腹が立ってくる。その言葉が私に向かってるわけでもないのに。会話の雰囲気からすると、モラルハラスマントっぽいし、どこか抑圧的、洗脳的にも受け取れる。「失礼ですが、あなた騙されてますよ」と言ってあげたいところだが、他人の男女の仲に入るほど野暮なことはない。お互いにそれで関係を維持されているならそれで良いとも思う。しかしそれ、言葉とは不思議なものだ。時に人を傷つけ、騙し、時に人を励まし、行動を勇気づけ、人と共感し、時に大衆を扇動する。眼に見えないくせに魔法のようなものだ。

「家族愛」という総合的概念的言葉は、あたかも正論で、世の中の理想論で、誰もが共感しから合えるからこそ、私は疑っている。「家族愛」で救われた人々、幸福である人々も多い。一方、それに抑圧され、拘束され、不幸に貶められる人もたくさんおられるはずだ。福祉援助職に就いていると、そんな家族とはたくさん出会う。繰り返すが、救われている人はたくさんおられる。素晴らしい家族も多い。しかし、それを「家族愛」という総合的概念的な言葉で一括りにして良いとは思わない。上手くいってる家族も、上手くいかない家族も、そこには葛藤やストレスや努力や称賛されることなど、個別性の高い事象が盛り込まれているはずなのだ。

先のカップルもそうなのだろう。私が知る以上に、

二人にはドラマがあるはずだ。機会があれば知ってみたいと思う。どんなドラマも退屈なことなどないのだから。

2025.11.25 米津達也

こころ日記「ぼちぼち」④

地域で性教育の民間研究会の滋賀支部のサークルを立ち上げてから33年になった。

性教育元年と言われたころで、セミナーを開催すると多くの人が参加し会員になってくれた。その業界では著名な人を招聘するなど、とてもやりがいがあった。学校現場でも、まだ先生たちは元気だったから、学びたい実践したい人がセミナーで模擬授業の発表を希望する人も少なからず一定数いた。しかし、20年前の性教育バッシング以降、性教育への実践は萎んでしまった。今もその状況は続いている。今サークル活動は、ほとんどしていない。セミナーを開催しても赤字になるからだ。

学校での性の健康教育の実践

一方で「思春期保健相談士」の資格を持つ自身が、県内の出前性教育に行くことは多くなっている。学校での性教育が進まない中、行政は外部講師を使っての性教育は推奨している。

その一つで行政が予算をつけ推奨しているのが、2024年度からの県の「プレコンセプションケア」事業である。つまり「妊娠・出産に備えての健康管理」のあり方の指導だ。いわば少子化対策の一つだと言つていい。これを「性教育」として実践すると称しているが、私たちが目指す包括的性教育とは随分とかけ離れている。きっかけとしてしないよりした方がいいと思っているが。

実は自身も講師登録を勧められて登録したが、いまだに「プレコンセプションケア」からの依頼はない。無料で講師を招聘できるので、予算の少ない学校は利用しやすいはずが、依頼数はあまり伸びていない。

学校では、性教育を実施していないわけではない。保健体育という教科の中で扱われる項目もある。教員に任せられている実態があり、これは昔から同じだ。場合によっては管理職の考えが反映されている学校もある。

今色々な学校への出前性教育で困るのは、学校によって子どもたちがどの程度学んでいるかを把握しなければならないことだ。

義務教育の中で、どんなことを学習しているのか、事前打ち合わせで聞かなくてはならない。結果は、ほぼ小学校では「月経指導」中心、中学校は保健体育科にある事柄を学ぶのみであることがわかる。

出前性教育に行く学校へは、子どもたちへの事前アンケートをお願いしている。

最近はデジタル化が進み、子どもたちはタブレットを持っているので、フォームから直接入力できる。紙ベースのアンケートより匿名性がやや高くなるので、子どもたちの実態が見えることがある。

何のためにするのか。

- ・子どもたちが知っている性教育に関する言葉や項目の把握
- ・教員が子どもの実態を知る機会とする。
などを目的としている。

忙しい中最初は面倒がる教員もいたが、今はむしろ学校からお願いされることが多くなってきた。日々の生徒の問題に対して、子どもの実態を知りたいと思いがあるのだろう。

中学1年生のアンケート結果では、「月経」や「精通」「生命誕生」という言葉が多い。

「小学校のとき、性教育をうけましたか?」の問い合わせに、多くの女子のほとんどが
「受けた！」

と手をあげる。しかし男子は、はてな?の表情。さらに聞くと、男女別での学習で、女子は月経指導、男子はビデを観ていたとのこと。このような例は珍しいことではなく、どの学校でも同じような答えが返ってくる。子どもたちは、それが性教育だと思っている傾向があることが分かる。

大人向けや大学生の講演でも、同じように「あなたはどのような性教育を受けてきましたか?」

という質問をすることがある。

8割の人が「受けた！」と答える。

ではその内容について問うと、

「学校での保健体育での学習」

「高校での避妊・中絶」

「あまり覚えていない」

など、全く統一性も系統立ってもいないこと
が分かる。

高校では、妊娠・出産・中絶・避妊などを
学ぶようになっているが、どの程度学んでい
るか学校によるのではないだろうか。

中学校での出前性教育で苦心するのが、た
った1年に一回50分の授業で、「性と生」
の学習で何を伝えるのかである。

最近は教員からの要望が多くなっているこ
との一つに、「同意」「境界線」の話だ。携帯
電話（スマートフォン）を9割以上所持して
いる中学生。教員からは、SNSをめぐる様々
な問題が起こっていることに日々忙殺されて
いるとの訴えがある。いわゆる「性加害」「性
被害」の事例が目立つとのことだ。

すぐに何かができる方策はないと思ってい
るが、たった1回の学習の中でも、子どもは
変容する。そのことに希望を持っているから
こそ、資料や教材に全力を尽くすようにして
いる。

性教育は、人との関係性の学びであり、人
権学習だと思っているが、学校現場の教員の
中には、そういう視点を持つ人は少ない。学
習内への理解をしてもらうための事前打ち合
わせを必ずしている。そこではもう教員への
ミニ研修になってしまっているが、20代の
教員が多い中、とても関心を持って聞いてく
れる教員がほとんどなのには驚く。

こういった先生達が、自分が担任する子
どもたちに、思春期の変化について科学的に人
権の視点で、語ってくれる日がくるといいな
と思う。

求められれば学校へ出向く日々だが、いつ
までこの活動を続けなければならないのか、
続けられるのか。

後継者を育てることもいかなければと
思うこのごろだ。

つづく

スクールソーシャルワーカーの仕事

④りくとくん

高名 祐美

スクールソーシャルワーカー（以下SSWと表記します）は、学校に在籍する児童・生徒が抱える問題の解決を支援する専門職です。学校と家庭、そして地域社会をつなぐ役割を担っています。いじめや不登校、虐待などの問題に対して、社会福祉の専門知識と技術を活かし、子どもや保護者、教職員と連携しながら、問題の解決を支援します。今回は特別支援学級に在籍する、「学校がおもしろくない」と不登校になっている『りくとくん』を通して、SSW業務の実際について書いてみます。

＜学校からの依頼で支援がはじまる＞

りくとくんは小学6年生。特別支援学級に在籍している。母、祖母、二人の姉、小学2年の妹みこちゃんとの6人家族である。りくとくんが4歳のときに両親が離婚し、母親が子どもをつれて実家に戻ってきた。それからずっと母の実家でりくとくんは生活している。シングルマザーの母は仕事中心の生活で、学校からの連絡にも応じることがあまりできていない。りくとくんは、6年生になってから欠席することが増えた。そこで不登校への対応と家庭への関わりをと、学校からスクールソーシャルワーカーに支援依頼があった。

5月。教育事務所から支援依頼の電話を受け、担当することになった。学校訪問し、りくとくんの現在の状況、家族のこと、これまでの経過と学校での取り組み内容、担任や校長が抱いている思いや考え方を聞き取った。りくとくんの妹みこちゃん（小学2年）も、最近は欠席することが多くなっていた。

＜まずはアセスメントする＞

○学校から情報を得る

5年生の11月頃より「朝起きられない」という理由で、学校を欠席することがあった。6年生になってからは、欠席が増え、登校した日はほとんどが遅刻。スクールバスの時間に間に合わないときは、町の無料バスを使う。その方法なら登校はできるが、始業時間には間に合わない。登校できたら帰りのスクールバスの時間まで学校で過ごすことができていた。母・祖母が車を所有しておらず、家族が学校まで送ることができない。そこで、学校は対策として、手の空いている教諭（主には校長）が自宅まで迎えに行くことにした。学校から担任が電話を入れて、迎えの時間を決める。その時間までに起床して身支度を整えておくというルールを設けた。それでなんとか登校できていた。

朝起きられないのは夜ふかしによるもので、Youtubeを見たり、ゲームをしたりしてときには朝方まで起きている。その結果、スクールバスで登校する時間には起きられない。また偏食がひどく、学校給食もほとんど食べない。食べるのは白いご飯と牛乳だけ。家ではチャーハン、ヒレカツ、フライドポテトなどで野菜は全くといっていいほど食べない。身体は標準よりも小さく、歯もみがいていないせいで虫歯も多い。治療を促しても、歯医者への受診もしていない。水が嫌いという理由でお風呂もなかなか入らない。学校行事に母が参加することも少なく、学校と家庭とのつながりが薄い状況だった。

○家族と面接して家庭の状況を知る 家庭訪問で祖母との面接

学校から聞き取ったのち、家庭訪問を計画した。祖母は学校からの連絡に必ず応じてくれるため、まずは祖母と面接することとした。学校からSSWについて祖母へ説明をしてもらったのち、日時を約束し家庭を訪問した。祖母は家の外まで出て、SSWを迎えてくれた。

家族との面接では、ジェノグラムを丁寧に一緒に描くようにしている。そしてその家族の日常的な一日の流れ・過ごし方とこれまでの歴史を聴き取る。食事の時間や場所、家族それぞれの居室や記念日の過ごし方など自然な流れで聞いていくようにしている。祖母はSSWの質問にはスムーズに答えを返してくれ、りくとくんの家庭の様子が少しずつわかつってきた。家事は一切祖母がになっている。祖母は孫4人と母になった娘を含め、5人の子育てをしているように感じる暮らしぶりだった。

「おばあちゃん」と呼んだが、年齢を聞くと62歳。（自分より若い！）20歳で嫁ぎ、すぐに子どもに恵まれたとのこと。そしてりくとくんの母もまた20歳で結婚、すぐに長女を出産したと聞いた。62歳で18歳をかしらに4人の孫。そのうえ38歳の娘が4人の子の親となったのちも娘のまま、暮らしを続いている。

祖母に、日頃の孫との関わりをねぎらいつつ、母と話をできないかと問うと、

「ええ、大丈夫だと思います。私から話しておきます。」と。次回は母の休日に合わせてSSWが家庭訪問し、母と面談することを約束した。

りくくんは、SSW訪問時(平日の午前中 本来は登校して家にいない時間)にはまだ寝ていた。。祖母が起こして連れてきてくれたが、SSWには言葉もなくまた寝室へと戻っていった。妹のみこちゃんも登校しておらず、パジャマのままで、SSWの声掛けに返答はなかった。母は仕事に出かけて不在だった。

○母との面接

祖母の力を借りて、母と面接するため再び自宅に訪問。母親の就労状況、こどもとの関わり、学校への思いについて聞き取りした。一日の過ごし方を聞くが、食事はりくくん、みことちゃんと食べない。寝るのも別室、ふたりと過ごす時間をほとんどもっていなかった。そして「あの子らは、私(母)のことが好きじゃないんです。ばあちゃん子なんです。ばあちゃんが母のようなものです。」「私はどうしても怒るだけの人になってしまっているので、私のそばにはよってこないのです。」と悪びれもせず語る。

母の仕事はフランチャイズのアイスクリームショップの店長。りくくんの姉二人(高校3年・高校2年)は、そのアイスクリーム店でアルバイトをしている。アルバイトを通じて母と過ごす時間が長女・次女にはあった。母が4人の子どもを上二人、下二人と線を引いているように感じた。なぜ、「あの子らは私のことを好きじゃないんです。」と口にするのだろう。一緒に過ごす時間をもとうとしないのだろう。母はどんな子ども時代をすごしてきたのだろう。祖母は娘のことをどう思っているのだろう。面接を終えて、記録を書きながら私の中には疑問がいくつも湧いてきた。

<ケース会議を開催する>

課題を学校と共有し、アクションプランを検討するために、学校でケース会議を開催した。学校側は、校長・教頭・担任・特別支援コーディネーター・指導主事が出席。SSWはジェノグラムを提示しつつ、祖母・母との面接結果から捉えた課題について説明する。不登校の背景にある昼夜逆転、基本的生活習慣の欠如、偏食、親と過ごす時間の少なさ。りくくんの生活を改善するには何ができるのか、意見を交換する。学校が行ってきたこれまでの支援を承認しつつ、課題解決に向けて目標設定し、アクションプランと役割分担を行った。

<支援の実際 そして今・・・>

りくくんの生活に大きな変化はないが、登校するタイミングを自分で決めて、週に1日は登校するようになった。夜ふかしや偏食、お風呂嫌いは変わら

す続いている。妹のみこちゃんが常に母の枕を抱えて、家から出なくなっている。言葉も少なく、甘えたような囁語を話すのみである。その姿からは、言葉では伝えられない「母と一緒にいたい」という思いが感じられる。

母へみこちゃんを一日1回ハグすることを提案したが、母はバツの悪い表情で「え？ハグですか～できないですね・・・」と。お風呂に入らないりくとくんに、「あの子はあまり臭わなくて。でも首には垢がたまってるんですよね。着替えもしないし。水が嫌いなんです。」と返答する。母なりに対処しようとしているのかさえ疑問に思うこともある。

町のこども家庭センター、児童相談所とも対応について相談し、「連携」を意識している。偏食については、知り合いの管理栄養士に相談もしてみた。学校との情報交換は継続している。しかし、目標達成には至っていない。

私は月に1～2回は母と面接し、母の行動変容につながるような関わりを続けている。

<スクールソーシャルワーカーの役割>

学校と家庭、そして地域社会をつなぐ役割は担えているのだろうか。

不登校、子育てへの関わりのうすさに対して、社会福祉の専門知識と技術を活かせているのだろうか。

子どもや保護者、教職員と連携しながら、問題の解決を支援しているのだろうか。

今一度 SSW の役割について考えてみる。

自分が実践していることがスクールソーシャルワークなのか。悩むばかりの日々を過ごしている。



「一語一絵」
ちいさな言葉と絵のものがたり

miho Hatanaka,

ある年の暮、某幼稚園に招いていただき性教育を行った。保護者の参観もあり、子どもたちへの話が終わってからは大人に向けて話をした。子どもたちの素直な反応と笑い声の響く、楽しい、あたたかな時間であった。

今回は、子どもたちの“詩”と保護者の方たちによる「いのちのうた」の、二編を。



【第20話 いのちのうた 5 : こどものコトバ、大人のコトバ】

幼児に向けた性教育では特に言葉の理解など発達の差を考慮しなくてはならず、対象の年齢によってどのような話をするのか、教材には何を用いるかは考え方である。しかしその準備の過程は楽しい。この時は前もって子どもたちに「いのちとは何か」をテーマに絵を描いてもらい、園から郵送してもらった。性に関する主要な話の部分は大まかに決めておいて、絵を見てから展開を考えるようにしたのである。とは言え、子どもたちに初めて会うのは授業のある当日なので、この問い合わせで描いてもらうには工夫も必要だった。どのような教示をすればどのような絵が描かれてくるのか、ある程度こちらの意図するところを表現してもらえるようにもしなくてはならない。いろいろなことは委ねる部分も多く、園には用いる言葉などまで細かにお願いの文書を添えた。

さて絵が届き、わくわくして包みを開けると、園で飼育している動物の絵、幼い下のきょうだいの誕生を祝う家族の様子、大きく描いた自分の顔などその子たちの生き生きとした姿が見えるよう。“絵を描いたその時のあなた”にしか描けないすてきな絵。それらを前にして話は自ずと展開し、子どもたち全員の絵をレイアウトした一つの物語ができた。「これを、読もう」。私の持つ専門知識はそれとしてツールではあるが、子どもたちの内にあるものによっていつも最も相応しい形として引き出されるように感じる。

いのち の うた

作った人：Kようちえんのみんな

むかしむかし、みんなははじめ、
ちいさなちいさな“たまご”でした。
ちいさなちいさな“たまご”は、
しづかで あたたかな
おかあさんのおなかのなかにいて、
とてもしあわせでした。

おかあさんは うたいます。

ちいさなちいさな“たまご”ちゃん、
あなたはねんねをしているの？
はやくおかあさんのところにきてね…
だっこしていっぱい、遊びましょう。

ちいさなちいさな“たまご”は
おかあさんのやさしいこえをきいて、
とてもうれしくなったので、
おなかのなかでどんどんおおきくなりました。
おかあさんのおなかのなかで、
どんどんおおきくなりながら、
くるくるとおどったり、
しゃっくりをしたりしました。

どんどんおおきくなつたので、
ちいさなちいさなたまごは いつのまにか
“ちいさなあかちゃん”になっていました。
おかあさんのおなかのなかにいる
“ちいさなあかちゃん”は、
もっともっと どんどんおおきくなつて、
“ちゅうっくらいのあかちゃん”
になりました。

「おかあさん、もうおそとにでてもいい？」

…いえいえ、まだですよ…。

“ちゅうっくらいのあかちゃん”は、
またまたどんどんおおきくなりました。
“ちゅうっくらいのあかちゃん”は
もっともっと おおきくなります。
さあ、もうそろそろ、いいかな…

「もうおそといでてもいい？」

…いえいえ、まだですよ…。
もうちょっと おおきくなつてからね。

“ちゅうっくらいのあかちゃん”は、
おかあさんのおなかのなかで
おかあさんのこえをきいたり、ねむったり、
わらつたり、あしをうーんとのばしたりして、
“ずいぶんおおきいあかちゃん”
になりました。

…さあ、もうそろそろ、いいかな…

つきのきれいなしづかなる、
ずいぶんおおきくなつた
あかちゃん は、
“おそといでよう” と、きめました。

「おかあさん いま いきますよ…
ぼくもがんばるから
おかあさんもがんばってね…」

おかあさんは、まちました。

やっとやっと、
あなたにあえるよ…
このひをずっと、
まっていました。

…そして—、

…やあ、ぼくだよ。

ああなんてうれしいの！

おいわいに、みんながかけつけました。

おにいちゃんも、おねえちゃんも、
おじさんも、おばさんも、
みんなみんな、あかちゃんにあいにいきます。

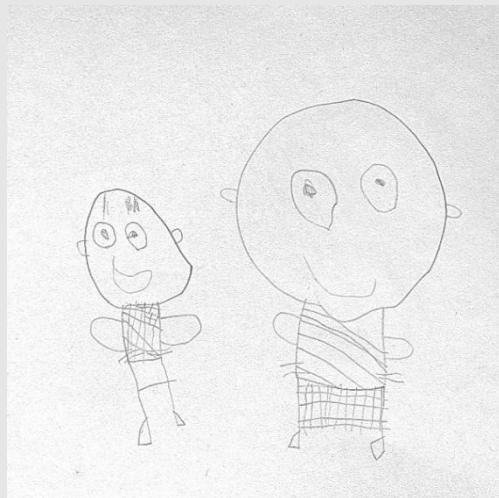
らっきいくん も、
しろちゃん も、
くろちゃん も、
まっくろちゃん も、
みんなきたよ。
おじいちゃんも、
おばあちゃんもいきます。

「わたしたちも いそぎましょう♪」

お誕生日 おめでとう！
あかちゃん きてくれてありがとう。

みんなで 待っていました…

お し ま い



“Here I am！”

*絵は本文とは関係ありません。

いのち

K 幼稚園家庭教育学級の皆さん

私たちはみんなリレーをしていて それぞれにバトンを持っている。

そのバトンが命。

落としてもいいけど、

次のランナーに渡さなければならぬ、とても大切なものの。

守っていくこと、つなげていく事。

責任。

自分のDNAを永遠に続けていくための尊いもの

1人1人に与えられたチャンス。得たチャンス。

生きている限りは 自分の人生をどう生きるかは自分が決めるしかない。

そのための“いのち”だと思う。

何らかの役目を持っていて、自分、周りの成長にかかせないもの

この世でいろいろな経験をするチャンスを

神様から与えられたこと。

「いのち」はまわるもの。

消えてゆくいのちもあるけども、

新しく生まれるいのちもある。

なぜ生まれてくるのか。なぜ死んでしまうのか。

うまく説明できない。

それくらい難しいもの、神秘的なもの。

喜び、生きがい、宝

キセキ

はかないもの

いのち = 愛

痛みを伴うが、いのちを教えてくれたのは我が子

いのちは巡り、いのちは愛情をたどっていく

生命は永遠のもの

受け継がれてきて、受け継いでいく 大切なもの。



タイトル名 「対人援助実践をリポートするこの一冊」

第33回：第4章-その5-

車椅子の少女が命を懸けた物語に教えられたこと

著：渡辺修宏

企画：渡辺修宏

小幡知史

二階堂哲

はじめに

前回は、高山かおり先生に執筆していただいた。

彼女が紹介してくださった「セーラームーン」、実はまだ、その漫画を読んだことがない。しかし、それが歴史に名を残した秀作であると、聞いたことはある。漫画のみならず、アニメ、映画、ゲーム、舞台、さまざまな領域で幅広く人気を博した作品として、広く高名であろう。

そういえば、良く通う市立図書館に、「セーラームーン」の漫画が全巻揃っていた。今度借りてみようと思う。もしかしたら、この年になってそのような蔵書を借りるとなると、その姿をみた司書さんは、私を変な目で見てくるかもしれない。しかし大丈夫。私には娘がいる。娘のために借りるんだよ、という大義名分を胸に、威風堂々と借りてみることとしよう。

もっとも、私の娘は、「セーラームーン」に親しむことがなかった。

その一方、娘はかつて「プリキュア」が大好きだったから、娘が幼い頃、何度か一緒にそれを楽しむことが少なくなかった。よって私は、未だに、「スィートプリキュア」の主題歌を歌えるほどである。「ラ♪ラ♪ラ♪スィートプリキュア♪」は、今聞いても、歌っても、とても元気になれる曲である。

子どもからの影響

娘から「プリキュア」を教わった一方、息子からは「仮面ライダー鎧武」を教わった。

幼き頃、「仮面ライダー（スカイライダー）」や「仮面ライダースーパー1」に夢中になった私は、TVで「鎧武」をみて、仮面ライダーシリーズの進化を間に当たりにした。さまざまな演出に感動すら覚えた。しばらくは息子とこれを楽しもうとすら思ったが、…残念ながら息子は「鎧武」以降、仮面ライダーを卒業して、野球に夢中になった。

学童野球、そしてその後は中学硬式野球に移行した息子に付き添って、やれ遠征だなんだ

と、親としていろいろとお手伝いする役割が増えていった。同時に、野球部出身ではない私は、あまり野球に詳しくないことを自覚し、おのずと、野球に関する本を読むようになっていった。

読者はご存知であろうか？野球にはいくつのルールがあるのかということを。

息子がお世話になっている硬式野球チームのある保護者は、次のようにいっていた。

「野球のルールの基本は、1700 ですよ。でも、リーグの違いなどによって、更に増えたりするんですよ。ひたすら勉強ですよ」と。

せ？

せん？

せんななひやく？

(;▽;)



私はそれを聞いて驚愕した。とても覚えられる数ではない。

野球経験者ってすごい…。

ちなみに私は、陸上部、サッカーチーム、空手部出身者である。陸上や空手のルールは、競技によって異なるが、さほど複雑ではない。サッカーのルールの基本は、17種類である。

野球と桁が2つも違う…。

生まれて初めて野球の本に触れる

以降、息子の付き添いのために、野球の本を読むようになった。ただ、公式ルールブックはつまらないから、なるべく読みやすい本から手を取るようになった。

まず、バッティングの基本、守備の基本、走塁の基本などの専門書をとりあえず斜め読みした。野球を生業とする方々の著書にも手を出し、やがて、清原和博、桑田真澄、新庄剛志、野村克也、落合博満などの、元プロ野球選手らの著書を手に取るようになった。

以下、読了したそれらの本の一部を示す。

高橋 秀実	「弱くても勝てます」開成高校野球部のセオリー
小谷野栄一	自分らしく パニック障害と共に生きる
中村 計	世の中への扉 甲子園がくれた命
島沢 優子	スポーツ毒親 暴力・性暴力になぜわが子を差し出すのか
早見 和真	あの夏の正解
桑田 真澄	心の野球 超効率的努力のススメ
三井 康浩	ザ・スコアラー
年中 夢球	球伝
朝日新聞スポーツ部	高校野球 名勝の流儀 世界一の日本野球はこうして作られた

小塩 靖崇 10代を支えるスポーツメンタルケアのはじめ方
高校野球 名将の流儀 世界一の日本野球はこうして作られた
新庄 剛志 わいたこら。人生を超ポジティブに生きる僕の方法
スリルライフ 天才ではないが、天然でもない
清原 和博 清原和博 告白
魂問答
反骨心
落合 博之 采配
不敗人生
野村 克也 一流非難
巨人軍論 組織とは、人間とは、伝統とは
ああ、監督 名将、奇将、珍将
エースの品格 一流と二流の違いとは
野村セオリー 紾
野村の革命
野村ノート リーダーとして覚えておいてほしいこと
上達の技法
「野村再生工場を語る」
よみがえるノムラの金言
女房はドーベルマン
人生に打ち勝つ野村のボヤキ
遺言 野村克也が最後の1年に語ったこと
野村再生工場 叱り方、褒め方、教え方
プロ野球怪物伝 大谷翔平、田中翔大から王・長嶋ら昭和の名選手まで
私が野球から学んだ人生で最も大切な101のこと
人生を勝利に導く金言
弱者が勝者になるために
野村克也野球論集成
…などなど。

どうせなら彼らの著書すべてを読了てしまえ、と調子にのったが、よくよく調べてみると、数百冊以上あることを知り、白旗をあげた。野村克也一人だけで、350冊以上の著書があるらしい。凄まじい。なんという著書数だろう。

アスリートでありながら、著述家でもある彼らに感服した。とにかく、野球関連の本の多さに、これまた驚愕してしまったのであった。

私の心に刻まれた野球漫画

息子のため（？）に野球関連本を読んでいるうちに、ふと思い出した。少年時代に私は、それなりに野球漫画に親しんでいたことを。

あだち充の「タッチ」、しばあきおの「キャプテン」や「プレイボール」。「MAJOR」や「グラゼニ」、「おおきく振りかぶって」、「ダイヤのA」などが、次々と頭に浮かんでくる。

そしてその中で、今回特にご紹介したいのは、小山ゆうの「チェンジ」である。

小山ゆうといえば、「がんばれ元気」、「あずみ」、「お~い！竜馬」などが代表作で、それぞれアニメ化や映画化などがされている。しかし「チェンジ」は間違えなく、隠れた名作である。少年漫画の金字塔に加えてもおかしくはない。

さて、この「チェンジ」は、車椅子の少女・早（さき）が、自分の命と引き換えに49日間の時間を早に与えた新米の死神の奇跡により、高校野球の甲子園を目指す物語である。

この作品、確かに2巻か3巻という短さで完結してしまったが、とても感動したことを覚えている。ネタバレを避けるため、ストーリーについて細かく触れる事はしないが、とにかく泣ける作品であった。周囲の友人に、しきりに一読をすすめたことを覚えている。ある友人の一人は「泣け過ぎて、読むのが辛い」とすら語っていた。「これはいつか必ず、映画化するに違いない」と私は確信してきたが、私の知る範囲で、未だにそのような動きはない。おかしい。実におかしい。アニメでも実写でも、絶対世界的にヒットすると思う。

実は、「チェンジ」は青春野球漫画であると同時に、友情、愛情、信頼、命、人生とは何かを訴えかける、哲学的漫画でもあったのだ。ただ「野球が好き」とか「野球で勝ちたい」という枠にとらわれず、限られた人生でどのように生きることが大切なのかを問うてくるような作品だったのである。

読者の皆様におかれても、ぜひこの作品をご一読いただき、私と一緒にになって考えていただきたい。

私たちの人生は有限である。

いつか必ず訪れる最後の日に向かって、今日も生きているのである。その事実を踏まえて、私たちは今日、どんな過ごし方をするのであろうか。どんな過ごし方をすべきであろうか。

今日は、私たちの残りの人生の、最初の1日である。

二度とない、大切な1日である。そうであるならば、私たちは、その時間を有意義に、有效地に、使っているのであろうか。

もしかしたら、無為に、無駄に、浪費しているかもしれない。

そんな時もあるかもしれない。

それが良いとか悪いとか、正解とか不正解であるかと、追求したいわけではない。

ただ、限りある、尊い人生の真っ只中にいる私たち自身は、時に、命や時間が永続的に続くわけではないということを忘れているかもしれないということを、指摘するだけである。少なくとも私は、時々それを忘れている。

忘れるから、大切にすることや、努力することを怠る。

鈍感になるから、漫然と日々を過ごす。

そして、時々気づくのである。「勿体ない」と。

命を懸けるということ

時間を、命を、この上なく大切して生きる、というのは、言うほど簡単ではないと思う。

でも、その姿勢というか意欲というか志のようなものをちゃんと持っていないと、やっぱり勿体ないと思う。

この発想って、人を支える職業者は皆、多かれ少なかれ、お持ちになっていたり、お感じになっていることではないだろうか。

報われる、とか、儲かるとか、そういった目的から遠ざかり、ただ、自分の「命」を「使う」ということを大切にするということ。つまり、「使命」をもって生きるからこそ、人は、他者を、心から支えられるのではないだろうか。

その意味で、対人援助というのは、職業としての在り方の前に、「生き方」としての哲学が問われることが多々あると思う。

さて、読者はどうお考えになるだろうか。

機会があれば、ご示唆頂きたい。

一つづく一

タイトル名「対人援助実践をリポートするこの一冊」

第34回：第4章-その6-

障害児支援の最前線で働き続ける理由

著：小幡知史

企画：渡辺修宏

小幡知史

二階堂哲

前回は毛利甚八作、魚戸おさむ画の「家栽の人」という作品を挙げ、この作品によって私が「答えがないという答え」という発想を得たことを紹介した（対人援助マガジン第61号を参照）。前回の原稿を執筆後、再び自分の人生を振り返って、自身の対人援助に大きな影響を及ぼした漫画について振り返ってみた。

対人援助にも通底する自身の人生観、哲学の形成や職業選択に影響を及ぼした作品は枚挙にいとまがないが、今回は「自分がなぜ障害児支援の現場で働き続けているのか」という、現在進行形で活き続けている自身の対人援助観を形成した一つを紹介したい。

その作品は、佐藤秀峰の「ブラックジャックによろしく」である。本作品はドラマ化もされているので、知っている方も多いのではないだろうか。本作品は研修医である主人公の目線から、医療制度の現実や矛盾、患者を取り巻く環境や心理的葛藤をつぶさに生々しく、グロテスクなほど情緒的に描いていたように記憶している。

すべてのエピソードにおいて、多くの対人援助職者の価値観や倫理観を揺さぶるテーマや言葉に満ちているが、私の頭にこびりついているエピソードは、「小児科編」である。本エピソードの舞台はタイトル通り小児科で、緊急時の対応や夜間など時間外診療の多さ、それらに伴う小児科医の過酷な労働環境がさまざまと描写されている。主人公だけでなく読者すら、どうにもならない、どうしようもない現状を痛感してしまう。そんな怒涛の小児科での研修期間を終え、主人公は指導に当たっていた小児科医に「小児科医を続ける理由はなんですか？」と問いかける。その小児科医はそれまでの柔軟な表情から一変し、覚悟すら読み取れるような顔で、「僕がやらなきゃ、誰がやるんですか？」と答える。この場面では、その言葉の真意や背景にある文脈などは詳しく描写されてはいない。しかし、本エピソード全体を俯瞰することで、その言葉に込められた意味合いが見えてくる。

私は障害児支援の現場で、管理者かつ児童発達支援管理責任者として、日々働いている。合わせて、実践における研究活動も細々と続け、ポスター発表ではあるが年数回、学

会などで登壇もしている。また一方、地元の専門学校で看護師やST（言語聴覚士）、PT（理学療法士）などのリハ職を目指す学生に、心理学など多岐にわたる対人援助に関する内容を講師として教えたりもしている。

自分から言うのは憚られるが、現場以外にも、研究や教育のフィールドにシフトすることも可能だし、おそらくそちらの方が自身の金銭的・時間的環境は良くなりそうである。何より、肉体的な負担は明らかに現場の方が重いであろう。実際、現場で一定の経験を積んで、研究や教育のフィールドに羽ばたく方は少なくないという印象がある。

少なくとも私に限った話ではあるが、仕事に関して多様かつインセンティブのある選択肢がある中で、自身が現場をメインに働き続ける大きな理由は、上述の「僕がやらなきゃ、誰がやるんですか？」である。私の肌感覚が大きいところで、具体的なエビデンスもない意見ではあるが、障害福祉の現場では専門的な知識を十分に持ち、かつ、きちんと研究活動も展開する「サイエンティスト・プラクティショナー」は少数派であるようと思う。理由は様々であるが、「優秀な人ほど早く辞める」という側面は決して少くないだろう。専門的な知識が十分にあるとはいはず、かつ研究活動にも全く興味がない支援者が多数の環境では、また、別立てで書けるほど様々な思いが逡巡する。

それでも、私が誰かに「どうして現場に居続けるのか？」と聞かれたら、私はおそらく上述の言葉を返すだろう。「僕がやらなきゃ、誰がやるんですか？」

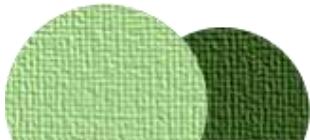
この言葉には、自己憐憫のようなヒロイズム的動機が内在しているかもしれないし、單なるこだわりかもしれない。ゆえに、年に数回は自分自身に「なぜ現場に居続けるのか？」と問いかける。その度に上述の言葉を思い出し、思い悩む。ある意味で、本作品が自身の対人援助実践をリブートするきっかけでもあり、そしてリブート“しない”きっかけでもある。

一つづく一

新・島根の中山間地から Work as Life

第6回
「隠居中年の青写真」

野中 浩一



1. 変化のとき

四月、大学生になった長女が家を出た。同じく四月、3人になった家族は、20年近く住み続けた里山の家を出て、都市部に移り住んだ。(※1)

中年の転機である。このタイミングで、長年続けてきた大切な仕事を人に譲り、多少の仕事と役割とを持つだけの半隠居状態になった。

あっという間に八か月が過ぎた。人と会い、勉強会や講習会に出て、本を読み、多少の仕事や役割をこなし、それでも有り余る時間は散歩をしたりゲームやスマホが埋めたりする生活が続いている。

そして今、海外に出て働く道を模索している。

2. 私の問題意識の断片

ここ数年、私は自身が運営するフリースクールを、若者だけでなく、家から出づらい中高年も含めて、多世代が混在して過ごせる場所にアップデートできないかと考えてきた。

「安全感があり、話し相手がいて、楽しい。集団が苦手でも、人と話すことが得意でなくても、自分なりの距離感とペースで人と関わることができる。人からも関心を向かれて、自分らしく生きられる、身近で小さな場所」のイメージである。

このような場所を実現していくうえで、私の中で関心があるキーワードを5つ挙げたい。

(1)協働調整

協働調整とは、人と人との「関係性」における「相互作用」を基盤とし、無意識的な神経生理学的な働きを含めた心身の相互調整が行われる状態を指す。親密な他者との「感覚、感情、自律神経」の相互作用（協働調整）の経験を積み重ねることで、この調整機能が内面化し、自己調整能力が身につく。これは、人間が社会の中で意欲的に活動するための情緒的・生理学的基盤の構築であり、活動のエネルギーを生み出す源泉であると考えられている。（※2）また、ステファン・ポージェスはその著書の中で、「安全であると感じられる状態」の大切さに言及するとともに、生理学的状態や行動を互いに協働調整するエクササイズとして「あそび」に着目している。

この「関係性における相互作用」について、神経生理学的観点から論じるステファン・ポージェスのポリヴェーガル理論、そして対話、意味、自己、および社会的現実から論じるケネス・ガーゲンの社会構成主義。この2人の論は分野も焦点も違うものであるが、私の実践からくる視点と「人の気力や意欲といった活動エネルギーの源泉は関係性の中にある」という部分において重なっているように感じている。

(2)生涯活躍のまち（ごちゃまぜで街づくり）

生涯活躍のまち構想の発端は、2015年6月に閣議決定された「まち・ひと・しごと創生基本方針2015」の中の、日本版CCRC（継続介護付きリタイアメント・コミュニティの推進）構想である。その後、多世代共生と地域包括ケアを基軸とした、高齢者コミュニティに限定しない「生涯活躍のまち」構想へと発展していった。

この構想の根底にあるのは、「年齢や障害の有無等を問わず、誰もが居場所と役割を持つコミュニティづくり」という理念である。現在までに多くの実践例が報告されているが、私は特に、雄谷良成氏を中心とした「社会福祉法人 佛子園」「公益社団法人 青年海外協力協会」「全国生涯活躍のまち推進協議会」の動きと連帶に注目している。

(3)コンヴィヴィアル

オーストリア生まれの思想家であるイヴァン・イリイチが、その著書『コンヴィヴィアリティのための道具』の中で提示した概念である。

イリイチは、コンヴィヴィアリティを「人間的な相互依存のうちに実現された個的自由であり、またそのようなものとして固有の倫理的価値をなすものである」と定義しており、産業化、標準化やシステム化、専門分化の正反対として位置づけている。また、別の言葉を引用すると「もし自分らがともに仕事をし、たがいに世話をあうことができるならば、自分たちは今より幸せになるのだという洞察を、人々がわけもつこと」と述べている。イリイチは自律性の尊重、相互行為の豊かさ、制度・道具の限界設定を訴えて

おり、人々の生活を一方的に管理し、依存させ、自立性を奪うラディカルな独占として、「教育・医療・産業・交通システム」を挙げている。

日本総合研究所の井上岳一は共著「コンヴィヴィアル・シティ」の中で、コンヴィヴィアルの訳語として「自律協生」の文字を当てている。そして、「今の社会の問題は、人口が減っていることより、人口が減っているのに居場所と出番をうまくつくれない人がたくさんいるということの方にある」としている。この点、不登校や発達障害などのレッテルをもつ若者と一緒に過ごしてきた私としては、大いに共感するところであるが、「うまくつくれない人がたくさんいる」というよりは「うまくつくれない状況がある」または「うまくつくれない人が増える土壌が今の日本である」という方が正確なように思える。

(4)文化人類学の視点 (※3)

私がものを考えるうえで拠りどころにしているのが文化人類学の考え方である。文化人類学とは、特定の文化や社会を相対化し、人間存在の多様性を理解しようとする学問である。初期の人類学は、西洋の自己文化中心主義（Ethnocentrism）を批判する中で発展してきたという歴史的背景を持つ。

文化人類学とは何か。九州大学のホームページにはこう書いてある。「文化人類学者たちは、（当時のことばを使えば）西洋から見た『未開社会』を、現地調査によって詳細に記録することを試みました。その成果を、民族誌という書物に残しました。文化人類学者たちの故郷から遠く離れ、厳しい自然環境のもと、不慣れな食べ物を口にし、難解な言語の壁を突破し、ひたすら現地の事情を知ろうという意志のもと、文字通り『フィールドで仕事』をしていたわけです。」また、文化人類学的研究のために必要な力として「常識を疑問視し、批判的思考を実践できる力、そして異なった世界を作り立たせている前提を想像し、それを内在的視点から理解する力」の2つを挙げている。なるほど、納得がいく。

松村はその著書の中で「マリノフスキは、人類学者がやるべきなのは『習慣と伝統によって規定された型どおりの面』と『実際にそれを行うやり方』、そして『住民たちが心にいだいている行為への解釈』の三つをとらえることだという。」そして「人類学は最終的に『人々のものの考え方、および彼と生活との関係を把握し、彼の世界についての彼の見方を理解すること』を目指す」と述べている。

(5)当事者研究

当事者研究は、北海道浦河町にある「べてるの家」における、統合失調症などをかかえた当事者の暮らしの中から生まれ育ってきたエンパワメント・アプローチであり、当事者の生活経験の蓄積から生まれた自助（自分を助け、励まし、活かす）と自治（自己治療・自己統治）のツールである。

べてるの家を設立したソーシャルワーカーの向谷地氏は、「当事者研究とは、（中略）当事者自身がみずからのかかえるさまざまな生きづらさを『研究テーマ』として示し、仲間や関係者と連携しながらユニークな理解や対処法のアイデアを見出して、現実の生活に活かしていくところにその特徴がある。」

と述べている。

3. 横串としてのケア

「多年代が自分らしく過ごせる居場所をつくる構想」を実現するうえで、前述した(1)～(5)のキーワードを貫く横串として、私は「ケア」を差し込んでいる。

- (1)協働調整 →関係性に基づく、個々人の内臓感覚としてのケア
- (2)生涯活躍のまち →日常の生活環境の中に組み込まれる構造的なケア
- (3)コンヴィィヴィアル →考え方や哲学としてのケア
- (4)文化人類学の視点 →文化・歴史の視点から問う学問としてのケア
- (5)当事者研究 →困難の中でリカバリーする技術（及び仲間とりカバリーし合う技術）としてのケア

これら(1)～(5)にケアの横串を差し込んだものが、私にとって「多年代が自分らしく過ごせる居場所をつくる構想」の理論的マニフェストである。

さらにこの横串である「ケア」を捉えるうえで拠りどころとなるのが、キャロル・ギリガンの「ケアの倫理」である。「『関係性』の中で、いかに他者に応答し、責任を果たすか」とのキャロルの視点を参考することにより、権利や規則などの「正義の倫理」と対比することができ、なぜケアの倫理における優良事例や評価された概念が、制度や政策に乗ると色あせて陳腐化しまうのか、その原理が理解可能になる。

それは下の表1が示すとおり、「ケアの倫理」とは、個々の状況と関係性のニーズに応じて柔軟に応答する姿勢である。これが、男性を中心として伝統的に高く評価されてきた「正義の倫理」に基づく普遍的な規則にものごとを当てはめようとする姿勢（＝既存の非コンヴィィヴィアルな構造）と混ざり合いにくい性質をもつためである。

表1 ケアの倫理と正義の倫理の比較

	ケアの倫理	正義の倫理
重視する価値	つながり、責任、応答、関係の継続、共感、親密さ、自分と相手が相互依存的である	分離・自律、権利、規則、公正、ゲームの継続、抽象的な原理、社会的地位と力の関係性（相互利益）の働き
判断の焦点	状況における具体的な文脈とニーズ	普遍的に適用可能な原理・規則
人間観	相互依存的な存在	自立・独立した個人

4. 夢パークと子どもの権利 ~地域と暮らしと根っこ

この秋、私は西野博之氏の講演会に足を運んだ。川崎市子ども夢パークやフリースペースえん等を運営する「認定 NPO 法人フリースペースたまりば」の理事長である。1986 年より不登校児童・生徒や高校中退した若者の居場所づくりに携わってきた西野氏の講話の中で「育ちの 3 要素は、遊ぶ、学ぶ、ケアです」という言葉が印象に残った。(※4) ここで西野氏はケアという言葉を「気にかける・関心をもつ」という意味で用いており、その必要性についてまったく同感である。

この夢パークを舞台とした映画「ゆめパのじかん」や NHK の「ドキュメント 72 時間」の映像を観ると驚くのが、大人も子どももフラットに関係しあい応答しあえる「遊び・学び・ケア」の場が長きにわたり実現している事実である。

もともと不登校は予後がいい。私の経験上では、発達に凸凹がある子たちも 17~19 歳くらいになると多くは自然と学校に通えたり、自分なりのやりくりができるものである。しかし、べてるの家を設立した向谷地氏の「みんなと回復していくなかに、(中略) 足腰の強い回復がある」という言葉が表すように、安心して集える場があり、自分を気にかけてくれる人がいて、話したり笑ったりできる仲間がいる中の回復は、ただの回復ではない。そこにはその子の将来をも支えてくれる足腰の強い回復がある。この夢パークにも、遊びや食を通じて人と人とが繋がり合う、共に生きる関係性からくる相互作用を強く感じる。

この場所が、不登校の子や発達に凸凹がある子など、ひとクセもふたクセもある子どもたちにとってもかけがえのない学びの場となっている要因に、「川崎市子どもの権利に関する条例」がある。下記リンクを読んでみてほしい。これは権利に関する条例という「正義の倫理」の中身を、「ケアの倫理」に委ねるという逆説的な試みでもあり、子どもたちに「なにもしない」ことを保障し、子どもたちの暮らしを取り戻すことを全面的に下支えしている。ただし条例はその運用や解釈によって「正義」に傾くか「ケア」に傾くかの塩梅が変わってしまうため、現状、運用と解釈を西野氏が行い、川崎市とタッグを組んでいる状況において、悩める子どもたちにとって有効で持続性のある居場所を実現できているのではないかと私は理解している。

川崎市子どもの権利に関する条例 <https://www.city.kawasaki.jp/450/page/0000004891.html>

さて、こうした素晴らしい事例がある一方で、このエッセンスを全国的に取り入れようとしてもうまくいかないのはなぜだろうか。(※5) 私流に解釈するならば、「ケアの倫理」に基づく場には、日々の暮らしと繋がっている「根っこ」がある。その確かな生活感とそこで育まれる有機的な関係性によって人も場も生き生きするのである、「正義の倫理」の土壤にその成功事例の要素（部分）を植え替えても根づくことが難しく、早晚腐ってしまうためではないかと考える。

5. メメント・モリ

47歳の私は、毎日のように死を意識している。

それは私が主としていたフリースクール運営の仕事を引退して、昼日中にお散歩がてらお弁当を買いに行く日々をおくっていることと無関係ではない。また、毎日拝んでいる仏壇の位牌に「俗名 野中時雄 享年五十三歳」「俗名 野中サツキ 享年五十五歳」と祖父母の享年が書かれていることもある。

第二次大戦後から、日本人の平均寿命は右肩上がりに伸びていった。それ以前の日本人の平均寿命を見ると、江戸であれ明治・大正であれ概ね50歳未満である。しかしこれは医療の未発達や戦争・疫病等の影響により幼くして亡くなるケースが多かったためで、幼くして死亡したケースを除いた場合の日本人の平均寿命（最頻値寿命）は、第二次大戦以前の時代においても概ね60歳くらいだったようである。

生物的な観点から、25歳から35歳くらいの間に子どもを産み、その末子が成人するのが55歳頃を考えると、医療や投薬による延命がない場合の寿命は概ね55歳から60歳とみてよさそうに思える。反対にその自然の摂理を超えて誰もが長命を求めた場合に、生命としての新陳代謝が滞り、本来の命のバトンの受け渡しの円環が歪むのではないかと心配になる。

もしその歪みが今の少子高齢化や晩婚化・非婚化だとするなら、私は個人的にはあまり死にたくはないのだけれど、どちらにせよいずれ枯れて朽ちる命なのであれば、本来の命の営みのとおりの時期に死ぬのがよいのではないかと考えたりもする。

だからこそ私は海外に行き、今の私が思いもよらぬ環境や状況の中で生きる人、その人たちを支えていけるコミュニティの中で生活を共にして、限りある命の中で自分らしさやその人らしさを模索し続けたいと考えている。そして、こうした関係性の只中で、適切な時期に前向きに枯れて朽ちることを願っている。

<語句注釈>

※1 里山から都市部へ

人口3万人強の中山間地域から、人口20万人弱の地方都市に移り住んだという程度の変化である。

※2 協働調整の影響

私は特に、考えを言葉で表現することが難しい乳幼児期の協働調整と、その不全により、学童期や思春期以降に意欲や気力が湧きにくい状態へのリカバリーとに関心がある。

※3 文化人類学の視点

村松圭一郎はその著書「旋回する人類学」の中で、ティム・インゴルドの言葉を引いて「人類学とは人々についての研究ではなく、人々とともに研究する学問だ」と述べている。そして私たち自身の生と私たちが調査をしている人々の生において、「私たちが彼らから進んで学ぼうとする場合にのみ現実のものとなりうる」として「他者を真剣に受け取ること」の大切さを説いている。また、インゴルドは「どのようにして私たちが住もう世界を知ることができるのか」（＝認識論）ではなく、より根本的な「私たちが知っている世界はどのようにあるのか」（＝存在論）という問いを投げかける。

※4 印象に残った言葉

本編とはずれるため注釈に載せるが、西野氏の言葉でもう1つ強く印象に残った言葉がある。それは、「遊ぶことを通じて非認知能力が高まるのであって、非認知能力を高めるために遊ばせるんじゃない」という言葉である。

※5 うまくいかないのはなぜだろうか

半ば私が決めつけていた表現になっているが、事実としてもそのとおりではないだろうか。

<引用・参考文献>

生涯活躍のまち第66号（2025年9月）

ステファン・W・ポージエス著、花岡ちぐさ訳（2018）『ポリヴェーガル理論入門 心身に変革をおこす「安全」と「絆」』春秋社

内閣官房・内閣府総合サイト <https://www.chisou.go.jp/sousei/about/ccrc/index.html>

イヴァン・イリイチ著、渡辺京二・渡辺梨佐訳（2015）「コンヴィヴィアリティのための道具」筑摩書房
井上岳一・石田直美編著、高坂晶子ほか著（2025）「コンヴィヴィアル・シティ 生き生きした自律協生の地域をつくる」学芸出版社

九州大学ホームページ「九州大学と九州大学大学院で学べる文化人類学」 https://www2.lit.kyushu-u.ac.jp/~com_reli/anthropology/

松村圭一郎（2023）「旋回する人類学」講談社

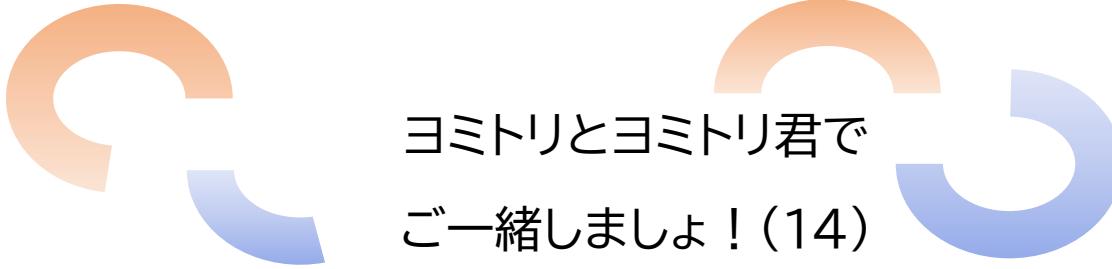
当事者研究ネットワークホームページ https://toukennet.jp/?page_id=2

向谷地生良（2009）「技法以前 べてるの家のつくりかた」医学書院

キャロル・ギリガン著、川本隆史・山辺恵理子・米典子訳（2022）「もうひとつの声で——心理学の理論とケアの倫理」風行社

Yahoo ニュースコラム（荒川和久）

<https://news.yahoo.co.jp/expert/articles/015b2416505d2a0abb07fe2e4ba71cc4ac582db0>



ヨミトリとヨミトリ君で ご一緒しましょ！(14)

高木久美子

意識があるのに、わかっているのに、言葉を発しているのにそれが伝わらないことについて、どう向き合い、取り組んでいくかということは、人の尊厳に関わる大切なことです。心と技能と技術を繋ぎ、障害のある方のコミュニケーション支援・レクリエーションの楽しい機会の提供を目指して非営利で活動しています。活動を通して学んだこと、感じたことなどを書いていきます。

「新たなフェーズへ」

この「ヨミトリとヨミトリ君でご一緒しましょ！」連載投稿の上記の投稿への思いの中で、これまで「技術と技能を心で繋ぎ」と書いてきた部分を本号から「心と技能と技術を繋ぎ」とあらためました。
2021年にヨミトリ君プロジェクトを立ち上げた時に、

技術と技能を心で繋ぎ
心を技術と技能で繋ぎ

と、どれを最初に持ってくるか、目的語にするか、あるいは手段にするかずいぶん悩みました。ヨミトリ君プロジェクトが今年5年目に入り、介助付きコミュニケーション「指筆談」のヨミトリによる技能もヨミトリ君の技術もそれぞれに切磋琢磨し、一定の上達・進化を遂げてきたと自負するところではありますが、特に私自身にとっては、指筆談の技能が向上するにつれ、心の領域、まだよく知られていない遷延性意識障害や閉じ込め症候群の状態におられる当事者の方々の思い、感情、思考の深遠さ、広大さ、時には神秘ともいえるその不思議な力に驚嘆し心を揺さぶられる場面が増え、もっともっと当事者の方々と交流し、協力していただきながら、多くの方にその未知の豊かな心の世界を知っていただき共に学び合いたいと思うようになりました。

特に前号の投稿からのこの3ヶ月は、まるで何かの采配を受けたようにそのテーマに関連する体験が続きました。今号ではそのいくつかをご紹介し、寝たきりで身体を動かすことも話すこともできず目視では覚醒を確認することはできなくても、意識や心の声、言葉は確かにあり、私たちはそれを知り共感することができるることを知っていただければ嬉しく思います。

■躍動する心

8月に古くからの友人Aさんと連絡を取り合うと、認知症の症状の出ていた高齢のお母さんが、夏の酷暑がこたえたのか衰弱が一気に進み、寝たきりになって体がまったく動かず話すこともできなくなってしまい、主治医の先生からは看取り期に入ったと言われたとのこと。手を握ると時々握り返してくれるけれども、どのぐらいわかっているのかわからないとのことでした。

遊びに行くといつも温かく迎えてくれて、得意の料理やお菓子をふるまってくれたAさんのお母さん。指筆談による介助で意思疎通できるかもという思いと、子どもの頃から可愛がってくださったお礼をぜひ直接お伝えしたいという思いで、お訪ねさせていただくことになりました。

ただ、お体が動かなくなる前に認知症の症状があったということで、指の動きを読み取ることはできたとしても、果たして意味のあるやり取りが可能か、不安がありました。少し緊張しつつ、お部屋のベッドのところに行ってお顔を拝見すると…。これまで12年余、意思疎通のトライをさせて来ていただいていますが、わかるのですよね、意識があるということ。早速久しぶりのご挨拶と、指筆談のやり方を簡単に説明し、手を取らせていただいて○と×を書いてみていただくと、しっかりと○と×を書かれました。こちらの言うことがちゃんと聞こえているし、理解しているということです。そしてその通りに書けています。私は横で固唾をのんで見ていたAさんと同席されたAさんのお兄さんに向かって「ばっかりです。いけそうです！」と伝えました。

「え、書けてるの？」Aさんは驚きつつも嬉しそうです。

お母さんに「○と×しっかり書いてくださってありがとうございます。続けてなにか文字を書いていただきたいのですが、ひらがなでお願いできますか」と、お伝えしている間に、即座にちゃんとその通りひらがなで、一気に書き始められたのです。

ここでは、漢字混じり文にします。

「久美ちゃん(高木)、来てくれてありがとう。まさかこんなふうにまた書いて言葉を伝えることができるなんて信じられないです。とてもうれしい」とお母さん。

「おばさん、すごいです。Aちゃんとお兄さんに何か言ってあげてください」

Aさんとお兄さんぐっと身を乗り出して、お母さんの方に顔を寄せました。

「ここでいろいろ相談しないで」

「え…」

「ぜんぶ聞こてるし、わかってるから。ここでみんなでいろいろ相談しないでちょうだい。」

「…」

Aさんもお兄さんも固まってしまって声が出ません。

うーん、子どもの頃から、すごく気さくで話しやすいお母さんだったけど、言う事はちゃんとはつきり言う、私の知っているAさんのお母さんそのままだ。それにしても、認知症と聞いていたけど、認知症はどこへ行った？！

「それからA子」

「…」

「A子、聞いてる？」

Aさんははっと我に返り、「何？お母さん」と答えました。

「あなた、声がすごく大きくてうるさくてたまらないの。もっと小さな声で話してちょうだい」

Aさん、ついさっきまでお母さんに意識があるかどうかと思っていたことを忘れたように、言い返しました。

「え、だってお母さん、耳がすごく遠くなつて、お母さーん！って近くで大きな声で叫ばないと聞こえなかつたじゃない」

「大きい。もっと小さな声で」

「こう？」

「まだ大きい。」

「どう？」

「もっと小さく」

「えー、これで聞こえるの？えー？」

なんだかいつもの小さな親子げんかがそのまま再現されているような様相です。思わず笑ってしまいそうになりましたが、真剣勝負の場の空気を紛らわそと、割って入つて言ってみました。

「実は多くの当事者の方が『話しかけられる声が大きすぎて困る』と言われるんですよ。お体が動かない分感覚が鋭敏になられるのでしょうかね」

「そうなんですね」と、じつと黙つてやり取りを見ておられた温厚な人柄のお兄さんが合いの手を入れてくださいました。

「それからA子」お母さんは復活を楽しまれるかのごとくどんどん書かれます。「その『おかーさーん、あーの一ねー』つていかにも年寄りに話すみたいな変な話し方もやめてね。普通に話してちょうだい。普通に」

「聞こえないと思うから、聞き取りやすいようにわざわざゆっくり区切つて言つていたのに、もう。だけど今日久美ちゃんが来つてくれて本当によかったです」

「私もお話しできてうれしいわ」

「いや、昨日実はCDかけてたの。わかるてるかわかっていないかわからないじゃない。元気出してもらおうと思って、行進曲を集めたCD。」

「あー行進曲。賑やかなやつね(苦笑)」

「そう、景気付けに。しかも大音量で。私がいる間、一日…。」

あちゃー。「それはたいへんでしたね」と、思わずお母さんに話しかけました。お母さん、ゆっくりと書かれました。

「あれは、つらかった」

お気の毒なのですが、お兄さんも私もつい笑ってしまいました。

「だけど、元気を出してもらおうと思って一緒に懸命曲を選んでCDにまとめたんだから。時間かかったんだからね」とお母さんにまた言い返すAさんも子供のようなかわいらしさ。

何気ない母と娘の会話。お母さんが自然体で話すように書いてくださることもよかったです、Aさんとお兄さんが最初は驚かれたものありのままに受け入れてください、普通に自然に会話をしてくださいたことが私は本当にうれしかったです。

お母さんは、お子さんやお孫さん達の健康や多忙を気遣い、親しい方々へのメッセージ、ご自身のこれまでの人生のこと等、いろいろ話してくださいました。私も、可愛がってくださったことへのお礼を直接伝えることができてよかったです。

その後、お母さんに少し休んでいただくことにして、Aさんと私は別の部屋に移動。お互いの近況など話しました。意思疎通支援の活動のことも詳しく話すのは初めてで、Aさんはいろいろ熱心に聴いてくれました。

そして、しばらくしてお母さんのお部屋に戻ると、先ず言われたのが「A子とあんな風に話しているのね。楽しそうで、なんだかうれしかったわ」でした。驚きました。

「え、おばさん、私たちの話しているの聞こえたんですか。」

「聞こえた。聞こえるのよ。ものすごくよく聞こえるの」

あり得ない…。私たちが話していた部屋はお母さんの部屋と反対側の廊下の一番奥で、お母さんの部屋も私たちがいた部屋もドアは閉めてあり、話し声もひそひそ声ではないもののボリュームはかなり落としていたからです。

しばらくしてヘルパーさんが来られました。会釈して静かに入って来られたのですが、お母さんがすかさず私に指筆談で「とても上手で親切なヘルパーさん。お礼を言いたいと思っていたの。久美ちゃんがいてくれてよかったわ。伝えて」と書かれました。私は一字ずつ書かれるまま読み上げました。Aさんがまた驚いて

「お母さん、誰が入って来たか見えたの？目もすごく見えにくくなっていたんじゃない？見えるの？」と言いました。

「そうなの、見えるのよ。」

ケアが終わるのを待って、私は思わず尋ねました。

「おばさん、ものすごくよく聞こえるし、目も見えるんですよね。どんな感じで見えるというか、聞こえる

んですか」

「耳で聞いているし、目で見ているのだけれど、それだけじゃなくて、なんていうか、身体全体で見たり聞いたりしている感じ。上手く言えないけど」

対話支援で訪問して、当事者の方々がよく言われる「すごくよく聞こえる」という感じも、この身体全体の感覚によるものなのだろうか。でも身体全体で聞く、聞こえるって…。不思議です。

Aさんのお母さんはその日指筆談での対話を始めてかなり早い段階で、「こんなふうに話ができる本当にうれしいけれど、でも久美ちゃんが帰ってしまうと言葉を伝えられなくなるから、それはとてもつらい気がする。でもやっぱり思いを伝えられるのは本当にありがたいので、忙しいでしようけれどまた来てちょうだい。お願ひね」と言われました。

「言葉が再び届いた喜びと、再び伝えられたが故に感じる介助者不在時の伝えられない一層のもどかしさ」という意思疎通支援の課題もすぐに理解され、家族や親しい人たちそれぞれの健康や多忙を案じ、ヘルパーさんに感謝を伝え、そして私にも「とても大切な活動だから、がんばって続けてね」と励ましてくださったお母さん。

その後再度お訪ねした際は、「私も話したい」とご親族の方々が私の来訪に合わせて来られ、お母さんはとても喜ばれました。一緒に笑ったり、泣いたりしながら皆さんが当たり前のように自然にお母さんのお話を聞かれ、お母さんに話しかけるご様子を拝見しながら本当に温かいファミリーだと、私も愛を分けていただいたようなうれしい気持ちになりました。

Aさんのお母さんはその後まもなく亡くなりました。Aさんには「久美ちゃんのおかげで会話ができる」と、奇跡のように思います。本当にありがとうございます」と言ってもらい、Aさんのお兄さんからも「おかげで最期に濃いコミュニケーションを取ることができて本当に良かったです。ありがとうございました」とメッセージの伝言を受けました。お身体はまったく動かせず、言葉を発することもできませんでしたが、お母さんはすべてわかっておられて、そのお心は躍動し、愛があふれていました。大切な方々への思いを言葉で伝えるお手伝いができてよかったです。

一方、反省すべき点もあります。國學院大學の柴田先生のきんこんの会で行動障害の当事者の方々と指筆談でお話しして、その知識の豊かさや人間的内面の深さを知り、表出される行動とのギャップにご本人達が一番つらい思いをされているということを私は知る機会を持っていたのに、Aさんのお母さんが認知症と聞いて、認知症では意思疎通は難しいのではと一瞬でも懐疑的になってしまったことです。認知症はどこへ行ったのかという謎は置いておいて、今後は機会があれば、認知症から言葉を失ってしまった方の意思疎通支援にもトライしていきたいと思いました。

Aさんのお母さん、再会と対話は私にとって今後の支援に大きな学びとなりました。今までのすべてに感謝します。ありがとうございました。

■対人援助学会第17回年次大会に参加しました

実は、今後はこの遷延性意識障害、閉じ込め症候群の状態の方々の常人を超える感覚の凄さを皆さんに知っていただこうと思ったきっかけが今年の学会の初日に行われた対人援助学マガジン情報交換会

でした！

その前に、恒例となりました大会参加記、印象に残ったことを書きます。

いろいろ嬉しいこと、参考になったこと、素敵な人々との出会い・再会がまたありました。

先ず一番に、会場となった大阪キリスト教短期大学の守衛さんです。閑静な住宅街を通り抜け大学キャンパスに到着し、会場の案内をしてくださった守衛さんが本当に素敵なお方でした。初老の紳士。静かな雰囲気でしたが学会関係者の来訪を温かく歓迎してくださっていることが伝わってきました。大学の品格と合っているというか、最初に言葉を交わす関係者の方が良い方だと大学のイメージも一気に上がります。なんとなくお姿を拝見したくて、2つに分かれていた会場を行き来する際は必ず守衛室の前を通り、それとなく中をうかがい…。完全に不審者です。不審者の取り締まりは守衛さんの任務の一つです。自らお仕事増やしてどうする、高木…。こうやって書いていてもお懐かしく思い出します。今日も静かに守衛室におられ、温かく丁寧に来訪者に接しておられることでしょう。私もこういう姿勢で意思疎通支援の活動に臨みたい。がんばります。

ヨミトリ君は、システムエンジニアの岡田さんが新潟、広島、京都、そして今回の大阪大会と4年連続でポスター発表1番をゲットし(常にやる気満々です)、満を持して最新のヨミトリ君の入力装置を展示、公開しました。社会学系の発表が多い中、ヨミトリ君のポスター掲示の前には毎年お借りするテーブルにヨミトリ君の機材、操作用パソコン複数台を並べ工学色が全面に。しかし、ヨミトリ君を触っていただきながらのご来訪者の方々とのお話は人の尊厳、意識、愛、福祉、リハビリ、支援の事等、心のふれ合いを通してのとても温かく時に熱い交流と情報交換の素晴らしい場となりました。

今回初日の一番に来てくださった方は、親しいご友人のご家族が遷延性意識障害であるとのこと。意識があるのかどうかわからない状態で、為す術がないとご友人が苦悩しておられるとのことなので、ヨミトリ君で多くの当事者の方が意思を表示したり、ゲームを楽しんだりされていること、全国に遷延性意識障害者の家族会があり共に支え合っていることなどを紹介させていただきました。とても驚かれ、「希望が持てます。友人に伝えます」と喜んでくださいました。

熱心にヨミトリ君の説明や指筆談での意思疎通の活動のことを聞いてくださった女性は、脳卒中の後遺症者であるとのこと。発症後に数々の資格を取られ、現在専門職としてお仕事をしておられるとお聞きし、すごいなーと思いました。また、なんと前号の投稿で書いた名古屋の脳卒中後遺症者のいきがいづくり NPO法人ドリームをご存知のこと。脳卒中の当事者がマスター、ママを務める喫茶ドリームに一度行ってみたいと思っていましたとうれしいお言葉をいただきました。

週が開けて、ドリームで「対人援助学会の大会で大阪に行ったら、脳卒中後遺症の方がヨミトリ君を見に来られて親しくお話ししました。お名刺いただいて来ました」と所長に見せると「存じ上げております」と！いろいろ繋がりがあってうれしくなりました。

大会の基調講演、ワークショップも新たに知ること、学ぶことが多く、今後の意思疎通支援の活動の大いな学びになりました。大会事務局の先生方、大阪キリスト教短大のボランティアの学生さん、たいへんお世話になりました。ありがとうございました。

追記。ヨミトリ君の岡田さんと衝撃の発見です。「他の人のポスター、布製のがありますね。」こっそりあちこち触ったりしてみて(触ってないで中身を拝見しろ)、布の種類もいろいろあることがわかりました。折れるしシワにならないみたいだし、うーん、次は布製か。学会は本当に学びが多いなー。

■対人援助学マガジン交流会

大会では学会の会員さんで心理カウンセラーのBさんと毎年お会いするのがとても楽しみです。意思疎通支援のお仕事もされているので、お話しするといつもヨミトリ君や指筆談の活動に良い気づきや助言をくださってとてもありがとうございます。

今回とても楽しみにしていた大会初日の最終プログラム「対人援助学マガジン執筆者＆読者＆未来の読者 情報交換会！」にBさんも参加され、同じテーブルになりました。同テーブルの他のご参加の方とも親しくお話しすることができたのですが、これもBさんが気さくでお話し上手なので、自然に会話が盛り上がったおかげでした。

「マガジン3ヶ月に1回ってけっこう早く締め切りが来るでしょう。書くことがなくて困るとかはないんですか。」とBさん。

「3ヶ月の間に本当にいろいろなことがあるので、毎回書きたいことはたくさんあるんです。その中からどれを書こうかなという感じで」

「そうなんですか」

「書きたいけど書けないこともあります。あ、これは次号に書こうと思っているのでここでも」と、友人Aさんのお母さんとの意思疎通のエピソードを少しお話ししてみました。よく聞こえない、見えないはずのお母さんが実はものすごくよく聞こえ、見えていたことに皆さんとても驚かれました。

ところで、当事者の方々の感覚がすごいと思うのは、実は他にもいろいろエピソードがあります。ある当事者の方は私のこともよくわかってくださいって、

「去年体調がとても悪い時がありましたよね。高木さんがつらいのが伝わってきてとても心配していました。今日久しぶりに会えてとても元気そうなので安心しました」

あるいは、この前話したことのその後を今日はお伝えしなくちゃと思って出向くと、先に当事者のかたの方から

「この前の話、その後何か進展があったような気がしますが。どうですか」と聞かれたり、会話の途中で言おうとしたことをそのまま先に「〇〇とか？」と良い意味でズバリ言い当てられたり。

マガジン交流会の場では具体的なことはあまりお話ししなかったのですが、

「そういう超常的といえるほど鋭敏、研ぎ澄まされた当事者の方々の感覚についてすごく感心することが最近多いので、寝たきりで意識があるかないかわからないという判断をされがちな当事者の方の中に、わかっているどころかそういうすごい感覚を持っておられる方が数多くいるということをもっとアピールできたらと思うのですが、でも読んでオカルトみたいと気味悪がられてもいけないし…。」と正直な気持ちをお伝えしてみました。

そうしたらBさんが、「なんで？そういう話、ぜひ聞きたいですよ。臨死体験とかそういう究極の場を経験した人のことも研究されていますよね。その遷延性意識障害というのは、心肺停止とかになって蘇生した人が今生きておられて、実はいろいろわかっていて思いを伝えようとされているんでしょう。そういう状態の人がするどい感覚を持っておられること、広く知ってもらって当事者の人達が認められるべきだと思いますよ」と言ってくださいました。

他の参加の方たちも、興味ありますと。

そして大会から戻り、また対話支援で当事者の方とお話しすると、ますますその感覚の鋭さを感じるようになり、そしてただ鋭いだけでなく、いつも大切な誰かを案じたり共に喜んだり、共感や温かい思いにあふれていることが、あらためてよくわかるようになりました。

これからは当事者の方々と更に多くの対話の機会を持って、そのお一人おひとりの内なる世界と尊厳ある人生を皆様に知っていただいて交流が進むよう、努力していきます。

Bさん、背中を押してくださりありがとうございました。

■指筆談は究極のリハビリ？！

ある時、当事者のCさんが言われました。

「高木さんに指筆談で介助してもらっている時、話すように自然に書いて、身体が動かないことを一瞬忘れる前に言つたことがあります、最近は、こうして会話していると、自分が書いている感覚とか高木さんの言葉に反応して自分の身体が動くとか、そういう手応えを感じるようになりました」

これは大きな気づきです。Cさんご本人にとってはもちろんですが、介助者である私にとってもたいへん重要な「証言」です。

Cさんの言葉を聞いて、Dさんことを思い出しました。

障害で手が上手く動かせない方のリハビリ器具として、スプリングバランサーというのがあります。細かいテンションを調節できるスプリングに腕を通して吊って浮かせることで、腕を動かす際の負担を軽減して動作をサポートするのですが、車いすに座つていくつかの動作ができるまでになった遷延性意識障害のDさんは、以前リハビリで腕の動きの制御の練習にこのバランサーを使用しておられました。車いすに座つてバランサーを装着し、車いすテーブルに置いた目の前の輪投げの棒に輪を通す練習でした。棒の先から少し低い位置でご家族が輪を手渡し、それを掴んで棒の先端の高さまで輪を持ち上げ輪を棒にかける訓練です。Dさんは自力では輪を持ち上げることができませんが、バランサーを装着するとDさんの腕を上げようとする動作をバランサーが補助して棒の先端の高さまで負荷なく輪を持ち上げることができます。驚くことに、これを繰り返すと、その後はバランサーを外しても自力で腕を上げて輪を通すことができたのです。それは1度だけ、上手くいっても2度、自力でできる時があったかそのぐらいの短い時間ですが、超短期の脳の記憶かと立ち会っていた専門家は言われましたが、瞬間的ながら身体が動作を覚えていて再現できたように見えたことがありました。

Cさんと指筆談で対話してCさんが自然に書ける手応えを感じた時に、タイミング良く私がCさんの指

先から介助の手を離すことができたら、バランサーを外しても腕を上げることができたDさんのように、もしかしたら瞬間にでもCさんは指を自分で動かせるのではないだろうか。もし指が動いたら、それは発症前に自然に書いていた動きを指筆談でCさんの身体は思い出し、それを覚えて、介助なしで再現できることになります。成功すれば指筆談は遷延性意識障害の思いの表出を手助けする手段としてだけでなく、自力で書くという動作を促す究極のリハビリになります！ということは、指筆談のメカニズムの一要素である接触圧センシングによるデバイス、負荷なく操作できるヨミトリ君でも同様の効果が得られると考えられます。そうです、事実、指筆談でしばらく書いた後は、書く前よりヨミトリ君の操作がスムーズにできるという結果が以前出たことがありました。検証と言えるほどの実験をしていませんが、ヨミトリ君はディスプレイにどのぐらい押せたかの数値が出るので比較は有効です。

こうなると、対話支援をお勧めする際にも、日頃出せない思いをご自分で書いて言葉で伝えることができ、励みや癒しになりますという点に加え、自然に話すように書けることを繰り返すことで身体が実際にその動きを思い出し記憶して、再現することができるようになる、かもしれません、とアピールすることができます。事実、目視では確認できないマイクロムーブでも、当事者Cさんご自身は身体が動いていることを自ら感じられたのですから。

当事者の方と検証実験をやりたいな。できるだけたくさん。ご家族の皆様どうかご協力よろしくお願ひ致します！

また、別の出来事ですが、当事者Dさんは聴覚がとても鋭敏で、これまで周囲のほんの微かな音に驚いて身体がビクッと反応する時があったのですが、先日指筆談での会話中に私が言ったことにハーツともものすごく大きく息を吐かれたがありました。そして「今は、高木さんのお話を聞いてとても驚いて、思わずすごく大きなため息みたいになりました」と説明してくださいました。遷延性意識障害で身体が動かない方々は、可笑しくて笑っているつもりなのに表情筋はピクリともしない、悲しくて、うれしくて泣いているのに涙が一滴も出ない等、本当に様々なもどかしい思いをされています。Dさんは、多分私の失敗談か何かにあきれる程驚かれたということだったと思うのですが、物理的な音とかではなく、人の話の内容に反応して相応の身体の動きが出るというのは、Cさん同様、とても良い兆しだと思いました。

対話支援と名付けている活動ですが、本当に私自身の気づき、学びが多いです。できる限り続けていきたいです。

■来年も楽しみです

このマガジン63号が公開される頃は、毎年開催される愛知県内の市のボランティア団体と市民の交流イベントや活動発表展に参加して、ヨミトリ君の展示・紹介をしています。学会の年次大会が10月の半ばでしたが、その時ご紹介したヨミトリ君には既にしっかり改良が施され、今はまたすごいことになっています。

ヨミトリ君でAI作曲ができる体験はクリエイティブに楽しみながら自然に「はい」「いいえ」の押し分けの練習ができるとあって、当事者の方々に大好評。ご家族にも音楽の披露があり楽しいと言っていただいている。「留まるところを知らないヨミトリ君の進化」はもはや定型句になっていますが、なにやらス

一ぱーヨミトリ君なるものの噂も流れてきて、一体ヨミトリ君はどうなるのか、どこまでいくのか。ヨミトリ君から絶対目が離せません。

対話支援のご依頼や東海地区遷延性意識障害者と家族の会「ひまわり」の新規会員さんで在宅介護をご希望されている方の、先輩会員さん宅の見学コーディネート等、新たな繋がりが生まれ交流や情報交換の場が育まれる機会のお手伝いはとても勉強になり、そして大きな喜びがあります。

3月には遷延性意識障害当事者のEさんの音楽発表会があります。今回は、ヨミトリ君を操作して電子ドラムの演奏をするという挑戦です。音楽教室の他の生徒さんとのコラボ演奏という企画も出ており、演奏はもちろんのこと衣装をどうするかでも盛り上がり、今からワクワクです。

前号の投稿タイトルにした「失業の危機？！」は、ありがたいことにほんの僅かな期間でした。指筆談のメカニズムに関する新たな研究テーマも芽生えつつあります。諸先生方のご指導を仰ぎつつ、遷延性意識障害・閉じ込め症候群の状態にある当事者の方々・ご家族と連携しながら、これからも実践と研究、そして啓発をがんばっていきたいと思います。

No Promises. Just Possibilities.

確約はないです。でも可能性は常にあります！

あなたがわかっていること伝えたい。

情報を必要としている方、表出しているのにまだ伝わっていないあなたの大切な方に、指筆談とヨミトリ君が届きますように。

ご一緒しましょ！

<https://www.goisshoshimasho.com/>

ヨミトリ君HP

<http://www.aizyoushien.com/index.php/yomitol-kun-project/>

東海地区遷延性意識障害者と家族の会「ひまわり」

<https://pvs-himawari.wepage.com/>

<筆者プロフィール>

インドネシア語・英語通訳・翻訳を経て、介助付きコミュニケーション「指筆談ヨミトリ」による意思疎通支援をライフワークとする。「ご一緒しましょ」代表。ヨミトリ君プロジェクト。東海地区遷延性意識障害者と家族の会「ひまわり」役員。第52回NHK障害福祉賞優秀賞。ヨミトリ君共同考案者。

備忘録～理事長の独り言③～

11月某日

10人くらいの仲間と、月一のペースで「フォーカシングの会」を開催しています。指導者や認定トレナーは不在ですが、書物やさまざまな研修会、講演会などで「フォーカシング」に触れた仲間が集まって、情報を交換したり、お互いにフォーカサーやリスナーになって、ペアでのフォーカシングの練習をしています。

フォーカシングは、人が誰でも意識せずにやっていることで、「フォーカサーが、“ある状況や事柄”について、自分自身の内側に注意を向けて、そこにある“もの（フェルトセンス）”とやり取りをしながら、なんらかの気づきを受け取る」というものです。そのことに気づいて「フォーカシング」と名付け、そのやり方を人々に教え始めたのは、カール・ロジャーズのもとで「カウンセリング」の研究と実践に励んだユージン・ジェンドリンでした。

フォーカシングは、一人でも（フォーカサー）出来るし、誰かに相手（リスナー・ガイド）をして貰ってペアになっても出来ます。

また、誰かに相手をして貰ってフォーカシングをする場合に、その“ある状況や事柄（プライベートな情報）”の詳細について、フォーカサーが話さなくてもフォーカシングが出来るというが特徴があります。それなので、ペアでフォーカシングをしているときに、すぐ傍でギャラリー（観察者）がフォーカシングの様子を観察することも、比較的容易です。

参加メンバーはほぼ固定してきているのですが、たまにメンバーが新しい方を連れてくることがあります。そういうときに私は、その方がフォーカシングのどんなところに関心があるのかをお聞きするようにしているのですが、今回新しく参加する方は、次のようにメールで教えてくれました。メンバーのM先生と同じ小学校で働いている若い先生です。

「M先生に、学級の子どもたちのことで相談している中で、“フォーカシングというもの”があることを知りました。内側のザワザワした気持ちに目を向けるというところに、興味を持ちました。

これまででは、子どもたちの行動にばかり注意が向いていたのですが、内側の、言葉にできないザワザワな感じにも注目することで、“なんか、うまくいかない・・”と困っている子どもへの手助けになるのではないかと考えました。

また、私自身、自己の中でモヤモヤしたことをM先生に聞いていただいて、モヤモヤの理由やこれから自分がすべきことに気づかされることがあります。

まず、私自身が、自己を理解できるようになるためにも、その術を学びたいと思っています。」

このメールを拝見して、当日お会いするのがとても楽しみになっています。

11月某日

分教室で、担任に反発して大暴れして、教室の机など破損させてしまった中1のエリさんです。学園の担当と分教室の教頭先生とでいろいろと調整をして、本児が職員と一緒に分教室に出向き、教頭先生と担任に「謝罪」する（セレモニー）ということで許してもらうことになったようです。

ところが本児は、「ゴメンはするけど、謝罪はしない！」と言い張って頑なな様子。本児にしてみれば、教室での担任の先生の教え方に不満があるみたいなのです。

大人の感覚だと「ゴメンすること＝謝罪すること」なのですが、本児の中では、はっきりと「ゴメン」と「謝罪」は違うようです。

私は、「この二つが、エリさんの中でどう違うのかを、エリさんに聞いて欲しいなあ・・」と思うのですが、今の私の立場では、直接担当職員にお願いすることが、ちょっと憚られてしまします。

どこかの国のトップにも、「どうして謝罪しないのか？」と聞いてみたい今日この頃です。

(了)



はじめに

“すみあそび”という自由な書の実践を通して、人が自分のままに表現できる場をつくってきた。その中で常に感じていたのは、書くという行為が単なる技術ではなく、身体・感覚・世界との関係性がむき出しになる現象だということだった。

最近になって現象学を体系的に読み進める中で、私が“なんとなく”直感していたことが、実はまさに現象学の核そのものだったということに気づいた。本稿では、これまでの実践から見えてきた「現象学としての書道」の独自性を整理するとともに、支援者・教育者にとっての意義をまとめたい。そして最後に、この探究をさらに学び合う場として、研究成果でもある新しい学びのAPW（Art Play Worker）養成講座1期の募集にも触れたい。

「上手さ」から離れる—エポケー（判断停止）としてのすみあそび

現象学の出発点は、フッサールのいう「エポケー」である。それは、“正しい／間違っている”“上手い／下手”など、文化や価値観による判断をいったん横に置き、現象そのものに立ち返る態度だ。すみあそびで「上手く書かなくていい」「筆に任せてみる」と伝えるのは、まさにエポケーである。参加者はそこで初めて、自分の身体の癖や、線を引くときの躊躇い、筆の重さや紙の抵抗を“あるがまま”に感じができる。評価を脇に置くと、「書くとは何か？」という問い合わせ、身体の内側から自然に立ち上がってくる。この姿勢は、対人援助における“相手をラベルや枠から解放して見る”こととも直結している。

書く身体が先に世界を感じる——メルロ＝ポンティと身體現象学

メルロ＝ポンティは、「身体は世界を知る主体である」と述べた。私たちは頭で考える前に、身体で世界を感じ取り、その感覚を通して意味が立ち上がる。書の実践で起こることもこれと同じだ。

- ・筆が紙に触れる瞬間、手が“勝手に導かれる”感覚
- ・墨の重さ、湿度、紙の繊維が動きを形づく
- ・意図より先に、身体が道具に応答してしまう
- ・書いているのか、書かされているのか曖昧になる瞬間

これは身体現象学の核心にある「知覚と行為の統合」であり、書が“思考の産物”ではなく“身体による世界との対話”であることを示している。先日参加してきた古武術やホースセラピーで体験した“脱力”と“混ざり合う存在感”は、書にもそのまま流れ込んでいる。力で制御しようとすると関係性は硬くなり、脱力すると相手（紙・筆・世界）との応答が豊かになる。この感覚は、支援者が相手と対峙するのではなく“共に立つ”姿勢にも通じている。

書—経験が人をひらく変容のプロセス

現象として現象学において「経験」とは、ただ何かを感じることではなく、世界の意味づけそのものが変わる出来事である。すみあそびの場で起こる変容は、その典型である。

書く瞬間、人は「自分が書いている」のか「世界が書かせている」のか、その境界が曖昧になる。この曖昧さの中で、身体は“意味を生む場所”として働き出す。メルロ＝ポンティの言う「生きられた身体（le corps propre）」が、意識と世界のあいだで振動し、その揺らぎのなかで新たな自己理解が芽生える。線を引く手のためらい、にじみ、震え。それらは単なる筆致ではなく、**自己と世界との関係の痕跡**である。ある人はそれを「わたしの中の“いま”が可視化された気がする」と言う。その瞬間、世界の見え方がわずかに書き換わり、“わたし”と“世界”的間にあたたかなつながりが生まれる。現象学的にいえば、そこには“志向性”が働いている。

つまり、書くという行為が世界へと開かれ、同時に世界から呼びかけられている。

この出来事は、対人援助の本質にも重なる。援助とは“相手を変えること”ではなく、“世界との関係の取り戻しをそっと支えること”だからだ。すみあそびはその原型を内に秘めている。筆を通して、わたしとあなた、身体と世界、見る者と見られる者が共鳴する——それはまさに「間主観性（intersubjectivity）」の現場である。

この探究を、学びの場へ—ArtPlayWorker Basic 1期募集について

こうして見えてきたのは、書を通じた経験の中に、**支援と教育の新しいかたち**が潜んでいるということだった。現象学としての書道は、アートの領域にとどまらず、“在り方を支える実践哲学”でもある。人は評価から解き放たれると、驚くほど自然に自分のリズムで世界と関わりはじめる。身体が世界を感じる力は、誰の中にも眠っている。その力が目覚めると、援助は“方法”から“関係の生成”へと変わる。そこに、学びと癒しと創造が同時に立ち上がるのだ。

この思想を、現場の実践として共有していくために立ち上げたのが**Art Play Worker (APW) 養成講座**である。すみあそび、現象学、身体性、対人援助の知恵を統合し、「人が本来もつ創造性と尊厳が立ち上がる場をつくれる人」を育てていくことへの挑戦もある。

理論を“知る”ではなく、“生きる”ための学び。現象学としての書の探究を、自分の現場での“生きた体験”として実装していきたい方、一緒にこの領域横断の深い学びを追求していきたい方、ぜひ共に探求していきたい。

朱紅icco (櫻井育子) | 生涯発達支援塾TANE・書と生き方研究所代表

宮城県在住、1979年生まれ。水瓶座。書家・美術家。認知発達の視点からアートと生き方を統合する

「朱紅・書と生き方研究所」運営。既存の枠を外し続ける「フリーランス教育者」のオンラインサークル「はみだすラボ」を現在拡張中。Art Play Worker養成講座BASIC、第1期は1月開始（募集中）

コソダテノシンリ（11）

中谷陽輔

連載第11回目です。前回、連載二桁回に到達し、今回は11回目のゾロ目回ということで、勝手ながら、なんだかめでたい感じがしています。次にそんな感じがするのは、15回目とか20回目、22回目あたりかな…そう考えると、余計にレア感があります。

さて、そんな今回は、コソダテにおける「余裕」について書いてみたいと思います。このテーマについては、逆になぜこれまで書かなかったのだろうと思えるくらい、コソダテにおける重要かつ、とてもよく語られるテーマだと思います。

[第4回目](#)の「睡眠」、[第5回目](#)の「コントロール」とも関わりますし、現代的には、[前回](#)まで4回連續で述べていた「スマホ・タブレット」にも少し関連しそうなテーマだな、と構想を思い浮かべながら考えています。

ということで、今回は、コソダテにおける「余裕」とは何を指し、そしてなぜ大切なのか、といった観点について、ゆるっと考え始めてみたいと思います。

コソダテにおいて、「余裕」は少しずつ、確実に失われていく

子育ての現場でよく聞く言葉に「余裕がないくて…」というものがあります。本当は、もっと落ち着いて関わりたいのに、朝の支度でついバタバタして、子どもの一言にイライラしてしまう。心のどこかでは「こんな言い方したくなかった」と思いながらも、気持ちに追いつけない。

そんなとき、親が失っているのは…そう、「余裕(ゆとり)」です。

そんな「余裕」って、「ある」ときは気づきにくく、「ない」ときに一気に存在感を主張てくるものだったりもします。電気・水道・Wi-Fi みたいな生活インフラと似ているようにも感じられます。普段は「あるのが当たり前」だけれど、停電した瞬間に「どれだけ支えられていたか」を痛感する…あの感じに似ています。

私自身、コソダテ前は、何かと仕事やらプライベートやらで忙しくしていたつもりでした。しかし、コソダテが始まった後で、「余裕」の在り方は、大きく質が変わりました。その変容っぷりには、正直、コソダテ前には、到底想像がつきませんでした。わかりやすいのは、[第4回目](#)で語った「睡眠」でしょうか。自分以外の生命体に、ゴリゴリ自分の「余裕」が奪われていくという体験…そして、そのどうしようもなさ。無力感…コソダテにある程度向き合った方には、想像に難くないと思います。

コソダテに関する研究においては、親が日々直面する「日常的ストレス(everyday hassles)」が、親の心身の健康や子どもの発達にじわじわ影響することが繰り返し示されています(cf., Crnic & Low, 2002; Ribas, et al., 2024)。

それら一つ一つは、コソダテにおける「大事件」、というわけでは決してありません。「朝の支度がスムーズに進まない」「子どもが寝ない」「学校・保育園からの連絡が山積み」…といった小さな負担が、休む間もなく積み重なると、親のエネルギーと注意力を削っていくのです。

コソダテにおける「余裕」を紐解いてみる

最近、親のバーンアウト(parental burnout)に関する研究では、「親としての要求」(育児負担・役割など)と、それに対処するために「利用可能な資源」(サポート・休息・お金・自己効力感など)のバランスが崩れ、「要求 > 資源」の状態が慢性的に継続すると、バーンアウトに陥るとされています(Mikolajczak et al., 2019)。

つまり、心理学的に言い換えると、コソダテにおける「余裕」の有無とは、コソダテにおける「要求(demands)」と「資源(resources)」のバランスの問題、と考えられます。

そして「要求 < 資源」という状態が安定していること、コソダテにおける「資源」が十分にある状態、そういうものを日常語では「余裕」と呼んでいる、と言っても差し支えなさそうです。

ただ、コソダテは本質的に「要求」の高い仕事といえます。人は一人では生きていけない、とはよく言ったもので、現代においても、一人の子どもが大人になるまで存命し、健やかに育つということ自体、決して当たり前ではありませんし、必ずや、複数の第三者の関わりが必要になります。このことは、コソダテノシンリとしても繰り返し述べてきたことでもあります。

かたや、コソダテにおける「資源(余裕)」の解像度をもう少しあげてみたいと思います。

…パツと思いつくだけでも、コソダテにおいて失われがちな「余裕」には3種類くらいあると考えられます。具体的には、「時間的・身体的な余裕」「心理的・情緒的な余裕」「対人関係・つながりの余裕」の3つです。

まず分かり易いのは「時間的・身体的な余裕」です。たとえば、予定や家事で埋め尽くされていない、“ぼーっとできる時間”“自分がやりたいことに専念できる時間”というのは、コソダテをしているとなかなか確保できないことは周知の通りです。さらにいえば、睡眠・休息、雑務を処理するまとまった時間、そして1人でゆっくり食事をとったりトイレに行ける時間すらも、子どもが小さければ小さいほど、とりにくくなります。

次に、「心理的・情緒的な余裕」。イライラや不安・焦りで頭がいっぱいではなく、「ちょっと待とう」「まあいいか」と、自分の感情を少し引いてとらえられる程度の心のスペースの有無です。ここにはストレス対処スキル、感情調整スキルや、最近注目されている、セルフ・コンパッション(self-compassion; Neff, 2003)という、自分への思いやりも含まれると言えます。

最後に、「対人関係やつながりの余裕」。パートナーや家族・友人・専門職とのつながりなど「困ったときに頼れる人がいる」という感覚、コソダテをひとりで抱え込まず気持ちを分かち合える存在がいるという感覚です。古典的なストレス研究からも、物理的・具体的なソーシャル・サポートの量よりも、当事者が知覚しているソーシャル・サポートがストレス緩衝効果は大きいとされています(Cohen & Wills, 1985)。親子関係そのものの温かさや安心感もここに入れてもいいかもしれません。

つまり「余裕」の有無は、これらの要素が複雑に絡み合った結果として体感されるものであるとともに、これらの「資源」があることで、同じ「要求」でも負担の感じ方は大いに変わりえるのです。

子育てインフラとしての「親の余裕」

ここまで見てきたように、親のバーンアウトに関する研究によると、親が燃え尽きるのは、「要求」が高く、「資源」が少ない状態が続くときです。そして親がバーンアウトに陥ったときの中核的な症状は、研究間でほぼ共通しています(Mikolajczak & Roskam, 2020)。

- ・ 極度の疲弊感(もうヘトヘトで限界だという感覚)
- ・ 子どもからの情緒的な距離(かわいいより「うっとおしい」が勝ってしまう)
- ・ 親としての有能感の喪失(「親としてやっていけない」「有能な親ではない」という感覚)

ここでいうバーンアウト状態は、単なる「疲れている」ではなく、「もう限界、親として関わり続けたくない」というレベルの枯渇です。

そして、このような親のバーンアウトが高いほど、子どもへの暴力(暴言・体罰)、ネグレクト(関わらない・世話をしない)、子どもの情緒・行動のディスレギュレーション(感情が荒れやすい／行動が乱れやすい)などのリスクを大いに高めることが報告されています(Mikolajczak et al., 2018)。

つまり「要求がずっと高いのに、それを支える資源が足りない」という状態が続くと、親はだんだん「枯渇モード」に入り、結果として子どもにとてもかなり危険な環境になり得る、というのが現在の知見です。ここまで来ると、「もっと頑張れ」「気持ちの持ちようだ」という精神論ではどうにもなりません。もはや「個人の努力不足」ではなく、健康問題・社会問題として扱うべきレベルのストレス状態です。このように、「親の余裕が削がれ続けた結果としてのバーンアウト」は、子どもへの虐待・情緒的混乱のリスクを押し上げてしまうため、親のバーンアウトの予

防は、コソダテにおける喫緊の課題だと言えます。

また、バーンアウトに至らないまでも、親の子育てストレスが高いほど、子どもの内在化問題（不安・抑うつ・引きこもりなど）、子どもの外在化問題（攻撃性・反抗・多動など）が増えるという相関関係が、過去の研究で繰り返し示されています(cf., Ribas et al., 2024)。

また、縦断研究（時間を追って同じ親子を追跡する研究）では、さらに踏み込んで、親のストレスが高いほど数年後の子どもの内在化・外在化症状が高くなる、という因果関係だけでなく、子どもの問題行動が増えるほど、その後の親のストレスもさらに高くなる、という逆の因果関係も示されています(Dijk et al., 2022; Stone et al., 2016)。いわば、親子相互にとつての「双方向の悪循環」が確認されているのです。

つまり、「親の余裕がない」というのは、親自身の主観的なしんどさで終わらず、時間をかけて子どもの行動・感情にもじわじわ波及してしまって、そのことで親の余裕がさらに失われてしまう…という、誰も望まない循環が繰り返されてしまうのです。

ここで重要なのは、「ストレスが高い親＝ダメな親」ではまったくないという点です。

むしろ、「それだけの“要求”にさらされながらも、今ある“資源”を最大限に使用しながら何とかやり続けている親」であることが多いと言えます。

ただ、結果として「余裕」が削られていくことで、結果的に子どもへの反応が硬くなったり不適切になったりして、悪循環が起こりやすくなる——という理解が妥当でしょう。

世界中の研究をまとめたメタ分析(Rusu & Candel, 2025)でも、子育てストレスが高い親ほど、抑うつ・不安・怒りなどのネガティブ感情が強く、生活満足感や幸福感が低くなりがちである一方、ストレスが低い親ほど主観的幸福感が高い、という関係が示されています。加えて、親の主観的な幸福感・生活満足度が高いほど、子ども側の主観的幸福感や情緒的な安定ともポジティブに結びつくことが報告されています。

このあたりを素直に読むと、「親が元気に、自分の人生をある程度良しと感じながら生きていること」自体が、子どもにとっての重要な保護要因であるといえそうです。親の余裕はまず親自身のために必要な“人権”ともいえますし、そのうえで、子どもを守る「インフラ」にもなるのです。

言い換えると、コソダテにおける親の余裕を守ることは、「親が楽でいいよね」という話ではなく、子どもを虐待や情緒的な混乱から守る“一次予防”として機能する、家庭のインフラ整備だと考えるのが妥当です。

「親の余裕＝子どもを守るインフラ」というのは、決して過言ではありません。むしろ、現時点のエビデンスともかなり筋が通っている、と言ってよさそうです。コソダテにおける「余裕」は“あるとよい”ではなく、“なくてはならない”家庭の基盤であるといえます。

…ここまで書いていて、「余裕が大事」と言われても、「そんなの分かってるけど、作れないから困ってるんだよ」問題』が各所から聞こえてくるような気がします。

ここから先は、「どうやってそのインフラ(余裕)を増やすか」「余裕を削る社会的要因をどう減らすか」という、より実践と制度設計の話になっていきます。

それこそ、日本のコソダテ事情において、常時、「要求 < 資源」であるというご家庭こそ稀なのかもしれません。コソダテのサポートが充実しており、休息も適切にとれており、経済的にも困窮しておらず、スキルも十分にある…なんて、夢のまた夢のように思えます。

だからこそ、コソダテノシンリとして、余裕を「意図的に作りだす」必要性があると断言しておきたいと思います。

そう断言できる根拠や方法については、調べ出すと色々ありましたが、すでに本稿が長くなってしまったので、次回に回したいと思います。

…「面白き こともなき世を面白く」と詠んだのは幕末の志士、高杉晋作でした。

コソダテを楽しめるように、そんな思いが残るくらいは「余裕」を残しておきたいものです。

【引用・参考文献】

Cohen, S., & Wills, T. A. (1985). Stress, social support, and the buffering hypothesis. *Psychological Bulletin*, 98(2), 310–357. https://www.academia.edu/12497943/Stress_social_support_and_the_buffering_hypothesis

Crnic, K., & Low, C. (2002). Everyday stresses and parenting. In M. H. Bornstein (Ed.), *Handbook of Parenting: Vol. 5 Practical Issues in Parenting* (2nd ed., pp. 243–267). Lawrence Erlbaum. https://www.researchgate.net/publication/232498354_Everyday_stresses_and_parenting

Mikolajczak, M., Brianda, M. E., Avalosse, H., & Roskam, I. (2018). Consequences of parental burnout: Its specific effect on child neglect and violence. *Child Abuse & Neglect*, 80, 134–145. <https://www.sciencedirect.com/science/article/abs/pii/S0145213418301297>

Mikolajczak, M., Gross, J. J., & Roskam, I. (2019). Parental burnout: W

hat is it, and why does it matter? Clinical Psychological Science, 7(6), 1319–1329. <https://www.researchgate.net/publication/332402868> Parental Burnout What Is It and Why Does It Matter

Mikolajczak, M., & Roskam, I. (2020). Parental burnout: Moving the focus from children to parents. Child Development Perspectives, 174, 7–13. <https://www.researchgate.net/publication/346322849> Parental burnout Moving the focus from children to parents

Neff, K. D. (2003). Self-compassion: An alternative conceptualization of a healthy attitude toward oneself. Self and Identity, 2(2), 85–101. <https://self-compassion.org/wp-content/uploads/publications/SCtheory/article.pdf>

Ribas, L. H., Montezano, B. B., Nieves, M., Kampmann, L. B., & Jansen, K. (2024). The role of parental stress on emotional and behavioral problems in offspring: A systematic review with meta-analysis. Jornal de Pediatria, 100(6), 565–585. <https://www.scielo.br/j/jped/a/mxf9wBPSLdhHcFy6Z5LFpQz/>

Rusu, P. P. et al. (2025). Parental stress and well-being: A meta-analysis. Clinical Child and Family Psychology Review, 28, 255–274. <https://link.springer.com/article/10.1007/s10567-025-00515-9>

Stone, L. L., Mares, S. H. W., Otten, R., Engels, R. C. M. E., & Janssens, J. M. A. M. (2016). The co-development of parenting stress and child hood internalizing and externalizing problems. Journal of Psychopathology and Behavioral Assessment, 38(1), 76–86. <https://link.springer.com/article/10.1007/s10862-015-9500-3>

Van Dijk, W., de Moor, M. H. M., Oosterman, M., Huizink, A. C., & Matvi enko-Sikar, K. (2022). Longitudinal relations between parenting stress and child internalizing and externalizing behaviors: Testing within-person changes, bidirectionality and mediating mechanisms. Frontiers in Behavioral Neuroscience, 16, 942363. <https://pmc.ncbi.nlm.nih.gov/articles/PMC9800797/>

Woine, A., Escobar, M. J., Panesso, C., Szczygiel, D., Mikolajczak, M., & Roskam, I. (2024). Parental burnout and child behavior: A preliminary analysis of mediating and moderating effects of positive parenting. *Children*, 11(3), 353. <https://www.mdpi.com/2227-9067/11/3/353>

<プロフィール>

児童福祉施設の相談員。資格は、公認心理師、社会福祉士、臨床発達心理士など。
大学院に進学後、研究者の道から方針転換して子ども福祉臨床の現場に飛び込み、
早10年強。現在、仕事でもプライベートでも、子育て＆子育て支援まみれの日々を送っている。
プライベートでの子育てやらをめぐる由無し事を、ブログに月数回、不定期投稿中。
(<https://childcare-support.hatenablog.jp/>)

教室の窓から

令和 7年
(2025年)1月
来須 真紀

あっという間に師走

あっという間に師走です。先生も走ってしまう12月。今回は、少し真面目に(いつも真面目ですが)学校の外でこどもたちがやってしまったことへの対応について書こうと思います。

「学校の外のこと」「学校の中のこと」

学校に勤めていると、教員は毎日毎日いろいろなことが起こり、授業研究、保護者対応、書類作成に追われる毎日を送ることになります。そんな慌ただしい放課後に一本の電話。

「お宅の小学生が地域で悪さしてます」

さあ、先生たちはどうするでしょう？

①仕事を中断して、現場に向かい必要であれば指導する。

②学校の教育活動以外の時間で起こったことなので、警察に連絡してもらうようにお願いする。

さあ、どちらでしょう？

正解は両方

電話の内容によります。大抵の場合は①ですが、緊急性が高い、ちょっと教員だけでは手に追えそうにないなんて時は②をおねがいすることもあります。

例えなどんな電話がかかってくる？

私が今まで経験したものとしては、

- ・公園で大騒ぎして困っている→公園まで行って「公共の場所である」ことを指導
- ・こどもがボールで遊んでいて、車に当たった→現場に行き、相手の連絡先を聞き、保護者に連絡。子どもにはその場で謝罪させる。
- ・万引きしました。→お店まで迎えに行き謝罪。保護者にも連絡しお店に来てもらうようにお願いした。
- ・商店街でシャンプーを泡立て遊び、商店街の通路を泡まみれにした。→現場に行き、一緒に掃除。

びっくりするようなことも起きる

子どもの発想と行動力には驚かされることも多く、苦情の中には「へえ、すごいな」と思うこともあります。先に述べた「商店街シャンプーまみれ」もその一つで、街中で配っていたサンプルを使って、最初はシャボン玉遊びをしていたのですがだんだん楽しくなってしまい泡を投げあってしまったそうです。また、山からどんぐりをたくさん拾ってきて、公園でどんぐりを投げあって遊び、公園をどんぐりだらけにしてしまったということもありました。子どもたちは楽しいことに貪欲で、大人が思いつかないような遊びをするのだなと思いました。

だれの責任?どこの責任?

学校では、しばしば「どこまでが学校の責任でどこからは地域や家庭の責任なのか」という話が上がります。特に校外での問題行動の指導を求められると「それは学校の責任じゃないよね」とか「それは家庭の責任よね」という声が聞かれがちです。特に働き方改革が叫ばれるようになってからは、「学校の範疇外のことは関わらない」というスタンスの学校も増えているように感じます。しかし文部科学省によると学校には「管理責任」と「指導責任」があり、校外の出来事に関しては「管理責任」はないが「指導責任」はあるとしており、指導していく責任はあるのですが…。

子どもの居場所

ある学校では、放課後子どもたちが地域で問題行動をたくさん起こし、教員は放課後の校外での指導にクタクタになっていました。そこで、子どもたちの放課後の遊び場所として校庭を解放しました。最初は、校庭を使うマナーやルールの指導に苦労したようでしたが、しばらくすると校外での問題行動が激減しました。校外で問題行動を起こしていた子どもたちが学校の校庭で遊ぶようになったからです。もちろんその子どもたちは校庭でもけんかをしたり、いたずらをしたり、マナーが守れなかったりしましたが、わざわざ校外の現場まで行かず校内で指導できること、タイムラグなしに指導できるようになったことで教員の負担は軽減されました。また、子どもたちも放課後の友だち同士でのトラブルを次の日に持ち越して学校でまたトラブルを起こすことが減り、学校の活動内でのトラブルも減ったそうです。しかし、この取り組みも時代が流れ、コロナ禍を経て「校庭を解放している時間の責任の所在が明らかではなく、学校が責任を負うには荷が重すぎる」という理由で取りやめになりました。しかたないことだとは思うのですが大人の事情で子どもたちの居場所がなくなっていくのは悲しいことです。

社会科の授業を対人援助学の視点から⑪

2025年11月 内田一樹

0.はじめに

前回は「応答責任」と「興味」「関心」という概念から東日本大震災の被災地である宮城県石巻市、及び福島県浜通りを訪れるスタディツアーデの学びについて考えた。

前回も書いたが、対人援助学・対人援助職・対人援助者につながる視点、「種」のようなものを植えることが高校社会科の授業ではできるのだと感じている。それは小学校や中学校とは違う高等学校の発達段階にある子どもたちだからこそできるものもある。小学校や中学校で学んできたことや自己のアイデンティティについて考える時期（進路やキャリアともかかわるかもしれない）だからこそ、子どもたちが見つけることが「種」があると思うのだ。そしてその「種」は大学・大学院での研究やフィールドワークによってより芽吹き、花を咲かせていいくのだろうと思う。では子どもたちが見つける「種」とは何か。そしてそのための「種」を見つけるために教員ができることは何なのかを考えていきたいと思う。それは「道徳」ではない。あくまでも社会科教育や高校での教科教育、あるいはホームルームでの活動とつながるものとして考えている。

今回は「東北」と「復興」を Subject-matter として考えていく。Subject-matter とは「主題」のことであるが、日本語では「教材」とも訳される言葉である。「東北」と「復興」を子どもたちにとってどのような「主題」として捉えていくべきか、そしてその結果子どもたちの学びにどのような意味があるのかを考えていく。

I. Subject-matter としての「東北」と「復興」

デューイは「思考の開始段階として、現実的な経験的状況が必要だ」としている。ここでの「経験」とは、「何事かをなぞり試みることと、そのお返しとして、その事が人に対して知覚できる程度に何事かを仕返すようにすること」である。¹この点において、被災地である宮城県石巻市や福島県浜通りへの訪問は自らが何かを「知ろう」とすることと、それに対して到来する被災地の光景があり、さらに言えば何事かを「聴こう」とすることと、それに対して「語ってもらうこと」という「経験」が起こっている。しかしここの「経験」は、既存の知識だけで対応しきれないような状況になる「経験」である。東日本大震災の「被災」と「復興」は「今なお進行中の、しかも不完全な状況」²ということができる。「事態が不確かな」「疑わしい」「問題となる」「進行中の」「不完全な状況」に対しては「思考」が生ずる。こうした思考に携わる「経験」を「第二次的経験」ともデューイは呼んでいる。³こうした状況に自分自身が参加したうえで、自分にとっての問題状況として受け止めることで、その問題状況を解決するための「思考」が生じるが、その「思考」とは、「探究 inquiring」の過程、「事態を調べる過程」、「調査の過程」である。その「思考」の展開は次の5つの特徴がある。①困惑・混乱・疑惑、②推測による仮説の設定、③焦点化すべきものを絞り込んだ観察や調査など、④こうした観察や調査などに基づく仮説の精緻化、⑤精緻化された仮説の検証作業である。しかし「確実性を前もって保証することはできない」という点において、「すべての思考は危険を伴う」。したがって「思考の結論は、事象によって確証されるまでは、多かれ少なかれ試験的ないし仮説的である」。しかも「被災」と「復興」の「事象によって確証されるまで」の期間

¹ デューイ,前掲書,p244

² デューイ,P235

³ 岩崎宏志「経験と思考」p272,『民主主義と教育の再創造』

は非常に長く、私たちはもう生きていなかもしれない（とりわけ放射性物質の汚染については半減期は人間の時間軸とは異なる）。

ここで当事者たちの語りによる「被災」や「復興」に関する「出来事の記憶」は、各生徒が「自分のものにする／領有」することは許されない。であれば、どのようにして「自分にとっての問題状況」として受け止めるのだろうかという疑問が生じる。生徒たちが「自分にとっての問題状況」として受け止めることができる理由として、ここでは2つの可能性が考えられる。1つは語り手と聴き手の間の関係性として、「ケア」の関係が成立している可能性である。もう一つは「当事者にはなり得ない」ということが「自分にとっての問題状況」として立ち現れて来る可能性ということである。

前者の「ケア」の関係についてである。ギリガンは、互いにケアし、ケアされる関係性を前提にするからこそ、「すべての人が他人から応えられ、受け入れられ、取り残されたり傷つけられる者はだれ一人存在しない」という理想像」に向けて、「ニーズに目を向け、それに応答する活動」⁴が重視されるとした。だからこそ、ノディングスはケアをする者（ケアの提供者）にとって「専心」と「動機づけの転移」がいかに重要であるかを説いた。「専心」とはケアされる者（ケアを提供される者）への開放的な選り好みすることのない受け入れの姿勢、これは先にあげた「ニーズ」を把握するために他者が伝えようとしていることを見聞きし、感じている完全な需要状態である。次に「動機づけの転移」とは「専心」の結果得た他者が伝えるものを受け取って、「他者の目的や課題を助けるように応答したい」と考えるようになる。他者の「ニーズ」に対する動機が、自己に転移するのだ。そして「自分たちが他者を助けるために何ができるのか」を考え始める。そして今度はケアする者に対してケアされる者がそのケアを「専心」によって受け取った時に、相互性のあるケアリングの関係が完成する。⁵こうした関係についてトロントもケアとは「必要を満たすものであり、だからこそ、常に関係的」⁶であることを前提としたうえで、その内実として4つの局面を提示している。①関心を向けること（Caring about）/②配慮すること（Caring for）/③ケアを提供すること（Caregiving）/④ケアを受け取ること（Care-receiving）の4つの局面である。これはそれぞれの局面の中で反省や見直しの契機が発生し、③、④の局面からでも①の局面に立ち戻ることもあり得る。⁷これを語り手として語る被災者の方、あるいはその傍に立って支援をしている方たちと、聴き手である高校生の関係に当てはめてみる。先述したように「苦痛の重荷」をともに背負ってほしいという、被害者、あるいは当事者である語り手たちの語りに 対して、聴き手の側が「記憶の分有」を通して語りの場をつくり、ともに背負おうすることは間違いなく「ケア」的な関係である。語り手の側も聴き手の様子に合わせて、話が理解できるように、あるいは学びを得られるように（「教訓」と語りを変える。「こんな遠くまできて」「わざわざ休みの日に勉強熱心だね」といった語り手の側の言葉や終了後の質問にどこまでも答え続けようとしてくださる語り手の側の姿勢は、聴き手としての高校生たちへの関心や配慮として向けられている。そして実際に自分たちの経験を語ることが学びたい高校生たちに対するケアを提供することとして行われ、高校生たちのリアクション、反応によってケアを受け取ることができているかを確認する。

2022年度に行った現地の方たち（中高生含む）と高校生たちの語り合いという人的交流の場に来ていたある石巻市議会議員さんは次のような言葉をおっしゃっていた。「俺はここに来るまで伝承とか何の意味がある

⁴ キャロル・ギリガン著,川本隆史・山辺恵理子・米典子訳『もうひとつの声で 心理学の理論とケアの倫理』p172-p174

⁵ ネル・ノディングス著,佐藤学監訳『学校におけるケアの挑戦 もう一つの教育を求めて』,ゆみる出版,2016年,p43-p45

⁶ ジョアン・トロント著,岡野八代訳・著『ケアするのは誰か?』白澤社,2021年,p25

⁷ ジョアン・トロント著,前掲書,p27-p29

んだって思ってた。自分の辛い体験なんて誰にも理解してもらえるわけがない。あれからあるのはずっと後悔だけだ。それでも今日若い子ども達が話している姿を見て、伝承にも少しは意味があるんじゃないかって思うようになった。これから若い世代が未来のことを考えるために」そして、その後に自身の体験を追ったドキュメンタリー番組の DVD を「たまたま録画したものをもらってかばんに入っていたから、よかったですこれ、子どもたちに見せてください」と引率である内田に手渡した(スタディツアー後に埼玉に帰つてから高校生たちと授業中に見た)。これは、語り合っている姿を見た議員さん(被災当事者)が、「誰にも理解してもらえるわけがない」と思っていた話を、「若い子ども達が話している姿」から DVD を渡すという形で伝えようとする姿がある。これは語り(=現地を訪れる高校生たちに対するケア)が確かに受けとつてもらえたという実感を得たからこそ、自身の大切な DVD を託すという次のケアが生まれているのだろう。2024 年度に訪れた雄勝花物語共同代表の徳水博志さんは年度末の文集に寄稿してくださったが、その中で次のような言葉を書かれている。「皆さんから送られてきた感想文の中の一つに、「自分事として考えるようになり、8月8日の宮崎県沖地震では、山口県の祖父の家で地震に遭遇したが、身を守る行動が身に付いてきました」という内容がありました。A さんです。A さんの感想文からは、地震の体験から自分事に落とし込んで、考え、行動することの大切さを、実感が込もった言葉で書かれていました。私の講和が少しは役に立つてもらえたようで、嬉しく思いました。」ここで徳水さんが書いている「自分事に落とし込んで」ということが、「自分の問題状況」として受け止めることだと考えられるが、その結果徳水さんは生徒たちに向けた語り(=高校生たちの学びに対するケア)が「少しは役に立つてもらえた」と受け取つてもらえた実感を持っている。

高校生たちは学んできたこと、「聴いた」ことに対して、ツアー後にお世話になった方たちへの手紙や zoom ハイブリッド形式での報告会を行う形で、応答をしている。その結果、ケアを受け取つてもらうことをより語り手である当事者の方たちは感じているのではないだろうか。一方で、聴き手である高校生の側はどうかというと、語りを聞くことが語り手にとってのケアとして作用しているならば、どのように聴こうか、ということが語り手への関心や配慮となり、そのうえで「聞く」ことがケアを提供することにつながる。そしてその「聞く」姿勢に対して、思わず多く時間いっぱい語ったり、「来年も来てね」といった言葉で歓迎して送り出したりされることが、自分達の姿勢(=目の前の語り手に対するケア)を受け取つてもらえたと実感することにつながる。この互いに語る-聴くという関係を通して、ケア関係が築かれている。「わたしたちはみな、ケアを提供する者であるだけではなく、わたしたちすべてが、誰でもケアを受け取るひと」⁸になっている。しかし高校生たちが受け取つたものの中には、その場で応答できなかつたものも多くある。そもそも「東日本大震災」の中で起こつたことを語る中で「誰かに語り伝えて欲しい」「二度と繰り返されてほしくない」などの伝えられる思い、語り手の「ニーズ」はその場で応答しきれるものではない。あるいは「復興」の中で今現在起つてゐる問題については、そもそもその「ニーズ」がどこにあるのかも分からぬ。そのため「動機づけの転移」があるからこそ「自分の問題状況」として受け止めているし、「専心」はスタディツアー後も続くからこそ、新たに考え始める、あるいは考え続けなければならなくなる。まさに「動機づけの転移を経験すると、人は考え始める。」⁹というノディングスの指摘の通りなのではないだろうか。

もう一つは「当事者にはなり得ない」ということが「自分にとっての問題状況」として立ち現れて来る可能性ということである。この点について、2022 年に参加した当時高校三年生の女子生徒がスタディツアー前に次のような言葉を感想の中で書き残していた。

⁸ ジョアン・トロント,前掲書,p31

⁹ ノディングス,前掲書『』 p44

「今私が考えていることは「共感と行動」のことだ。本当はいくら私が同じ気持ちを抱いたって、被災した方の思いというのは理解しえないのである。それが、説得力や寄りうことのリアルを生まないので、すごく悔しい。どの社会問題もそうである。当事者ではない自分がどう行動したら、どう変わるか。当事者になにを与えるのか。すごくもやもやしてしまう。私は大川小学校を実際に見て、話を聞いて、自分になにができるかを考えたい。それは石巻にいる間でも、帰ってきてからでもいい。」

語り手から聞くことを通して、語り手の辛い記憶や起こっている出来事の真の意味での「当事者になり得ない」ことは、生徒たちも気付く。それは想像を絶するようなことが起ったことや壮絶な体験を聞く中で気付く。東日本大震災で被災した宮城県東松島市（石巻市の隣町でもある）の中学校で生活継続方の実践を行っていた教師の制野が担当した2014年の当時中三の女子生徒、菜穂は次のように綴っている。

「やはりよく分からぬ。どれだけ考えても分からぬ。震災に限らず苦しさを味わった人を助けられないのがくやしい。同じ苦しさを知れないのがつらい。きれいごとばかり書いても意味がない。いくら話をきいても、その人の助けにはならない気がする。どれだけ自分ががんばろうと結局、他人事になってしまう。その人自身にはなれないから本当のつらさが分かってあげられない。」¹⁰

埼玉県の高校三年生の言葉と宮城県の中学生の言葉の間には重なる部分も多い。この中三の菜穂の言葉を受けて制野は次のように書いている。

「自分の中にある「非当事者性」に気づくことが、眞の共感への「根」になります。このどうしようもない「非当事者性」の自覚こそが、嘘のない仲間への共感につながっていくのです。」¹¹

「自分の中にある「非当事者性」の自覚」は、逆説的に自分が他者にはなり得ない、独自の〈わたし〉が何者であるのかを浮き彫りにする。

2. 共感とは-empathy/sympathy/compassion-

一般に「共感」は、脳のミラーニューロンの働きによるものと神経科学では認識されている。しかし古くから哲学や心理学、教育学などの研究領域からも議論されており、昨今「共感」の研究は学際的にも行われている。先述したノディングスは、ケアリングにおける「専心」の状態（「心を奪われている」という受動的な状態「reception」）から「共感」（自分自身を「相手の状況や立場へと感情移入する」という能動的な状態「投影（projection）」）を分離して考えていたが、最近の心理学の動向を受けて、自身のケア論の中に「共感（=empathy）」を含みこむことを言及している。¹²ノディングスの変化にも影響を与えたスロートは「共感（=empathy）」と「同情（=sympathy）」を分けている。口語的には「共感（=empathy）」＝「相手の痛みを感じること」、「同情（=sympathy）」＝「痛みを感じている相手を気の毒に思うこと」である。「共感＝empathy」においては相手が感じている感情が、あたかも相手の痛みが私たちに侵入してくるかのような、非自発的に呼び起こされることを指す。一方で「同情=sympathy」においては、痛みを感じている相手に対して哀れに思ったり気の毒に思ったりし、回復を願うことができる。しかし「同情=sympathy」は相手の痛みを感じる

¹⁰ 制野俊弘『命と向き合う教室』、ポプラ社、2016年、p160

¹¹ 同上、p161

¹² 河合美枝「ノディングスのケアリング論における「エンパシー」の検討－ホフマンとスロートのケア論を手がかりに－」『日本教育学会大會研究発表要項』81号、一般社団法人 日本教育学会、2022年、p13-p14

じること（「共感=empathy」）なして可能である。¹³そのうえで心理学者ホフマンの研究¹⁴も踏まえて、「真正な共感や成熟した共感(fully developed empathy)においては、共感する側の人間は、自分が相手とは異なる人間である、という感覚を維持している」¹⁵と説明する。

ここでもう一つ、*empathy* と *sympathy* と並ぶ言葉、*compassion* も参照しておきたい。それは *empathy* や *sympathy* と並んで「共感」を意味する言葉であり、前者同様に教育学、とりわけ社会科教育において導入されてきた概念であるからである。ヴェイユにとって、「共苦 compassion」とは他者のうちに自らの悲惨を認知することである。自らの悲惨を他者の不幸のうちに認知することである。」¹⁶と言及している。ヴェイユは「不幸」についての思想家であり、それを受け止める認識方法として「注意(attention)」を重視した。「注意(attention)」はその語源から「待ちのぞむ(attendre)」という動詞を語源とし、「目には見えずとも到来するものを願い求める不動の待機こそが、「注意」の核心」¹⁷である。その「注意」の先にあるのは、「あなたの苦しみは何ですか？(Quel est ton tourment?)」と語りかけたときから、彼らを縛る沈黙と不在性を共にしようとしている。「共苦(compassion)」の実践として。それも、自己を失うことなく他者の観点を引き受けたというような、常識的な共感の程度をはるかに凌駕する過剰さにおいて」¹⁸であり、「存在しないものからの沈黙の呼びかけ。それに応答するという受動=受苦の立場を出発点として思考すること」¹⁹である。こうした関係(構造)を捉えるためのヴェイユの「注意」は、池田によれば、「「当事者」の特殊性(つまり、当事者性)を損なうことなく、「当事者」ではない者が、それを理解し「共苦」するために必要とされる、臨床的なアプローチにとって欠かせないものの一つ」と指摘している。²⁰

ハリファックスは「compassion」を「共にいる力」であると定義づけている。「共感=empathy」との違いについて、語源の古代ギリシア語の「empatheia」（「in(内)」）と「pathos(情念)」）までさかのぼって、「共感=empathy」が「他者の内面を感じること(feeling into another)」であることに対し、「compassion」は「他者のために感じること(feeling for another)」であると区別している。²¹こうした「compassion」へとつなげる強力な3つの手段が、開かれていること(知ったつもりにならない)、苦しみと共に在ること(ありのままを見届ける)、心を込めて応えること(慈悲に満ちた行為)である。そして他者との間に「適切な境界」を設ける(利己的になることでも、相手を避けることでも、「他者化する」ことでもなく、私たちは苦しんでいるその人自身にはなれないと心に留めておくこと)ことで、共感疲労を防ぐことができると説明している。²²ヴェイユとハリ

¹³ マイケル・スロート著,早川正祐・松田一郎訳『ケアの倫理と共感』勁草書房,2021年,p20-p21

¹⁴ Martin L. Hoffman,Empathy and Moral Development:Implications for Caring and Justice,Cambridge:Cambridge University Press,2000(『共感と道徳性の発達心理学—思いやりと正義とのかかわり』菊池章夫・二宮克美訳、川島書店、2001年)

¹⁵ マイケル・スロート,前掲書,p23

¹⁶シモーヌ・ヴェイユ著,富原眞弓訳『カイエ 4』みすず書房,1992年,p166

¹⁷池田華子「厄災に臨む方法としての「注意」——「不幸」の思想家との対話」山名・,前掲書,P184

¹⁸池田華子,前掲書,p187

¹⁹池田華子,前掲書,p188

²⁰池田華子,前掲書,p192

²¹ ジョアン・ハリファックス著,一般社団法人マインドフルリーダーシップインスティテュート監訳,海野桂訳『Compassion 状況にのみこまれずに、本当に必要な変容を導く「共にいる」力』英治出版,2021年,p118

²² ジョアン・ハリファックス,前掲書,p100-p101

ファックスの間では、「compassion」を感じる〈わたし〉の姿勢や在り方が異なっているが、共感から行為（共に苦しむ、あるいは心を込めて行為すること）への何らかのつながりがある点では共通しているだろう。

それでは、この「compassion」という言葉を日本ではどのように捉えられているのであろうか。「同情」「慈悲」「思いやり」のような意味も含む「compassion」を「共感共苦」と訳出したのは、フォルジュの『二十一世紀の子どもたちに アウシュヴィッツをいかに教えるか？』を訳出した高橋武智である。高橋によれば「この語はしばしば「同情」と訳されるが、パッションに「情念」と「受難」の意味があることに着目し」「共感共苦」と訳出した。²³

2001年に開かれた「新しい歴史教科書をつくる会」中学歴史・公民教科書の採択に反対の声を上げる目的で開かれた対話集会『〈コンパッション〉は可能か？——歴史認識と教科書問題を考える対話集会』の対話集会パンフレットの中で、この「compassion」についてさらに言及している。「〈コンパッション〉ということばを集会のタイトルとして使うことについては、外部からだけではなく、実行委員会の内部からもいくつかの批判や意見が寄せられました。「高みに立って憐れむ」ものではないか、大衆性がない等々です。「compassion」ということばには「憐れみ、同情」というニュアンスがあることは事実ですが、フォルジュ氏はこのことばを「他者の苦悩への想像力」という意味で用いています。このような意味を的確にあらわし、いきいきとした説得力をもって伝えることばをいまの日本語に見つけることができないのも、私たちが直面した現実でした。」²⁴この対話集会の中で、高橋哲哉は冒頭でこの集会のタイトルである「〈コンパッション〉は可能か？」という問い合わせについて、それが不可能であるという前提からしか出発できないのではないかとしつつ、この問い合わせが被害者の側から「私たち」に投げかけられているにもかかわらず、当時の日本社会の知識人の強まっている傾向として次のような議論を紹介している。「例えば、私はいま黄さん（黄錦周さん：日本軍によって「慰安婦」にさせられた被害者であるハルモニのことばをここで紹介しながら、それを自分たちとしてどう受け止めるかということを申し上げているわけですが、私たちは、被害者の訴えを聞いて、そして日本政府に対して被害者に償いをするように訴えかける責任があるのでないか、という議論をいたしますと、それは本来「代弁」・「代理」することのできない暴力の被害者に自己を一体化して、それを「代弁」できるかのように見せかけて、「正義の暴力」をふるう、そういう知識人の言説なんだ、その正義のロジックによって傷つけられる、問い合わせされることによって傷ついてしまう「加害者のほうの悼み」をあなた方は想像できないのか？」という議論があり、それは「加害者がみずからを被害者であるとして加害責任を相対化し、消し去ろうとする動き」だと喝破している。²⁵

当時大学院生としてこの集会に登壇していた須永陽子は同様に「〈コンパッション〉は可能か？」について、様々な本を読んできて、「他者の心をコピーする」ことができないということ、「知ることの困難さ」や「他者と自分の間の断絶の深さ」を感じ、「過去は過去、未来は未来でいこうというような「未来志向の友好」というスローガン」ではとても対応できないと発言している。しかし、そのうえで「やはり〈コンパッション〉に可能性があると思っているのは、（中略）、とても困難なことだけれども、他者の苦悩をわかるとすることが、その断絶をこえて新しい関係をつくり出すということだと思っているからです。負の遺産を克服し、積極的な可能性に転化することはたいへんなことですが、それは、「あなたの問題」ではなく、「私たちの問題」です。」と自身の経

²³ フォルジュ, ジャン=フランソワ著, 高橋武智訳『二十一世紀の子どもたちに、アウシュヴィッツをいかに教えるか？』作品社, 2000年

²⁴ 対話集会実行委員会編『〈コンパッション〉は可能か？——歴史認識と教科書問題を考える』影書房, 2002年, p5

²⁵ 対話集会実行委員会編, 前掲書, p18-p19

験をもとに言い切っている。²⁶ここで出てきている高橋哲哉の「本来「代弁」・「代理」することのできない暴力の被害者に自己を同一化して」という部分や須永陽子の「他者の心をコピーする」ことができないということ、「知ることの困難さ」や「他者と自分の間の断絶の深さ」という感覚と重なる。これは宮地尚子が提唱したサバイバルマップ「環状島」の尾根にある対人関係に吹き付ける〈風〉とも重なる。

支援者が自己を被害者に同一化させること、時に支援者が被害者を支配しようとする事もある。そして傍観者から支援者に対して降り注ぐ視線「被害者を扇動している」「被害者を操って自分の社会運動に利用している偽善者にすぎない」といった「偽善者非難」も起こる。²⁷その意味では高橋哲哉の言っている議論は〈風〉にあたるだろう。しかし「環状島は、トラウマ経験のもつ重みや連れられなさについても描こうとした。人間はある程度経験に縛られて存在するしかないが、それは「経験をしなければ何も分かることはがない」といった百パーセントの経験主義ではない。環状島は、声の出せない人、抹殺された人を想像しようとする。トラウマについて発話できる人は、発話できているのだからいたたかれた傷を負っていない、ということが言いたいのではない。カムアウトできるくらいならいたたかれた差別ではないと言いたいのでもない。声を出さない当事者はどこにいるかわからない。見えないもの、知らないことに想像を働かせるとき、そこには補助線が必要になる。そもそも想像自体が、見えないものに対する暴力となりうる。〈内海〉を想像するためには、声の出せる人や、その証言から補助線をひくことができる。そういう意味では、すべての証言は代弁で(も)ある。つまり、証言は証言そのものとして尊重され深く受け止められるべきであるとともに、より内側にいる犠牲者の代弁としても理解され深く受け止められるべきである。」²⁸とあるように「深く受け止められるべき」という姿勢は変わらない。

以上「共感」について empathy, sympathy, compassion という言葉から考えてきた。この 3 つの言葉で重なっているのは自己と他者の違いをまず前提にしているということだ。自分と相手は同一ではないからこそ「共感」することができるし、「共感」することによって相手と自分の違いがますます浮き彫りになる。そもそも経験した者にしか分からない、当事者にしか分からないということは出発点である。だからこそ「共感」することができるし、「共感」を原動力にさらなる「共感」へと広げていくことができる。先述した埼玉県(自由の森学園)の高校 3 年生の生徒も宮城県の中学生 3 年生の生徒も、「共感」ということを軸に「被災した方の思い」というのは理解しない。「同じ苦しさを知れないのがつらい。」という感覚になる。だからこそ「いくら話をきいても、その人の助けにはならない気がする。どれだけ自分ががんばろうと結局、他人事になってしまう。その人自身にはなれないから本当のつらさが分かってあげられない。」という気づきや、「私は大川小学校を実際に見て、話を聞いて、自分になにができるかを考えだしたい。それは石巻にいる間でも、帰ってきてからでもいい。」という思いにつながる。この二人の違いは被災地からの距離の違いかもしれない。しかし制野が「真の共感につながる」と背中を押したように生徒の「非当事者性への気づき」そしてそのことへの「くやしさ」を認めて、それでも向き合い続ける姿勢を支え続けることで、「考えだしたい」という考え方続ける生徒の姿勢にもつながっているのではないか。なぜならば須永が言ったように他者と自己との違い(当事者/非当事者の違い)の自覚を出発点に下「あなたの問題」ではなく、「私たちの問題」という引き受け方が存在するからだ²⁹。

²⁶ 対話集会実行委員会編,前掲書,p75

²⁷ 宮地尚子,前掲書,p30-p31

²⁸ 宮地尚子,前掲書,p214

²⁹ この「私たちの問題」という引き受け方について、「当事者」という観点から以下 3 つの考え方を紹介しておく。諏訪清二は災害多発国日本においては「被災者」、「被災地」に対して被災地の外に住んでいる人たちも未だ災害にあっていないという観点から、「未災地」「未災者」という言葉で呼ぶことを提言している。(諏訪「学校で災害を語り継ぐこと—〈戸惑い〉と向き合う教育の可能性」山名・矢

2022年度の石巻スタディツアーリに参加した別の生徒は次のように感想を書いていた。

「悲しみを“共有”することはできないけれど、緩やかに繋がりながら共に抱えていくことができるんじゃないかと思う。私が石巻に行って、教えてもらったことは向き合い続けること。変わることのない、失うことの悲しみと変わり続ける(復興していく)街の景色。どんどんかけ離れていくものを抱え続ける、見続ける。そうすることしかできない。それは強さなのかもしれないし、優しさなのかもしれないし、そんな綺麗な言葉では表わすことができないこともたくさんあったと思う。そういう意味でのリアルを知ることができた。それでもうひとつ心に留めておきたいのは、石巻の人々が私たちに語ってくれたという事実。知ろう、と外から来た人を受け入れ、思いを伝えてくれた。決して簡単なことではないはずで、語ってくれたことの意味を私たちは考え続けなくてはいけないと思う。…(中略)…3日間を経て今の私にできること。正直問われると、考え込んでしまう。行ってみないと分からなかったこと、行ってみても分からなかったこと、どちらもあった。「どうしようもできない」ことにもたくさん触れた。まずその無力感や矛盾に向き合う必要があると思う。その先で自分にできること、したいことは何か。スタディツアーフラから帰ってきて今からがスタートだと思う。できることが思い浮かばないのでない、なんというか、ひとつひとつの行動に自分自身で納得するまでが苦しい。石巻のことを忘れないでいること。終わらない復興に関わり続ける。Reraさんは復興支援の予算は減っていくし、現地に来るボランティアの数も減っていくとおっしゃっていた。自分が感じたことを自分の言葉で語ること。語り部をして下さった方は息子さんを津波で亡くしていて、「母親としてしか語ることができない」と言っていた。人はみんな、自分としてしか語ることはできないと思う。だからこそ、自分の言葉を大切にしたい。語ることが全てではなくて。苦しんでいる人に何も言わずにただ寄り添うことが今の私にできるだろうか。」

3. 主体の問題としての subject-matter

教材は文字通り「主体(subject)」の「問題(matter)」でなければならない。³⁰「探究のテーマ」である教材は、子どもとともににつくられるものであり、教師も教材をつくることにおいて探究者となる。教材は「学びの場」をどうするのかという問題である。こうした「学びの場」は「探究と創造、知的発見のよろこびが、たんに教員のみによってではなく、教員と生徒によって、ともに経験される」³¹ものもあるだろう。ただし教育者(=教師)の方は教材に熟知している分、教材に対する生徒の態度や反応、そして現在の能力や教材との作用と反作用(相互作用)に専心しなければならない。³²学習者にとっては「経験の中で教材が発達する過程」が重視される。そ

野,前掲書,p226) 石戸論は非当事者ではない立場ではなく「歴史の当事者」という立場からの語りを提案する。「未来に向けて何かをしたいと思うとき、狭い意味での「当事者」か否かという線引きは無効になる」(石戸論『リスクと生きる、死者と生きる』亜紀書房,2017年) 宮地尚子は「発話そのものに敬意を払うとともに、それでも語られずにいること、表現されえない何かが存在することを想像してみたい。そういう受け止め方や聞き方、たたずまい方を体得していきたい。このことさえ確認できれば、もはや当事者であるかそうでないかの区別など、どうでもいいことと言えるのかもしれない。さらに引き延ばすならば、当事者からいちばん遠い人を想像すること、いちばん遠い人を悼み、愛し、つながろうとすることが、逆説的に〈内海〉にいちばん近く深く寄り添うことになるのかもしれない。」と結んでいる。(宮地,前掲書,p214-p215)

³⁰ 山上裕子「14章 教材の本質」p281

³¹ 里見実「見えないものを見る力 社会を読む」『ひと』太郎次郎社,1972年

³² デューイ,前掲書,p289

れは教育者が教材に熟知している場合に成就された知識によって正確に定義し、論理的に相互に関係づけられることができるが、逆に学習者である子どもたち（＝初学者）にとっては経験が組織化されておらず、流動的で偏っているものを個人的な仕事として結合していく。この「過程」を山上は「いかに為すべきかという知識から、経験以外の情報を得て、それまでの知識に意味をもたらし、知識は拡大され、論理的に組織されていく。学習者自身の経験の中に教科内容は組み込まれ、経験の意味として組織化されていく」³³と表現した。一方で「教材」には社会的情況下でつくられているという意味で、社会的なものとしての側面もある。「社会的責任を認める教育課程は、共同生活の諸問題に關係のある問題を含み、社会的洞察力や社会的関心を発達させるのに適した観察や情報が行われるような情況を提供しなければならない」³⁴とデューイは指摘している。

以上みてきたように、「東北と復興」の学びにおいては、「東北」と「復興」をデューイの言っている「教材=subject-matter」としている。「東北」については、中央と地方の関係という歴史や構造的なこと、そして東日本大震災を扱っている。地震予知研究者の今村明恒が1929年創刊の雑誌『地震』の発刊の辞に寄せたように、地震が「自然現象」であり、災害が「人間の文化を前提」としている「人為的現象」³⁵であるならば、「東北」と呼ばれる場所がどこにあって、どのような歴史をたどっていて、どのような構造があるのか、どのような暮らしがあるのかを知識的に知ることで、実際に被災地を訪れるスタディツアーでの生徒たちの経験を意味づけると同時に、一方で新たに問い合わせられる。「復興」についても同様に、実際に被災地で何が起こっているのかを語りや景色を見ることで経験することで、さらに新たな問い合わせや考えに直面する。東日本大震災の被災の伝承に関わる震災遺構や伝えられ方も通して、子どもたちは新しい発見をする。1956年広島を訪れた、哲学者のギュンター・アンダースは第二次世界大戦後の広島の町を見て、「復興は破壊の破壊である」と言った。これは「復興」によって「破壊」が破壊されたということであり、したがってアンダースは「破壊の極致」とまで言い切っている。「実際、わたしには、ここで起きたことを思い出させてくれるものは、なにひとつ見当たらない。目に見えるものの、すなわち新しく建った家、それは、ちょうど新聞や日常生活の話題がそうするように、過去にあったことを抹殺してしまう。すべてのものが、『時間と無関係』である、つまり、はじめからそこにそうして立っているかのような顔をしている。現在あるものは、『前からずっとそうであった』ような仮面をかぶっている。そして、この仮面をかぶった現在が、ほんものの過去を覆いかくしてしまう。歴史は、過去の方向に改ざんされている。しかも（復興も、けっきょくは歴史なのだから）歴史自身の手によって。歴史——それは、歴史の自己かいざんの歴史である。」³⁶アンダースの考えには広島の原爆被害（爆心地やその結果の町の光景）をそのまま遺構として残すことによって人類に警告をもたらすことを目的としていた。だからこそ「復興」によって「破壊の破壊」がなされたと考えた。もちろんこれは広島で暮らしている人たちの事情とは別の視点からだろう。合わせてもう一つ、震災後かさ上げされた陸前高田市での復興工事、およびその過程で出会った人をモデルに瀬尾夏美が書いた『二重のまち』という作品がある。この『二重のまち』は「広島の物語ですかね？」と尋ねられることも多いという。瀬尾が広島を訪れた際のあるおじいさんとの会話は震災からの「復興」と戦争からの「復興」と重なる部分が多く象徴的である。「おじいさんは、『わしが見て欲しいものはひとつなんよ』と言って、私を追悼平和祈念館の地下まで連れていった。そして、『これじゃ』と指さしたのは、背の高い地層の標本だった。『平和公園はきれいでええですねえなんて言われるけどな、ここにはまちがあったんよ』。おじいさんが『わかるか？』という風にこちらを見てくるので、私は目の前の標本をじっと見てみるしかない。『この公園はな、1メートルくらい嵩上げしてあるん

³³ 山上裕子,前掲書,p282

³⁴ デューイ,前掲書,p303

³⁵ 今村明恒「発刊の辭」震災予防評議会編『地震』第1巻第1号,p1-p3

³⁶ ギュンター・アンダース著,篠原正暎訳『橋の上の男』朝日新聞社,1960年,p79

よ。ほら、この上までは後から被せた土で、こっちがもとの地面。だから、この間に挟まっているのは焼かれた日用品じゃ。みんなそのまま埋めてしまったんじゃねえ』。彼は愛おしそうにその部分を指でなぞりながら、『何にもなかったと思われるのが一番悲しい』とつぶやいた。ここにはまちがあって暮らしがあって、色も音もあって、しかもそれは辛い記憶だけではなかったのだから。』³⁷

2022年度、講座を開いた最初の年に訪れたある生徒は次のように石巻市スタディツアーの感想を綴った。

私たちは九月十七日～九月十九日まで、フィールドワークで石巻を行った。私が石巻に行き、最初に驚いたのは、海が高台に登らないと見えないということ。高台に登るまで本当に海が近くにあるのか分からなかつた。街は何もかもが新しく、古い建物といえば震災遺構の建物ぐらいだった。昔からあった街ではなく、新しい街と言う方がしっくりくる。本当にここまで津波が来たのだなど実感した。

ずっと心に残っていることは、今も現地に住んでいる方に、「私は震災遺構(門脇小学校)をみたくない」と言われた事だ。現地に住んでいる人はほぼ毎日見るだろうし、それを見て辛いと思うなら「撤去するべきなのかな」という気持ちもある。しかし、私は震災遺構がないと「本当に被害があったの?」と思ってしまうだろう。写真だけでも理解できるが、実物が無いと実感が湧かない。震災遺構を残したい人と残したくない人、現地の方も色々な意見があるだろう。この問題は「復興」を考える上で重大であると思った。大川小学校は在学していた生徒が残して欲しいという事で震災遺構になった。この場合、住民の反対はあったのだろうか。反対派は言いづらいだろうなどと思う。この疑問が私の中でずっと残っている。

「復興」が進んだ町、建物や道路が新しくなり、「新しい街」となった石巻市を訪れ、「震災遺構」がなぜ残ったのかを考える。「震災遺構」は誰のためのものなのか。この生徒の感想にはアンダースの論や瀬尾と広島のおじいさんとの邂逅とが重なる部分がある。一方で「震災遺構」が誰のものなのか、現地に住む人たちの生活にとってどのような意味があるのか、という観点は誰のための「復興」かという視点につながる。それは震災を伝承することも含めた「復興」なのかどうかという点において大事な視点であるが、一方で「反対派は言いづらいだろうな」という声を上げられない人への気遣いにも似た想像力がこの文章からは感じられる。「復興」と「震災遺構」をめぐる問いは多くの生徒の考えの中から出て来る。「復興」とはどうあるべきか、「震災遺構」がなければ学ぶことが出来なかつたかもしれない自分と一方でそれが現地の人たちの暮らしにとつてどうなのか。その問いに当事者不在でもなく当事者のみに委任するのではなく、〈わたし〉たちの問い合わせとして出て来る。

この講座のタイトルには「東北と復興」を探究するテーマとして掲げていると同時に、「東北と復興」「と〈わたし〉」という言葉が隠れている。それぞれの探究のテーマとしての subject-matter に〈わたし〉がどのように向き合っていくのかということだ。そこでは教員自身も少しだけ生徒よりも「東北と復興」について詳しい立場としてかかわるが、答えを知っているわけではない分、生徒とともに学習者としてかかわっている。³⁸一方で少しだけ詳しい分の余裕を、事前学習としての子どもたちの「東北と復興」を探究する姿勢や態度について向け、「中間点」にとどまれるような支えや声かけ、時に一時避難や経験に意味づけをしていく存在としてかかわることになる。そして「東北と復興」のスタディツアーでの経験を通して、埼玉から訪れた子どもたちや教員である〈わたし〉たちは新たに問い合わせられるのだ。その問い合わせを出発点に事後学習も深めていくことになる。

³⁷ 瀬尾夏美『二重のまち/交代地のうた』書肆侃侃房,p242-p243

³⁸ 繼続して参加する生徒の中には特定の分野、例えば「東北と復興」にかかわる行政や法、動物のことなどについて教員よりも詳しい生徒もいる。

4.「東北」と「復興」に関する生徒たちの気づき、問い合わせ

・一番感じた事は、「復興は終わっていない」と思った。どのように、後世に伝えていくのか、どのように町を作っていくのか、どのように事実を知るのか、どうしたら知れるのか、今も震災の影響で苦しんでいる人、悩みがある人、たくさんいる事を知る事ができた。一見、「きれいな町だな」とか、復興してあとかたもねーとか思うけど、その裏では、命がたくさん消えてしまった場所であり、忘れてはいけない場所もある、と感じた。門脇、大川それ
その小学校に行き、ここまで差があるのかと思った。命が助かって、都合のいい門脇は整備され、大川では、
市にとって、消したい存在であるから、雨ざらして、中にも入れない。どちらも震災を伝承していくうえで大切な
場所なのに、差があるのはおかしいし、その事に悲しんでいる人がいる事を忘れてはならないし、まだ、復興して
いないと、感じた。

・震災から11年経った石巻の復興には、問題が複雑に絡まっている印象を受ける。女川町の2015年の住民意識調査では、復興は順調に進んでいると思う人は72%、同時に、復興から取り残されている人が多いと思う人も75%だった。命が助かった学校と助からなかった学校、語り部さんの語り方には違いがあった。大川
小学校の語り部さんは、隣にできた記念館(伝承館?)を「中途半端」と言っていた。語り部さんの主觀を通した
評価だとは感じるから受け取り方に迷うけれど、それでも市や県が経験を繰り好んで伝承していくことはあって
はいけないと思う。なぜ助かったのか、もなぜ助からなかったのかも、どちらも同じくらい重要だと私は思う。海
を見えなくしてしまった防潮堤。誰を、何を守る防潮堤なのだろう。空が広く、風の気持ち良い石巻、家も道も全
部新しくて整然としていた。かつて海の周りに街が広がっていた。海と一緒に、人と人が繋がりながら暮らしてい
た場所だったはずだ。でも今、ここでコミュニケーションが圧倒的に減ってしまったのだろうということは、震災以
前を知らなくても分かった。街にあったものごとを過去にしてしまった震災が純粋に悔しい。

・次にこの復興という出来事に、被災者ではない自分が、どう向き合うべきなのか。この問題に、年明けから考えるようになった。でも東北と関東は距離もあるし、簡単につながる事ができないし、実際にこの学校で、被災地に行った人は、少数派だと思う。最初は、つながりがないと、復興に向き合う事は出来ないと思っていた。でも、つながる事だけが全てではないんじやないか。そう思うようになってきた。スタディツアーで沢山の現地の人
の声を聞いたが、全員に共通して言えた事は、僕達に知って、考えて欲しい。という願いだった。それを受け取つ
た僕達が、今度は、この学校のみんなに、現地の声を、届けて、知ってほしいと、願い、伝える側に回るべきなの
では、と考えた。この間接的ではあるが、誰かに伝えるという事は、ある意味、復興の手助けになると思う。被災
者の願いを拡散して、同じ事が起こった時、二度と同じ思いをしないように、考えていく事が、復興なのではな
いか。

・実際に足を運んで見たものは、映像で見る時とは違う迫力があったし肌で感じれるものがあった。風が通りひ
とつひとつ目に映った光景から、子ども達が笑いかけ走る姿がどこなく私の目には映ったし、想像でしかない
光景と今日の前にしている光景が行ったり来たりまた重なったりしていた。大川小学校では手元に映る写真と
話してくれているその温度がよりそれを鮮明にしてくれていると感じている。ただ同時に、私にはこれを飲み込
みきれないと思うし想像し切ることはできないのだと痛感した。それでも、足を運んだことや展示物を目にしたこ
とで当時の一瞬一瞬を切り取るように様々なことが目に映った。いろんな展示をみて勿論当時の情報として語
られるものがある中で、感情や人が表現する言葉としての発信を、割と多く感じたことが少し驚きでもあった。ある意味小さな声として映るだろう教員、保護者、親、子どもまで多くの多くの言葉が私の中に入ってきて、ただひたすらに噛み締めていたし震災というものが人にとてどんなものとして映っていたか、その目を借りるような心
地だった。

・午後は雄勝の方へ移動した。おじま漁港ではホタテの養殖を船に乗りながら見せていただいた。最近は、海水温の上昇により、牡蠣やホタテの稚貝が死んでしまったり、そもそも種が付きにくい状態になっている。その

為、ホタテの種を北海道から買ったり、牡蠣の種を広島に売ったりしているらしい。地球温暖化の影響が出ているとひしひしと感じた。

・スタディツアーに行く前、私の中で「東北」は震災で大きな被害を受けた地域でした。「復興」という曖昧で、人によって捉え方が異なってしまう言葉には触れないように過ごしていました。被災者の人のために、震災のこととなるべく思い出さないで過ごせるように、そんな偏見から、東日本大震災について深く学んできませんでした。

東北と復興の授業を通して、東日本大震災の壮大さや沢山の悲惨な話を耳にしました。色々な感情や覚悟を持って訪れた東北、宮城県石巻市は、事前学習の時に目にしていた瓦礫だらけの道路や、どんよりとした空気など感じられないほどに、綺麗で静かな街でした。どの施設に行っても置いてある、震災前の石巻市の風景から変化しすぎていて、とてつもない寂しさを感じました。

山もあり川もあり海もある。とっても豊かな街が一瞬にしてヘドロまみれの水に覆われてしまった事実から目を逸らすのではなく、様々な形で私たちに伝えようしてくれていました。

復興という私が今まで触れてこなかった言葉は、被災した方々にとって触れてほしいものだったのです。触れて、感じて、考えて忘れないでいてほしい。四日間で沢山の方に言われた言葉です。

・私がこの1年でこの講座から学んだことは復興のゴールと、そこに至るまでの道のりの長さと過酷さが尋常ではないことです。

まず私が学んだことを活かして定義した復興のゴールとは「被災した地域の機能を回復させ、被災地というイメージをその地域から払拭させ『そこの人や動物を呼び戻す』こと」ということです。なぜこういう風に定義づけたかというと、東日本大震災から今年の3月11日で13年が経ちますが、まだ一般市民が立ち入れない、立ち入っても時間制限がある地域があることです。また、放射能汚染のイメージがやっと福島から払拭し始めたのにALPS処理水の海洋放出でまたそのイメージがでてそのイメージをまた払拭しなければならなくなってしまったからです。また13年経とうとしているのに復興のゴールがまだだということをふまえると、ゴールへの道のりの長さと過酷さが尋常ではないことが分かります。

・復興に終わりがあるのだろうか、という問いを抱えながらこの講座を受講しました。東北の歴史を学ぶことから始まり、スタディツアーで実際に現地を訪れ、自分自身のものの見方が変わっていくのを感じました。

まず始めに私が考えたのは、「当事者でない私たちがどのようにして当事者と関わっていけばいいのか」ということです。私たちが震災について尋ねるのは無責任ではないか。苦しい出来事を思い出させてしまうのではないか。色々なことを考えてしまい、知りたいことも聞けない状態でした。そんな中で、東北を訪れ、気付かされたことが沢山あります。

私たちが訪れた石巻市は、震災から12年が経過し、すごく綺麗な街になっていました。「復興」と聞き、イメージするのは、瓦礫がなくなり、建物ができ、人々が日常を送れるようになることだと思います。しかし、石巻市の街並みは、震災があったことを感じさせない、石巻市に歴史があることも感じることが難しいものでした。綺麗で同じ建物が立ち並ぶ、静かな街を目の前にし、とてつもない喪失感を感じました。

事前学習や遺族の方のお話を聞き、何度も想像しました。自分の大切な人を震災で失ってしまう苦しみ。私には、どうしても想像しきれないものでした。

震災当時、混乱がひどく、報道などでしか被災地の情報が得られない状況だったと思います。しかし、広く報道されたのは、「人」についてだけなのです。何人の方が行方不明で、何人の方が亡くなった。その背景には、報道されず、静かに苦しんでいた人たちがいたことを知りました。我が子のように丹精込めて作り上げてきた野菜が収穫できなくなった農家さん。愛情を込めて育ててきた養殖魚が死んでしまった漁師さん。震災や原子力発電所事故は、人々だけでなく、多くの大切なものを奪いました。

・私は昨年、この文集で「復興」とは何か疑問に感じると書いた記憶がある。その問い合わせを知るため、昨年のスタディツアーでは何も出来なかったことも相まって今年度もこの講座を受講することを決めた。では一年間、「復興」とは何か問い合わせ続けてきてどうだったのか書いていこうと思う。

まず最初に答えを見つけることができたのか、单刀直入に行ってしまうと答えは「NO」だ。(中略)

今年度は現地でしっかり質問したり、現地のことを知ろう。そうすれば答えは分かるはずだと考えていた。今年度、二度目の現地を訪れてひたすらに質問した。年代、肩書き、間わず聞きまくりノートに書き記した。そしてスタディツアー終了後にパッとノートを見て、「全員言つてること違うし、余計に分からなくなつたなつたわ。」と思ってしまった。たかが一つの言葉、されど一つの言葉で、普段テレビやインターネットで普通に使われているこの言葉はただのハリボテであって、その奥には数えきれないほどの意味、捉え方があった。現地で暮らしている人でさえ意味が違うし中には「復興」という言葉を一度も使ったことがない人もいた。それなのに、自分含め我々は「復興」という言葉を使い知った気になっていたと現地の方の声を聞いて考えた。そして、現地の方の声で一つ共通していることがあった。それは、「暮らし」に関することだ。いくつか抜粋すると、「社会的弱者が暮らしやすい街創り。」「安心して暮らすこと」という声を聞くことが出来た。このように決してハード面の復旧が済んだからと言えないその人自身のこと、暮らしのことが「復興」という言葉にはあり、それらは表面上では見えてこないことだ。実際に石巻の市街地は震災の爪痕が分からぬほど綺麗になっているし、一昨年と昨年の間で変化があったとすれば「いしのまき元気いちば」のロータリーが完成したくらいだ。これで「復興」は終わつたと感じる人もいるだろう。でも現地の「暮らし」、被災された方の心の中は震災当時から何も変わっていないかもしれない。変わることができていないのかも知れない。これらの人間自身の「復興」は前述したように可視化されにくく、お金でどうこうなる話でもない。このような内面的な「復興」は過去の災害において達成されていないのではないだろうか。この「復興」にはタイムリミットがある。「命」だ。震災から立ち上がりがれないと、その方は亡くなり、綺麗になった街だけが残る。そして表面上の「復興」が完成してきたのかもしれない。今、私がいる関東も一〇一年前には大地震が発生しており、それによって都内の道路は再整備され現在の大通りが誕生している。これはハード面で表面上のものだ。実際に被災者は亡くなられていて、内面的なものは分からず、忘れ去られてしまったのではないのだろうか。東日本大震災でも福島県では震災関連死が多く、中には内面的な「復興」が果たされぬまま亡くなった方もいるのではないか。そう考える。私達はそんな人達に向き合っていくしかなければならない。この言葉で終わるのはよくない。たかが関東の高校生が向き合うことはできないし、何様だ状態だ。この気付きもとっくに分かっている人は多いはずだ。これで終わりにしては知った気になった状態だ。そういうならないために、私はまだ「復興」の答えを見つけていない。一步目にちょっと踏み入れられたくらいである。これからもこの問い合わせ悩み続けたいと思う一年間だった。

・また現地の方から話を聞いたことで、「復興」への考え方方が少し変わりました。今まで震災前にぎわいを取り戻すことや滞ってしまった文化や伝統を再生させる、以前のような生活が送れるようになることが復興だと考えていました。しかし3日目に阿部さんが「復興は新しい時代に合わせてつくること」とおっしゃっていて驚きました。そこで、必ずしも元に戻すことが正解とは限らないと気づきました。防潮堤をつくることも住民全員が賛成している訳ではないということを初めて知りました。確かに海の近くは人が住めなくなったのだから作る意味がないと言われればないとも言えるし、これまで海が見えていたのが見えなくなる寂しさにも納得しました。防潮堤について考え方が一人一人違うように、復興についてもそれぞれの考え方があるのかなと思います。だから復興のゴールは一人一人が持っているもので、正解はないのかもしれないと考えるようになりました。私が石巻に着いて最初に思ったことは何もなくてなんかガランとしてるなということでした。でもローズガーデンファクトリーさん、鮎川捕鯨さんなどたくさんの方達に会って、石巻の方の温かさを感じました。また自分が住む町に愛情を持っている人って素敵だなと思いました。

・ハザードエリア、いわゆる非可住エリアで、私は沖縄県の、基地問題に直面した時のような住民性があると感じた。石巻市の門脇町は、高盛道路から海岸側の土地はハザードエリアに指定されていた。津波被害による悲劇を繰り返さないように、防災の観点で人が住めないようになっている。今では大規模な公園化されていて、伝承館まである。そこでは国によるハザードエリア指定が決定した後に、当時の門脇町の住民による反対運動があったと聞いた。私の中でその門脇町の反対運動が、沖縄県の辺野古基地前座り込み運動と重なった。内容は全くもって違うものだが、双方とも自分の地域を守るために、国や政府に対する社会運動。このような反対運動はもちろん、門脇町以外でも起きている。私も自分が生まれ育った町が、自分や地域の納得や理解を得ずに変わっていく姿は見たくないから当事者であれば反対するだろう。でも忘れてはいけないのは国や政府は国民を守るために、このような決定にしたことだ。それは一方的な不条理劇ではなく、国の「国民を守る」義務を果たした結果になる。私は、この地域の声と国の判断・決定の「差」が復興での難点の大きな一つだと感じた。

この難点の解消には住民と政府による歩み寄りの精神がカギになってくる。実際に、雄勝ローズファクトリーガーデンの徳水さんは、「住民の声が届き、要らない防潮堤の削減に成功した地域がある」と言っていた。これが住民と政府による歩み寄りでできた共同性だと思った。けれどこの結果も、住民の納得いかない反発心から生まれた反対運動によるものだ。最善の復興とは、根本的に反発心を起こさせないものだと考える。だからこそ復興に必要とするのは、しっかりととしたグランドルールとローカルルールになる。国民を守る最低限度の基準を守りながら、住民の納得を得る形にする。そのようなグランドルールを作るのには政府と国民による歩み寄りの精神で、しっかりと議論し吟味しなければならない。この共同ができなければ、復興は一方的な不条理劇になりかねない。グランドルールの上で独自性を持ったローカルルールができたら最善な復興に繋がる。私は、何を守るか分からなく海が見えないほど高い防潮堤を見て、セメント会社が儲かる仕組みを聞いて、地域と政府の共同性を思った。復興の大きな難点を解消するのは共同性にあるかもしれない。

・考えたこと、三つ目は「復興について」。ツアーの中で出会った多くの方々はそれぞれがそれぞれの辛い思いをされたと思うけど、私たちにそんな思いも含め、自分がしているお仕事のことだったり、地元の魅力をたくさんお話ししてくれた。そして、一人一人に復興の形があった。復興という言葉が持つ意味は一人一人違った。皆さんのお話を聞いていく中で私は思った、「私が思う復興って何だろう?」復興って何を指すんだろう。どこまでいたら復興できたってことになるんだろう。私は復興にゴールなんてないと思った。復興っていろいろなことを指すと思う。震災で壊されてしまった土地に対してだけではなく、傷ついた一人一人の方の心まで。土地もそれぞれの時代に合った形で変わっていくし、傷ついた心と向き合うことは先が見えない大変なことだと思う。それでも、みんなで助け合いながら生きていくこと、未来に繋げていくことが大切だと思った。

・このスタディーツアーで最初に肌で感じて知った事実は、門脇小学校と大川小学校の対比から得ました。一番初めに、門脇小学校へ向かい、数の裏にはちゃんと人がいるということや、隣り合うクラスを見比べて、震災はいつ起ころかわからないことを学び、その後実際の逃げ道等を見学させていただきました。この時点でも、震災の傷跡に、心を抉られましたが、今後も震災遺構として残せるようにと、綺麗に修繕されていたこともあり、どこかぼんやりとした震災の全貌を感じて、その日は眠りにつきました。次の日、見たのは、少しは維持されていても、あの日あの時から時が止まったように、ただそこに佇む震災遺構。犠牲となったお子さん方の親御さんが何とか残した大川小学校は石巻にある小学校の内、唯一子供の犠牲者がうまれてしまった学校で、うまれてしまった根本には、県ひいては国の、学校における防災対策不足であり、第二、第三避難場所を設定していかなかったことが原因と言われていることもあります。政府が震災遺構として残したがっていないことが、門脇小学校と比べてみるとありありと浮かぶ場所でした。別の場所でお話を伺ったときも、市内の学校から語ってくれと呼ばれたことがないとおっしゃっていた方もいて、政治の複雑な裏を垣間見た気持ちになりました。また、少し逸れてしまいますが、わすれん(せんだいメディアテーク)のスペースが、少し狭いな、と感じたことも、みんなも感じていた

ことだったのか、と思いました。それから、原発への道の復旧が早かったというお話も、至極当然な判断なのですが、本当に、何とも言えない気持ちになりました。また、門脇小学校から見た、草原。もう2度と人が住めない土地という言葉から、失ったものの重さをとても感じ、言葉に詰りました。

今回のスタディツアーで、実際に現地に足を運び、その当時の話を当時いらっしゃった方に聞くということの大切さを学びましたが、特にそのことを感じたのは大川小学校と、幼稚園バスの事故現場で、「死者が出てから気づき、動く」という、人間社会の複雑さ(それでは遅いと強く思うが、そうならないと気づけないこともあるかも知れないと考えている)と、こういった震災遺構こそ、未来で2度と起こらないように語り継いでいくために、残していくべきなのではないか、と考えました。ただ、私としては、残しはしたいけれど、門脇小学校の様な残し方ではなく、先ほど綴ったような、あの地域全体で「時が止まったような」残し方ができたら良いのではないかと思いました。思うに、門脇小学校は、確かに保存という意味では良い保存の仕方であると思うのですが、震災遺構としての悲惨さを伝えるという意味では、かの保存の仕方では、悲惨さが薄れているような気がするのです。ただ、これに関しては犠牲者の違いからの私の心の持ちようや、感性の問題なので、あくまで私的には、ということなのですが、大川小学校は逆に、かのような門脇小学校のようにお金かけられていないからこそ、被災の爪痕が大きく残って今まで届けられたように、思いました。

・門脇小学校では、いままではここは変わらないなーと思うくらいで見てたけど、今回はじっくり見て回ることができて、火災で燃えた教室に消火器が真っ黒になって転がっていたり、机の展示の周りに水筒があったり、傘の骨組みが落ちてたり、細かい部分で新しい発見をすることができたなと思う。燃えた当時のまま残ってるって、本当にあった災害なんだよなって改めて実感できるからすごくいい施設だなと思う。大まかな展示は過去に見たから、今回は細かい部分を見たいなと思っていて、ちゃんと見れて良かったです。門脇小に住み着いてるらしい猫ちゃんのことも気になったり、また行きたいな。

3.11メモリアルネットワークでは、大川小のけんとくんのジャンパーをおそらく初めて見て、すごくきれいな状態で残されていて、こういう展示を見るとどこでも思うけど遺族の方、そして周りに関わっている人たちの、大切にしようという心がすごく伝わってくるなど。同情とか、悲しみだけじゃなくて、現地の人たちの忘れないで伝えつないでいこうという気持ちが伝わってくるなーと思いました。

二日目は大川小学校。大川小学校は昨年行ったときに撮った、向日葵が生えている写真がお気に入りで、何回か見返したりして。ここは一番、どこよりも寂しいなと思うところだけれど、遺族の人たちの思いが一番伝わってくるところだなと思う。話を聞くたびにどうすればよかったのか、なにが適切だったのか明確だけど、教師の気持ちも生徒の気持ちも、ほかの人の気持ちも全部わかる気がして一番いろいろ考えてしまう場所。がれきに埋もれた遺体を腐敗臭で見つけたって話がすごくしんどかった。「親として」娘の最期を知りたくて伝承の会に入ったというお話は、深い悲しみと親心を感じてつらくなりました。実際に土砂に飲み込まれたここに自分が立って考えていくことって重要なだと改めて思います。

・今までずっと復興はもともとあるものを形を変えずにそのまま元通りにすることだと思っていて、それは海でも山でも同じだと思っていた。例えば海だったらたくさんの種類の魚や生き物がいて自分たち人間にとてて厄介だったらそれを駆除する。でもそれは自分たちにはいらなくて厄介な生き物でも海の世界では生態系を守っている。その生き物がいないだけで生態系は崩れるという話を私は前に聞いたことがあって、それなら山だって鹿が増えているから駆除するとかしないでそのままにすればいいのにってずっと考えていたけれど鹿が増えるとヒルが増えたり、良い山をつくるには木を入れたり広葉樹を植えたりすることで、動物が住みやすい山になったり、土砂災害が起きにくくなったり、山からの養分が地表を通って牡蠣が育ったり、哺乳類や鳥にもいい影響を与えることだって出来たりする山を変えるにもひとつの選択に目の前の1つの問題だけではなくて多方面から見ることで50年先、100年先の未来が変わっていくということが分かったし、私は自分だけの事ではなくて

他の生き物のことも考えていたつもりだったけど話を聞いてまだ自分は綺麗な海や山のありかたを分かっていなかつたし結局は自分のことしか考えていない！人だつていうことに気づいた。

・特に印象的だったのが門脇小と大川小の違い。同じ震災遺構でも保存、伝承の仕方に大きな違いがあると感じた。門脇小は次世代に繋がるような様々な展示や工夫が施されていたと思う。これは私個人の感覚だが門脇小は震災後に人の手が加えられすぎていて当時門脇小に通っていた生徒たちや教員たちの情景を想像することが難しかった。博物館を見ているような感覚で得られたものは有意義であったのは間違いないが小学校としての門脇小にリアリティを見出す事が難しく感じた。校庭に生えた木を見た時、この学校は時が進んでいるんだなと思った。比べて大川小は震災から時が止まっているようだった。空気感が重く目の前で起きたであろう悲劇を想像して打ちのめされた。あまりにも残酷すぎて目を背けたくなったが紫桃さんの話でこれは本当に起きたことだということを自覚させられた。私が門脇小と大川小の空気感の違いを感じ取った背景に当事者、第三者含めた震災遺構への賛否両論があげられると思う。門脇小ももちろん震災遺構とすることに対して様々な思いがあったと思うが、それ以上に大川小について遺族、近隣住民それに外部の人間の複雑な思いが交差していると広々した校庭にポツンと献花台のような机を見て推論せざるおえなかった。門脇小は結果として学校の指揮下にいた児童の死者はでなかった。でも大川小は悲劇の学校として名をはせてしまうことになる。大川小を震災遺構として扱うことは門脇小と違ってどうしても悲劇の象徴として存在することになってしまい、それは私達外部の人間にとってもそうだが遺族にとっても悲劇の象徴であることは変わらない。遺族は変わり果てた大川小を見て何を思うのだろう。門脇小は多くの命が救われた例として避難の重要性等を語り継いでいくが、大川小はそこで起きた悲劇を語り継いでいく。大川小の遺構に賛成した人にはその覚悟があることは承知だが私にはその事実が痛ましくてたまらない。震災のちょっと前まではどちらの学校も同じ輝かしい笑顔を咲かせていたはずなのにたった一つの地震で明暗を分けてしまうことになるなんて。お話をいただいた紫桃さんは後世に語り継いでいく重要性を体現したかったと同時に娘の存在を風化させない、父親としての使命感と決して消えない怒りあるいは無力感あるように感じた。でも私には悲劇を悲劇で終わらせない、自分が負った苦しみが後世にとって語り継いでいくべきかどうか考えていく余地なんであるのだろうか。私がもし当事者であったなら大川小を震災遺構として残していくことに対して肯定的になれる自信がない。だからこそ後世といえる私達のために大川小が何を遺していくか批判もあったであろう状況下で考えて残してくれた人達の意志を大切にしたいし向き合っていきたいと思う。

門脇小と大川小の訪問は最初に書いた私の問い合わせ大きな知見をもたらしてくれた。震災が起きてからではなく起きる前から向き合って適切な準備をしとかなきやならない事を強く実感した。これは口で言われても怠惰な私には理解はできても実践しなかったんだろうが、スタディツアーリーを経て、たくさんの人たちが私たちに遺してくれたものを背負っている自覚ができた。その人たちの思いを無駄にしないためにも学んだことを最大限生かしたい。そしてもし震災が起きてしまった時、その後についてどう向き合っていくか。きっとこの問いには最善と呼べる行動はない、人それぞれ違った答えを持つだろうというのは考えていた。今回のスタディツアーリーを通して復興を願う人達に共通することは形は違えど各々の伝承に重きをおいているということが私の中で確信に近づいた。向き合い方というよりもまず向き合っていく事が大事なのだろう。石巻の出来事を石巻だけで完結させず未来を巻き込んで語り継ぐ。これは3.11に限らず広島やアウシュビッツなどにも同じことが言えるだろう。私はこの授業の最初の課題で復興に終わりはないと書いた。それは広島に行った時の経験も基にしていたがやはり復興の起点となるのは伝承なんだと実感した。そしてスタディツアーリーが終わった今、私は間近で宮城の復興に関われて本当に良かったと感じている。

・一日目、石巻へ向かう電車では、「あれが仮設住宅かな」とか「同じような家が沢山あるな」など色々見て考えながら乗っていたが、やっぱりどこか抜けない旅行気分に、これが四日間続いたらやうかも、という不安を抱えながら門脇小学校に到着した。そんな旅行気分は、体育館に入った瞬間消えた。

市の資料館である門脇小を見て、案内してくれた藤間さんのいうように、一人一人の心情が分からぬいため、心搖さぶられなかつた。そうだったのかという実態や数字にしか考えが行き届かなかつた。藤間さんの「数字の先」という言葉は理解したし、納得もしたけど、だからと言って「こんな想いだつたのかな」なんて想像できないし、できないのが当たり前で、そんな思いなんてしない方がいい。そこで、想像できたなんてことはとても失礼なことだと思う。それと、戦争の資料館では感じたものがなかつた。それは、戦争は、目の前の人には死に、自分は生き残るというのがあり得る。だが津波というのが横の人すら全て飲み込むから、津波が終わつた後でしか生死が分からぬ、終わつても分からぬ。それに、自然災害だからしようがないという考えが頭のどこかにあるから、心が揺さぶられなかつたのかなと思う。だからこそミート門脇には、心搖さぶられるものがあつた。やっぱり個人に干渉、クローズアップ出来る民間の資料館は素晴らしいと思った。

・宝鏡寺でも早川さんの言葉の中に復興はできない。新しい浪江町はできるけど、と語っており実際考えたら確かにそうだと感じた。復興って失ったものを一から作り直すという意味だが現実をみたらそれは不可能だと自分は思った。石巻でも防潮堤を設置することで復興につながるとか国は言っているが、周りは人が住めないエリアなのに防潮堤を設置する意味があるのかという疑問があり復興とは言えないといふ人もいる。福島でも新しい技術を取り入れることで復興につながると言っている。でも現地の人はそれを求めていない事がわかる。今回のツアーでお話してくださつた方々は国が進めている復興に対しても不満を持っていることが伝わつた。そこで思ったのはまず国は復興よりも被災者や現地の人たちの意見を聞き、そこから現地の人が望んでいる復興というのを聞いてから復興に取り組んだほうがいいのではないかと思った。自分は3年間この講座を受講していく、3年間復興とは何なのかを考えていたが今回のツアーで今まで自分が考えていた復興というのが変わつてしまつたツアーになつた。

・復興の難しさは、ただ建物やインフラを再建すれば解決するものではないと思った。震災によって生活基盤を失つた人々が地域に戻るには、住まいや仕事が確保されるだけでなく、地域コミュニティの復活が必要に感じた。特に福島では、放射能汚染による健康不安や風評被害が問題になって人々が福島に戻ることや地域で生き続けることのハードルが高くなつてしまつた現実を知ると、復興には物理的な再建だけでなく、人々の心をつなぎ直す取り組みが大切だと思った。

伝統芸能の復活も、そのひとつだと思っている。震災によって中断を余儀なくされた踊りや祭りが再開されることで、人々に希望を与えるだけではなく地域のつながりを取り戻すきっかけにもなると思った。実際、震災後に東北六魂祭が始まつたことには、そうした意図が込められていると感じる。けど、伝統芸能やお祭りの需要があり外から見ると理解されないこともあるとおもつた。文化や芸能は、過去の物ではなくこれから形を変えて残していくべきだと感じた。

・そんな早川住職を近くで見守ってきた早川さんに「早川住職と早川さんは今の復興をどう思っていますか」と質問をした。そうしたら早川さんは「震災が起きた以上、町は復興できない」と言った。自分は復興があつて当たり前だと思っていたが、そもそも復興はできないと思っている人がいるのが驚きだった。そして早川さんは「故郷に戻らなかつた復興に対して悲しく思つた」と言った。じゃあ復興はどうあるべきなのか。

自分は全体を通して、「復興の主体とは」について考えてきた。早川さんは故郷に戻らない限り復興はないと言っていた。だったら復興をするなら故郷に住んでいた被災当事者(避難者を含む)が主体であるべき。じゃあ果たして今の復興の主体は被災当事者に在るのか。自分は、地域によって差はあるが無いに近いと思う。行政が主体になって「復興」という大規模事業、国策の一種になつてゐる気がする。東日本大震災・原子力災害伝

承館では最後のコーナーで創造的復興という言葉を用いながら工場の誘致や、ローンやあらゆる機会を使った大規模農園の説明があった。未来を象徴とした最先端の技術を強調としていて、震災で開いた土地が、いわゆる「実験場」になっていると思った。福島イノベーション・コスト構想といった行政が主体になって進めている大きな復興政策もその一つだ。その様子は、まるで「原子力明るい未来のエネルギー」をキャッチコピーにした福島原発かのようだ。また同じようなことが惨事便乗型資本主義的に福島に入り込んでいると感じた。はたして福島イノベーション・コスト構想で、全国各地に避難した避難者たちは帰りたいと思うのか。避難者にとって故郷はどうだったのか、どう故郷が震災によって壊れたのか。それを行政は考えていくべきだし、被災者当事者・避難者当事者の多様的な声をどう拾っていくかが復興のあるべき進め方だと思う。「故郷を大事にしてほしい」、早川さんが言った言葉には、今の復興に対する想いがあったと思う。

福島の様々な復興の形に対して、そのようなことを感じた。防潮堤や大規模公園、交流の難しい施設など。とても開発的で既定路線のような型にはまっていると思う。防潮堤やソーラーパネルによって地元故郷の田園風景のような景観が失われている。そしてこのような復興の賛否によって住民の中で分断、対立も起こっている。じゃあ交流の難しい施設（代金が高くて貸し切り状態のような体育館とか）は震災、復興で起こった分断・対立も解消するのか。実際にガンガン除染したりと、行政主導の「復興」をして被災者が不在のまま、町（ふるさと）の姿が大きく変わってしまっている。これじゃ避難者が返ってこないのも無理がない。結局、被災当事者、避難者の声が理解されず、拾ってもらはず、多様的な復興になっていない。それは加害当事者ごまかし（創造的復興、理解した気になっている）と被災当事者のあきらめ（帰りたかった「故郷」がない、分断、対立）にある。国の伝承館に多用されていた「創造的復興」という言葉自体が悪いとは思わない。また町を目指していく中で、壊れた建築物をそのまま建てる「原型復旧」ではなく、新しいアイデアや技術を取り入れて立て直す「創造的復興」にはとても意味があると思う。しかし自分が目にした福島や東北の復興のどこかが創造的かよく分からぬ。新自由主義的社會にふさわしい形で以前の状態以上の復興していくのが創造的復興なのだろうが、以前の状態にさえ戻れない人たちが実際にいる。仮設住宅での孤独死や、避難所での震災関連死、ソーラーパネルがたくさんあるふるさとの風景。自分はこれを見て復興しているとは思えなかった。

・浜通り地区で現在実施されている3.11関連の動きを「復興」と仮定し考える。行政曰く、福島イノベーション・コスト構想などが復興である。里見さんのお話を踏まえると過去の教訓を残す伝承活動も復興である。現地で見てきた「復興」は、公、行政は未来のみを、民間は過去を見ているように感じた。前者は震災後、ゼロベースからの復興である一方、後者は今までに地域全体で積み立ててきたもの上にある復興だ。復興と言わない人もいるが、民間の人々考える復興は過去を踏まえた未来をみているように感じた。

まず初めに、公立の原子力災害伝承館は、事実ベースの展示であり、全体を通して「伝えたいこと」は防災と國の考える復興のように見えた。事故前、震災、復興の3つ展示の間に壁があるような印象もあった。はじめの螺旋状の時系列展示で最後が「原子力災害伝承館の完成」だったことから考えられたのは、“そこ”が震災後と新しい浜通りの区切りということ、震災と原発事故で崩壊した町をリセットしてRe.ゼロから始める浜通り開発の意思表示に思えた。（中略）民間の復興の形を総括すると、直接的な復興事業がある石巻に対し、浜通りは、ただ知らないだけかもしれないが、現地で直接的な復興事業は民間ではほぼ見られなかつた。これは推測になるが、浜通りでは行政が避難指示区域を設定し、その更地を東京にある中央政府、行政が彼らなりの復興を行なっているため、民間の復興は直接行えないのではないか、もっと言えば、原発が浜通りに建設された時からほぼ中央の殖民地だったかもしれない。行政が今の復興から手を離したら良いというわけでもなく、浜通りの被災状況は比較的復興のゴールが見えやすい石巻と違い、復興のゴールが見えないからこそ、石巻のものわさんや鮎川捕鯨のような賑やかさを取り戻そうということが難しいのではないか。その段階に至っていない、至らないのではないかと感じた。では、このままでは浜通りは殖民地のままかというと、そうではなく民

間の復興が公の対として存在する事で、現地が中央のものではなく現地住民の意思が残り脱殖民化に繋がる。つまり現地に復興のための伝承と脱殖民化のための施設として復興の拠点があるということに意味があるのだろうと感じた。

・私は誰が悪いのか、と言うのが見えにくいものだと思っていたので、早川さんのように自分に責任があると思っている方がいることに驚いた。だが、3日目にゆめの森の南郷さんが「誰かが誰かに任せていて、全ての国民に原発事故の責任がある」と仰っているのを聞き、腑に落ちたような気がした。直接の関わりはなくとも、むしろ関わらなかった事によって、自分にも少なからず責任はあるんだ、と考えることは大切なことなのでは無いだろうか。多くの人が責任の所在を任せにしている今の状況は、南郷さんの仰っていた問題点を誰かに任せていた時と同じ状況なのでは無いかと思った。同時に、原子力発電所を安全に稼働できる方法を考えて欲しい、と言う訴えが聞き入れられず、事故が起こってしまった。と言う事と、今公共の施設などが市民の意見を取り入れず議論されずに建設されている。と言う事も同じだと思った。どうして同じ事を繰り返してしまうのか、そこに暮らす人はその危うさに気付いているのに、行政は何故それらの意見を取り入れた復興の形を考えることが出来ないのかとても不思議に思った。

・「復興」については、これについても本当に人一人一人によって、その人の復興っていうものがあって、それ違なものだから、そりやあ、完結することもないよなど、考えました。このことについては、宮城よりも福島の方が、私の中では沢山考えられたように思っていて、私は今まで、復興というのは何千年後には必ず成立するものなのではないかと思っていて、それは、当事者たちがいなくなつた後、その当時の地形との大幅に変わった世界で、生きる人々は、私たちの年代で起きた震災とは、直接的な関わりが大きく薄れ、新しい文明社会が築かれると考えていたからです。ですが、福島は原発事故という人災が起きたが故に、これから10万年ぐらい管理しなければならない危険なものが置かれ、それによって復興という未来が想像しにくくなつたからなのかな、と思いました。それから私は、環状島について学んだ時に、前述した今までの考え方でいうと、当事者も支援者も傍観者も全ての人が海に飲み込まれ、底に沈んで地球に還った後、また新たな文明が生まれ、またそこに住む人々の日常が生まれることが復興なのかななどと思っていたけれど、相馬高校の方々の例え原発問題が解決しても、これからずっと、この災害のことを伝承していくかなくてはいけないというお話を聞いて、海の水位をなるべく引いた状態にする努力を、ずっと続けていくことこそが、復興への、というか…。伝承への足掛かりになるのか、今まで持っていた考えは、単なる「忘却」だったのかなと考えられました。

このようなことを考えてきて、復興に終わりはないのかもしれないな、と考えました。でも、何度も話させていただいておりますが、ゆめの森学園のように、これから未来に繋げていく行動、活動という、一步一步は踏み出せるのだなど学べました。

・今年度は「復興」という視点を強く意識させられた。そして、今後、東北と復興をとったときにもそれは変わらないのかもしれない。しかし、東北と復興を含めた学校生活や日常生活のなかで、歴史のなかの「東北」の特異性を感じたことをあたまの片隅にいれながら来年度含めたこれからを過ごしていくことになると思う。

・まず結論から入るが、「復興」というのは人によって変わり、正しい「復興」の形は存在しない。というのが私の考えだ。このような考えになるまでにいろいろなことがあったものの、今現時点での私の結論はこれである。このような考えになるまでの経緯をいくつか挙げていこうと思う。

この講座を選択し、最初の方の授業にて昨年のこの講座の人たちが製作した壁新聞を見る機会があった。この壁新聞は学発に展示された後に仙台メディアテークにて展示されたものである。壁新聞の中に、「あなたにとっての復興とは?」という質問があり、展示を見た人が書き込めるようになっていた。そこには「元通りの生活が帰ってくること」「前のような活気が帰ってくること」などが書いてあった。その時の私は大きな災害があった後にすべてが元通りになることは現実的ではないな。と思っていて、となると復興する際に目指すべきなのは前

のような活気という部分なのではないか。と考えていた。この講座を取っている人もだいたいそんな考えをもっているような気がした。

考えが変わった最初のきっかけは石巻スタディーツアーだった。いろいろな話を聞いていると、防潮堤に批判的な意見を持っている人が多くいた。防潮堤は津波から人々や建物を守るために作っているとされているが、東日本大震災の津波にて大きな被害が出た地域には人が住むことができなくなっていて、防潮堤が何のために存在するのかが分からなくなっている。という意見を複数人から聞いた。この時に国側は一つの「復興」として防潮堤を作っているけれど、これは必要な物だろうか。を感じた。また住んでいる人たちが防潮堤をつくることに反対していたり、対話を求めていたのに対して、応じずに防潮堤を作り続けていることに、私の考えていた「復興」の形はこれではないなど感じた。この時には私の思う「復興」はもともと住んでいた人達がもしくは、もともと住んでいた人と国や政府側が対話を重ねて作り上げるものなんじゃないかと思った。

次に考えが変わったのは水俣病について授業で教わった時だった。水俣湾埋立地について教わったときにもっといい方法があったのではないか、と思った。また、いまだに水俣病の認定患者問題などがあり、これは本当に最善だと思って行っているのだろうか。と不思議に思った。

そして福島スタディーツアーにて自分の中の復興が固まつたと思う。福島の東日本大震災・原子力災害伝承館の展示の中に「福島イノベーションコースト構想」というものがあり、端的に言えばロボットやAIなどの最先端技術の実証拠点を作って地域の活性化を目指しますというものだ。最初に私が思っていた「復興」の形は前のような活気を取り戻すというものだったから、この構想だったら昔思っていた「復興」が福島では、行われているということになる。が、これは本当に福島の人々が描いていた「復興」の形なのだろうか。私は福島に住んでいるわけでも、住んでいたわけでもない完全な部外者であるが、この構想にはもともと福島に住んでいた人たちの気持ちが反映されていないのではないかと感じた。ただ、この構想に賛成している福島に住んでいる人だけが、私の考えているより良い「復興」とは違うものだと感じた。そして宝鏡寺での早川さんが言っていた言葉の「復興とは町が元通りになることだから達成されることはない」という言葉を聞いてなるほど、と感じた。

私は「復興」の事を勘違いしていたのだ。ずっと大きな被害が出るようなことがあった場合に、被害者や国が目指さなければいけないものだと思っていた。今まで通りの生活に戻すことや、街を活気づけることを目指している状態の事を指していると思っていたが、それも一つの解釈なだけで人によって「復興」なんて変わる。その中でより多くの人が納得するより良い「復興」を模索しながら進めて行くのがこれから求められることなのではないかと考える。

・新しいものを作るということは水俣病や原発と同じように犠牲になる人ができるかもしれない。震災で衰えてしまった産業を再び活性化させることには応援したい。でもその裏で苦しんでいる人が生まれたらそれは復興ではないと思う。授業での「どうすれば水俣病は起きなかっただろう」という問い合わせ印象に残ってる。戦争がなければ良かったのか、国が止めてくれれば良かったのか、チツソの製品を買わなければ良かったのか。誰か一人に責任があるわけではないと思う。でも今の私たちには、同じことを二度とくり返さないために行動していく責任があると強く感じた。また豊かな暮らしのために近代化を進めればいいってものでもないんだなと思った。

復興への考え方が変わったと同時に、関わり方の難しさを感じた。復興に携わることは思ったよりも簡単ではなかった。さっきも書いたように復興のゴールは人それぞれで、すべてを語れる人もいるし語れない人もいる。だから一部始終を聞いて分かった氣にもなれない。関わっていくためには被災者とのコミュニケーションが必要不可欠だと思った。でもどこまで踏み込んでいいのかが難しい。後半の授業では自分にできることってなんだろうとすごく考えた。スタディーツアーで学んだからには伝えていく必要があると思うけど、学んだ情報が多くて正直自分の中で消化しきれてない気がする。なにかしたとしてもそれは本当に望まれていることなのかとも

考えてしまった。でもそんなことを考えてなにもしなかったらいつのまにか考えることすら忘れてしまうから、授業は終わってしまったけどこれからも少しずついいから関わり続けて考えを深めたいと思った。

・最後にこの一年間は、昨年度の学びから生まれた、地域に根ざした復興の形はどのようなものかと言うことや、震災以前の被災地の状況と言った問を基に、様々問題に対して昨年度とは異なる側面を意識して授業に臨んでいました。二年目だからこそその中で、被災地では過去津波災害が多発してきたという新たな学びを得られ、災害の伝承の重要性と難しさを新たな観点から実感しました。また、今年度初めて実施された福島のスタディーツアーを通して、自然災害と原子力災害における被害の状況は大きく異なっていることから、復興事業などについて過ぎたこととしてではなく、現在起きていることとして地域住民の望む復興の根本的な方向性について率直な意見を伺えました。そのような話を踏まえて、「復興」について考える中で、単に震災から復旧するという単純なものではなく、元に戻すことができないような被害を受けた過疎地域において、今後加速的に過疎化が進んでいくことが予想される中で、地域の活性化に繋がるような策としてどのようなことを復興として取り組んでいくのかと言うものなのだと思います。その中で自治体の示す形と地域住民の考えていた形が異なっており、そのことから対立的になってしまっている状況が現状なのだと考えました。今回は、これに対して今回は、活性化の効果があり地域住民の望む形にも近くなる復興の具体的な形について自分なりに考えました。しかし、それでも効果があり、地域にあったものであるかは、効果を検証したわけではないし、自分は地域住民でもないので、いいものなのかどうかは究極的には分かりません。ただ、この問題は東北に限った問題ではなく、同じように過疎化が進んでいる地域であれば、今後同じような災害が発生した際に、似た状況になる可能性があることから、被災地での復興における課題と類似する課題があるとすれば、災害が起きたかどうかに関係なく現在から取り組まなければいけないことだと思います。そのためにも被災地で進められている復興が今後どのような形で帰着していくのか見守り、考え続けていきたいと思います。

・私が今、「東北」と「復興」について思うことの中には、学ぶ前と変わった部分と変わっていない部分がある。まず「東北」について。私は講座で学び始める前、「東北」という言葉に「美味しい食べ物がたくさんある」とか「昔から伝わる文化が豊か」といったイメージを持っていた。その時そう思ったのは、今まで日本のこと学ぶ中で知識として知っていたり、実際に自分が東北に足を運んだ際に素敵な体験を沢山したからだと思う。とても素敵な場所であり魅力溢れる場所というその時の「東北」のイメージは今も変わらない部分だ。しかし、学んでいく中で私が「東北」について思うことの中に加わったのは「被災地」という観点だ。学び始める前の私は東日本大震災当時東北で何が起きたのかをほとんど知らなかっただし、その事について考えることもなかった。しかし、「環境学」講座で福島第一原発事故について学んで、東日本大震災について知る機会ができて、高校3年生で「東北と復興」講座に出会った。知りたいという気持ちを持って今まで学んできたことはとても苦しくて、衝撃的な事だった。知ることの多さや、難しさに考えることから逃げ出してしまいたくなる時もあった。でもいつも、学び続けなければいけないと思った。なぜなら、実際にあるのに自分に見えていない観点を見つけなければいけないと思ったからだ。(中略) 次に、「復興」について。講座の中でずっと考え続けていたことだったが、一年の学びを終えて考える私なりの「復興」は、その言葉の意味に正解はなく、それぞれの思う形があるものだと思った。それでいいのだと思う。しかし、自分の復興の形が正義だと決めつけて進んでいくことが、ある人にとっては良くないものである可能性があることを国の政策や、ツアードに行く先々で聞いた、政策への不満の声から実感した。

双葉屋旅館の女将さんがおっしゃっていた、議論することが大事という言葉が印象に残っている。そもそも復興という言葉の意味の捉え方が違うのだから、その言葉の使い方も違うし、言葉って本当に難しいものだと思うけど、いくらぶつかっても私たちは言葉を使って話していくことしかできないし、だからこそ議論することから逃げてはいけないと思った。

・復興とはどうあるべきなのか。この問いはこの講座を取らなければ考える機会がなかったかもしれない。しかし復興を考える過程で生まれた産物は私にとってかけがえのない学びになった。復興というのは物理的な再建だけでなく人間性の再建であり見つめ直してあるのではないだろうか。そしてそれは非当事者である私にも大きな意味を持っている。災害という大きな破壊を経て揺らいだもの、揺らがなかつたもの、生き方や価値観。それを知り考えるということの意味。石巻の閑散とした風景を眺めた時震災前の情景をイメージし感傷的になるが、それは3.11が自分と切り離せる存在ではなかったからだろうか。例えば200年後の人間が石巻に対して同じように感傷的になるのだろうか。人間の歴史を俯瞰した時私が今いるこの場所も何らかの復興を経て成り立っていてこの土地に思いを馳せた人がいたのだろうが、その人は今この土地を見て復興を果たしたと思えるのだろうか。この講座を取る前のニュースで阪神淡路大震災は復興完了という記事を見て当時の私も国からのその言葉通り復興は終わったんだと受け取ってしまったが、今考えるとそれはインフラや都市などの可視化できる復旧を指していく失われてしまったコミュニティや暮らしが元通りになったわけではないのだろう。復興というのは極めて多面的であり一つの視点で捉えられるものではない、文化や精神的なものも絡み合いどこかで対立してしまうことも免れない。そう考えた時、復興というものに終わりないあるいは復興が終わったと誰が決められない。復興の基準は人によって異なり満場一致での復興を実現するのはほぼ不可能に近いのかもしれない。私は復興に対してもちろん人の希望になることだと思うが同時に残酷な側面も存在していると感じるようになった。福島は誰かの犠牲の上で復興が成り立っていると強く感じ、表面上では行政にとっての復興を意味する事業が進められていてそういう事業は無関係な人からしても明らかな復興であるが、上書きされてしまった人々が自分たちの存在を認知させることはとても難しい事を理解した。これは加害構造が明確化されているが被災者の間でも復興観の対立は避けられない。可視化されなかった思いを抱えている人が私の認知が届かない範囲にも大勢いるとすると「語り」が記録以上の意味を持つ事が分かる。復興とは「過去の出来事の克服」という目的だけでなく、「どのように記憶を継承し、未来へとつなげるのか」という問いかけてもあるのではないか。震災を経験した人々の思いが時間とともに風化しないようにすることも、復興の一環と言えるのだろうし、自分における復興の解にはまだ自信がないが語りの重要性というこの講座で得られた学びを生かしたい。

・今年度は、復興庁と古滝屋という旅館に原子力災害考証館を作った、里見さんという方にお話を伺った。復興庁では主に風評被害について講習を受けた。復興庁としては、国民に正しい情報を伝え、福島のものは安全だと知ってもらい風評被害を払拭したいらしい。しかし、福島の方の考えは全く異なっていた。まず、「風評被害」という言葉は使っていないらしい。「農作物やキノコ類（今でもキノコ類は流通していない）などに実害があったから風評と言っていない。もちろん風評被害対策はしているけれど、福島のものを避けている人に対して、『それはダメだ』と非難するのは違う。逆に政府が『風評被害』や『復興』という言葉を使うことによって、国の責任や罪がぼやけてしまうのではないか。福島だけの問題にされている。」とおっしゃっていた。私はこの言葉を聞いて、とても納得した。被災した人や地域のために復興庁は作られたはずなのに、街の人の考え方と違うことをするのには、政府との距離があると感じるし誰のためにやっているのか分からぬ。また、復興庁で配られたプリントを見ると、「復興した今の街の様子」として駅や除染した土を入れているフレコンバックが撤去された水田の写真が載っている。これだけみると街の復興は完了して、綺麗に元通りになっているように感じる。しかし、実際は駅周辺だけだったり地域のコミュニティがあまり出来ていなかつたりする。石巻のスタディツアーや行ったときにも感じたが、建物が新たに建てられただけでは、少なくとも「復興した」と言えないのではないか。

・もうひとつ印象に残るのは駅前で見守ってきた桜まで伐採されてその桜にあった物語まで消えてしまったという話。歴史上に残るような大きな出来事がなくても、町の人々に愛された歴史があるし、そういうものを残すのは大切だと思う。消えていい歴史ってないよなど改めて気づいた。「復興」のために思い出を消してしまうのは「復興じゃない」と私は思う。

おわりに

当事者にはなれない。当事者不在で物事が決定することも問題だが、しかし一方で当事者のみに決定をゆだねることもまた問題である。リスクを引き受ける当事者とそのメリットを引き受ける当事者が同じ存在ではなく、原子力発電所の場合にはその電気をエネルギーとして消費する消費者がいる。水俣病におけるチッソも同様である。リスクを引き受けている当事者（時にそれは被害者）はそのリスクを引き受けるかどうかを自己決定し、その結果を自己責任として負うのではない。そのリスクを引き受けやすいように「メリット」を提示した側、あるいはそもそもそのリスクと引き換えに得られるメリットを享受する側の人たちも同様に当事者性を持つべきではないだろうか。被害の当事者にはなれなくとも加害の当事者としての立場もあり得る。過去・現在・未来の被害当事者という立場が存在するならば、過去・現在・未来の加害当事者という立場もとりうるはずであり、そうなったときに自らの未来の被害当事者、あるいは未来の加害当事者の立場を拒否するように考えていくことが、主体の問題として引き受けられる当事者性ではないだろうか。当事者になることはできない。当事者不在の決定でも当事者のみの決定でもなく、自らの主体の問題として捉えることができる当事者性を帯びる人たちにできることがあるのではないかだろうか。こうした主体の問題として捉えることができる場面は社会の中にもあるだろう。それは対人援助という具体的な場面の中での出会いを通してかもしれないし、まだ援助されるべき存在として認知されていない未来の当事者を掘り起こす場面で起こるかもしれない。

ある看護科教員のアタマの中

11

～看護師の専門性について～

山岸 若菜

はじめに

看護関係の人がSNSを発信しているのを眺めていると「看護師の仕事が雑多すぎる！看護師でないとできない仕事に専念できるようにするべきだ」という主張を目にする。

看護師でないとできない仕事ってなんだろう？

昔読んだ本の中で、看護師の仕事は、皮をむいたら中身がなくなってしまう玉ねぎみたいなものだ、色々やることは多いがどれも特化した知識があるわけではなく、専門職と言われるが、その実専門的なことは何もない。という文章を読んだことがあります。

看護師は専門職と言われることに少し懐疑的だった若かりし自分はとても納得したことを見ています。

それから〇十年後、私が考える看護師の専門性について書いていきたいと思います。

誰でもできる仕事

SNSの主張を見ていると、医療行為以外の例えばベッド周りの環境を整えることやシーツ交換などが看護師でなくてもできることと考えている人が多いようです。

ドラマや映画でも、できる看護師として描かれるのは、救急の事態に迅速に対応して、医療処置の介助にも卓越した技術を持つ人が多いですよね。

かっこいいしわかりやすいから。

私が勤める看護科の学生でも、「ドラマでかっこよかったから入りました。」という子がチラホラいます。

でも、看護の仕事が救命にあるとイメージで看護師を養成する学校に入って、まずしょっぱなに教えられることは実は環境整備とリネン交換なんです。

環境整備にリネン交換！思ってたんと違う！

と、ギャップを感じる人もおおいんじゃないかな。

そしてそんなこと、看護師じゃなくてもできるやんと思うのも無理はないです。

確かにそうなんです。

ただ「シーツを替える」「ベッド周りを綺麗に整える」だけなら、たぶんホテルのハウスキーパーさんの方がよっぽど綺麗です。

でも、そこが病院で患者さんが寝ているベッドとなると話は変わります。

たとえば、ちょっとしたシーツのしわが寝たきりの人にとっては褥瘡の原因になる、今シーツを替えないといけないベッドに寝ているその人が、どの程度動けない人なのか、どんな皮膚の状況でどんな風にシーツを敷くのが最適なのかを考えないといけません。

ベッド周囲を整えることにも、そのベッドを使っている患者さんがどの程度動けているのかを把握して、どうしたらコケたり混乱したりしないで安全に過ごせるのかを考えて工夫しないといけないです。

そしてそれを考えられるのは、医療の知識や人間のとらえ方を勉強して資格を持った看護師だからこそできることなのではないのかなと考えます。

専門性とは

看護の専門性が医療行為だけでは語りきれないのは、看護が本来人の生活を支える仕事だからです。

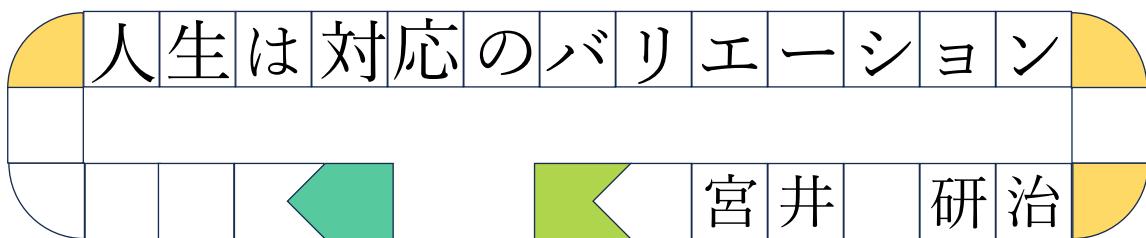
治療は短い時間に行われる“点”的なものですが、患者さんが過ごしている多くの時間は日常生活です。その日常生活が整っていかなければ、治療の効果も十分に発揮されません。清潔、休息、食事、排泄などなどが整ってこそ、患者さんは回復に向かえるのです。

患者さんがよりよい環境で一日を送れるよう、生活の基盤を支えることこそが看護の専門性だと考えています。

でも冒頭のSNSでの主張「看護師の仕事が 雜多すぎる！看護師でないとできない仕事に専念できるようにするべきだ」にはどうしたら対処できるのでしょうか。

看護の専門性を理解した看護師が、この人はこういうところに気を付けてこのようにシーツを整えてほしいと依頼して、そのようにしてくれる看護助手のような人が増えればいいのかなあ。

人が十分にいればそんな意見も出てこないのでしょうが、これから少子化がどんどん進んでいくとどうなるのか、また別の機会に考えようと思います。



-第11話 続・面接再考（最高！）-

「対応のバリエーション」は、私たちが仕事で出会う様々な「対応」場面をロールプレイで再現し、いろんな対応の仕方を試してみて、感じたことを自由に話し合おうというワークショップ式体験学習です。ゲームみたいな感覚でみんなで楽しみながら、実は、その中から何か日常の業務に役に立つものを持って帰っていただけたらと思っています。　（「そだちと臨床」研究会主催 対応のバリエーション勉強会のお知らせより）

もう、齢 66 であります。常識的、年齢的なことを言えば、十分年寄りです。しかしながら、この常識が近年、崩れてきております。80 歳でますますご活躍、90 歳はどこ吹く風、といった方を自分の身近に見知ることからも、人生 100 年は単なる標語ではないことを実感する今日この頃です。統計的にも、100 歳人口が 10 万人に近づいていることを知るにつけ、いやいやまだまだこれからと思ったりします。その後の記事で、その 10 万人の 8 割が女性と知り、やはりそろそろ店じまいの準備かと意気消沈したりするお年頃となりました。

1.お世話になってきたもの

前回の面接の話からの続きです。この連載の 1 回目、2 回目で対応のバリエーション勉強会について取り上げさせてもらいました。また、その勉強会の仕組みを考える上で、ベースに流れる考え方として「解決志向」があると勝手に思っています。また、3 回連載でお送りした「岡田隆介論」の中にも「解

決志向」について触れるくだりがあったと思います。かように、私の面接では利用活用させてもらっている心理面接における理論であり、心理療法です。今は、利用活用というより大袈裟でなく、自分の血脈に流れていると感じています。なぜそこまでになったかと言いますと、突き詰めれば人の相談を受ける上で、役に立つと実感した結果だと思います。それは自分で感じることに加え、相談者さんにも時々、直で尋ね、その返答からでの納得でもあります。相談者さんのリップサービスもあるでしょうが、全く役に立たない場合は少ないと思います。もちろん、他のやり方(分析的な立場や、認知行動療法をベースにした立場)との比較ではありません。言ってしまえば、主観です。それで、今回はいつもお世話になっている「解決志向」について改めて取り上げようと思います。有難いことにいろんな場所でいろんな立場の人々に「解決志向」の話をし、それを体験してもらうエクササイズや、ロールプレイの研修会をしています。「解決

志向」の良さのひとつでもあります。何か突飛なことをさせたり、聞いたりするのではなく、普段の問いかけや観点がほとんどです。だからこそ、誰もが取り入れやすい考え方であり、物事に対する姿勢だと思います。思想や哲学と言ってもよいけど、あまりにも大仰になりすぎる気がします。先程も出ましたが、「人生における物事の見方のあるヒント」というのが、現時点ではしつくりきます。

2.インスーさんへのリスペクト

皆さん、インスー・キム・バーグさんをご存知ですか?「解決志向」を少しでもかじった方なら、そのお名前ぐらいはご存知でしょう。

インスー・キム・バーグ(1934-2007)は韓国・ソウル生まれの心理臨床家・ソーシャルワーカーで、少年期に朝鮮戦争を経験し、人が危機や困難の中でも前進できる力への関心を深めました。渡米後はウィスコンシン大学でソーシャルワークを学び、ミルウォーキーで家族療法の臨床に携わりました。夫スティーブ・ド・シェイザーとともに解決志向ブリーフセラピー(SFBT)を創始し、家庭内暴力、依存症、児童虐待など難治性の高いケースにも効果を発揮する実践的アプローチを確立しました。世界中で研修を行い、多くの専門家を育て、短期療法の発展に大きく貢献した先駆的臨床家です。

こんな大変なヒストリーを抱えた偉大なる方だとは露知らず、当時、家族療法を学んでいたことから、インスーさんのワークショップにも何度か参加させてもらいました。

だいたい20年以上も前のことですから、ずいぶん以前のことになります。しかしながら、その声や仕草は、自然といま目の前で再現されているかのように蘇ってきます。それは、たぶん、あまりにも彼女の語りかけが自然で、優しく、気取らなかったからだと思います。どこかその辺にいる市井の人、身近だけど、品の良さがあり、かつてどこかで出会った人、まさにその印象です。DVDで見かける彼女も、講演会で壇上に立つ彼女も、プライベート(知る由もありませんが)でも、たぶん、どこを切り取っても、変わりなくインスーさんであるのだろうと思います。これは、彼女の外見がアジアのそれも、日本や韓國のおばちゃんの良いところと共通しているからに他ならないと思います。一方、小柄で穏やかで親しみやすいといった形容と同時に、その小柄な身体とは相反するようなエネルギーとパワーを感じさせられました。それは、彼女の面接における質問の仕方や態度に表れていたように思います。「解決志向」とは、クライアントの強みや資源を自身で気づいてもらうことを目的とした、セラピストによるインタビューだと私は思っています。そのために、質問について、非常に考えられ練られた心理療法だと考えています。面接する彼女は自然に、そして積極的に、でも無理からに切り込むのではなく、タイミングを計りながら、クライアントに質問をしていきます。ここまで書いて気付いたんですが、彼女の質問の素晴らしさのひとつは、"間"ですね。矢継ぎ早の質問ではなく、答えが途切れれば、少し置ける、絶妙の"間"だと思います。アジア的な"間"だと独断と偏見で言ってしまいましょう!そして、質問を諦めないことも、素晴らしさのひと

つでしょう。人は聞けば何でも尋ねてくれると考えるのは、人にも自分にも素直な人か、すごくおめでたい人だと思います。インターの面接でも、彼女の問い合わせに対して、口ごもったり、逆質問してきたりするクライエントやそうした場面はたくさん出てきます。その時彼女は決して諦めず、同じ内容を別の言葉にしてまた質問していきます。クライエントに質問して、首を傾げられたり、怪訝な表情をされたりすると、質問したセラピストも慌てるものです。たぶん、私もこの方法を使って30年以上面接をしていますが、やっと最近思った反応が返らなくとも、焦らないでいられるようになりました。でも、インターにはまだまだ足元にも及びません。また、人はすぐに答えてくれない場合、そのことについてじっと考えている場合もあるのだということです。上手に待てるかどうか、そして、次の一手となる質問に繋ぐこと、淀みなく流れていく水のような面接、それをインターから感じます。「Good!」「Wow!」「Amazing!」。わざとらしくなく、次の語りを励ますような、これでいいんだと思わせるようなそんな相槌、そういうことができる人に私はなりたい（宮沢賢治風）。

3. ポジティブシンキング(プラス思考)との違い

これは、研修などをしていて、繰り返し説明してきたことです。たぶん、解決志向というのは、肯定的に物事をとらえるやり方であると思われている人は多いと思います。楽観主義とかプラス思考呼ばれるものと同義であるというものです。これは、一部は当たっていると思いますが、楽観主義と解決志向が全く同じものであるとは思えません。

同じ方向は向いているのかもしれません。その例をひとくだり。スコット・ミラーという解決志向だけではありませんが、上手くいく面接、役に立つ面接についての研究者であり、臨床家であるアメリカのサイコロジストがいます。この人も一時期よく来日して講演会を開いていました。その人からの受け売りです。

「ポジティブシンキングと、解決志向の違い。みなさん、犬の糞(フン)はお好きですか? 犬は好きでも糞は嫌いでしょう。ポジティブ、それも超が付くような考え方の人が犬の糞を踏んだ時、その人は“あー、踏んだのが私で良かった、しかも、この糞はなんだかいい匂いがするじゃん、素敵な糞!”こんな感じ。では、解決志向の人は、どうか。“糞フンじゃった。やっちまったな。やだなあ。落ち込むよ。この糞は臭くて、靴もどうにかしなくちゃなんないけど、空を見上げれば、いい天気だし、いい気持ち。そうだ、これから大好きな人に会う用事があるんだ。楽しみが待ってる。おう、その前にこの靴なんとかしちゃお!”」

人生に対する肯定的な側面は同じですが、プラス思考の人は、犬の糞をなかったことにしようという方向にベクトルが向いていふとも言えます。一方、解決志向の人は、犬の糞を踏んだという事から目を背けてはいません。ただ、それ以外の自分にとって良いこと、役に立ちそうなことを探す方向にベクトルが向いていると言えるでしょう。人生は犬の糞を踏むような嫌な事(問題)は転がっているけど、ちょっと視点を変えれば青い空や楽しい約束(解決)が待っている。これが大枠で言えば「解決志向」であるという事です、とスコットさんは言ってお

りました。そして、これはポジティブシンキングを決してディするものではありません。犬の糞を踏んづけたことを、幸せに感じられたらそれはそれで素晴らしいと思います。ただ、これにはそれなりの修業がいるのでしょうか。リアリティという意味では、「解決志向」に軍配が上がるような気が私はします。

4. 差異の文脈のとらえ直し

「解決志向」をそれこそ志向していて、最近思うのは、この差異のとらえ方こそが解決であるということです。物事、出来事、人間、それを説明する言葉それぞれに差異があります。そもそも差異を見つけようとしなければ、差異自体存在しなくなります。差異はあるもの、そしてその差異の意味付けにより、差異の背景にある文脈も変わってきます。差異は差異を生んで、さらに、次の差異や行動の変容を生み、それが意識の変化にも再び通じていく。なにか書きながら自分でもよくわからなくなりましたが、つまり煎じ詰めれば「小さなことからコツコツと」と言うことでしょうか。西川きよし師匠、ありがとうございます。「解決志向」では決して十把一絡げ(じっぱひとからげ)にはしない姿勢が大事ということです。ただ、決して差異があることだけが大事というのではなく、差異のとらえ直しについて当事者(クライアント)に考えてもらうという作業が大事になってくるという事です。前の失敗と今回の失敗について「同じ過ちを犯している。何も学んでいない。また、次も失敗するに違いない」このような思考にとらわれるクライアントは多いでしょう。そして、確かに次の失敗の確率も高くなる。

例えば、こんな場合は、どうでしょう。スケーリングという「解決志向」の中核に位置する質問の投げかけ方を用いて会話してみましょう。

セラピスト(以下 Th)

「確かに同じ失敗に表面上は見えるけど、今回の失敗と前回との違いに点数をつけるとして、全く同じ、寸分違わない失敗を0点として、全然別もの、全く違う失敗を10点とすると、今は何点ぐらい?」

クライアント(以下 C1)

「えー、同じだと思うけど、全くと言われるとねえ.....。1点かな。」

Th 「なんで1点違うと思ったの?」

C1 「それは、今回のように失敗について考えることもなかったからね。ただただ、ショックで。考える余裕もなかった。たしかにそこは違うか。」

こんな感じでしょうか。つまり、Thが「同じ過ちじゃないよ」とか「失敗から学ぶべきこともあるよ」というように Th 自身の差異に対する意味付けを、先に言ってしまうのではなく、C1に考えてもらうという事が絶対に外せない要件になっているという事です。更にその違いは、次も必ず失敗するという固定観念にも搖さぶりをかけることにもつながっています。同じ失敗はしないように、ただただ成功、そして成功についても十把一絡げにしていた C1 が、成功の違いについて考え始める切っ掛けになるやもしれません。成功それ自体があるわけではなく、成功を自分なりにビルドアップしていく可能性が広がる、なかなかそう上手くは行きませんが。成功確率は確実に上ると予想します。

今回は、私が面接する上で役に立ってき

たし、これからも大事にするであろう「解決志向」を、自分なりの言葉で表現することを試みました。前述のスコット・ミラーは、一つの技法に執着しないで、更に役に立つ技法が現れたなら躊躇なく、それに乗り換えなさいといった意味のことを以下のように言っていました、「技法と付き合ってもよいけれど、結婚してはいけません」。“技法”的ところを人に置き換えててしまうと、ちょっと問題ありの言いぐさでしょうが、技法のことですから大丈夫でしょう。面白い例えだし、その通りだと思います。しかし、書いてきたように「解決志向」は単なる技法ではなく、物の見方、延いては人生に対する姿勢みたいなものであるように感じます。冒頭では否定しましたが、やはり哲学と言ってもよいのかもしれません。

今回、個人的にはインスター・キム・バーグ女史の思い出に浸ることができて幸せな回でした。

けふばあちゃんからの手紙(6)

— 治郎くんへ —

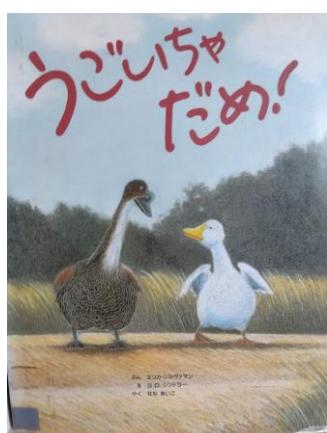
(じやりんこ文庫 乾 京子)



急に寒くなってきました。琵琶湖に次々と渡り鳥がやってきています。湖北野鳥センターの冬の三大人気者、コハクチョウ・オオヒシクイ・オオワシが揃ったと報じていました。けふばあちゃんも10月末行って、オオヒシクイとコハクチョウは見てきました。その時は、オオワシのおばあさんは、まだ来ていませんでした。

マガモ・オナガガモ・カンムリカツブリ・ヒドリガモ・キンクロハジロ・オオバンなど膳所公園や琵琶湖博物館のあたりや、琵琶湖岸のあちこちでたくさんの水鳥がゆったりと羽を休めている姿をよく見かけます。琵琶湖に冬到来ですね。

いつだったか？新刊で買った絵本、『うごいちやだめ！』という絵本をしばしば文庫の時に読んでいたことがあります。治郎君、覚えていますか？



アヒルさんとガチョウさんが、「わたしの方がおよのがじょうず」「ぼくの方がはやい」「いや、わたしのほうが…」「いやいや、ぼくのほうが…」と、ついに「うごいたら まけ」きょうそうをしましようよ。うごいちやだめなの。しゃべっても いけないの。はねいっぽん もぞもぞさせちゃ だめ。これにかったほうが、ほんものの、ひとりきりの チャンピオンの なかの チャンピオン、ってのはどう？」

で、ハチが来ても、ウサギがぴょんぴょんしても、カラスにつつかれても、風に吹き飛ばされても動かない。とうとう、キツネに袋に入れられて、鍋に放り込まれそうになって……

チャンピオンの中のチャンピオンは だれだったのでしょ？

思い出したかな？

さて、そんなある日、一郎君、治郎君とひろこちゃん姉妹が文庫にちょっと早くやってきて、おやつにミルクと手作りケーキを食べていた時のこと。

(ここから日誌より)

ひろこちゃんの妹ののんびりふみちゃんだけ食べ終わらない。

そこで、ひろこちゃんの提案でこんなゲームが始まりました。

「ねえ、ふみちゃんが終わるまで、『うごいちゃ だめ』よ。おばちゃんたちもだよ。」

「ねえねえ、しんぞうはうごいているよ。息もしちゃだめ？」

「息はどうぞ、しんぞうも うごかしてください。でも、からだは うごいちゃだめなの。おばちゃんは きつねさんだから うごけるの。いい せいの！！」

一郎君は、おじそさまに なってしまう。治郎君もおじぞうさま。ほんとうに かわいいおじそさま。

そこへ 一郎君治郎君のおかあさんが 入ってこられて、あたまを なでなで、

「わあ、おじぞうさま！おがませてもらいましょ。なむなむなむ……。」

後でやってきた子どもたちが、風さんの役をやったり、カラスになったり、うごいちゃだめの4人は、ひっくり返っても そのまんま。『うごいちゃ だめ』が絵本から飛び出して、子どもたちの世界に溶け込んだ時間でした。



そして、この「うごいちゃ だめ」ごつごは、数年にわたって文庫でしばらく続いたのでした。



この写真は、治郎くんが、じゃりんこ文庫にくるようになったクリスマス会の写真です。どこにいるか分かりますか？

1歳か2歳、そんな頃でした。お母さんが大好きで、おとなしくて優しい、そんな治郎君。治郎君が幼稚園の時、妹のマコちゃんが生まれて、お兄ちゃんになりました。お腹の大きい時のお母さん、そしてまだ首の座らない妹のマコちゃんを抱っこ紐にくるんで、治郎君のお手々をつないで、

毎日毎日、坂道を下っていく治郎君とお母さんをよく見かけました。幼稚園の方針で、「歩いて登園」が規則だったそうです。それこそ、雨の日も雪の日も。(えらいなあ、おかあさんすごい！！)って、けふばあちゃんは、みていました。「困ったらいつでも言ってね」でも、そんな日は一度もありませんでした。もっとも、そんな登園の毎日も楽しい語らいのひとときだったのかもしれませんね。

日誌を広げて読んでいると、ほとんどの文庫の日に一郎くん、治郎くん、マコちゃんの名前がのっています。(おかあさんのお仕事再開まで)治郎君のご近所さんの姉弟と一緒に来て、ロウを溶かしてアルミで型を作って、新しい蝋燭を作ったり、ひろこちゃん姉妹とおはなしおばちゃんのストーリテリングを楽しみに待っていたり、そんなのんびりしたじゃりんこ文庫も、4年、5年と経つうちに、毎回20人、3

0人という日が普通になってきて、しかも、元気のいい男兄弟たちが何組もいて、にぎやかで、時には喧嘩も始まるという日もありました。そんな時も、余り動ぜず小さい子(特に妹のマコちゃん)の面倒をみたり、気の合うお友達と一緒に本を読んだり、積み木や工作をして遊んでいました。

クリスマス会では、「さんびきのやぎのがらがらどん」のナレーターをしたこともありました。紙芝居や手品、人形劇、腹話術もあったね。覚えているかな?何が楽しかったかな?



『さんびきのやぎのがらがらどん』の絵本を読む治郎君



腹話術のお人形とおばちゃんが手品をしてくれて、でもなぜか大笑い
じやりんこ文庫10周年のお祝いを自治会館借りて、人形劇や紙芝居もしてもらったね。



夏の遠足(万博公園)や春の遠足(相模川上流へ)



恒例の春の遠足は、相模川上流へ。
竜が丘から池の里、住宅街を通り抜け
ると 田んぼが、見えてきて、側の水
路にオタマジャクシをみつけたり、
サワガニをみつけたり、そのうち右手
に用水池がみえてくると山道に入る。
道々ネーチャーゲームのビンゴゲ
ームやカモフラージュというゲーム
をしながら相模川源流のお不動さ
んで昼食。ここで動物あてゲーム。

治郎くんは、この動物あてゲーム好きだったなあ。雨の日のじ
やりんこ文庫の日には、「おばちゃん、どうぶつあてゲームしよう」

って、言ってたんだよ。フフ、覚えていることあったかな? ではまたね。お元気でね。



心理臨床における多重関係を考える

地方のありふれた心理士の日常から

本林 友梨

2つの「私」が混在した日～職場にて～

先日、職場で地域の方に向けたイベントが開催された。各部署からブースを出展したり、地域の飲食店の方も出店してくださり、盛況であった。私も所属部署のブースを担当させていただいた。私の部署のブースは子どもたちがよく来てくれた。一人ずつの体験となるものであったため、一人ひとりにかかる時間も多く、たくさんの子供たちが並んでくれた場面もあった。私の役目はその体験の説明と、子どもたちを盛り上げる声掛けを行うことであった。声を張り続け、気づけば喉がカラカラになるほどだった。酸欠のような感覚もあったし、自分で何を言っているか分からぬ状態にもなったりした。そんな中で、列の中から「〇〇（我が子の名前）のママちゃうん？」、「〇〇のママや、〇〇のママや！！」と小さくもない、大きくもない、ただしつかりと私の耳に届く声が聞こえてきた。『あ、子の保育園のお友達やな』と瞬時に理解した。イベントに来てくれた嬉しさと、「〇〇のママの私」・「ここで働く私」（すぐ隣には職場の人がい

る）が混在し、戸惑う気持ちが生じた。どうすること（特別なこと）もできないし、どうする（特別なことをする）必要もないのに、なぜか『どうやってやろう？』などということを考えた。結局、知っている子を前にすると必要以上にテンションを上げることには自然とならず、普段の「〇〇のママの私」で盛り上げ、何事もなく終了した。

やはり私は「～の私」が複数生じてしまうと、居心地が悪くなるようである。この場面では子の保育園送迎時の「〇〇のママの私」と、テンションを上げ切り職務を全うしようとする「働く私」が混在した。

家族が連れてくる関係とともに生きる

心理臨床における多重関係を自身の心理臨床のテーマに掲げて1年が経過した。この1年も、日常生活の中で幾度とクライエント（以下Cl）と出遭ってきた。また、それ以上に家族（夫や子）の関係から知るようになった人とも多く出遭った。知人の内訳を考えると、Clや私の知人のような私と直接的な関係の人よりも、家族の関係から知

るようになった人の方が当然ながら多い。そのためそのような経緯で知り合った人と生活の中で出遭う機会も多くなる。家族は私をいろんな人と出遭わせてくれ、世界を広げてくれる。ただ同時に、心理臨床家として生きていくうえでの私が困難と捉える多重関係も連れてくる。なんと悩ましいことなのか。家族を持つことは私の人生において歓迎されるべきものであると感じているが、心理臨床家としてはそう思えないことが、悲しい。このような気持ちを抱きながら、この先も心理臨床家として生きしていくことは、苦しい。では、悲しまなくてよいように、悲しまなくてよいようにするには、どうしたらよいのだろうか？

日常生活の中で知人と出遭うたびに、心理臨床における多重関係について考えてきた。そして改めて思った。『心理の臨床家の自己とその他（プライベート）の自分を綺麗に分けることなんて、“ここ（小さな町かつそこで生活を営んでいる者という環境）”では不可能なのではないか』と。心理臨床においても心理士以外の自己の要素を含む場合があることを認めておく必要があるし、プライベートにおいても心理臨床家の要素を含む場合があることを認めておく必要であるのではないか。そうやって日々臨床を重ねながら生活も営んでいく中で、心理士として成長し、一人の人間としても豊かになっていくのではないか。というか、そうせざるを得ないのではないか…。

私は多重関係に注目し、①心理臨床における多重関係の実態②多重関係を経験する心理士の実存的な視点③多重関係による心理臨床への影響、について考えたいとした。しかし、前述したように、私の心理臨

床における多重関係についての心情は大きく変化している。当初は自身の心理臨床と多重関係をなんとかして切り離し続けようとしていた感覚があるが、現在は無理して切り離すよりはありのままの環境を認め、その体験を踏まえて成長していかなくてはならないという感覚が生じている。このような変化の中で、そもそも“ここ”で心理臨床をしていくということはどういうことなのだろうかということを知りたい気持ちになっている。家族を持つという私の人生の喜びが、私の心理臨床家として弱点とでしか捉えられずに悲しみ、悲しまなくてよいように、まず「生活する小さな町で心理臨床を行うこととはどういうことなのか」ということをリサーチクエスチョンとして改めて掲げ、探求していきたいと考える。

生活する小さな町で心理臨床を行うということ——先行研究からの視点

生活する小さな町（「地方」「田舎」「農村部」「小規模コミュニティ」などの言葉で言い換え可能と考える）で心理臨床を行うこととは、一体どういうことなのだろうか。心理臨床家にどのような感覚をもたらせるものなのだろうか。それは心理臨床そのものや心理臨床家の自己にどのような影響を与え、どう意味付けされているのだろうか。

このテーマに関連する、わが国における先行研究を探してみた。しかし、なかなか見つからない。我が国の心理臨床における多重関係の実態に迫った先行研究がみられなかった（対人援助学マガジン 59号 第1回目連載より）ことと同様に、このテーマにおける研究も我が国ではありませんなされていないようである。海外では心理臨床家の実践

の場が農村部であることに注目し、それに伴う課題に焦点を当てた研究はいくつかみられる。例えば Fruhauff (2006) は、農村と都市という環境が心理臨床家の自己開示の頻度にどのような影響を与えるか調査した。農村は結束の強い場であるため、そこで活動する心理臨床家の自己開示の機会は都市の心理臨床家のそれと比較し多いことを仮説としたが、結果として自己開示を行う機会の増減は環境に起因するとはいえないと考えられた。しかし、他の注目すべき示唆として、農村の心理臨床家は都市の心理臨床家よりも、意図しない自己開示をより多く経験していることが示された。また、農村の心理臨床家は都市の心理臨床家よりも、意図しない自己開示が臨床に良い影響を与えていると感じる場合が少ないと示唆された。さらに、農村部や小規模コミュニティで生活、臨床を行う心理臨床家が抱く倫理的葛藤についての調査を行った Shank & Skovholt(1997)の研究がある。倫理的葛藤として社会的関係やビジネス関係における多重関係などが挙げられたが、心理臨床家自身の家族への影響も認められることにも言及した。農村地域では、生活の中で心理臨床家が CI やその家族と出遭う機会が多いため、心理臨床家の家族が、心理臨床の守秘義務の延長線上に置かれる状況がある。そのような場合に自身の家族に十分な状況の説明もできなかったり、家族の友人宅に遊びに行くような生活者として当然行うような行動にも慎重にならざるをえなかったりするという現実を示した。

これらの先行研究から、生活する小さな町での心理臨床を述べるには、心理臨床技術に関する視点や自身の家族に関する視点

など、様々な水準の視点がキーワードとなるであろうことが推察できる。私自身、上記の研究で示されたことはかなり実感として持つことができるものである。では、実際のところ我が国ではどうなのか？私以外の生活する小さい町で臨床を行う心理臨床家はどのような経験をし、どのように感じているのであろうか？

生活する小さな町の心理臨床探求への姿勢 ——倫理的配慮と誠実さ

本研究を展開していくうえで重要なことの一つに、倫理的配慮がある。例えば、小さい町（には限らないかもしれないが）で臨床を行う心理臨床家にお話を聞く必要があるが、内容には心理臨床における基本的な倫理ではカバーできない部分に触れるものが多くあるであろう。そんな中であるからこそ、まずお話くださることとなる心理臨床家の方に不利益がないようにすることが絶対である。そのためにはかなりの準備が必要であろう。本研究に関連するような倫理を確認することはもちろん、この研究が持つ倫理的課題に対する困難や迷いに悩みつつもしっかりと向き合い、誠実に取り組む姿勢が不可欠であると感じるのである。

-
- Fruhauff, K. P. (2006). *Exploring the impact of rural and urban settings on therapist self-disclosure* [Unpublished doctoral dissertation]. George Fox University.
- Shank, J. A. & Skovholt, T. M. (1997). Dual-Relationship Dilemmas of Rural and Small-Community Psychologists. *Professional Psychology: Research and Practice*, 28(1), 44-49.



そうだ、お米を作ろう。

どんどん上がるお米やお野菜の値段。家庭菜園、ベランダ栽培、水耕栽培等家庭でできる食費節約術は数あれど、思い立ってお米を作ろうとする人はほとんどいないと思います。実際、私自身も祖母から受け継いだ畑で野菜は育てていますが、田んぼまで手を出そうとは思えない…。しかし、自然体験や生活科の学習においてはお米作りって結構メジャーで人気の高い取り組み。バケツやタライで簡易田んぼを作ったり、地域の方に田んぼをお借りして年間通して稻作を学んだりいろいろな方法があります。「お米を作る」とひとことで表すことができますが、細かく工程を分けると田植え、草引き、稻刈り、脱穀、精米などなど数多くの工程があるので幼児期の子から小中学生まで幅広い年代で楽しめるプログラムですもんね。今回は5月から10月にかけて続いているお米作りのプログラムから田植えと稻刈りについてのおはなし。

5月 にゅるにゅる田植え祭り

まだ少し風がひんやりする5月に預かり自然体験diveの活動で田植えに挑戦。農家さんに田んぼの一角をお借りし、年間通してサポートしていただきます。この日集まった小学生から幼稚園児もメンバーは超活発。田植えは午後からの予定で午前中は春の自然を観察しよう！というプログラムでしたが、カエル探しに夢中になるあまり活動開始1時間

もしないうちにどろんこに…。一応、遊びはじめは靴が汚れないように、服が濡れないように体を田んぼギリギリまでうーんと伸ばしてカエルを捕まえようとしていたんですけどね。もう、一回濡れたり汚れたりするといい意味で「どうでもいいやっ！」ってなってしまうみたいです。土、水、生き物とたっぷりじっくりかかわる経験ってその人の原体験になる部分。「汚れるよ！」「危ないよ！」って言いたくなる気持ちはぐっとこらえてとこんやりたい思いに寄り添います。



自然の中で遊びながら毎回思うのは子どもたちの遊びに道具やおもちゃなんて必要ないのかもしれないってこと。この日はカエル探しがメインの遊びになっていたのですが、周りのほとんどのお友達が大声を上げながら田

んぼを駆け回る中田んぼのすみっこで黙々とどろんこを丸める子たちが…。お団子作り、おにぎり作り、泥と水の配合を何度も調整して遊んでいると形が作りやすいちょうどいい粘度になる田んぼの土。田植えまでに混ぜ混ぜされていない土は遊びはじめはなんとも言えないドブ臭いにおいがするので「くっさ…」と懸念する子もいるのですが、触れば触るほどイヤなにおいが消えていくのがとっても不思議。きっと子どもたちはその感覚を五感をフル活用して体感しているのでしょうか、ゾーンに入ったように黙々と土を触り続けていました。



午後になってお待ちかねの田植えがスタート。午前中からたっぷり土に水に親しんだ子どもたちは大人の心配をよそに、抵抗なく裸足や靴下のままズンズン田んぼの中へ。「なんか嫌やな…」と長靴を履いて田んぼに入った子も泥んこに足を取られてからは「長靴ない方が歩けるやん！」と気持ちを切り替えズンズン！「お米の赤ちゃん」と苗を指でつまんで、農家さんのレクチャー通りスープと田んぼに手を入れます。グッと田んぼの土に苗を刺せると浮いてこないんだとか。今年の田植えメンバーは超センスがよかったようで、両手に用意していた苗がみるみるうちになくなっていました。田んぼの上から苗の補充係をしていた大人の方がヘロヘロ「たぴちゃん！早くお米の赤ちゃん投げて！」と言われるがままにアシスタントに専念させてもらいました。この日は予定を大きく上回る面積

の田植えができ感動！収穫をお楽しみに解散となりました。

10月 これ、この前の お米の赤ちゃん？

時は流れてあっという間に10月。猛暑の影響でどうなることかと思っていたお米ですが無事、収穫できるくらいまで育ちました。5月の田植えに参加していたメンバーの中には成長した稻を見て「え、これがこの前のお米の赤ちゃんか？」と成長に驚く子も。この日も大人がなにをするまでもなくカエル探し始まり…稻刈りが終わったばかりの広い田んぼを運動場のようにダイナミックに使い、「どこにそんなに隠れてたん…」と言いたくなるほどのカエルを捕まえてくれました。

田植えに限らず染物や火起こし、土遊びなどひとつ大きなプログラムを設定して遊ぶdiveの活動において自由遊びとしての生き物は子どもたちにとってウォーミングアップ兼オリエンテーション、アイスブレイクの役目も果たしているのかもしれないと思う今日この頃。何度かdiveに訪れる子にとっては「今日のフィールドはどんなところかな…」「前に来たここ、前みたいに生き物も残ってるかな…」と遊びを通して確認しているような。初めて参加した子にとっては生き物やスタッフ、友達を介して今日のフィールドに慣れていくような。そのフィールドに生きている生き物に受け入れてもらえる感覚が子どもたちの内面になんらかのいい影響があるといいなと思いながら見守っています。(まあ、全滅させてやる！と言わんばかりにそこにいる生き物を狩りまくっている方々も数名おられます…)

俺らがやるから！ 見てたらいいから！

そんなこんなで10月のdiveもカエル探しパーティーをメインに水遊びに発展するというカオス状態からスタート。おいおい、午後から稻刈りをしてくれるのか？と心配になる

ほどの熱中っぷりでした。農業体験系が大人にも子どもにも根強く人気な理由の一つに道具のかっこよさ、物珍しさがあるように思います。ほら、コンバインを熱烈に支持している3歳児男児とか、毎年どこの園にもいるじゃないですか…（経験談）この日も農家さんが「はさかけ」のために鉄パイプや電動ドリルを使いだしたことをきっかけに小学生男子が目の色を変えて飛びついてきて「なんなんそれ！」「やりたいやりたい！次変わつて！」と大騒ぎ。



傍にあった稻刈り用の鎌を見つけてさらに気持ちに火が付き、稻刈りモードに切り替わったみたい。その分野特有の道具とか、普段使いそうで使わない道具とか実際のプロが使っているところを見たり、自分が使ってみたりすることでいい意味で印象がガラッとかわりますよね。比較的いろいろな物事がバーチャルで体験できるし、なんなら体験、経験しなくともいろいろなメディアを通して「知ったつもり」になってしまう現代っ子たち。昔の道具に感動！でも」それ以前に鎌やドリル、ハンマーなど現代で使われている道具も生で見て感動！なんだろうな…と思います。ハンマーやのこぎり、薪などはキャンプやアウトドアに馴染みのある子にとっては生で見る機会もありますがそうでもない子たちがこぞつていうのは「〇〇（ゲームのタイトル）で見

た！」が多いので。本物に触れる機会ってすごく貴重になってきているんですね。

例にもなく鎌の魅力に取りつかれた小学生男子たち。はじめて握る鎌、押したり引いたりしながらどのポイントに当てるか刃ざわりよく鎌が動かせるのか、稻のどの部分を掴むと危険ではないのか、友達同士でどうこう言いあったり、一人黙々と研究したり真剣な表情です。また、軍手を履きながらの作業では素手とは違う感覚。思ったように握れない、手が滑りそうになって怖いなど普段なかなか味わえない感覚に苦戦していた男子たち、お昼休憩でチャージしたパワーをフル活用して稻刈りをしてくれました。好きこそ物の上手なれという言葉通り、興味がある物事に対する成長スピードは目覚ましいもの。あんなにぎごちなくギコギコと手を動かしていた子たちが20分もしないうちにグッと鎌を引いて一振りで稻を刈れるようになりました。彼ら曰、上手に刈れた瞬間って何とも言えない爽快感があるんだとか。これってまさに「手ごたえ」ですよね。いいね、いいね、最高だねと褒めればほめるほど彼らのモチベーションがアップ。作業を始めた当初は少し気怠そうだった小学校中、高学年が「俺らで全部刈るから手伝わんといいで。」「小さい子らは見てたらいいわ。」とキリッとした表情で伝えてくれたときの頼もしさと言ったら。手ごたえ、達成感、自分はできる！という効力感…机上では得ることができない自然体験ならではの歓びに出会う子どもたちにたっぷり寄り添うことのできた米作りでした。





地球と宇宙の文化心理学

第3回 解題：「第二の皮膚」（1）

土元 哲平

はじめに

本稿では、連載第2回の詩「第二の皮膚」の解題として、ある人（筆者である私）にとって、月や地球がどのように経験されたのかをオートエスノグラフィー的に探究する。オートエスノグラフィーは、自らの経験を出発点として、その主観性と文化的・歴史的・社会的な結びつきを考究し、表現していく実践である。私たちは、夜空に浮かぶ月が時・場所を超えて不变であること、地球で生きているということを当たり前のものとして生きている。しかし、現在の宇宙開発の急速な進展を思えば、その「当たり前」が変わるのは、決して遠い将来ではない。なお、本解題は第3回と第4回の二回にわたって展開する。

風景の倫理：不可逆な変化を前にした「月」への気づき

「第二の皮膚」の詩を書こうと思ったきっかけの一つは、月という私たちの風景が、宇宙開発の進展とともに不可逆に改変されていくことに対する、「風景の倫理」ともいべき視点を提示したいと考えたことがある。連載第1回で述べたように、私たちの世界は「文化化された自然」に溢れおり、それらの自然は私たち自身と深く結びついている。にもかかわらず、そういった自然はあまりにも「当たり前」にそこにあるように思われる所以、失われなければ「その自然がある（存在する）」という事実には気づかないほどである。

月も、まさにそのような自然の一つである。しかし、それだけでなく月は、時代や環境の局所性（ローカリティ）に左右されないという、特殊な位置を占めている。それは時代を超え、私たちが生きる地球の局所性という制約を超えて¹、ほとんどいつでも、どこからでも見えるのである。むろん、この意味では、太陽や火星、あるいは北斗七星を構成する星々など、「見る」ことの時空間を超越した天体は月に限らない。

それでも、なぜ月だけが特別に感じられるのだろうか。その理由は、第一に、私たちが地球上から月の「表面」を「眺める」ことができるということである。これは、太陽や、他の天体には生じない点である。第二に、地球上から表面が見えるということは、地球から見た月の景観が「改変可能である」ということを意味する。当たり前のように聞こえるかもしれないが、アポロ計画以前は、月面の見えが変わるということさえ、想像もできなかっただろ

¹ 地球における自然環境はあまりにも多様であり、私たちが共に生きる自然の風景や、自然との関係性のあり方は、それぞれがローカルである。しかし、月はこうした地理的制約を受けず、ほとんどあらゆる場所から見ることができる。

う。つまり月の改変可能性は、現代において「発明され」（基地建設や長期滞在の技術）、急速に高まっているといえるだろう。

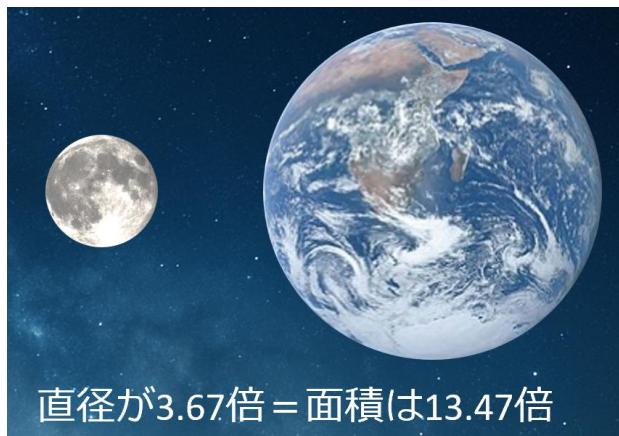
さて、近い将来、人類が月面に基地を築き、有人ローバーによる長期滞在を実現する未来が訪れる。私はそこに人類の大きな可能性を感じる一方で、風景という視点に立つと一抹の不安も覚える。未来の風景を想像すると、月が「これまでとは異なる存在」へと変わりつつあるかのような感覚が生まれるのである。それは決して善悪の問題ではないものの、技術や政治が主導する宇宙開発が加速するなかで、こうした風景に対する倫理的な議論は置き去りにされてはいないだろうか。この揺らぎが、私が詩を書く原動力となったのである。

月と地球を詩学する

2025年7月11日の満月の夜。その日はバックムーンとも呼ばれる満月だった。私は、いつもより一回りも二回りも大きく見える月に圧倒されながら、月面上から地球を見つめている自分を想像していた。後述するが、この時に月に圧倒される感覚も、振り返ってみれば幼少期の頃以来に感じた、奇妙な感覚だった。

私の「実験」は、「アポロの宇宙飛行士が見た地球」を、自分の身体感覚として経験しようというものだった。なぜなら、月で人間が暮らす未来を思い描くとき、まず「風景」として立ち上るのは月の地表そのものではなく、「月から見える地球」だと考えたためである。そしてその「地球」は、私たちが地球から眺める「月」よりも、はるかに美的で、深い意味を帯びた風景となるだろう、と確信していた。

地球は月の直径の約3.7倍、体積にして約13.5倍。月は腕を伸ばすと小指の半分ほどの大きさに見えるが（視直径で約0.5度）、地球は小指2本分よりやや小さい程度の大きさになる（図1）。私は毎日のように、自分の指先と月を重ねて地球の大きさを確かめていた。光と影が絶えず入れ替わり、自転しながら刻々と姿を変えていく地球のダイナミックな存在感は、地球上での月とは比べものにならない。雲は形を変えながら流れ、太陽光が海面を照らし、その反射が青い地球光となって月面をほのかに照らす。月に立つ者にとっての地球は、平面的な風景として「眺める」ものというより、むしろ有機的な生命体として「存在する」ように感じられるかもしれない。



直径が3.67倍＝面積は13.47倍

図1 地球から見た月と、月から見た地球
(月と地球の画像の出典：NASA)

しかし、宇宙飛行士の語りやメディア（YouTube やアポロ計画のアーカイブ写真）を通して、どれほど「宇宙から見た地球の美しさ」を想像してみても、想像は究極的には現実の知覚には届かないことを知っている。この数か月、私は地球を手触りとして感じる様々な実験的試み——これを「地球の詩学」と呼びたい——を続けてきた。地球を何度も絵に描き、飛行機の窓から遠くの水平線を眺め続けても、宇宙空間のような無限の闇との対比のなかで、地球が命的な輝きを放つ姿にはなかなかたどり着けない。そこではじめて、地球には大気があり、あまりにも明るすぎるのだと気づくことになる。

思い返せば、幼少期の日課は、玄関先で父に買ってもらった望遠鏡を覗き込み、月を眺めることだった。月の肌理（きめ）は、どれほど見つめても飽きることのない豊かな風景だった。月の位置が変わるたび、望遠鏡の調整ノブを回し、地球が回転していることを身体で感じた。しかし私は、教育学や心理学へ進んだ頃から、月を眺める習慣をいつの間にか手放していた。ところが 2025 年から立命館大学 宇宙地球探査研究センターで、宇宙と関わる機会が増えたことで、私は久しぶりに「満月に圧倒される」自分がいることに気づいた。それは、かつて宇宙に憧れた理科少年だった自分に、巡り巡って再会した感覚だった。

地球と月、今の自分とかつての自分、——それらが同時に重なり合いながら、私はあの日の満月を見上げていた。

（次回へ続く）

参考

- 立命館大学 宇宙地球探査研究センター <https://esec.ritsumei.ac.jp>
- おすすめの地球俯瞰映像「Ultra High Definition (4K) View of Planet Earth」NASA Johnson (@ReelNASA) <https://youtu.be/oFDeNcu3mnc?si=YGm-WAdovha2Lfgx>

編集後記

編集長(ダン シロウ)

* 2025年秋の対人援助学会は西成／釜ヶ崎のレポートがとても面白かった。近年、あまり何も面白く思えず、学会参加してもハイハイなんて気分で帰宅することが多かったので、久しぶりに楽しかった。

会場の大坂キリスト教短期大学も、私のような大阪北摂文化圏(梅田／阪急沿線)馴染みの者には、異国感さえ漂う阿倍野界隈。天王寺駅からの経路の食堂も喫茶店も、ちょっと変わった体験の宝庫だった。前に訪れたときも感じたことだが、満載だった。

* スケジュールの巡り合わせだけのことだが、私的には今号の編集作業は余裕だった。仕事場泊まり込むことも多く、食事に外出する事が増えた。余裕があるので、上映中の映画ラインナップが気になる。その結果、「TOKYO タクシー」「平場の月」「爆弾」「秒速5センチメートル」と相当なペースで日本映画を観ることになった。面白いから良いのだが、これに録画したドキュメンタリーや netflix、AmazonPrime が重なるのだから大忙しだ。

* 300ページ余の web 雑誌が定期刊行される現状が安定しているので、最近ではちょっと緩い要素にも許容的だ。私事都合で休載の人が増えて、アップ日に数日の遅れが出たとしても、仕方がないと受け止めるようになった。手綱を緩めるとグズグズになるなんて、未熟な時期の話だ。安定期がマンネリ期にならないように、執筆者の皆様には緊張をと願っている。

編集員(チバ アキオ)

2023年「児童相談所と近接領域における 家族療法・家族援助の実際 第31回研修会 in 浜松」[児童相談所と近接領域における 家族療法・家族援助の実際 第31回研修会 in 浜松](#)で共演させていただいた作家

の村井理子さん。なんでも、学生時代に京都にいたころ、阪急京都線西京極駅の近くに住んでいたそうで、私が今勤務しているところの最寄り駅なので話が弾んだ。世代も同じで、お金のない学生時代、一人暮らしで元気がない時は駅前の当時の阪急そばに救われたそうである。私も阪急豊中駅前にあった阪急そばによく通った。村井さんとの出会いの前に読んだ『兄の終い』は村井さんのノンフィクションエッセイ。このエピソードには児童相談所もワーカーも登場し、そのため「児童相談所と近接領域における家族療法・家族援助の実際 第31回研修会 in 浜松」の企画担当、早野さんは村井さんへの出演オファーをし、快諾をしていただき、登壇してくださった。兄の子どもさんへのサポートをしてくださった児相の方々には心から感謝しているそうで、こうした分野のお誘いがあればそれにこたえることが自分の使命だと考えていると話しておられた。村井さんとの出会いをきっかけにかなり村井さんの本を読んだ。『エヴリシング・ワークス・アウト 訳して、書いて、楽しんで』『はやく一人になりたい！』『はやく一人になりたい！』『いらねえけどありがとう』『本を読んだら散歩に行こう』『全員悪人』『ふたご母戦記』『実母と義母』『家族』…。しっかり村井さんの影響を受けて、パックごはんを活用するようになった。その『兄の終い』を原作にした映画『兄を持ち運べるサイズに』(主演:柴咲コウ、オダギリジョー、満島ひかり他)『兄を持ち運べるサイズに』大ヒット上映中 脚本・監督:中野量太(『浅田家!』)を観に行った。「家族」が持つ、華やかさだけでは語れない側面もしっかり取り上げられていて、しかもユーモアもあってとてもよかったです。家族に厳しい時であればあるほど、家族を実感する、させられるというのもあるだろう。家族には物語が必要であると団編集長はいつもおっしゃる。その言葉が染み入る状況も経験してこそ、やっとわかる。これでもまだ序の口だということもわかつてくる。そんなことを考えながらの 63 回目の編集作業でした。

編集員(オオタニ タカシ)

今号の編集会議のテーマの一つは、時流とどう向き合うか、という点であったように思います。世の中に

時流があり、その時々でもてはやされ、いつの間にか消えていくものが数多あるように、対人援助においても時流があります。時流に合わせて言うことがコロコロ変わるというのはいかにも節操がないように感じますが、一方で時流に乗らず頑固に独自の哲学を貫きつつ衰退してしまうものもあり、時流に乗らなければよいというシンプルな答えでもないことがまた難しいところです。

今自分が関わっている業務で、大学が地域の子育て世代に向けて開いている「親子教室」があるのですが、こちらは明らかに「こども誰でも通園制度」の影響を受け、利用している親子がこれまでよりもずっと早いペースで幼稚園・保育園の利用を開始し、親子教室を卒業していくという流れが生まれています。結果的に親子教室の方は利用者数が安定せず、利用率も低迷している状況です。

ニーズが無いなら止めればよいというシンプルな答えもあるのですが、ニーズ自体がないわけではない…と思うと難しく、自分たちにできること、やりたいこと、できるとよいと思うことを並べて、今後のあり方を思案しています。

そんな時代の中、“あり続けているもの”的力にも、もっと目を向ける必要があるのかもしれません。マガジンは無事 16 年目、63 号の発行を迎えました。この間、大きな遅延なく定期発行できているのは、いつも締め切り通りに原稿をお送りくださる執筆者の皆さんのお力によるものです。引き続きどうぞよろしくお願ひいたします。

対人援助学マガジン
通巻63号
第16巻 第3号
2025年12月15日発行
<http://humanservices.jp/>

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は

danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

第64号は2026年03月15日

発刊の予定です。

原稿締切**2026年02月25日！**

執筆希望者、常に募集

本誌は常に書き手に門戸を開いています。新たなジャンルからの、執筆者の登場に期待します。自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分だからこそ描ける分野の記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。ページ制限なしの連載誌です。必要な回数、心置きなく書いていただけます。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。**執筆資格は学会員であること。** 現在非会員で書いていただく事になった方には、本誌は学会ニュースレターの位置づけですので、**対人援助学会への入会**をお願いしています。

対人援助学会事務局

540-0021

大阪市中央区大手通2-4-1

リファレンス内

TEL&FAX学会専用 06-6910-0103

表紙の言葉

表紙のデザインを変更したのではない。たまたま今号は、こういう図柄にしてみた。「木陰の物語」に登場する、様々な女性が一堂に会した大判のポスター画を作ったことがあった。その絵をそのまま使ったので、こうなった。

男性版のものと対で作ったので、気が変わらなければ次号は、それが表紙になる。

印刷物雑誌なら表紙は顔だが、web版では、うっかりすると表紙はスルーで該当ページに飛んでしまう読者も多い。

マガジンが全ページに目を通せる厚さではなくて久しいが、たまには表紙もご覧下さい。 2025/12/15